一ノ瀬俊也著

戦艦武蔵

忘れられた巨艦の航跡

中公新書

2387

戦艦武蔵

二〇一五年、戦艦武蔵がフィリピン沖海底で発見され、世界の注目を集めた。だが、太平洋戦争中の一九四二年に完成し、四四年のレイテ沖海戦で撃沈された武蔵は、敗戦後、長きにわたり半ば忘れられた存在だった。姉妹艦の大和が一貫して脚光を浴び、戦記や映画、アニメなどで繰り返し描かれたのとは対照的である。両者の差はどこから生まれたのか。建造から沈没までの軌跡を追い、さらには戦後日本の戦争観の変遷をたどる。

一ノ瀬俊也著

戦艦武蔵

忘れられた巨艦の航跡

中公新書

2387

戦艦武蔵

一ノ瀬俊也著

中公新書

中公新書

2387

9784121023872

1921221008608

ISBN978-4-12-102387-2

C1221 ¥860E

定価 本体860円+税

戦艦武蔵

中公新書 2387

中公新書 既刊より

一ノ瀬俊也著

戦艦武蔵

忘れられた巨艦の航跡

中公新書

2387

戦艦武蔵

一ノ瀬俊也著

中公新書

中公新書

2387

戦艦武蔵

中公新書 2387

中公新書 2387

一ノ瀬俊也著

戦艦武蔵

忘れられた巨艦の航跡

中央公論新社刊

目次

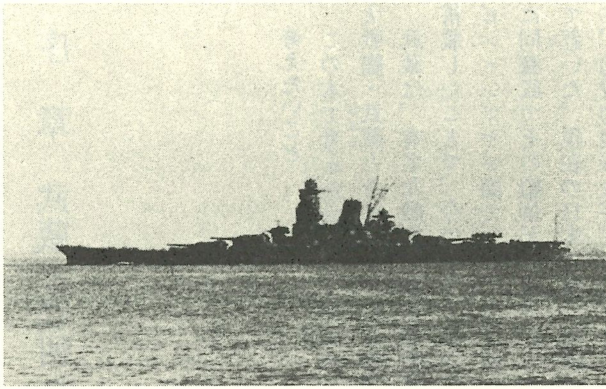
戦艦武蔵

序章　武蔵とは何か

考えたいこと

この本で考えたいのは、一九四二（昭和一七）年に完成し四四年に沈没した日本海軍の巨大戦艦・武蔵（むさし）とそれにまつわる物語は我々に何を教えるか、ということである。

武蔵は、有名な戦艦大和（やまと）の同型艦である。口径四六センチという空前絶後の巨大な主砲を搭載したことで、今でも多くの人がその名を知っている。武蔵は一九四四年一〇月、フィリピン・シブヤン海でアメリカ軍航空機の攻撃により撃沈され、二〇一五（平成二七）年三月に同海底でその船体が発見されて大々的に報道されたことにより、多くの人々の関心を改めて惹（ひ）いた。現在の日本でも、両艦は依然として高い知名度を持っているが、武蔵は大和に比べ、比較的地味な存在といえる。



戦艦武蔵

その理由として、「帝国海軍の隆盛と滅びの象徴として、華やかな脚光を浴び続けてきた「大和」に対して、「武蔵」はさしたる働きもできないままに、圧倒的優勢な敵の航空兵力によって、南溟の渕深く打ち沈められた悲劇の巨大艦」（手塚正己『軍艦武蔵』取材記　海軍を生きた男たち』）という説明がある。だが、それをいうなら大和もまた「さしたる働きもできないまま」米軍の飛行機によって沈められた点では同じではないのか。武蔵の知名度が相対的に低い理由を、戦中の武蔵の短い生涯や、戦後に編まれた武蔵物語の約七〇年にわたる歴史をたどることによって明らかにしてみたい。

もう一つ考えたいことがある。それは、戦後日本社会にとって、戦艦武蔵とは何か、ということだ。

その手がかりとして、一九六七年と二〇一五年のサブカルチャーにおける、戦艦武蔵の図像としての

描かれ方の違いをみてみよう。六七年、『週刊少年マガジン』一月二九日号の「トップ画報　海底の大戦艦武蔵」と題する折り込み図に画家・小松崎茂が想像力を発揮して描いたのは、暗闇の中、海底火山の噴火によって「まぼろしのようにうかびあがった」「いたましい武蔵のすがた」であった。「いたましい」というのは、米軍航空機の攻撃で船体を大きく破壊され、草生した屍のように海草をあちこちに生やしているからだが、描かれているのはあくまでも写真で見るのと同じ、鋼鉄の軍艦である。

ところが約半世紀後――二〇一五年の武蔵は、近年流行のいわゆる萌え（空想上の美少女などのキャラクターに感情移入して愛でる文化）と兵器・戦史を融合させたマニア向けの専門誌『MC☆あくしず』（同年三六号）誌上において、同じく海底の闇の中、船体の破片を豊かな胸などへわずかにまとった裸に近い体、やや苦しそうな顔で眠るアニメ絵調の少女に擬人化、キャラクター化されて描かれている（「緊急企画　海底の「武蔵」発見」イラスト・飯沼俊規）。

武蔵の擬人化は、高度消費社会の住人である読者たちが一時をよりよく萌えるための趣向、単なる遊びと言ってしまえばそれまでだが、よく考えればとても奇妙なことだ。戦艦武蔵はどう見ても人、ましてや少女ではないからである。シブヤン海に沈んでいるのは小松崎が描いたような鋼鉄の船であり、その内部には千人以上の男たちの遺体が眠っているはずだ。

私の考えでは、この絵の作者と読者たちにとって、シブヤン海底には実のところ〝何もない〟のである。だから何でも好きなものを代入できる。読者が裸の美少女を好めば、武蔵は美少女になれ、見る者は大好きな兵器と少女を同時に愛でられるのだ。なぜ戦艦武蔵は日本社会に生きる人々の心の中から消えてしまって、どこにもいないのだろうか。

武蔵の消失

この武蔵の〝消失〟は、社会学者・井上義和いうところの「歴史認識の脱文脈化」という事態ともとらえることができる。井上は、太平洋戦争末期、陸軍特攻隊の基地となった鹿児島県・知覧における特攻物語の描かれ方、受容のされ方を研究し、知覧が単に公への献身を讃美する場所として企業研修の場ともなっていることに注目した（井上「記憶の継承から遺志の継承へ　知覧巡礼の活入れ効果に着目して」）。知覧特攻平和会館の語るストーリーからは戦術としての特攻、ひいては戦争自体の愚昧さ、無意味さがどこかへ消えてしまい、単に公への献身を讃美する場所となっているので、会社員が客（それもまた一つの〝公〟である）や社会への奉仕を学ぶ場としても十分使えてしまう、というのだ。

戦艦武蔵についても知覧とまったく同じ歴史からの「脱文脈化」が起こっているとみることができる。そうであるなら、かかる事態はなぜ、どのようにして生じ、二〇一五年に裸の

美少女と化すに至ったのだろうか。

こうした事態は、作家の高橋弘希いうところの「戦争のファンタジー化」と呼べるのかもしれない。高橋は、近年流行のシミュレーションゲームで太平洋戦争の軍艦や戦国時代の武将たちが美少女、いわゆる萌えキャラに〝擬人化〟されていることをあげ、一九七九年生まれの自分が関ヶ原の戦いや日露戦争に「リアリティを持てない」のと同じく、より若い世代は太平洋戦争の死者にもリアリティを持てないでいると述べている（高橋「解説　戦争がファンタジーになるとき」）。

萌えキャラたちもまた、何らかの意味で従前の歴史物語の〈引用〉によって成り立つ存在である。先に述べた『MC☆あくしず』誌上の〝美少女〟武蔵には、「今まで軍艦・戦史ファンの間では、『「武蔵」は浮力を維持して沈没したため海底に沈まず、海流に乗って世界の海中を彷徨っているのではないか？』との「伝説」がまことしやかに語られていたが、これをもってその伝説も終止符を打たれた恰好だ」とのキャプションがついている。つまり、この絵は従来の武蔵「伝説」の受容と、戦後七〇年における実艦発見という契機がなければ描かれ得なかったのである。本書の目的は、戦後日本の戦争伝説、物語の歴史の中で、人々はいつごろから、なぜ戦争にリアリティを持てなくなっていったのかを、戦艦武蔵のそれを事例として考えることにある。

以上をまとめて簡潔に言うならば、本書の問いは、今日の武蔵はなぜ何ものでもなくなったのか、ということに尽きる。

あらゆる物語は、たとえそれが一枚の〝萌え絵〟であっても、それまでに築かれてきた同系統の物語体系に程度の差こそあれ影響され、いくばくかの引用や再解釈をすることによってしか成り立たない。だから、現在における戦艦武蔵の〝不在〟の理由を知るためには、その物語体系が構築され、解体、消失してゆく一連の歴史を追わねばならない。

戦争の虚構性

とはいえ、本書は、昔の戦争体験者は戦争に「リアリティ」を持っていたのに、それがしだいに失われて若い世代には「ファンタジー」となった、という単純な見方に与(くみ)するものではない。なぜなら、一九四五年の敗戦時に東京の中学生だった作家・吉村昭(よしむらあきら)は、一九七〇年の対談で空襲により街が焼けたことについて、「どこへでも行けるという一種の解放感でうれしかった」「戦時という時間の中で起る現象というものはやはり虚構の世界に入るものじゃないかな」と述べ、相手の久保田正文(くぼたまさふみ)は「戦争の時代とか、戦争のうずまきそのものが一種の壮大な虚構の条件みたいなものだということは、そうでしょうね」と応じているからである(吉村『時代の声、史料の声』)。

この対談は、戦争が今日の若い世代に限らず、当事者たちにとっても、街が焼け落ちたことにうれしさを感じるなどといった日常生活ではおよそあり得ないことが起こる、その意味で「壮大な虚構」——ある種の「ファンタジー」ともいえる——だった。この、戦争がはらむ虚構(ファンタジー)性の問題について、武蔵の建造から沈没までを扱う本書の前半で述べてゆきたい。

さらに、戦中・戦後の日本における、「大艦巨砲主義」の評価などにみる日本海軍観・戦争観とその変化についても述べてゆく。わかりやすく言うと、戦中から戦後にかけての日本人にとって帝国海軍とはどのような存在であったのか、なぜ多くの人が海軍のために献身し死んでいったのか、戦後彼らのことはどう描かれ、やがて忘れられていったのかを、戦艦武蔵およびその物語の歴史を例に考えたいのである。さらに具体的な論点として、戦後の日本では「大艦巨砲主義」という言葉がいつ、どのような文脈で批判的に語られるようになったのか、などを挙げておく。

第一章　戦艦武蔵の建造

1　武蔵建造の背景

日本海軍の戦艦

明治日本人にとっての日清(にっしん)・日露戦争とは、主観的には自国にほど近い朝鮮半島から清・露の勢力を排除し、国の安全を確保するための戦争であった。いずれも陸上戦闘は大陸で行われたが、海軍が重大な役割を果たした。日本は軍隊や物資を輸送するのに船を使う。そのために敵国艦隊の撃滅、海上交通路の支配権――制海権の獲得が必須だったのである。

当時の日本海軍は、アメリカ海軍軍人のマハンが唱えた制海権の獲得や、海軍力こそが戦争ひいては一国の命運を決定するという理論の忠実な受容者であった。日露戦争で戦艦同士の艦隊決戦（一九〇五〈明治三八〉年五月の日本海海戦）に完全勝利するという〝成功体験〟

を得たことによって、日本の軍人たちはこの理論の正しさをいよいよ確信するに至った。
日露戦後、米国資本の南満州鉄道（満鉄）経営参画提案、米政府の満鉄中立化要求を日本が拒否して両国の関係が冷却化したこと、ロシア海軍が壊滅したこともあり、海軍の仮想敵国としてアメリカが浮上した。一九〇七年に陸海軍が定め、天皇の裁可を得た帝国国防方針は「露・米・独・仏」の順に仮想敵国を定めたが、これは陸海軍が協同一致していたのではなく、それぞれ北と南に分裂した戦略目標を紙上に併記したとみたほうがよい。
このころ日本海軍が想定していた対米作戦の基本は、ハワイから来攻してくる米艦隊を小笠原諸島以西で邀撃、撃滅するというものであった（防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　海軍軍戦備〈一〉　昭和十六年十一月まで』）。日本海海戦の再現を狙ったといえる。後年の一九三〇年ごろになると、決戦場は小笠原諸島、マリアナ諸島以西へと拡大している。
当時、制海権確保に必須の兵器と見なされていた戦艦を、日本海軍は日露戦後になって国産化した。しかし、当時の英国など列強の急速な進歩について行けず、いったん巡洋戦艦金剛（三六センチ砲八門搭載、一九一一年起工、一三年竣工）を英国に外注、同型艦三隻を日本で製造した。以後の戦艦はすべて国産化され、太平洋戦争時の日本の戦艦は、この金剛から武蔵までの一二隻となった。

大正期の海軍軍縮

大正期の対米関係は、前述の満洲権益への米側参入拒否に加え、カリフォルニア州で日本移民排斥などの問題が発生したため、良好ではなかった。折から勃発した第一次大戦（一九一四〈大正三〉～一八年）で独・露が大海軍国の地位から転落した結果、日本は英米とともに三大海軍国の一角を占めるに至った。
欧州の戦いでは、華々しい艦隊決戦（一九一六年、ジュットランド沖海戦）により勝敗が一挙に決まることはなかった。むしろドイツの首を絞めたのは、英海軍による海上輸送路の封鎖であった。戦争中の独国では、海外からの物資移入が断ち切られた結果、大量の餓死者が出たという（藤原辰史『カブラの冬　第一次世界大戦期ドイツの飢饉と民衆』）。しかし、戦中戦後の各強国はともに戦艦の建造に注力していった。日本は、四一センチ砲八門搭載の戦艦長門（一九一七年起工、二〇年竣工）を建造、同型艦の陸奥も造った。米英も四〇センチ砲搭載艦を建造していた。なぜ各国海軍はこのような建艦競争をしていたのだろうか。
その背景にあったのは、日本と米英の中国をめぐる対立である。各国とも自分の言い分を通すためには、その裏付けとしての軍事力、なかんずく海軍力を必要とした。争点の基本は大陸の諸権益だが、米国と英国では立場が違っていた。英国は中国に具体的な権益（天津、上海、香港といった通商の拠点）を持っていたが、米国にはなかった。それなのになぜ、日

米は太平洋を挟んで対立していたのだろうか。

この日米間における「日露戦争以来の対立の構造」について、歴史学者の北岡伸一は次のように解説する。「日中戦争によってアメリカが失い、あるいは脅かされていた現実の権益はわずかなものであった。問題は中国の統一と独立という理念であり、いつかアメリカの巨大な利益が生み出されるかもしれないという（中国市場の神話）想像上の利益であった。日本の中国侵略がかりに成功したとしても、それでアメリカが致命的なものを失うわけではない。こうした具体的な利害対立が少なかったゆえに、実は妥協が困難だったのである」（北岡『門戸開放政策と日本』）と。

なるほど、具体的な利益のぶつかり合いなら相互に譲って妥協できるかもしれない。しかし理念同士の対立となると、どちらかが己の理念なり信念なりを枉げない限り、解決はできないのである。

それでも、日本は第一次大戦後にアメリカ主導で作られた一連の安全保障体制の枠組みに参入、両国は一時協調関係に入った。一九二二年、日本は戦後の財政難もあって、ワシントン海軍軍縮条約を締結した。従来、国防上必要な戦艦の総トン数（重量）を対米英七割としていたところ、六割で我慢することにしたのである。その一方で、日本は翌二三年の国防方針第二次改定において、仮想敵国を「米・露・支」の順に改めた。

ちなみに「七割」とは、山梨勝之進・元海軍大将によると本来は「玄人の見当、メヤスでこれより少し多いから少し少ないからとて、どうと云うことは数学的には出て来ない」（水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　上』）程度のおおざっぱな数字であったが、のちに独り歩きをはじめ、国内・国際政治上の深刻な対立点となる。

海軍の内なる精神主義

なぜ海軍は国力で勝るアメリカ相手の戦争を想定し、一九四一年、最終的に実行したのだろうか。戦後の日本でよく語られた、陸軍―無謀な精神主義、海軍―スマートな合理主義（陸軍は戦術で劣勢を覆せるが、海軍は兵力差で機械的に勝敗が決まる）というイメージからすれば、このことはきわめて不可解に見える。

しかし、大正期の日本海軍には精神論・対米強硬論が浸透していた。たとえば一九一三（大正二）年に海軍兵学校入学、一六年に卒業した野元為輝（元少将、空母瑞鶴ほか艦長）は、在校中の空気について、「入校時の校長山下源太郎中将が、我ら卒業後の内地航海で佐世保に入港の際、同中将は佐鎮（佐世保鎮守府）長官としてその官邸で園遊会を開いての歓迎会の席上、アノロの重い長官が「われらの目標はアメリカである」と述べられた時それまで江田島で明日にでも日米開戦となるように教えられた若い候補生一同は更に興奮に燃え上がつ

たものである」と回想している（野元「これからのこと」）。
野元によれば、当時の海軍内にこうした対米強硬論的な空気があったのは、「加〔カリフォルニア〕州の排日土地問題、学童就学問題に対する我の戦勝国民としての感情もあり、日米間の感情疎隔に便乗する海軍の士気振興策として米に対する心構えが生ずるに至ったのではないか」（傍点は引用者。特記なき限り、以下同様）と想像している。軍隊の組織統制上、何らかの具体的な「敵」を設定する必要があり、それが折から対立機運の生じていたアメリカだった、というのである。
かくして、「当時は第一次大戦中で総力戦的の空気が醸成中ではあつたが、結論的にはなつておらず、日本海海戦式勝利を夢見る海軍全般の気分は対米的に一気猛進するのみ」となったのである。
アジア周辺に「敵」のいなくなった日本海軍では、「士気振興」、組織引き締めという内輪の事情からこのような精神論が台頭し、再度の「日本海海戦式勝利」の夢として受け入れられたのである。むろん彼らは一九四五年の敗戦を知らない。戦争は当時からすでに「ファンタジー」化していたといえる。そもそも現実（リアル）とファンタジーの明確な切り分けなど、誰にとっても不可能である。なお、対米戦志向に際しては、野元が言うように、日本海海戦の成功体験も効いて（しまって）いるといえよう。軍隊における「戦史」学習には、将兵にかつて

の栄光を学ばせてその精神を鼓舞する役割もあり、故に重視されるのである。

漸減作戦

戦後の建艦競争に耐えられなくなった日米英仏伊の各国は、一九二二年にワシントン海軍軍縮条約を結んだ。日本海軍は戦艦のトン数を対米英六割に抑えられたため、いわゆる漸減作戦を志向していった。この作戦はまずフィリピン・グアムを占領し、ハワイから日本本土目指して進攻してくる優勢な米艦隊を、巡洋艦部隊や潜水艦の攻撃（のち航空機も構想に加わる）で少しずつ減らしてから、戦艦部隊同士の決戦に持ち込むというものである。太平洋戦争の直前まで、対米戦争はこの構想に基づいて実行されることになっていた。
元海軍中佐・千早正隆（ちはやまさたか）は昭和一〇年代の対米海軍作戦方針について、「昭和十一年に改訂した「帝国軍用兵綱領」で、「東洋にある敵を撃滅してその活動の根拠を覆し、かつ本国方面より来攻する敵艦隊の主力を撃滅するをもって初期の目的とす」と明示されていた」という。この「東洋にある敵」地とはフィリピン、グアムであり、敵艦隊と決戦を交える海面はマリアナ群島方面を想定、決戦の手段は戦艦を中心とする艦隊決戦主義が伝統的に考えられていた、とされる（千早『日本海軍の戦略発想』）。
千早は続けて「もうその頃（昭和一六年〕までには、日本海軍にとって、米国海軍との一

戦はもはや観念論ではなくて、完全に現実論であった」と述べている。後世の目から見れば対米戦争は無謀だが、当時はこの漸減作戦構想があったが故に、日本海軍は対米戦争、艦隊決戦の夢を「どこでどうやるかは、きわめてはっきりしていた」「現実論」として構想（空想）できたのである。

ワシントン条約後、昭和初年における漸減作戦の構想をもう少し具体的に言うと、戦艦部隊が劣勢であるので、夜間に高速、二〇センチ砲搭載の一万トン重巡洋艦部隊、水雷戦隊（駆逐艦）による接近戦を挑み、米艦隊の数を減らして対等になったところで戦艦部隊同士の昼間決戦を行う、というものであった。

夜戦の主兵器は魚雷であり、これを数本命中させれば戦艦といえども水線下に大穴が空き浸水して転覆、沈没に至る。そのため日本海軍は魚雷に大きな期待をかけ、高性能、重武装の特型駆逐艦や長射程の魚雷（九三式魚雷、一九三五〈昭和一〇〉年採用）の開発に力を注いでいった。

海軍は、のちの戦艦大和・武蔵とともに、魚雷に対しても対米決戦時の劣勢を一発逆転する兵器として大きな期待をかけていた。田結穣（たゆいみのる）・元海軍中将は一九三五年、ワシントン条約廃棄にあたって軍令部があまりに強いことを言うので、「一体アメリカと戦さ（いくさ）をして勝てる方策があるのか。若（も）しあるなら一つでもよいから話してくれ」と言ったところ、「重雷装

艦を造る。四連装発射管五基宛（ずつ）を両舷（りょうげん）に搭載して合計十基（四十門）とし、九三式魚雷四十本を搭載して艦隊決戦の展開時にこれを利用し、敵戦艦隊に大打撃を与えて戦勝の端緒をつくる」との答えが返ってきたと戦後に回想している（水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　上』）。田結は「日米戦争を勝抜くためにはそんなことだけではまことに頼りないと思った」という。

この「重雷装艦」は二隻が実際に造られた（四一年に軽巡洋艦北上（きたかみ）・大井（おおい）を改装）が、実際の対米戦争では戦艦同士の艦隊決戦が起こらず、したがって役に立たないまま終わった。

国防より組織？

海軍は国防上、海軍兵力の対米比率七割維持を主張してきたが、興味深いことに、それは何をおいても実現すべき最重要課題であったかというと、違うのである。当時大蔵省の役人として海軍との予算折衝に当たっていた賀屋興宣（かやおきのり）（のち蔵相）はワシントン条約時の海軍軍人の思考法について、「だれしもお家繁盛は喜ぶところで、海軍としては国防上有利な比率の要求は絶対に必要であるが、海軍というお家の衰微になるような兵力保有量の縮減は、たとえ所要比率が獲得されても好ましくない。つまり軍縮ではなくて、軍拡とまでは行かなくてもせめて現有勢力量は維持したい。こういう海軍本位の考えが強い」（賀屋『戦前・戦後八

十年』）と辛辣な見方をしている。海軍という一組織の勢力維持が、外国との戦力比率よりも実は大事だったというのである。

実際、ワシントン会議で当初日米英とも各一隻という提案だった一六インチ（四一センチ）砲戦艦について、日本海軍は陸奥廃棄に反対、そのため米英にもう二隻の増加を許し、結果として日米英の総トン数比率が一：一：一から英三（うち一隻は一五インチ砲のフッド）：米三：日二になる不利を認めるという、賀屋に言わせると「兵力比率論から言えば、全くバカげたことをやって」（同前）いた。こうなったのは「海軍は陸奥の廃棄に部内が極力反対の気勢であ」り、「これを生かさないと条約が成立しない」からであった。つまり、日本海軍は組織のポストや書類上の艦隊編制や軍人たちのポストを維持したいという「お家」の事情で軍艦の数を量——対米戦力比の向上——よりも優先させたのである。

海軍が陸奥に固執した理由については「艦艇は定期修理や突発事故などで艦の活動を停止することがあり、その場合一隻では平時における艦隊計画の計画さえたてられない」とか「陸奥の場合は僚艦長門とペアを組まねば、〔中略〕その真価は発揮できなかった」という軍事的なものもある（高増武夫『軍港させぼ秘話』）のだが、一国の軍備は本来他国との比較、相対的関係に基づき決定されるべきものである。その観点からみるならば、日本海軍という一組織の利害が純国防上のそれを優越したことになる。

ロンドン軍縮条約

ところが、一九三〇年のロンドン海軍軍縮条約で、漸減作戦の重要な要素であった補助艦（重巡洋艦、駆逐艦、潜水艦）の対米英比率もまた削減されることになった。海軍、中でも軍令部の艦隊派と目される人々は、政党内閣の軍縮方針に抵抗したが、天皇が条約締結に賛成していたこともあり、押し切られた。

先に述べたように、対米戦は海軍に関して言えば対米七割の戦力があれば何とかなるということになっていたが、ロンドン海軍軍縮条約でも補助艦の完全な対米七割は実現しなかった。総トン数全体で六九・七％、重巡洋艦に至っては対米六割となった。海軍部内には条約への賛否をめぐって深刻な論争が生じ、対立が高まっていった。条約反対を唱える軍人たちは官僚組織的利害と国防への使命感の両方から、不満を持ったのである。

戦後における日本海軍のイメージでは、海軍は合理主義、親英米ということになっている。このいわゆる「海軍善玉論」というイメージが造られるにあたっては、自らも海軍士官だった作家・阿川弘之による海軍の良識派提督——山本五十六、米内光政、井上成美の評伝小説が大きな役割を果たした。これらの小説の中では、海軍は心ならずも陸軍に引きずられ、勝つあてもない対米戦へと突入していったとされている。

しかし、日露戦後以後の日本海軍は一貫して対米戦を主眼とした組織であり、アメリカとの戦争に用いる軍艦の多数建造と、これに投ずる予算の増加を至上目的としていた。まさに一種の官僚組織にほかならず、軍人たちはそのような「お家」、身内の論理で動いていたのである。

日本陸軍が一九三一年に満洲事変を起こして翌年満洲国を建国すると、米英との対立は、にわかに破局へ至るものではなかったにせよ、深化していった。

後世の目から見ると、広大な大陸での満洲事変は陸軍の問題であり、海軍とはさほど関係なかったように見えるが、当事者たちにとってはそうではなかった。海軍軍人たちにとっては、軍縮など止めて強大な艦隊を新造し、米国を威圧してアジア地域への介入を防ぐことが、大陸権益を擁護することに他ならなかったからである。連合艦隊司令長官の末次信正大将が三四年、一般国民向けの講演パンフレットで「重ねて強調したいことは満洲問題と軍縮問題は絶対不可分だといふことであります」（末次『非常時局と国防問題』）と叫んだのは、そのことをよく表している。

末次にとって、軍艦の増勢は身内の利益維持であったかもしれないが、同時に満洲という崇高な国益の擁護でもあった。したがってそれは正義であり、予算の許す限りで堂々と遂行すべきだったのである。

一九三七年に日中戦争が始まると、日米の対立は妥協不能なところまで深まった。米英の中国支援に対し、日本は独伊との軍事同盟締結で対抗しようとした。米国による一連の対日経済制裁に対し、日本側は北部・南部仏印に陸海軍を進駐させ、東洋における英の拠点シンガポール、米のフィリピンに軍事的威圧をかけることで応じた。四一年にはじまった、日本側が中国から撤兵し、米側は経済制裁を解除するという戦争回避の交渉は、双方の非妥協的姿勢により決裂した。同年一二月八日、太平洋戦争開戦へと至る。

対米格差をいかに埋めるか

先に述べたように、海軍内部では対米戦争の可否を論じるにあたり、ある種の精神主義が前提となっていた。たとえば、一九二九（昭和四）年、海軍兵学校五七期生の練習艦隊で、詫間力平教官（旧姓・猪口。後述する武蔵艦長猪口敏平の弟）と少尉候補生が「自由の女神と奈良の大仏はどちらが大きいか」「立ちあがってみなければ、どちらが果して大きいかわかるものではない」といった問答を繰り広げたという（三輪公忠「対米決戦へのイメージ」）。

このような空想的思考が公然と唱えられたのは、いうまでもなく両国間の国力・軍備格差が現実問題としてあるからである。仮に前出の漸減作戦でアメリカが対日決戦に打って出ず、引き延ばしを図ったらどうするのかなどは、考えないことになっていた。フィリピンを

占領すれば米国民の世論が激高するだろうという希望的観測にすがっていたのである。

海軍はこの格差を埋めるために巨大戦艦を造り、アメリカの量に質で対抗する構想を案出、一九三四年、新戦艦――のちの大和・武蔵――の設計開始により実現させた。

それと軌を一にして、航空注力論も昭和初期に出現した。日米主力艦隊の決戦に先立って、艦隊に付随する航空母艦から飛行機を敵艦隊に向かわせ、相手の飛行機を撃破して決戦海面の制空権を奪う→戦艦群から観測機を飛ばして上空から味方の正確な射撃を誘導、戦艦同士の戦いに勝つ、という構想が出てきたのである。さらに、一九三七年の軍縮条約失効にともない、太平洋の防備制限条約も失効するため、日本は当時国際連盟の委任統治領だった南洋諸島を飛行機の発進基地化できたことから、ここへ大型で航続距離の長い陸上攻撃機を配置して魚雷を積ませ、米艦隊を邀撃（迎撃）しようという発想も生まれた。海軍はそのために九六式陸上攻撃機（陸攻、三六年採用）や九七式大型飛行艇（大艇）を開発した。

一九四〇年には、飛行機の進歩により邀撃哨戒線を東経一六〇度線（ミクロネシア付近を南北に通る線）まで東方に進め（前掲『戦史叢書　海軍軍戦備〈一〉』）、基地航空機の傘をともなう艦隊決戦の思想が登場していた。一九三九・四〇年には「艦隊主力決戦前に空母部隊の全力をあげて敵航空母艦部隊に攻撃を加え、余力をもって敵戦艦部隊を攻撃、これを撃滅するに航空兵力をもってする決戦の構想」までもが高まっていたという。つまりは軍艦の主砲

に頼らず、空母や陸上基地から発進する飛行機で一気にけりをつけようというのである。

これは「漸減作戦の目的を大半喪失することとなる兵術思想の大変革」であり、「昭和十五、十六年はわが海軍対米作戦構想大転換の過渡期ともいうべき微妙な時期」であったとされる。日本海軍と言えば、後述の「大艦巨砲主義」という言葉に象徴されるように戦艦偏重の印象が強い。だが、実際には対米戦力差を埋める手段としての飛行機への期待を開戦前から大いに高めていたのであった。ちなみに、夜戦の主力として期待した水雷戦隊は、大部隊による実地演練を保安上（艦同士の衝突事故がたびたび起こった）や魚雷・燃料不足その他の理由で行えず、図上のみで行われていたという（以上、『戦史叢書　海軍軍戦備〈一〉』）。

それでも、最終決戦はあくまで戦艦部隊同士で行うことになっていた。飛行機が作戦行動中の戦艦を撃沈できるかは、開戦前のこの時点では実証されていないからである。そこで海軍は、切り札としての戦艦大和・武蔵を三七年一月の軍縮条約失効前から一生懸命造り、結果的にはその完成とほぼ同時に対米英戦争へと打って出たのであった。

四一年、対米英戦争はなぜ実行されたのか

その対米英開戦の主因は日中戦争の解決、より詳しく言うと中国からの日本軍撤兵をめぐる日米双方の非妥協的態度だが、その当事者たる日本海軍の論理や勝算を概観しておこう。

まず第一点、勝算はあったのかについて。対米開戦から約一年後、米軍がガダルカナルやニューギニアで本格的な反攻を始めた四二年一一月八日、海軍の軍令（作戦）のトップである軍令部総長・永野修身は、枢密院の会議で参会者にとって驚くべき次のような発言をした。

　海軍は日独伊同盟に熱意なく、対米英戦争は成るべく之を避けんことを希望したり。〔中略〕三国同盟には我方自ら進みたるか、他より迫られたるかを知らざれども、其の締結後は対米英戦争に到るべき情勢殆んど不可避となれり。即ち米英の圧迫を受けて萎縮するか、反撥突破を試むるかの外なきに至れるなり。放置すれば衰死を免れざることの判明せる病人に、二、三パーセント回復の望を掛けて手術を施すが如し。洵にえらいところへ這入ったものなり。空に天佑を頼むは宜しからず。画策努力を尽して難関を突破することを期すべきのみ。（深井英五『枢密院重要議事覚書』）

海軍は政府の指導者たちに、必ず勝つとは断言できないが、「二、三パーセント」は勝算がありゼロではない以上、戦争に打って出た、と後から告白したのである。それゆえこれを聞いた枢密顧問官の深井英五は「永野大将の談は聴取者に尠からざる衝撃を与へたり」と書いている。従来海軍の宣伝で聞かされてきた対米不敗論が実は「天佑」頼みのものに過ぎな

かったことがわかったからである。開戦前の永野は、四一年九月六日、天皇臨席の御前会議で「英米ノ聯合海軍モ之ヲ我予定決戦海面ニ邀撃スル場合飛行機ノ活用等ヲ加味考量致シマスルニ勝利ノ算ハ我ニ多シト確信致シマス」と明言していた（参謀本部編『杉山メモ　上』）。飛行機が対米艦隊決戦上、すべてではないが不可欠な戦力として組み込まれていることに注目しておきたい。

第二点は、米国に物量で劣ると分かっているのにどうして戦争を挑んだのか、ということである。永野軍令部総長は九月六日の御前会議で、対米邀撃決戦に勝利しても工業力と物資力で優位に立つアメリカは長期戦に出るだろう、しかし日本側が南方の資源地帯を占領して長期作戦の基礎を確立すれば「有形無形ノ各種要素ヲ含ム国家総力ノ如何及世界情勢推移ノ如何ニ因リテ決セラルル処大デアルト存ジマス」と説明をしていた。

永野の言う「世界情勢推移」云々を、対米開戦時に軍令部作戦課長（第一部第一課長）・大佐だった富岡定俊の言葉を借りて解説すると、「欧州でも大戦が進行しており、最高指導者の間ではドイツも非常に勝っていることだし、バランスということもあるので、講和のキッカケはその間にでるだろう」（富岡『開戦と終戦　人と機構と計画』）ということであった。つまり、戦争とそれを支える各国の国力は物量という「有形」力だけでは決まらない、同盟国ドイツがイギリスを撃破すれば、アメリカも「無形」すなわち精神の面で打撃を蒙り、講和

に応じるだろう、と見透していたのである。

ただし、この物量差の問題については、若干違う説明もある。千早正隆は「米国の物量については決して楽観したわけではなかったが、兵力増強に関してわれわれが考えた物差はあまりにも小さすぎた。／米国が開戦後直ちに膨大な軍備拡充計画を発表したときでも、われわれは天文学的数字と批評はしても、それが現実的な脅威とはなかなかに結びつかなかった、というのが本音であった」（千早『日本海軍の戦略発想』）と回想しており、彼らが見たくないもの、都合の悪いものは見なかったことがわかる。

物量に劣るから対米開戦は不可能だといえば、海軍という組織は団結を失い崩壊してしまう。富岡らの説明は後付けの弁明と言えばそれまでだが、開戦時の軍人心理とはそういうものだったのだろう。彼ら海軍軍人たちが決戦構想や精神力を加味した勝算をいわば自己説得する形で持つに至った背景の一つに、巨大戦艦大和・武蔵の存在もあったのは間違いない。

対米英開戦三日前の一九四一年一二月五日、永野軍令部総長は昭和天皇に対し、一二月一六日に第一戦隊に編入する軍艦大和は「昭和一二年度補充計画に属する戦艦二隻中の第一艦」であり、「これにより帝国海軍に一大新鋭威力を加えることとなる旨の奏上」をしている（宮内庁編『昭和天皇実録　巻二十九　昭和十六年下』）。次節ではかくも期待された両艦がなぜ、どのように建造されたのかを詳しくみていきたい。

2　戦艦武蔵の建造

大和型戦艦の特徴

ワシントン・ロンドン両軍縮条約が一九三六年末で失効したため、三七年一月一日から日米英各国は無条約時代に入り、建艦競争へと入っていく。軍人たちにとっては多年の艦隊決戦の夢（ファンタジー）を実現する機会であり、戦艦大和・武蔵はその切り札として発案された。

一九三一〜三三年の海軍軍令部在任中に大和型戦艦構想を発案したとされる石川信吾（いしかわしんご）・元海軍少将は、のちにその利点を次のように説明している。すなわち、日本が巨大戦艦を造れば欧州各国もこれに追随し、アメリカは対抗上莫大（ばくだい）な経費と年月を投じてパナマ運河を通れないような大型戦艦を建造して、太平洋と大西洋にそれぞれ専属させざるを得ず、「これによって、日本はアメリカがワシントン及びロンドン両条約によってかち得た極東進攻作戦の自信を相当期間喪失させることが出来る。その間に、東亜における日本の地歩を固め、国力を増進すれば、両国の争点である支那問題も、漸次折衝によって解決すると云（い）う希望も持ち得た」（水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　下』）、と。

石川は「力の均衡による平和は、守勢に立つものが、攻勢を採ろうとするものに、軍事上

の自信を与えぬことによってのち維持される」とも述べ、あたかも大和型が「平和」のためのいわば抑止力であったような言い方をしているが、これは戦争に負けてからの、後付けの弁明であるように思う。なぜなら、大和型の存在は米国はおろか国民にも公表されず、秘匿されていたからである。

海軍省では、武蔵の進水式が終わったらその要目を「世界に知らせて、日本にこんなでかいのが出来たんだという事を知らせるという方針」だったというが、軍令部、艦政本部の反対で結局実行されなかった（一九八一年四月七日、福地誠夫・元海軍大佐の証言、戸髙一成編『証言録　海軍反省会　二』）。

軍令部で大和型の構想にあたった松田千秋・元少将も戦後になって「大和・武蔵を造ったら、抑止力にならずにかえってそれを使ってみたくなるんじゃないか」、「抑止力じゃなくて、アメリカに早く大和・武蔵をぶつけて、早くやりたかった思想があったか」という野元為輝の問いに対し、「もし抑止力なら、むしろ誇大に発表したほうがいい、そうしたら抑止力になる。〔中略〕だから抑止力じゃない。私は抑止力というのは政治的な判断だから、政治的なのは私は他にお任せして、これはいかに勝つかと考えていた」、つまり大和・武蔵は「抑止力」などではない、と正直に答えている（同前）。

ちなみに、石川が軍令部在任中に持っていた「将来の連合艦隊編制案」は「大型戦艦一隊

（二隻）と航空母艦四隻を基幹とし、これに適当の補助部隊を配属して一個艦隊を編制〔成〕し、その四個艦隊を保有する」という壮大なものであった。

両軍縮条約廃棄に先立つ一九三四年から新型戦艦（のちの大和、武蔵）の着想研究が行われ、昭和一二年度開始の③計画（昭和一二年度海軍補充計画）にて戦艦二・空母二以下六六隻を昭和一七年度までに完成、各種航空機を同一五年度までに一九一六機へ増勢することになった。いうまでもなく対米英戦を想定した大軍備拡張計画である。

同計画の予算が承認されたのは、第七〇回帝国議会（一九三六年一二月～三七年三月）でのことである。武蔵に関しては、古賀繁一（武蔵建造時、長崎造船所技師。戦後、三菱重工業社長）の自伝によると、予算承認に先立つ一九三六年一二月二六日、三菱本社に海軍より戦艦建造の内命が下り、三七年九月八日に二号艦正式発注、三八年三月二九日に長崎造船所第二船台にて起工、同年四月二七日に正式契約の運びとなっている（古賀『古い思い出』）。

二号艦正式発注の直後に始まった日中戦争で巨額の臨時軍事費が成立、そのかなりの部分が日中間の直接の戦争ではなく、対米戦備拡充に転用されていった（吉田裕『日本人の戦争観』）。武蔵一隻の建造費に限っても、当初の海軍と三菱の契約では、五二六五万円であった。三菱側の出した見積もりは六二五三万円だったが、海軍側の「猛烈な折衝」でこの値段となり、長崎造船所側では不満を持った。ところが、三菱長崎造船所の川森圓次郎によると「既

に欧州では動乱が始まり、只ならぬ雲行きであったし、海軍では臨時軍事費が議会を通過した等の為、艦本〔艦政本部〕としても筋の通っているものは承認し、支出し易い情勢になって来ていた」ことから、最終契約値段は六四九〇万円にまで上昇した（川森「土佐から武蔵まで（道中の道草を拾い集めて）」）。

これを海軍側からみると、武蔵の船台、進水台などが「目を見張る程の額」になったのは世界最大の巨体の進水であるためやむを得ないとして、船殻関係は海軍と三菱側の開きが大きく、「第一号艦〔大和〕の船殻がほとんど出来上がった状態で其の実就単価が判った状況の時に長崎の要求は呉の実績の二倍以上にもなったので、諸種の事情を考慮に入れても最大五割以内でなくては」ならなかったため、激しい折衝となったという（前田龍男〈元技術大佐〉「私の海軍時代」）。

このような建艦費のどんぶり勘定が許された背景には、日中戦争の影響があろう。日中戦争と対米英戦争は、費用の面でも連続しており、不可分なのである。

これをうけて第一号艦（大和）、第二号艦（武蔵）は一九三七年一一月四日、三八年三月二九日にそれぞれ起工された。その最大の特徴は、米海軍の新戦艦が四〇センチ砲であるところ、射程の威力にまさる四六センチの主砲を積んで米戦艦群を「三万メートル以上の距離である程度やっつける」「アウトレンジ」（一九八一年四月七日、松田千秋の証言。戸高一成編『証

言録　海軍反省会　二』）を狙っていたことである。すなわち、米の量に質で対抗しようとしたのである。

大和型の難点その一——アウトレンジ

大和型戦艦をめぐっては、戦後から今日まで続く、〝大きいことはいいことだ〟的な讃美論があり、「日本の技術力が生んだ不沈艦」などと評されることもある。しかし、本当によいことずくめだったのかというと疑問があるので、以下今日まで指摘されている批判的見解を紹介したい。その一つめは、海軍の目指したアウトレンジ戦法は「遠距離砲戦に終始するという弊害を伴うものでもあった」（千早『日本海軍の戦略発想』）ため、必ずしも有利ではなかったというものである。

艦隊同士の砲戦では、戦艦の大口径砲は約二万五〇〇〇メートル以内、二〇センチ砲級は約一万八〇〇〇メートル以内にまで接近して有効な射撃を続けねば相手艦に致命傷を与えることは至難であった。にもかかわらず、実戦で損害を恐れるあまり、米艦隊に肉薄せず取り逃がす実例があったのは、平素からこのアウトレンジ戦法を信奉して「敵に近迫するという気迫に欠けるという嫌いがあった」からだ、というのである。

また、四六センチ砲を採用したこと自体、本当によかったのか、という批判もある。軍令

部員として、艦を造る側ではなく使う側から大和型の基本構想作りに携わった松田千秋・元少将は、大和型の主砲について戦後、「この砲の発射速度が四十秒です。アメリカの十六インチ〔四〇センチ〕砲は三十秒なんだね。そうなると、「大和」は二分で三発、アメリカは二分で四発となる。十分間の砲戦で十五対二十となり、向こうが約一・三倍の弾丸を送りこむことになる。そうなると、実戦ではどうなりますかねえ」（松田千秋「孫子の兵法」）と発言している。

戦艦同士の戦いは、先に主砲弾を命中させて打撃を与えた方が非常に有利となるので、発射速度に劣る大和型は本当に有利だったのか、という指摘である。

むろん、大和型は厚い装甲を備えているので米戦艦の四〇センチ主砲弾に容易に貫通されえなかっただろうが、とにかく大きければそれでよかった、と単純に考えることはできない。

結局、欠陥のない兵器などありえず、実際に戦ってみないと本当のところは分からないのだが、もはやそれは不可能である。実際の技術的優劣を空想（ファンタジー）の力でどうとでも処理できるあたりが、現在でも大和・武蔵伝説にいっそうの陰影と魅力を与えている。

難点その二――速力不足

大和型は、当初速力三〇ノット（時速五五・五六キロ）以上を目指していたが、結局は約

二七ノット止まりとなった。高速力を出すためには蒸気タービン機関の缶（かん）（ボイラー）をより多く積む必要があるが、それでは艦の長さが増し、したがって重くなってしまう。艦艇史研究家の岡田幸和（おかだゆきかず）は、大和型が三〇ノット出そうとすれば缶を四個増やして一六個とし、艦の水線長は二六〇メートル、排水量は四〇〇〇トン増えて七万三〇〇〇トンになると計算、その分建造費が割高になると指摘している（岡田「建造の背景と巨艦の性能」）。

前出の松田千秋は、「新戦艦に対する私の要求としては、十八インチ砲を十門以上、速力は三十ノット以上というものだった」という。理由は、「アメリカの戦艦は二十ノットくらいですから、それより十ノットふやしておけば、戦闘のとき、見込みがあるとなれば押していけ」、「負けるとなればすぐ下がるというように、カケヒキが自由にできる」からであった。ところが、それだけの速力を出すには船体の「長さを増し、船腹〔船幅か〕を小さくしなければならない」なかった。しかし「長さを増すと、防御〔に充てる重量〕がひじょうに大きくなってとてもできない」ので、結局、二七・五ノット（五〇・九三キロ）止まりとなってしまった（松田「孫子の兵法」）。

速力三〇ノット以上を発揮した米国の新戦艦アイオワ級（一九四三～四四年就役）と大和型の船体上面図を比べると、アイオワ級がほっそりしているのに対し、大和型はずんぐりといえる。重量と予算（建造費）を減らすため、艦の全長を短くまとめたためである。さらに、

信頼性を極度に重視して比較的低出力の機関を積んだ。燃費に優れるディーゼル機関の搭載も検討されたが、信頼性重視の見地から中止された。二七ノットという数字は、それらの縛りのもとで可能な限り速力を持たせようとした技術者たちの苦心の結果である。

この速力不足の問題は、軍人たちの憤激を呼んでいた。軍令部の作戦主任として新軍備計画にあたった中沢佑（なかざわたすく）中佐は「三十節（ノット）を切れば、将来航空母艦と一緒に戦は出来ない。作戦担当者は事務屋ではない。国防の重責を荷（にな）っている。必勝の信念なくして軍令なし」と辞職を申し出たが、慰留されたという（水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　下』）。ちなみに大和・武蔵と同じ③計画で建造された空母翔鶴（しょうかく）・瑞鶴は三四ノットの高速を発揮できた。

中沢の構想は、数の劣勢を補うため、戦艦の砲力に航空母艦の飛行機の威力も加えて「カケヒキが自由」（松田）な「洋上機動戦」を行うというものであった。そのためには戦艦が速度の出る空母や巡洋艦と行動を共にできることが大前提だったため、「ぜひ三二ノットを実現して欲しい。三〇ノット以下は絶対に容認できない」（中澤佑刊行会編『海軍中将　中澤佑　作戦部長・人事局長の回想』）という強硬な発言となったのである。

松田や中沢ら軍令部側の回想は、新戦艦が単なる抑止力としてではなく、現実に生起するはずの対米決戦の主力として夢想されていたことを示すが、実際の大和型はあくまでも「事

務屋」的発想と純「作戦」的発想との妥協の産物であり、艦隊決戦の夢（ファンタジー）を追い求める当事者たちにとっては必ずしも理想の戦艦ではなかった。中沢は敗戦後になってもなお、「私は第二次大戦の経過より判断し、もし大和型戦艦が、当初軍令部の要求した速力を実現しておったならば、その用法は大に異り、太平洋上における作戦の推移も変っていたものがあったと確信し遺憾千万に思う」（同前）と憤懣（ふんまん）を漏らしている。

予算と重量の問題

戦後、大和型について一部の設計者が四六センチ砲搭載艦としては〝小さく造ったこと〟をあたかも日本の技術的勝利であったかのように語り、それを引き継いでいる書籍などもみられる。

しかし、大和型に対しては、その設計に携わった牧野茂（まきのしげる）・元海軍技術大佐により、戦後になって、船体中央部に置かれた機関室や火薬庫などの主要部（バイタル・パート）の集中防御と重量軽減にこだわった結果、主要部以外の前後部の縦横隔壁が薄くなったとの欠陥が指摘されている。牧野は武蔵沈没の理由について、構造の弱い艦の前部水面下に魚雷が複数命中して周囲の隔壁に亀裂が入った結果、四時間あまりにわたって浸水が進み、最終的に転覆沈没に至った、とみている（牧野『牧野茂　艦船ノート』）。

牧野は、戦後の一九八三年三月二五日に開かれた海軍軍人同士のみの内輪の座談会「海軍反省会」でも、大和型について「詳細設計を担当しまして、艦本（艦政本部）からくる基本設計だと、あんまり（隔壁が）薄いもんだから少し厚くして叱られたこともございますが、それでも強行して一〇〇〇トンあまり重量が増えて、変えろみたいに怒られましたけども、もう少しやはり厚くしたほうが良かったという所はございます」（戸高一成編『証言録　海軍反省会　五』）と反省の弁を述べている。

艦政本部が船体強度を犠牲にしてまで重量軽減に固執したのは、「最大の戦闘性能といっても、予算上から排水量はほぼ決まってくる。船体性能との兼ね合いがむずかしい」（内藤初穂〈元海軍技術大尉〉『戦艦大和へのレクイエム　大艦巨砲の技術を顧みる』）からであった。つまりは建造予算の枠内で四六センチ砲を積むために、船体強度が犠牲となったというのである。牧野はあと三〇〇〇トンの重量増が許されていればより完全なものができただろう、としている。

大和型が重視した主要部防御にしても、甲鈑同士を固定するリベットの強度に難があり、大和が一九四三年一二月二五日に米潜水艦の魚雷一本を受けた際には爆圧でリベットが剪断されて隙間が生じ、機械室や火薬庫へ約三〇〇〇トンもの浸水を許してしまっている。

牧野は大和型について「残念ながら〔第一次大戦後の〕ポスト・ジュットランド型からあ

まり進歩を見せない、拡大型」とし、同型をはじめとする③、④計画の諸艦にも「いわば消極的に発展したもので、設計の独創性に乏しく、特に航空機の飛躍的進歩などによる将来の戦闘に対する明察に欠けていた」（牧野『牧野茂　艦船ノート』）との手厳しい評価を下している。

明治以来、日本が蓄積してきた建艦技術の頂点に位置する大和・武蔵に対しては、いたずらに讃美も否定もすることなく、日本近代史上の一産物として冷静に評価することが必要であろう。

この予算と重量の関係について、もう少し付け加える。大和型の側面図を見ると、最上甲板が第一砲塔から第二砲塔、前檣楼（艦橋。見張り台などのある高層構造物）にかけて大きな坂のようにうねっている。これは、設計者たちが主砲塔の位置をできるだけ下げ、重量を減らすことに苦心したからである。元艦政本部技師・山下省三郎が大和型設計に文字通り身命を捧げて亡くなった上司・岡村博の追悼文中に書いているところでは、一番砲塔のバーベット（砲塔基部の円筒形の構造物。この内部を通じて弾薬を下部の弾薬庫から砲へ揚げるので、防弾のため厚い鉄板で造る。大和型は内径八メートル、厚さ五五〇ミリ）の高さを一メートル下げると重量が約一〇〇トン、三砲塔で三〇〇トン、支持させる構造をあわせると約一〇〇〇トンの節減になった。当時、鋼材の値段は一トン当たり約三〇〇〇円もの「莫大な金」であっ

た（山下「岡村博さんを偲ぶ」）。

山下は「しかし岡村さんはコスト・ダウンもされながら、軽い、工数のかからない艦への情熱を燃やしていました」と回想するが、逆に言えば「コスト・ダウン」を抜きにした戦艦以下の軍艦設計はありえないことになる。一九三三年、艦政本部第四部長（造船中将）・玉沢煥は横須賀工廠に着任する部下に物の値段を知ることに気をつけよと訓示し、「私は妻が反物を買ってきても、大体その値段の見当がつくよ」と言ったという（船越卓〈技術中佐〉「横廠から舞廠まで」）。造船官たちには「事務屋」的素養が不可欠であった。

予算の査定

大和型の建造にあたってはかくも「コスト・ダウン」が重視されたのであるが、それは建造予算獲得にあたり、大蔵省の厳しい査定を受けねばならなかったからである。戦後日本の代表的な艦艇研究家にして元海軍技術少佐・福井静夫が戦後の一九六七年、雑誌『丸』に記した「姿なき戦艦〝国会〟をまかり通る」がこの間の事情を簡潔に示しているので、以下に引用する。

戦艦大和、武蔵が昭和一二年度開始の③計画によって建造されたことは先に述べたが、この計画は大小約七〇隻、約二〇種の各種船型に及ぶものであった。国防上どのような船が必

要かは海軍の決めることだが、その予算は一艦ごとに大蔵省の査定を受けねばならない。予算書類上、第一号艦・第二号艦とされた戦艦二隻は三万五〇〇〇トン、四〇センチ砲搭載と記された（実際は約六万トン、四六センチ砲）。

この海軍の計画要求に対し、「大蔵省としては、トン当たりコストを査定して少しでも低下させ、もし全体予算が無理ならば、隻数を減らすのが常道」であった。海軍は大蔵大臣、次官、主計局長、主計課長のうち、福井の記憶では三名にのみ真相を示して協力を求め、戦艦については優先的に認めてもらった（大蔵省は特務艦や掃海艇などの小艦艇ほど辛く、「戦闘艦艇」には好意的だった）が、トン当たりのコストはかなり削られたという。

それでも最終的に予算の枠内で二万五〇〇〇トンもの差を埋めて完成できた要因として、福井は駆逐艦三隻と大型潜水艦一隻を架空艦として計上したこと以外に、次のような要因を挙げる。軍縮条約の束縛下では工事が面倒で兵装も割高だったが、条約が廃棄されて自由な無理のない設計が可能となり、そのぶん③計画下の諸艦はそれ以前の①、②計画に比べトン当たりのコストがかなり低下したため、空母翔鶴などの他艦から浮いた分を戦艦に少しずつ融通してもらえたこと。海防艦など小艦艇の排水量を減らし、かつ在庫兵器を利用するなどしてトン当たりのコストを削ったこと。一部の甲鉄は戦艦比叡などの費用で昭和一二年以前から製造をはじめたこと（ただし大和型の予算成立と共に振り替えた）。

これらの苦心と当時の建造技術の進歩により、大和型は一隻の直接費（船体、機関、兵装費）が約一億六〇〇〇万円と「排水量が巨大であるのに、じつは意外にも安価で」建造できた。

福井は、このようなお金の苦心は大和型の存在を一日でも長く秘しておき、米国が建造した新戦艦を完成早々、第二級戦艦に転落させ、急ぎ慌てて対抗艦建造のために数億、いや数十億ドルの予算を使わせ、そのぶん「われわれが予算をセーブしようとするにほかならなかった」からと述べている。この理屈は艦隊決戦を「早くやりたかった」用兵側の視点（本書三〇頁参照）を欠いているためわかりづらいが、福井の「大和型戦艦は、あくまで貧乏国日本の海軍が、貧乏人の本領を発揮してケチったためのものとさえいえるであろう」という記述は、六万トンの新戦艦として誕生した大和型が人々の夢とコスト意識との妥協の産物であったことをわかりやすく示す。

福井は「大和型戦艦のみではない。すべての新計画艦が、基本計画の概案作製と平行し、つぎつぎと予算を計算して、少しでもけずられれば、計画のやりなおしであった」と書いている。巨艦の設計と建造は当時の軍人や技術者たちの情熱や理想のみでは語れず、「事務屋」たちの地道な計算や大蔵省との交渉なども含める必要がある。軍備とは畢竟（ひっきょう）は金のやり繰りであり、そしてその交渉過程で無理が生じたのである。福井は大蔵省との交渉しか述

べていないが、その先に回想のタイトル通り「国会」が待ちうけているのは言うまでもない。

大和・武蔵は〝時代遅れ〟の発想ではない

とはいえ、昭和九年に巨大戦艦・大和型を造り始めたこと自体は、のちに批判されるような飛行機軽視の時代遅れの発想では決してない。そもそも大和型設計の時期に、戦闘で大量の敵機が殺到して航空魚雷を投下、命中により大量浸水するなどといった状況は想定されておらず、三本まで耐えるのが目標であった。また、コストや予算上の制約を一切受けず好き勝手に軍艦を造れる海軍などは、世界中いかなる時代の、どの国にも存在しないだろう。

以下は、大和型建造時に海軍の艦政本部長（艦船建造部門の最高責任者）だった中村良三（なかむらりょうぞう）大将の、建艦に関する基本的な考え方である。

> 彼は、海軍の保守派によくある戦艦中心の大艦巨砲主義的考えに一時、かなり固執していた。〔中略〕従って将来の有望な兵器であるはずの航空機に対しては、潜水艦と同程度の認識にとどまり、むしろ、安全性に欠ける航空機は、海戦の主役にはなり得ず、単に制空権を確保する補助兵器（偵察や観測に使用）として存在し、海軍の決戦は、空中戦の後に制空権を取ってから、堂々と海上における戦艦対戦艦の砲力によって決着をつ

けるべきであるとの考えが強かった。「制空権下の海上決戦」、当時これが日英米三大海軍国の用兵家たちの常識であったし、航空機対艦船の決戦などは思いも及ばなかった。
（外崎克久『津軽の濤声　海軍大将中村良三とその時代』）

当時、日米英どの海軍もこうした「大艦巨砲主義」「艦隊決戦」の考え方に基づき戦艦を重視しており、のちの実戦で明らかになった飛行機の「有望」性はいまだよく知らなかった、したがって大和型戦艦など造らず飛行機に注力すべきであったという批判は後知恵に過ぎない、というのである。これはその通りで、実際、日本の新戦艦が二隻（大和・武蔵）にとどまったのに対し、米海軍は実に一〇隻も造った。速力についても、アメリカが条約廃棄後にはじめて設計したノースカロライナ級戦艦のそれは約二八ノットと、大和型と同程度である。

なぜ新戦艦を造ったか

とはいえ、日本海軍部内では、のちの大和型に至る新戦艦計画の段階ですでに、将来の戦争が戦艦から飛行機に移ることは一部で予見されていた。

新戦艦設計作業中の一九三四～三六年に連合艦隊司令長官を務めた高橋三吉大将は三六年ごろ、将来の艦隊の主力は戦艦から飛行機へと移るのではないかと考え、海軍首脳の人々に

そう話したところ、「君は航空戦隊司令官〔在任一九二八～二九年。海軍初の空母部隊〕をやっていたからそう思うのだ、恰も末次〔信正〕大将が嘗て潜水戦隊司令官をやったので潜水艦の価値を過大視するようなものだ。海軍首脳部では今や「長門」の二倍位の大戦艦で主砲一八吋を搭載するようなものを計画しているのだ」と聞かされたと、敗戦後の一九五八年に回想している（高橋信一編『我か海軍と高橋三吉』）。一部の先駆的な若手航空士官の放言ではない。

高橋は「これに対し私はまだ航空主力論を強く主張しなかったのを今でも残念に思って居る」と書いているが、これは敗戦後の結果論である。彼が三六年の段階で「強く航空主力論を主張しなかった」のは、続けて「当時艦隊で考えて居った「制空権下の艦隊決戦」という意味は、戦闘機隊を以て彼我上空を制し、爆撃機隊、雷撃機隊を以て敵を攻撃しつつ漸次水上部隊の戦闘に導き、それと呼応して更に水中〔潜水艦〕航空の全攻撃力を以て敵を撃滅するという意味で決戦は巨砲に俟つなどとは最早考えて居らなかった」と述べているように、来たるべき決戦は水上・航空・水中の総力を挙げて行うことになっていたからである。艦隊決戦が航空母艦中心となるのは実際の対米戦開始後である。

そうである以上、戦艦についても「「長門」の二倍位の大戦艦」もあるに越したことはなかった。前出の中沢佑が新戦艦の速力不足に抗議して辞表を出そうとまでしたのは、この

「制空権下の艦隊決戦」という作戦構想が画餅に帰しかねなかったからである。

海戦の主役を戦艦と航空機のどちらにするかはともかく、高橋が現役の連合艦隊司令長官として一九三六年の大衆雑誌『日の出』（新潮社）で「日本は、いまだ嘗て米国のモンロー主義を否定したこともなければ、英国の欧州における指導的勢力たることに難くせをつけたこともない。にも拘らず、彼等が日本の東洋における優位を認めないとすると、それは彼等がながいあひだ有色人種に対してゐた理由なき優越感と解するほかはない」とアジアの指導者たる自国の正義を叫び（本書一四頁で紹介した、北岡伸一のいう「妥協が困難」な「理念」とはこういったもの）、万一米英と戦争になっても「短刀で大業物と渡り合へと云はれれば、結構立派に渡り合つて見せる」と国民に大見得を切っていた（高橋「我に必勝の信念あり」）のは事実である。海軍にとっては飛行機だろうが戦艦だろうが先立つもの——予算の獲得が必要であり、そのためには納税者たる国民の支持が不可欠だったのだ。

大和・武蔵は国民のため？

日本海軍が「量より質」の考え方に基づいて膨大なエネルギーと予算を投じ、結果的にはほとんど役に立たなかった大和型戦艦を極秘裏に建造したことは、いっけん国民不在のきわめて独善的な行動にみえる。

たとえば、一九三四年一〇月三一日、軍縮条約の廃棄を原則的に確認した元帥会議で軍令部第一部長・嶋田繁太郎少将が行った説明には「［軍縮］協定不成立の場合、生起することあるべき建艦競争の対策としては、我は現在条約維持の場合に要すべき海軍経費と大差なき範囲において特徴ある兵力を整備し国防の安固を期しうる成算がある」との一節があったという（『戦艦武蔵建造記録』刊行委員会編『戦艦武蔵建造記録　大和型戦艦の全貌』）。この説明には「新戦艦の計画をにおわせた」という解釈があり、そうであるならば「量より質」の大和型建造は、軍の最高指導者間ですら秘密の構想だった、ということになろう。

しかし興味深いことに、戦艦（主力艦）についてほぼ同じ意味のことを、現役の海軍大将・末次信正（軍事参議官）が一九三六年の一般向け講演で国民に向かい、「無条約になれば主力艦は三万五千噸、巡洋艦は一万噸と云つた様な艦型の拘束がなくなるから、自国の国情に合つた艦を造り得る、今迄は同じ型の艦を造るから数の競争になる。今後は、自分の好きな経済的且つ効果的なものを造るのであるから、必ずしも数の競争をしなくてもいゝのであります」（『海軍大将末次信正閣下述　軍縮決裂と我等の覚悟』）と直接訴えかけていたのである。

巨大戦艦構想は確かに極秘だったが、この講演を同時代の聴く人が聴けば、ははあ、これは量（「数」）より質の巨艦を造るつもりだ、と察知できたのではないだろうか。なお、末次は続けて、今日の海軍軍備は飛行機や潜水艦なども進歩しているので、「是等海上兵力を構

成する諸要素を綜合大観すると、主力艦丈がものを云ふのではないから、其の国情に応じて種々の組合はせが出来る」、つまり貧乏な日本の「国情」に合わせて工夫したい、と訴えている。彼とて、とにかく戦艦だけをたくさん造りたいなどと言っていたわけではない。

末次は、当時の海軍部内で対米英協調、ロンドン条約締結に強硬に反対した、いわゆる艦隊派の頭目として、今日の歴史家の間で評判のきわめて悪い人物である。だが彼は日本国民に対し、金食い虫の戦艦は「経済的且つ効果的なもの」とする、これからの戦争は戦艦だけでもない、国家財政に過度の負担はかけない、だからどうか軍艦を造らせてくれと、それなりに筋道立った理屈に基づき理解を求めていたのである。このことが大和型の設計上、コスト計算がやかましく言われた背景となっている。

翌三七年、末次は予備役に編入されて海軍部内での発言権を失うが、その後は内閣参議・内務大臣に就任するなど、海軍軍人の中では国民との接触面が多かった。彼が中国における権益擁護と海軍軍縮の問題は不可分——権益を守りたいなら海軍軍備は必要不可欠、と述べていたことは先に紹介した（本書二二頁）が、末次にとっての軍備とは、あくまでも国民の理解と協力を得た上で整備すべきものであった。そのためならば、国民に対しても極秘のはずの大和型戦艦建造を自ら進んで「におわせた」のである。海軍にとっては予算獲得こそが最優先課題なのであり、機密保持はその後であったとも言える。

大和・武蔵建造が始まった一九三七年、海軍は国民に向けて軍事予算の確保を訴える宣伝パンフレットの中で、次のように述べていた。

〔議会の〕協賛を経たる海軍予算に就ては海軍に職を奉ずる者は何人も之等国防費は究極するに国民全般の辛労心血より生れ出たる貴重なる結晶であることを瞬時も忘るることなく之を使用する上に於ても出来得る限り節約を旨とし最大の効果を挙ぐることを心掛けて居る次第である。（海軍省海軍軍事普及部『予算上より見たる帝国海軍』〈同部、一九三七年〉）

海軍が国民にこうした懇願ともとれる宣伝をしていたのは、二度の軍縮に伴う人員・予算削減と、昭和恐慌による農村疲弊の記憶がいまだ生々しかったからだろう。

とはいえ、私は、海軍が組織防衛の論理、「お家」の欲得だけでこの話をしていたのではないと思っている。ここまで引用してきた海軍作製の諸宣伝パンフレット中の記述は、軍人たちが、海軍とは国益擁護という国民からの負託を受けた組織、つまり国民のための組織であると本気で信じていたことの証でもあるからだ。

国のために軍艦を造ることと、海軍のために予算を取ることとは、彼らの中でまったく矛

盾していない。海軍が大和・武蔵の建造に膨大なエネルギーを発揮し得たのは、末次のような人々が納税者たる国民への使命感と、組織利益拡充の欲望を同時に強く持っていたからこそであった。しかし軍事予算が議会の承認を必要とする以上、窮極的には国民が戦艦はいらないといえば造れない。そこで機密保持を後回しにしてでも「大和型建造は畢竟国民のためだ」と解釈できるような説得が行われたのである。

次の戦争を用意し、結果的に一九四五年の無残な敗戦をもたらしたのは、軍人たちのさもしい私益追求のみではなく、大陸権益は絶対擁護されねばならない、それが国民のためだという正義感、使命感であった。それらが組織の強力な推進力となったのは、当時誰にも否定できない正義であったからに他ならない。

陸軍とのパイの奪い合い

昭和海軍の軍人たちにとって戦艦とは何だったのか、その考え方をもう少し見てみよう。

海軍少将・高木惣吉は大戦末期、終戦工作に深く関与した政治的軍人として著名だが、武蔵着工直後の一九三八年七月四日、興味深い文書を作成している。高木は当時大佐・海軍省臨時調査課長であったが、陸軍の雑誌『偕行社記事』の「国家総力戦」研究記事中に、海軍とその戦艦批判ととれる箇所を発見した。

高島辰彦陸軍歩兵中佐執筆のそれは、「空中武力ノ異常ナル発達ニ伴ヒ、艦上防禦高射火砲ノ威力ヲ顧ミズ敢行セラルベキ爆撃威力ニ対シテハ、現在型ノ主力艦ヲ以テスルモ抗堪スルニ由ナキ事実」に照らして「空軍ノ海軍艦船ニ対スル代艦価値ハ著シク増大」、「主力艦ヲ以テスル大海戦、即チ一戦争一大海戦ノ時代ハ将ニ過ギントシ」ているから、今後は戦艦ではなく補助艦艇を多数建造し、敵国の海上封鎖や自国資源の輸送掩護などに活用するとともに「国家平時負担ノ減少ヲ策スベキデアラウ」、要するにこれからは飛行機の時代だから戦艦などはもう古い、よって不要だと切り捨てたのである（伊藤隆編『高木惣吉　日記と情報　上』）。

高木はこの文章を読んで怒り、「独逸式陸軍万能ノ思想ヲ以テ押捲ラントスル」ものであるから「海軍トシテ充分警戒ヲ要スル」、「英米ガ主力艦ナル場合小艦艇ヲ以テ我国防ヲ全フシ得ルヤ」と反論の言葉を書き付け、文書化して部内に回覧している。この反論をどう考えるか。高木にとって、陸軍側の戦艦批判は一種の既得権攻撃と映ったはずである。陸軍側の意図が、今後の「国家総力戦」遂行にあたって限られた予算と物資のパイを海軍から奪うことにあり、そこで戦艦が恰好の攻撃材料となっているのは誰の眼にも明らかであるからだ（陸軍側のいう「空軍」とはあくまでも陸軍航空隊主体）。陸軍側の空軍重視論はそれなりに論理的で筋が通っており、高木の反論は痛いところを突かれたがゆえの過剰反応ともみえる。

高木にとっての戦艦とは、一つの既得権に他ならない。

だが、高木の意図が軍官僚としての単なる既得権維持、組織防衛のみにあったともいえない。彼もまた海軍軍人の一人として「国防ヲ全フ」するという強い使命感を持っていたし、三八年時点では戦艦の有効性がいまだ完全に否定されたわけでもなかった。しかしその戦艦も、数では英米相手の艦隊決戦に勝てそうもない。この打算と使命感とが相まって、質で量を凌駕（りょうが）せんとする大和・武蔵のアイデアが出てきたのである。

艦名は聞こえたか

武蔵建造は日本海軍、そして三菱重工業の総力を挙げた一大プロジェクトであり、日本の持てる造船技術の粋とも言われる。とはいえ、③計画の成立予算における艦艇製造費総額八億六五四万九〇〇〇円のうち、戦艦二隻（一号艦、二号艦）一億九六〇〇万円（機密保持上の数字。実際は二億三五一八万円）に対し、空母二隻（のちの翔鶴、瑞鶴）一億六一七〇万円、駆逐艦一八隻一億六二〇〇万円（ただし実際は一五隻）などとなっており、戦艦だけに予算が偏重していたわけではない（防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　海軍軍戦備〈一〉　昭和十六年十一月まで』）。

確かに大和型は海軍の期待を担い、技術の粋を凝らして造った巨艦だが、一国の軍備や予

算という視点に立てばあくまでもその一構成要素に過ぎず、過剰に特別視すべきではない。

また、三菱側に言わせると、武蔵の建造自体は必ずしも難事業ではなかった。三菱長崎造船所の武蔵建造本部附技術者だった古賀繁一は回想録中「久しぶりで、みんな忘れてしまった主力艦建造ではあったが、造船所の現場の施工の方は、大して心配していなかった。それというのも、軍艦のトン当たりの工数（人工（にんく））は駆逐艦で一四〇、巡洋艦で七〇～八〇、これに比べて戦艦は四〇ということでも分かるように、戦艦は小型艦より遥（はる）かに造り易かったからである。ただ、真面目に、正攻法でやりさえすればよかった」、「武蔵を立派に建造することは、むしろ易しかった。これを秘密に建造することがむずかしかったのである」（古賀『古い思い出』）と述べている。この発言を裏付けるように、前掲の『戦史叢書　海軍軍戦備〈一〉』によると、③計画成立予算上の戦艦（大和型）のトン当たり単価は二八〇〇円なのに対し、駆逐艦のそれは約一・六倍の四五〇〇円となっている。

古賀たち技術者にとって、本当に難しいと感じられたのは巨艦の建造作業それ自体よりもむしろ、長崎という坂状の市街地から造船所を見下ろせる土地での機密保持であったという。それはひとえに、艦隊決戦に大和・武蔵という切り札を投入して華麗な勝利を収めるという海軍軍人たちの多年の夢（ファンタジー）を実現するためであった。

武蔵の建造工事は、まず陸上の船台で船体のみを組み立て、これを滑走させて海に浮かべ

（進水）、その後艦橋、煙突、主砲などの構造物を取り付ける（艤装）段取りになっていた。

一九四〇年一一月一日、武蔵の進水式に参列した及川古志郎海軍大臣は「同艦を命名するのに当たって、「本艦を軍艦？？と命名する」と宣告し、進水式台に並んでいた造船所側の誰もが聞きとれなかった、という逸話が残っているほどである」（千早『日本海軍の戦略発想』）といわれている。この挿話だけを読むと、機密保持がいかにも徹底していたように思える。

これを記した千早正隆は、「武蔵の艦名そのものが秘密であったから、とくにそうしたのであろう」としつつも、及川の人柄について、「そのいい方も、その巨体に似ず平静であり、口のなかでもぐもぐという方であった」と評している。千早は明らかに、「武蔵」の艦名をはっきり言わなかった及川個人の弱さと、当時の近衛文麿首相や陸軍に向かって対米戦は不可能と言明できなかった海軍という組織のそれとを重ね合わせている。武蔵の短く悲劇的といえる生涯を考える上でも、実に象徴的なエピソードのように聞こえる。

ところが、この式に参列した長崎造船所員の川森圓次郎は、千早に反駁するかのように「命名書は及川海軍大臣によって朗読された。ここには海軍と三菱側の少数の限られた人しか居なかったが、『武蔵』と云う声は皆によく聞えた」と書いている（川森「土佐から武蔵まで（道中の道草を拾い集めて）」）。彼らが式を終えて引き揚げる時、艦政本部の人に「武蔵とハッキリ聞えましたが」と言うと、「式台上の人は、少数の而も限られた人。万一進水が失敗したら、所謂切腹覚悟の人達である。そんな人達に、命名式と云うのに、肝腎の名前を秘匿する必要は無いですよ」という答えが返ってきたという。

今となっては真相は闇の中である。及川の日記が出てきて、機密保持のためわざと聞こえなくした、あるいは、機密は気にせず堂々と話した、とでも書いてあれば話は別だが。戦艦武蔵について物を書くときには、このように「記録」「証言」の扱い方の難しさがついてまわり、戦争ひいては歴史そのものについても同じことが言える。

武蔵の進水に立ち会った前出の前田龍男（当時造船少佐）は、その様子を「巨体が水中に進行するにつれ、海水も之に伴われ海の表面も遥かに彼方に引いて行かれ、海底が相当沖の方まで干しあがるも、やがて海水が戻り出し、而も平常の水位を遥かに越え津波の如く船台の半ばを過ぎ船首部近い所まで来たその現象は、長崎湾が比較的狭いためかも知れないが恐ろしい様な印象を心に刻んだ」と描写している（前田「私の海軍時代」）。

ちなみに、呉工廠で一九四〇年八月八日に挙行された戦艦大和の進水式でも、読み上げられた艦名が聞こえなかったという話がある。元海軍技術大佐・梶原正夫は式台から離れた船渠で見学していたためか聞こえず、「どうも亜細亜と聞こえたようだ」「なるほど、超戦艦だから名前もひと廻り大きくなったのかも知れない。二番艦はさしづめ、東亜かな」と話した。

「機密のためなるべく一般に聞こえないよう、ことさらに声を低めて早口であったのであろうか」と回想する（梶原「大和、武蔵建造のエピソード」）。厳めしい巨艦といえども、このように戯画的な挿話はあるのだ。

子どもが勉強できない

とはいえ、武蔵建造にあたっての機密保持はしょせん完璧ではありえなかった。戦前、毎日新聞の海軍担当記者をしていた高増武夫によると、長崎県の佐世保海軍工廠では将来武蔵を入れる巨大な第七ドックの築造を進め、これを厳秘にしていた。しかし、「実際の工事に従事する土工などは世間を渡り歩く者が多」く、軍艦を造る従業員の身元を確認するようなわけにはいかなかったため、「工廠の中にはどえらいドックができているそうだ」という噂は広まっていた（高増『軍港させぼ秘話』）。

このドック築造工事の騒音について、三六年二月二八日の佐世保予算市会で社会民衆政治同盟の副島喜八議員が子どもたちが勉強できない、対策はないかと質問した際、「そのドックは七万トンもあって、一万トン巡洋艦が四隻並んで入渠できる大きなものである」と付け加えてしまった。これに佐世保鎮守府が軍機漏洩にあたると激怒、副島は議席を失うに至った。彼が前年一一月まで工廠に勤務して内部の事情を知っていたことが、失言の背景にある

とみられた。いつの時代も、人の口に戸は立てられないと言うべきである。

この第七ドックは、武蔵が後の四一年七月二日から八月一日まで舵、推進機（スクリュー）、推進軸の取り付けなどの船体仕上げのため入渠したのみとなった。

高増は一号艦の名が「大和」、二号艦が「武蔵」でそれぞれ呉と長崎で建造していることは一九三七年から知っていた、「いうなれば海軍記者の特権とでもいうべきものであったろうか」と回想している（同前）。両艦の命名は一九四〇年であるから一部記憶違いであるが、巨大戦艦建造の事実自体は知っていたとみられ、海軍が機密の保持を一部緩めてでもマスコミ・世論対策を重視していたことを示す挿話といえる。

現実の対米戦争と武蔵の完成

日中戦争は相手国の中国が強力な海軍を持たず、したがって縁の薄い戦艦部隊の関係者たちはひたすら訓練をしていた。中沢佑・元中将の回想によると、のちに武蔵艦長となり、艦と運命を共にする猪口敏平中佐は連合艦隊砲術参謀（三六年一二月〜三七年一二月）として「九五式水上機を使って、出来るだけ遠距離より射撃を開始し、アメリカの主力艦をアウトレンジする方法を研究訓練した」（水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　下』）という。「お蔭で射撃成績はぐんぐん挙がり、命中率は従来の倍位にまで向上した」とされる。実際

の命中率の程はともかく、戦艦部隊が来たるべき対米決戦の主力を自任して訓練に励んでいたのは事実であろう。

しかし、対米決戦や夜戦重視を呼号することと、それに勝つこととは全く別の話である。日中戦争勃発前年の一九三六年秋、日本海軍最後となった特別大演習が行われ、青軍〔日本軍〕艦隊は赤軍〔米軍〕艦隊に惨敗を喫してしまっていた。

第一駆逐隊司令としてこの演習に参加した小柳冨次・元中将の回想によると、赤軍艦隊は青軍夜戦部隊の反復攻撃を受けてあわや全滅かと思われたが、数が多いのでなかなかそうはならなかった。そのうちに夜が明けると「砲力が断然優勢になるので形勢は一変」、青軍部隊は夜戦部隊と後方の主力との合同に失敗して「各個に撃破され、敵〔この場合日本軍〕主力は全滅してしまった」という。

巡洋艦那智艦長としてこの演習に参加した戸塚道太郎・元中将は「視界不良の黎明に大艦隊が巧みに合同して一挙に決戦することは極めてむつかしい事でもあり、又艦隊の年度中一度もそんな訓練をしたこともないので、大混乱の裡に演習終結〔中略〕要するに、一度も稽古してないことをやることは如何に困難なことであるかと云うことをしみじみ教えられた」と回想している。

このとき、前述した末次信正大将は、赤軍審判長として戦艦陸奥に乗艦、「演習とは言え、

日本艦隊全滅とあっては艦隊の士気に影響するとでも思ったか、しきりに探照灯を以って演習中止を具申したが間に合わなかった」（以上、『帝国海軍　提督達の遺稿　下』）とされる。アメリカと「決戦」すれば勝てるという信念が、一種の空想に過ぎないことが暴露された形となった。

以上が日本海軍の実像であったが、もとより一般国民は知る由もなかった。両軍艦隊はこの後大阪湾に集合して大観艦式を挙行、国民はこの空前の盛儀のみを観たのであった。

この観艦式に合わせて海軍省が作ったパンフレット『観艦式の栞』は「海軍力は、海洋国日本にとつては、国家の生存発展上からも、東亜の安定勢力たる帝国の使命遂行上からも、之が整備充実に関しては断じて一日の偸安〔目先の安楽を求めること〕をも許さるべきものではない」と控えめに軍拡を説いているが、これが民間発行の『世界に誇る帝国海軍の威容大観艦式記念』（学芸研究会）になると、「海軍の任務は、〔中略〕時としては海戦に勝利を得ることにおいて、対手をして戦意を放棄せしめ得ることがある、即ち日本海の海戦などは、その顕著なる実例である」と、国民に「無敵艦隊」や艦隊決戦の夢を鼓吹していた。このような世論の存在は、のちの一九四一年、対米戦が現実の視野に入ってきた際、海軍が引くに引けなくなった一因となったかもしれない。

対米戦争開始と武蔵の完成

このような「決戦」構想の困難さ、危うさも影響してか、一九四一年に始められた現実の対米戦争は、一転して飛行機で行われることになった。すなわち、米太平洋艦隊の覆滅と米国民の士気低下を狙い、空母六隻とその搭載飛行機約三五〇機が四一年一二月八日に米ハワイ真珠湾基地を奇襲したのである。戦艦霧島・比叡の二隻はその護衛に付いた。このため米戦艦部隊は壊滅、米海軍は当面残った空母部隊でゲリラ的な反撃に転じざるを得なくなった。また同じ日、西太平洋における米軍の最大拠点・フィリピンへの第一撃は台湾から発進した海軍航空隊の空襲によって行われ、所在の米空軍部隊は壊滅した。

この二日後の一二月一〇日、マレー半島近海へ出撃してきた英東洋艦隊の戦艦・巡洋戦艦各一隻を日本の海軍航空隊が独力で撃沈した（マレー沖海戦）ことにより、戦艦に対する飛行機の優位が実証された。以後、海戦の主役は戦艦から飛行機と空母へと移る。これらの戦果により、日本陸海軍は南方資源地帯の攻略が可能となった。

戦艦大和が竣工したのはこれらの戦闘の直後、四一年一二月一六日のことであった。依然長崎で建造中であった武蔵は、工事中止すら唱えられた。宇垣纏・連合艦隊参謀長の四二年三月一日の日記中に「嶋田海軍大臣も毎々二号艦（武蔵）の建造を中止すべき意見なりしが、夫れは待たれたしとて抑へありと福留〔繁〕軍令部一部長語れり」（宇垣『戦藻録』）と

ある通り、嶋田繁太郎・海軍大臣は武蔵を不要と考えていたようだ。

宇垣は日記に続けて「概ね一般意見は然らざるなし。敵にして戦艦を有するも、凡有る場合之を無効ならしめる方策だに立たば、何億円と多大の資材を投ずるの要なし」と記している。宇垣はもともと砲術専門のいわゆる鉄砲屋だが、前記の実戦の結果、敵が戦艦を持っていたとしても、味方が飛行機で無力化できるのであれば高価な戦艦を造る必要はないという「一般意見」に反論できなくなったのである。

しかし、武蔵の建造工事はかなりの程度進んでいたため、結局継続された。工事現場の様子に関する証言は多くないが、三菱長崎造船所の製図工で、武蔵艦内の電気通信機器の取り付け検査に立ち会っていた牧山博人は「艤装工事中の艦内は、熔接の煙と臭気、その上、物凄い埃が充満し、坑内のようであった」「艦内の通路は多数の電線や、ゴムホースが入り乱れ、また、工事用の器材も散乱しており、足の踏場もない位、混雑していた。更に、各所から、けたたましいリベットの音が加わり、熔接の煙と鋭い光で、恰も戦場のようであった」（牧山『我が半生記　激動の昭和時代に生きた』）と語る。武蔵は多額の予算と資源もさることながら、かくも膨大なる人的エネルギーの注入を経てはじめて完成しえたのである。当然のことながら、人々はそれが大いなる徒労であることを知る由もなかった。

牧山によると、四二年春、武蔵艦上でいつものように立ち会い検査をしていると東條英

機首相の一行が「予告なしに、突然、現われ」、従業員の激励と視察をしていったという。「十数名の武官らを従えて、直ぐ立去って行った」という。この視察は東條の秘書官記録によっても裏付けられる。それによれば、東條は九州視察の一環として三月三一日に三菱造船所を視察、訓示を行っており、所要時間は一時間三〇分だった（伊藤隆ほか編『東條内閣総理大臣機密記録　東條英機大将言行録』）。

東條が完成間近の巨艦の姿を見て何を思ったかは残念ながら定かでないが、この戦争が海を挟んだアメリカ相手の戦争、すなわち海軍主体の戦争である以上、心強く感じたのではなかろうか。

東條は、戦争に負けたせいで強権・高圧的な負のイメージだけが残ったが、戦時中は指導者として視察を通じた自己演出と民心の掌握に努め、それなりに人気もあった。そのことは、直後の鹿児島、宮崎、大分での移動にヒトラーよろしくオープンカーを使っていることからうかがえる。吉田裕が指摘するように、東條は「総力戦の時代は、多数の国民の積極的な戦争協力を必要不可欠なものとする」（吉田『シリーズ日本近現代史⑥　アジア・太平洋戦争』）ことをよく理解していた。巨艦武蔵の建造風景は、その「総力戦」の遂行が東條ら陸海軍指導者や高度な軍事技術のみならず、大勢の無名の人々の献身なしにはなしえなかったことを、改めて教える。

ちなみにこの視察行ののち、六月のミッドウェー海戦大敗の報を聞いた東條は部下に「海軍がなくなってはもうお仕舞だよ」と涙をうかべて言ったという話がある（中原茂敏〈元陸軍大佐〉『国力なき戦争指導』）。

「こいつは生きている」

かくしてほぼ完成した武蔵は、一九四二年六月上旬から一か月以上にわたり、瀬戸内海の伊予灘で諸公試が行われた。まず運転公試（試運転）を行い、ついで兵装（火砲）の公試に移るのだが、そこで艤装員の千早正隆少佐（当時）は、二七・五ノットの全速力で海原を前進する武蔵が一挙に後進全力に切り替わるのを目撃した。

> また二十ノット以上の存速がある七万トン近い巨艦に、後進全速がかかると、艦はその巨体を鋭く身震いさせた。私は一瞬、プロペラが、エンジンがもたないのではないかと思った。が、艦はスピードを目に見えて落して、ついに停止したかと思うと、後進で走り出した。こいつは生きていると、私はすごい感動を覚えた。（千早正隆「第二号艦艤装員」）

彼にとって竣工間近の武蔵はまさに「生きてい」たのであり、そこには今後の海軍の主兵は航空か戦艦かなどといった合理論とは別の、超越的な力に対するある種の信仰のようなものがあったように思う。現実の国力・戦力差はどうあれ、この信仰に支えられて対米戦争は進んでゆく。私は本書の冒頭で「戦争のファンタジー化」について言及したが、何のことはない、戦争中の人々にとっても戦争や武蔵とは「ファンタジー」だったのである。何しろ生きているはずのない鋼鉄の軍艦が「生きている」のであるから。

武蔵初代艦長・有馬馨（ありまかおる）の言によれば、「同艦の公試は大和より若干宛（ずつ）の良成績にて終」わり（宇垣『戦藻録』四二年八月三日条）、同年八月五日に竣工式を終えた。同月一六日に艦を巡視した宇垣自身も「大和に比して、当司令部の意見に従ひ改善せられたる点、相当多し」（同月一六日条）と評価していた。

武蔵は翌四三年一月二二日に南方における海軍の拠点・トラックへ進出、二月一一日に最新鋭の戦艦として連合艦隊旗艦の座を大和から引きついでいる。

元呉工廠造船部員・技術少佐の木下共武（きのしたともたけ）によると、そのトラックで、武蔵はある工事を受けた。武蔵のトラック進出の約二か月前、戦艦比叡が最前線のソロモン海で米軽巡洋艦の六インチ（約一五センチ）砲により舵取機室（かじとりきしつ）を破壊され、退避行動不能となって沈んだ。「戦艦が軽巡にやられた」ことになり、同じ弱点は武蔵にもあったから、二五ミリＤＳ鋼板を当該

箇所に貼り付けたのである。呉が工事を間に合わせられなかったのではなく、実際には艦政本部の訓令の出し忘れであったという（木下「武蔵の残工事」）が、一見無敵の大戦艦にも、実はこのようなアキレスの踵（かかと）と言うべき弱点があった。

武蔵はその後、戦死した山本五十六連合艦隊司令長官の遺骨を内地へ還送した際の四三年六月二四日、横須賀沖で昭和天皇の行幸を迎えている。連合艦隊司令部従兵長だった近江（おうみ）兵治郎（ひょうじろう）によれば、天皇は武蔵滞在中の三時間の間に、二種軍装（夏服白布地）、海軍大将の肩章付きの服など、七回の「お召し替え」をしたという（近江『連合艦隊司令長官山本五十六とその参謀たち』）。また、艦隊司令部幕僚との会食に用いた食器などの諸道具類はすべて宮内省主膳寮〔正しくは大膳寮〕から持ち込み、その量は貨車二台分にものぼったという。大元帥・昭和天皇はまことに神に対するがごとき扱いを受けていた。

天皇は巨艦武蔵の偉容を目の当（ま）たりにして満足したようであった。しかし、もはや海軍の戦争は空母と航空機中心の戦いへと移行していた。そのため、同じ横須賀で建造中であった大和型の三番艦信濃（しなの）は戦艦から空母へと改装され、四四年一一月一九日に就役した。だが実際には未完成で、残工事のため横須賀から呉へ回航中の二九日、米潜水艦の雷撃により、戦局になんら貢献するところなく沈んだ。

第二章　武蔵沈没

1　レイテ沖海戦

一九四四年の戦況

一九四一年から四五年まで続いた日米戦争は、基本的には島嶼(とうしょ)戦、すなわち広大な海洋上に浮かぶ島々の争奪戦であった。よって、制空権を取った方が相手の輸送船を沈めて物資・軍隊の輸送ルートを断てるから勝つ、ということになる。わかりやすくいうと、米軍がどこかの島を占領したいと思えば、まず航空母艦で周辺にいる日本軍の航空機を撃滅、制空・制海権を取る。ついで空爆と戦艦などの主砲で陸上の防御施設を破壊したうえで海兵隊・陸軍の部隊が大挙上陸するのである。在島の日本軍部隊は死にものぐるいで応戦するが、増援部隊も補給物資も来ないので、やがて力尽き「玉砕」してしまう。

米軍はこの戦法の繰り返しで、太平洋上を東から西へ島伝いに、日本本土めがけてじりじりと押してきた。一九四二〜四四年にかけて日米の主戦場となったソロモン・ニューギニア方面の戦いで、海軍は航空隊や旧式ではあるが速度の出る金剛型戦艦を酷使して消耗させる一方、大和・武蔵をはじめとする戦艦部隊は出番もないため後方基地に待機させていた。

待機させた理由は、日米の激戦場である「ソロモン方面東部ニューギニア方面共に、敵航空勢力の集中焦点」であり、「我基地航空部隊を以て完全制圧の望なきに於て、艦隊大兵力（水上）を運用するは徒らに損耗を来して彼の手に乗るもの」であるから、「基地飛行機、潜水艦、小艦艇の活動に委」すのがよいとされた（宇垣『戦藻録』四二年一二月二九日条）ためだった。戦争の主力は彼我とも完全に飛行機であり、戦艦部隊は出て行っても意味がないとみなされていたのである。

一九四三年末から四四年にかけて米軍の空母部隊（機動部隊）が本格的な反攻作戦を開始、日本軍の各拠点を襲い始めた。四四年三月二九日、パラオ泊地にいた武蔵ほかの戦闘艦艇は、米機動部隊の空襲を予測し避退を開始した。このときパラオ礁外で米潜水艦の放った魚雷が命中、戦死者七名を出したが航行には支障なく、四月三日、呉に到着した（『戦艦大和・武蔵行動概要』、アテネ書房編集部編『戦艦大和・武蔵戦闘記録』）。

武蔵はこの呉で左右両舷の一五・五センチ副砲塔を撤去し、対空火器を増設する工事を受

けた。大和が左右の副砲塔跡に一二・七センチ連装高角砲を三基ずつ、計六基積んだのに対し、武蔵は高角砲の生産が間に合わず、二五ミリ三連装機銃を三基ずつ積んだ。このほかにも機銃を増設、対空兵装は合計一一九挺となった（『戦艦武蔵建造記録』）。

なお、パラオは三月三〇日になって実際に空襲され、退避せず残っていた日本軍艦船、航空機は壊滅した。武蔵とて残っていればどうなったかわからない。

同年六月一九・二〇日のマリアナ沖海戦は、米軍がサイパン島やグアム島といったマリアナ諸島を占領する過程で起こった海戦である。この海戦が日本軍にとっては長年「企図してきたとおりの遊〔邀〕撃戦が実現した」（澄川浩「日本海軍と大艦巨砲主義」）のだが、主力は日米とも航空母艦とその搭載機であり、数に劣る日本軍は空母三隻と航空機五〇〇機近くを失って敗退した。大和・武蔵を始めとする戦艦部隊は空母部隊の前衛として味方航空機が敵空母を撃破後、突撃して止めを刺す役割を担ったが、その機会はなかった。

サイパン島はこの敗北により増援を断たれて孤立、七月に陥落した。以後これらの島々はB―二九による本土爆撃の基地として使われた。同海戦と同じ時期、欧州ではノルマンディ上陸作戦が決行され、日独とも勝利の見込みは完全に失われるに至った。

米軍は続いてフィリピンの奪回を目指した。同年一〇月一七日、米陸軍部隊が海軍の護衛のもと、フィリピン・レイテ島東岸の小島・スルアン島に上陸、続く二〇日、レイテ島に大

挙上陸してきた。日本軍が同島に造った飛行場を奪い、首都マニラのあるルソン島制圧の拠点とするためであった。日本側から見ると、フィリピンを失えば石油をはじめとする南方資源輸送ルートは完全に切断されることになる。

レイテ沖海戦

このレイテ島東岸（レイテ湾）に押し寄せた米輸送船団を撃滅し、名誉ある講和の足がかりとする（いわゆる一撃講和）ために大和・武蔵他の水上部隊が出撃し、これを迎え撃つ米艦隊とのあいだにレイテ沖海戦が行われた。マリアナ沖海戦で生き残った空母部隊を囮として米空母部隊を同湾から引き離し、その隙に戦艦以下の水上部隊が三隊に分かれて各方面から同湾に突入、その巨砲で所在の米船団と上陸軍を撃滅するという、大規模かつ精緻だがきわめて投機的な作戦であった。

大和・武蔵はその三群のうち、栗田健男中将の率いる総勢三二隻、最大の主力部隊（第一遊撃部隊第一・第二部隊、通称栗田艦隊。旗艦重巡洋艦愛宕）に属していた。各部隊はいずれも飛行機の護衛のないまま一〇月二五日黎明を期してレイテ湾へ突入することになっていた。空母は囮に使い、陸上基地から発進する陸海軍航空隊はすべて米機動部隊攻撃に投入されたからである。

水上部隊にとっては事実上の特攻ともいえる作戦だが、その出撃は、米軍のレイテ襲来から一週間もたってようやく開始された。日本艦隊内には、米船団の主要物資・人員の陸揚げはとうに終わっているはずだから、万一突入に成功してもさしたる戦果は望めないのではないか、という疑念が広がり、士気は上がらなかったといわれる。さらに、艦隊の攻撃主目標がレイテ湾の輸送船団か米艦隊かで曖昧になっていた――艦隊としては当然のように後者を望んだ――ことも、のちの海戦の推移に大きく影響する。

この作戦が味方戦闘機の援護を欠いた、その意味で無謀であったことも、艦隊の士気に悪影響を及ぼしていたようである。とはいえ武蔵の沈没時、護衛にあたった駆逐艦・清霜艦長の梶本顗中佐によれば、ボルネオ島の前進基地ブルネイに艦隊が集結、各級指揮官がレイテへの出撃を前に旗艦愛宕に集合して打ち合わせを行った時は「敵機の猛攻にあうも、わが強力なる砲火をもつて対抗すれば十分排除できるという自信過剰のムードが濃厚であった」（梶本「〝戦艦武蔵〟の護衛について」）という。しかしこれは強がりともとれるので、額面通り受け取ってよいかは難しいところである。

僚艦大和の主計長だった石田恒夫によると、栗田艦隊がブルネイの前に待機していたシンガポール近くのリンガ泊地で、猪口敏平・武蔵艦長は「飛行機だろうと船だろうと主砲で射ちまくればいいんだよ、『武蔵』は沈みはしない」と言っていたという（石田「乗艦「大和」

の死闘」）。そうであるならば、猪口にとってこの海戦は、かねてからの大艦巨砲の夢を実現するための戦争であった。ここで考えたいのは、昔の人の戦争は現実（リアル）で、今の人の戦争は「ファンタジー」だという二分法が本当に有効なのか、ということだ。繰り返し述べているように、当時においても戦争とは人によってではあれ夢（ファンタジー）だったのではないだろうか。

そのような二分法で戦争を考えている人々が忘れがちなのは、この作戦の目的が米軍相手に一勝を挙げ、有利な講和を結ぶという空想だったこと、すなわち当時の戦争もその戦略からして「ファンタジー」化していたことである。

それはさておき、栗田艦隊は一〇月一八日、リンガからブルネイ泊地へと向かい、二二日八時〇〇分、同地よりレイテを目指して出撃した。しかし翌二三日早朝、虎の子の重巡愛宕、同摩耶（まや）が相次いで米潜水艦により撃沈された。旗艦は愛宕から大和に交代、救助された摩耶の乗員は武蔵に移乗し、翌二四日の対空戦闘に参加する。摩耶主計長の永末英一（ながすええいいち）主計大尉に武蔵の伊藤博（いとうひろし）主計長（主計少佐）は梅酒を勧め、「本艦は絶対に沈まないから安心せよ」と言ったという（永末「摩耶シケの海戦回想」）。

また摩耶航海長・井上団平（いのうえだんぺい）中佐は武蔵の運用長が雑談で「明日の対空戦闘では、この大戦艦「武蔵」は、たとえ敵機の爆弾をタライに雨水がふりそそぐように受けながらも、その強力な対空砲火と鉄板の厚さにものいわせて、シブヤン海を突破するだろう」などと「おもし

ろおかしく」話すのを聞いたという（井上「レイテ沖　この非情なる大海戦　史上最大の海戦から奇跡的に生還した激闘の記録」）。彼らは巨艦に対する絶対的信頼、信仰のようなものを抱いていたように思う。不安が高まるほど信仰もまた高まる。

こうした武蔵幹部側の豪語に、乗艦の沈没を経験済みの二人の印象は大きく分かれた。永末は「どんなに「武蔵」が大きくても太平洋に比べれば浮いているものは必ず沈む。まさかそんなことは言えない」と、井上は「おのずと頼もしくなってくる」とそれぞれ回想している。

「死に装束」

武蔵は一〇月二一日、ブルネイで猪口敏平艦長の命令により外舷（船体水上面）のペンキ塗り直しを行った。風雨でくすんだ色の艦隊の中で、きれいに塗り上げられた武蔵はひときわ目立つ存在となった。このこと自体は元乗組員佐藤太郎（さとうたろう）の手記『戦艦武蔵』（一九五二年）や僚艦・大和副長能村次郎（のむらじろう）の回想『慟哭（どうこく）の海　戦艦大和死闘の記録』（一九六七年）など、複数の回想記に出てくるので事実である（ただし能村はリンガでのこととしている）。

猪口本人が何を考えてこれを命じたかは定かでないが、佐藤はその時の水兵たちの反応を「塗料は可燃物だろう。爆撃されたらすぐ燃えるからだよ」「うーん、これは死装束（しにしょうぞく）だぞ。

死ぬ前の化粧だよ」「うん、そうか、艦長が四代、副長が二代で四二装束だよ（猪口は第四代の艦長、加藤憲吉大佐は第二代副長）」「本艦だけ塗ったんでは、敵機がみんな本艦に来るぞ」「囮はここでござーい」と記している。

つまり、この塗り直しには、爆撃の際に火災の元とならないための可燃物処理説、「死に装束」説、そして敵機の攻撃を一手に引き受ける囮説があることになる。

一方の能村は、猪口から大和も一緒に塗り直そうと誘われ、内心「その暇があるならば、休息するほうがずっとよいと思っ」て断ったと回想している（能村『慟哭の海』）。この時点で囮説は消える。戦隊の旗艦たる大和まで囮になる必要はないからだ。可燃物処理説も、ミッドウェー海戦以後の戦訓を受けて空母を始めとする艦艇の防火対策に熱心だった海軍（戸高一成編『証言録　海軍反省会　五』）にあって、武蔵だけが行い倣う艦がなかったのは不自然である。残るは「死に装束」説だが、「四二装束」という台詞がとっさに出てくるというのは出来すぎの感がある。

佐藤ら武蔵の水兵たちが、塗り直しは敵機の攻撃を引きつけるとして嫌ったのは理解できる。能村も本心ではそう考えて断った可能性が皆無ではない。しかし私は、猪口艦長には単なる囮として死ぬつもりなどなかったと思っている。彼は小柳冨次・栗田艦隊参謀長によるとかねてから「「武蔵」「大和」以下戦艦、重巡の砲戦威力を高く評価して、強く洋上決戦を

主張して」（小柳『栗田艦隊　レイテ沖海戦秘録』）いたという。その決戦論こそ容れられなかったものの、本気でレイテ湾に突入して日中戦争以来の訓練の成果を生かし、武蔵の巨砲で米船団を撃滅するつもりだったのではないか。猪口は武蔵は沈まないと確信していたからこそ、あえて外舷を塗り直したのであろう。それは、「死に装束」どころか、かねての大艦巨砲の夢を実現する「晴れ衣装」だった。だから武蔵と同等の力を持つ僚艦大和も誘ったのである。

武蔵の甲板士官（艦内の風紀取締係）だった野村治男・元大尉は、レイテ沖海戦直前の艦内の空気について、パラオで潜水艦の魚雷を受けて三〇〇〇トン浸水しても悠々と呉まで二二ノットで突っ走ったこと、マリアナ沖海戦で敵機が近寄ってこなかったことから、「近寄つて来て呉れれば、しめたもんよ。いつもみたいに、姿を見ただけで敬遠されちゃ折角の四六糎砲も夜泣きするばかりだあな」との声があり、「世界最大最強の艦だという頼りと、この大砲火を一度思う存分発揮して見たいという期待に心をはずませていた」（野村「戦艦「武蔵」の最後」）と回想している。

これが海戦から約一三年後のものである点には留意すべきだが、野村は海軍兵学校卒業後の四三年一一月からずっと武蔵に乗っていて激しい対空戦闘を経験しておらず、出撃に際して沈痛どころか昂揚した心境にあったとしても、決して不自然ではない。武蔵が沈んだのは

あくまでも結果であり、海戦前の彼らがそれを知る由はないのである。

空襲と米俵

栗田艦隊は二四日朝、いよいよ米空母機の大挙来襲が予想される海面へと突入した。艦隊は二群に分かれ、それぞれ輪形陣（輪の中央に戦艦を置き、その周囲を巡洋艦や駆逐艦が囲んで敵の飛行機や潜水艦に対抗する）を組んで進んだ。大和は旗艦として第一群の中央に、武蔵はその左後方に着いた。

駆逐艦清霜の砲術長だった門脇尚一・元大尉は空襲の直前、「艦隊の空気が殺気に満ちてピーンと張り詰めていた最中」、旗艦の「『大和』が将旗〔司令長官、司令官の座乗を示す旗〕を小さなものに掲げ換えたのが眼鏡ではっきり見えた」（門脇『駆逐艦「清霜」の奮戦』）と回想する。規則違反ではないが明らかに敵機の目標となるのを恐れての行為で、門脇は見苦しさ、苦々しさを感じたという。この回想が確かなら、先にふれた武蔵の下士官兵たちが外舷塗り替え時に感じた恐怖心は、大和の将兵にも共通していたことになる。門脇はこの戦闘で「海軍の伝統と旗章令に基づき戦闘旗を檣頂（しょうちょう）〔マストの先端〕高く翻（ひるがえ）し奮戦したのは駆逐艦「清霜」ただ一艦であった」とも語る。

しかし、これを大和の艦橋にいた小柳冨次参謀長にいわせると、「大きな艦ほど狙われる。

その点「大和」「武蔵」は筆頭だ。中でも「大和」は檣頭高く将旗を掲げているので、攻撃の焦点となつたであろう」という書き方になる（小柳『栗田艦隊』）。同じ海戦の同じ出来事でも、書き手によって全く描写や理解が異なることの一例である。

武蔵はこの二四日、六次にもわたる米軍艦上機隊の激しい空襲を受け、味方の損害を一手に引き受ける「被害担任艦」となる形で魚雷二〇本、爆弾一七発をうけて沈む。空襲の詳細は「軍艦武蔵戦闘詳報　菲島（ひとう）沖海戦（捷号（しょうごう）作戦）」（アテネ書房編集部編『戦艦大和・武蔵戦闘記録』所収）より作成した次表を参照されたい。

ただしこれらの数字は、武蔵が一連の爆撃で艦橋に被弾、戦闘記録者たちが戦死して記録も失われたため、沈没後、生還した副長以下の記憶と合議に基づいて推定、記録されたもので、同戦闘詳報自ら「記録亡失ニ付時刻ハ推定ノモノヲ記入ス」と記し、正確性に大きく欠けるといわれる。

	開始時刻	武蔵への来襲機数	命中
第一次	一〇時〇〇分ごろ	一七機	魚雷一、爆弾一
第二次	一一時三八～四五分	一六機	魚雷三、爆弾二
第三次	一二時一七分	一三機	魚雷一

第四次	一二時二三分	二〇機	魚雷四、爆弾四
第五次	一三時一五分	なし	なし
第六次	一四時四五分	七五機	魚雷一一（うち不発二）、爆弾一〇

※第二・三次の時刻は被雷時刻

ことに第三次以降については、戦闘に参加した味方他艦の記録と食い違いがあるとされ（防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　海軍捷号作戦〈二〉　フィリピン沖海戦』）、被雷数についても諸説あることをあらかじめ断っておかねばならない。

空襲開始直前の武蔵艦内では、中甲板の居住区にいた伊藤主計長が米俵を一メートル以上積んでその中に腰を据え、前出の永末英一主計大尉に「摩耶シケ（主計の略語）、前へ座れ」と言った（永末「摩耶シケの海戦回想」）。米俵は命中した爆弾の弾片除けだろう。永末の別の回想では、主計長は米俵を目の高さに積ませて一〇平方メートルほどの区画を作り「「摩耶」シケ、これがおれの司令塔だ。ここへ坐れ」、「この居住区は、下がアーマー（装甲）。右も左もアーマー。本艦で一番安全なところ」とも言ったという（永末「最後の「摩耶」主計長　比島沖海戦」）。こうした行動もまた、武蔵での一風景であった。

やがて第二次空襲で魚雷が命中して浸水、船体が傾くと、伊藤主計長は胸に掛けていた懐

中電灯を右手で吊し、斜めになったのを見て「本艦はかしいでいる」と言った（永末「摩耶シケの海戦回想」）。不沈艦への信仰が崩れる時が来たのである。

伊藤主計長が米俵にこめた危惧は故のないことではなかった。高橋清・衣糧長（主計大尉）らの回想によると、主計科指揮所を最初は右舷中部中甲板の副官室に置いたが、第二波の直前に衣糧事務所（下甲板か）に移した。直後に副官室は爆弾を受けて悲惨な状態となった。高橋は「幸いにも被弾をまぬかれたことは、まったく神助のおかげ」という（「総合立体特集　戦艦武蔵レイテ沖の最後」）。

武蔵戦闘詳報には、第二次空襲で命中した爆弾のうち一個が左舷四番高角砲左前方の最上甲板、上甲板を貫通して中甲板第十兵員室で炸裂、第二機械室に火焔が侵入して三軸運転を強いられた、各缶室に被害が出た旨の記録がある。その結果速力は二二ノットまで低下した。

第六次空襲では、防空指揮所に命中した爆弾が第一艦橋で炸裂し、猪口艦長は重傷、仮屋実航海長ほか多数の幹部が戦死した。さらに多数の魚雷命中により、浸水して左へ一〇度傾斜、右舷に注水して六度まで復元した。しかし「「トリム」（船首喫水と船尾喫水の差）ハ前へ四米ヨリ一挙ニ八米トナリ艦首沈下シテ主砲塔左舷最上甲板ノ一部浸潜状態トナ」ってしまった（「軍艦武蔵戦闘詳報　非島沖海戦（捷号作戦）」）。いわば左へ傾きながら前のめりとなった形である。

武蔵はこの左舷への傾斜が止まらず、最終的に一九時三五分、転覆沈没するに至る。永末はその目で見た断末魔の武蔵を「主砲は右と左にはなればなれの向きのまま停止、二十四門の高角砲〔実際は一二門〕の砲座はふっとびこわされ、一二〇の機銃もほとんどものの用に立たない。どす黒い甲板のチークを血潮が赤くいろどり、無数の死者と負傷者が横たわっている」（永末「摩耶シケの海戦回想」）と端的に描写している。

落伍した武蔵

旗艦大和の栗田中将は一五時一〇分、気息奄々となった武蔵にコロン島（パラワン島北方）へ向かうよう命じた（第一戦隊司令部「第一戦隊戦闘詳報　第二号」、アテネ書房編集部編『戦艦大和・武蔵戦闘記録』所収）。護衛として駆逐艦清霜を付け、艦隊はレイテ湾へと東進していった。この後、重巡洋艦利根、駆逐艦島風も護衛に加わった。

武蔵とともに取り残された形の清霜自身、その日の対空戦闘で被弾損傷しており、同艦の門脇尚一砲術長によれば二隻の姿は「深手を負った主従が落ち武者狩りを恐れながら、刀を杖に戦場から落ち延びる姿に似ていた」（門脇『駆逐艦「清霜」の奮戦』）。また梶本顗艦長は「誰しも口外しないまでも、心の中では主隊との同一行動を願ったものは私一人ではあるまい」、「護衛に当つて私が最も腐心したのは、敵の征空権下に友軍の支援なく廃人同様の大物

を抱えて、如何にしてその大任を完遂するかということであった」（梶本「〝戦艦武蔵〟の護衛について」）と当時の不安な心境を正直に書いている。

それでも武蔵は必死に前進を続けた。門脇砲術長によれば、武蔵の戦闘艦橋で「ひとり従容と椅子に座して前方を見つめ」、「すでに最悪の場合の覚悟を決めておられるのであろう」猪口艦長の姿が清霜から見えた（門脇『駆逐艦「清霜」の奮戦』）という。

不沈を自称した武蔵があえなく沈没した理由を、艦と運命を共にして戦死した猪口の遺書からみていきたい。艦の沈没間際に手帳に記し、副長の加藤憲吉大佐に手渡したものである。まず、宇垣纏が日記に筆写した遺書の前半部を以下に引用する。

> 遂ニ不徳ノ為海軍ハモトヨリ全国民ニ絶大ノ期待ヲカケラレル本艦ヲ失フコト誠ニ申訳ナシ。唯本海戦ニ於テ他ノ諸艦ニ被害殆ンドナカリシ事ハ誠ニウレシク何トナク被害担任艦トナリ得タル感アリテコノ点幾分慰メトナル。本海戦ニ於テ全ク申訳ケナキハ対空射撃ノ威力ヲ充分発揮シ得ザリシ事ニシテ之ハ各艦共下手ノ如ク感ゼラレ自責ノ念ニ堪ヘズ。ドウモ乱射ガヒドスギルカラ反ツテ目標ヲ失スル不利大デアル。遠距離ヨリノ射撃並ニ追打チ射撃が多イ。／被害大ナルトドウシテモヤカマシクナル事ハ致シ方ナイカモ知レナイガ、之モ不徳ノ致ス処ニテ慚愧ニ堪ヘズ。／大口径砲ガ最初ニ其ノ主方位盤

ヲ使用不能ニサレタ事ハ大打撃ナリキ。主方位盤ハドウモ僅カノ衝撃ニテ故障ニナリ易イ事ハ今後ノ建造ニ注意ヲ要スル点ナリ。敵航空魚雷ハアマリ勢力大デナイガ、敵機ハ必中射点デ然モ高々度ニテ発射ス。初メ之ハ低空爆撃ト思ヒタリシモ之ガ雷撃機ナリキ。／本日ノ致命傷ハ魚雷命中〔五本（確実）以上七本ノ見込〕ニアリタリ。一旦回頭シテキルトナカ〳〵艦ガ自由ニナラヌコトハ申ス迄モナシ。ソレデモ五回以上ハ回避シタリ。回避シタト云フノモ先ヅ自然ニ回避サレタト云フノガ実際デアラウト思フ。／機銃ハモ少シ威力ヲ大ニセネバナラヌト思フ。命中シタモノガアツタニ不拘ナカ〳〵オチザリキ。敵ノ攻撃ハナカ〳〵ネバリ強カリシ。且今ガワルケレバ対勢ガヨクナル迄待ツモノ相当多シ。但シ早目ニ攻撃スルモノモアリ。艦ガ運動不自由トナレバオチツイテ攻撃シテ来ル様ニ思ハレタリ。（宇垣『戦藻録』四四年一一月二八日条。〔　〕内は原文ママ）

これを読むに、武蔵沈没の要因は、対空射撃の威力不十分であったこと、舵の利きが遅く、米軍機の投下してくる魚雷・爆弾の迅速な回避が困難であったことの二点にあった。ただし、一九三四年以降の設計時に、かくも多数の魚雷を被弾する状況が想定されていなかったことは先に述べた。建造時に問題視された速力不足は、かつて軍人たちの夢みた戦艦同士の「制空権下の艦隊決戦」が実際の戦争では起こらなかったため、特段の問題とはならなかった。

文中の「方位盤」とは、艦の前檣楼最上層部に置かれた主砲の統一射撃装置である。戦艦の主砲は彼我の距離や速度、風向などの各種のデータを計算し、一斉に発射することで命中率を向上させていた。これが早期に「僅カノ衝撃ニテ故障」してしまったことは、仮に武蔵がレイテ湾に突入できたとしても主砲の精密な統一射撃は不可能となったことを意味しており、だから「大打撃」なのである。砲術の神様と称された猪口の無念がうかがえる。

かつて大岡昇平が小説『レイテ戦記』（一九七一年）にて指摘したように、技術の粋を凝らしたはずの大戦艦には、眼に見えない構造上の欠陥があったといわねばならない。現在では方位盤故障の原因について諸説あり、武蔵ほどの巨艦に一本の魚雷がそれほどの「衝撃」となるのか、という意見もみられるが、設計者の牧野茂技術大佐は「方位盤そのものね、やっぱりあれが取付法といいますか、耐ショックの防御がですね、足りなかったんじゃないか」と戦後の一九八三年三月に発言しており（戸髙一成編『証言録　海軍反省会　五』）、あり得ないことでもないようだ。

元海軍技術少佐の福井静夫も、一九四四年三月に武蔵がパラオ沖で米潜水艦の魚雷一本を受けて浸水した際、艦橋ではほとんどショックを感じなかったのに、「檣楼の測距儀、照準装置などがはげしい振動で損傷」、測距儀の測距手が目を、方位盤射手が足を、それぞれ激動で負傷したと述べている（福井「最後の名戦艦／その艤装・戦訓・改造のすべて」）。また、戦

争中、呉海軍工廠で損傷艦船の修理などにあたっていた元技術士官・堀元美の回想には、四三年一二月、同型艦の大和が米潜水艦の魚雷一本をうけた際、「前檣頂の射撃方位盤がショックのためと思われる変調を生じていたという」との記述がある（堀『続・鳶色の襟章　海軍工廠の戦いの日々』）。大和型に何らかの構造的な欠陥があったことをうかがわせる。

対空射撃の困難さ

艦隊の中で武蔵の対空射撃だけが拙劣だったというのではない。そもそも軍艦から高速で飛ぶ飛行機を射撃すること自体がきわめて困難であった。四二年八～一〇月にかけて武蔵の高射長（対空射撃の責任者）を務めた千早正隆は昭和一四年の暮れ、新鋭の巡洋艦筑摩分隊長に転勤になった。同艦には僚艦の利根とともに、その当時に完成したばかりの九四式高射装置（対空火器の統一指揮装置）が装備されていたが、その精度はきわめて不十分だった。「射撃訓練（時速約二五〇キロの水上機が曳く吹き流しに対するきわめて初歩的なものであった）で命中をえることは皆無といってよかった」し、「高角砲、機銃による命中は、まぐれ当たりを期待するほかなかった」という（千早『日本海軍の戦略発想』）。

このように、軍艦からの対空射撃が効果薄なのは開戦前から分かっていたが、だから対米戦争を止めるなどということはありえず、眼をつぶって突入していったのである。結局、敵

の繰り出す飛行機にはこちらも飛行機で対抗するしかないので、それを欠いた武蔵の沈没という悲劇は起こるべくして起こったといわねばならない。

武蔵の対空射撃が威力を発揮できなかった理由のひとつに、それまでの訓練の不十分さもある。映画監督・作家手塚正己のノンフィクション『軍艦武蔵』（二〇〇三年）は、多数の元乗組員などへのインタビューにより編まれた武蔵物語の労作であり、本書でも後で詳しくとりあげるが、その中に、「放水射法」と称する対空射撃の訓練法に関する証言がある。

〔武蔵の〕後甲板上には、搭載機運搬機軌条が交差する箇所に旋回盤が設置されていて、その上にカッター〔短艇〕が置かれた。カッター内には高射長と数名の機銃射手が陣取っている。射手の手には吐水管からホースで引っ張った細い筒先があった。そして、頭上にはカッターの上を通過するように、何本もの紐が交錯している。〔中略〕放水射法の訓練が開始された。何名かの兵隊によって、ちょうど艦が舵を取っているように、カッターの舳先は右に左にと回転させられた。突然、頭の上から紐を伝って模型の飛行機が滑り落ちて来た。すかさず高射長が「打方始め」の号令を発すると、射手が持った筒先から水が勢いよく噴出した。何本もの管から飛び出す水が、急降下して来る模型飛行機を追った。その間、カッターはせわしなく回頭を続けるのである。（手塚『軍艦武蔵

上巻』）

この「放水の軌跡を曳痕弾になぞらえて、襲い来る飛行機に射撃を加えるという訓練」は戯画としかいいようがないが「実弾射撃の代用だった。それほどに実弾は貴重であった」からだという。手塚は「信じられないことだが、「武蔵」が実際に敵機に向かって対空射撃をするまで、大半の機銃員は実弾射撃の経験がなかった」（同）とも述べている。

世界一の巨艦を造っても、これに十分な実弾を供給して訓練を積ませることまではできなかったのが、帝国海軍の現実の姿であった。僚艦大和も同様で、四四年五月八日に「単独出動対空射撃を実施」したが、「砲数機数多くとも実際の腕無ければ猫に小判なるべし」と酷評される有様（宇垣纏『戦藻録』同日条）であった。

とはいえ、武蔵艦上でこの放水訓練が考案されたのは、千早の後に高射長となった古賀祐光大尉が愚かだったからでは決してない。むしろ逆で、航空機に対する戦艦の無力さを日頃から公言、自分の乗り組んでいる武蔵を厳しく批判したような、きわめて頭脳明晰、目端の利く人物だった。その彼らにして、このような訓練法を案出し、実行するしかなかったという悲喜劇性にこそ、日本海軍の実像がある。愚かさと聡明さ、悲劇性と喜劇性のどちらか一方だけを強調したのでは、戦争も軍隊も理解できない。

運動性の悪さ

話を一〇月二四日、武蔵の最期に戻そう。栗田艦隊が落伍した武蔵を置いてレイテ湾を目指したことは前述したが、激しい空襲のため一五時三〇分に反転退却を決め、大破して動けなくなった武蔵の横を通り過ぎた。第一戦隊司令官として大和艦上にいた宇垣纏はその惨状を「損傷の姿いたましき限りなり。凡ての注水可能部は満水し終り、左舷に傾斜十度位、御紋章は表し居るも艦首突込み、砲塔前の上甲板最低線漸く水上に在り」と記している（宇垣『戦藻録』四四年一〇月二四日条）。

しかし艦隊は米空母群が囮作戦に引っかかって空襲を止め、日本空母を目指して北上を始めたことから一七時一四分に再反転、ふたたびレイテ湾目指して進撃を開始する。連合艦隊司令部は一八時一三分、「天佑ヲ確信シ全軍突撃セヨ」との督励電報を艦隊へ向け発信している。

武蔵がこのような大損害を蒙り、沈むに至った理由として、回避運動中の舵の効きの劣悪さが猪口艦長により指摘されたことはすでに述べた。この点について元航海長・池田貞枝大佐（武蔵在任四三年六月〜四四年四月）は戦後、次のように詳しい証言を残している。

武蔵では、重巡のような器用な芸当はできない。普通に転舵すると、一分四十秒もたって、忘れたころに舵が利きはじめる。全速ならば、この間に一・四キロも走ってしまう。／また、やっと十度ほど艦が回頭したかと思うと、あとが大変だ。舵を中央にもどしてしまうと、まわれ右をしてしまうくらい惰性がついてしまう。／一方、全速の二十七ノット（五十キロ）で航走中、爆弾をさけるため、九十度回頭すると、速力は十六ノットに減速する。三百六十度の一回転まわりすると八ノットにへる。まわりはじめがおそいから、高度四千メートルぐらいからの急降下爆撃を回避しようと思っても、艦がまわりはじめないうちに、爆弾はとどいてしまう。魚雷回避運動を二、三度つづけると、艦はほとんど静止状態になってしまうので、つぎの攻撃にあっては処置なしである。（池田「戦闘中における武蔵の効果的な運転法」）

このため、「敵機が上空にあらわれたとなると、もはや致命的であ」った。戦艦の対空火力として期待された主砲用の三式弾（砲弾が空中で炸裂してその弾片が広範囲に四散、敵機を包み込んで撃墜する）も「発見から上空にいたるまで、せいぜい一、二発うてるていど」であり、対空機銃の射撃を邪魔するなど、かえってマイナス面が強かった、という。

つまり武蔵戦闘中の「効果的な運転法」は実のところないため、池田は武蔵離任時、後任

の仮屋実航海長（戦死）に「とくと爆撃回避の不要論」を説いたという。猪口艦長はリンガ泊地における栗田艦隊出撃前の打ち合わせで回避不要論——空襲時は雷爆撃を回避せず直進し、敵機には対空射撃で応戦する——を主張して退けられ、回避運動第一、射撃第二と決められたという（手塚正己『軍艦武蔵　上巻』）が、これは猪口が武蔵の対空火力・耐弾力を妄信していたからではなく、その鈍重さによりやむを得ず選択された可能性がある。

池田は戦後、公職に就くことなく三〇年間にわたって海軍艦船の沈没地点の調査を続けた。その目的は、将来の船体引き揚げ、乗組員遺体収容の手がかりとすることであった。調査結果は、本人死去後の一九七七年に戦闘艦六八八隻、輸送船二五九六隻分を収めた大著『太平洋戦争沈没艦船遺体調査大鑑』（戦没遺体収揚委員会）と別冊付録『太平洋戦争沈没艦船位置精密図』として公刊された。

彼の孤独な取り組みの動機のひとつは、「処置なし」のまま一方的に、正確な沈没位置もわからぬまま沈められていった艦船と無名の乗員たちへの鎮魂の念、そして責任感であったとみられる。池田は一九六四年、大和・武蔵でさえ沈没地点の説が複数あることにふれ、「一般のあまり名もない軍艦艇、商船の場合は、おして知るべしである」「私は現在、南太平洋とアジアの海に沈む、二千百三十隻の日本艦船の位置を、正確に調査して、これを浮揚し、船内の戦没遺体約七万柱を収容して、遺族の方々におとどけすることを念願としており、こ

れを一生の事業としている」（池田「不確実な大和・武蔵の沈没場所」）と、六八年には「特に一銭五厘で召集された兵隊さんの家族としては、私のところへも何千通という引き揚げ促進運動の署名者の手紙がきておりますが、みな揚げてくれ、せめて緯度、経度だけでも知らせてくれ、こういう要望が非常に多い」（池田・中村正司〈対談〉「八百余隻の鋼鉄の墓標はかなし」）とそれぞれ述べている。

考え得るもう一つの動機に、このレイテ沖海戦で「日本海軍が夢みた巨大戦艦「武蔵」、「大和」で米戦艦群をみな撃滅しようという短期遊〔邀〕撃決戦はついに実現することなく、「武蔵」をはじめ、戦艦「伊勢」〔正しくは「山城」〕、「扶桑」などが、多数の巡洋艦、駆逐艦を同伴者として、飛行機あるいは魚雷艇の餌食となってしまった」（『調査大鑑』）ことへの、元海軍軍人としての無念があったように思う。遺著となった同書に池田自ら記した肩書は「元戦艦武蔵航海長　元海軍大佐」だった。

武蔵沈没の後

武蔵は二四日一九時三〇分から三五分にかけて急激に傾斜、転覆沈没する。この海戦時、乗組員は二三九九名いた（ほか便乗者、摩耶乗員あり）が、猪口艦長以下一〇二三名が戦死、行方不明となり、残る一三七六名が海中より駆逐艦清霜・浜風（島風と交代）の二隻に救助

された（「軍艦武蔵戦闘詳報　非島沖海戦（捷号作戦）」）。漂流者すべてを救助できたわけではなく、清霜の梶本艦長は「戦況が許せば翌日も現場に踏み止つて捜索を続けたかつた。しかし、沈没位置が敵機の攻撃圏内で夜明けまでにどうしても圏外に脱出しなければならず、到底長時日の捜索は許されなかった。〔中略〕この時執つた自己の処置に対しては如何なる批判も甘んじて受けたい」（梶本「〝戦艦武蔵〟の護衛について」）と書く。

残った大和以下の栗田艦隊は翌二五日朝、レイテ湾を守備していた米護衛空母の一群と交戦するが、同湾を前に反転、北方にいると報じられた米機動部隊攻撃（のち誤報と判明）に向かい、そのままブルネイに帰投してしまう。栗田が反転を命じた本当の理由は今となっては不明である。本来の作戦目的は万難を排してレイテ湾へ突入、所在の米輸送船団を撃滅して講和のきっかけとすることにあった。にもかかわらず、事前に行われた艦隊側と大本営側の作戦打ち合わせの際、有力な米艦隊が出現して迷った場合にはこちらを攻撃してもよい、という言質を大本営の参謀が艦隊側に与えていたことが、その背景の一つになったとされている。

一方、清霜・浜風の二隻は二六日にルソン島で武蔵の生存者を下ろしたが、彼らのその後の運命は多様である。飛行機で内地に戻って生き長らえた人々もあれば、ルソン防衛戦（四五年一月〜）の陸上兵として駆り出され、ろくな装備も与えられないまま、餓死・病死とい

う悲惨な最期を遂げた人々もある。このことは戦後生還者たちの間で大問題となるので、後述する。

大和に座乗していた宇垣纏中将は武蔵の犠牲が持つ意義について、海戦終了後の日記で次のように述べている。武蔵の犠牲がなければ攻撃は旗艦大和に集中し、以後の作戦はいっそう混乱して今回のような戦果（二五日の米空母部隊との戦闘を指す）を挙げることはできなかった、つまり「武蔵は大和を救ひ、戦隊のみならず艦隊全般を自らの犠牲に於て掩護救出せるもの」であり、我々は同艦に深く感謝せねばならない、と（宇垣『戦藻録』四四年一一月五日条）。

前出の猪口艦長が囮を買って出たという説も、こうした顕彰的な考え方に基づき後から作られたのだろう。しかし武蔵が本来護ろうとしていたフィリピンは、米軍によって事実上奪回されてしまう。レイテの攻防戦は四四年末に終了、翌年二月にルソン島の首都マニラが陥落、日米の主戦場は沖縄へと移る。

宇垣は四四年一一月二八日、加藤副長の持ち帰った猪口の遺書を読んで感激、「何と云ふ気高く何と云ふ尊き最後の言葉！」との感慨を漏らしていた（宇垣『戦藻録』同日条）。そしてこれと同日、軍令部から今後の水上部隊の用法や修理についての意見を求められ、敵艦隊への最後の止めはやはり水上部隊による、輸送にも使えると答えている。そして「本土に

近く敵と耦刺（刺し違え）も出来、また愈々行かざれば敵の来攻方面に注水擱座し有力なる砲台たる事も可能」である、「有るものを有力に使用する事は国力衰へる国に於て特に考慮を必要とす」などと述べ、最後まで戦艦擁護の姿勢を崩さなかった。

この意見を実行するかのように、武蔵の姉妹艦大和は翌一九四五年、その沖縄へ「擱座し有力なる砲台」となるべく特攻出撃するも、四月七日に米航空機の攻撃で同じように撃沈されてしまう。沖縄戦で海軍航空特攻作戦の指揮を執った宇垣もまた同年八月一五日の玉音放送後に沖縄へ航空特攻し、亡くなっている。

駆逐艦側からみた武蔵乗員

武蔵の沈没時、護衛と生存者の救助にあたった駆逐艦・浜風の乗組員も、戦後に回想録を書いている。浜風乗組員の真子平治（元兵長）は、浜風艦長が暗夜の救助にあたって潜水艦に発見されるのを承知で探照灯を点ける決断をした、武蔵の乗員たちが開戦以来大艦の乗り組みで沈没経験がなかったためか、浜風が海面に垂らした一本のロープに順番を待たず大勢ですがりつくなど「救助される要領が悪かった」ため、多くの人々が目前で力尽き、海中に没したと当時の状況を述べている（真子「駆逐艦「浜風」鎮魂記」）。

以下の真子による回想は、武蔵乗組員側のそれには出て来ないことである。浜風に救助さ

れた武蔵乗組員九〇四名の多くが、海中で靴を脱ぎ捨てていた。同艦の甲板は日中、太陽熱でフライパンのように灼けるため、彼らは日陰を求めてあちこちへと移動した。そのため排水量約二〇〇〇トンの小さな艦が転覆しそうになり、甲板士官らが声をからして注意しても何の効果もなく、艦長が厳重な注意をしてようやく収まったという。

彼らはルソン島コレヒドール上陸時に浜風乗組員の靴を無断で持って行ってしまい、そのため真子は「貴様がボンヤリしているからだと、後で散々しぼり上げられた」。彼は「軍隊で官給品の員数が欠けたらどうなるか、ということを充分に承知してやったこの行為は、ただ情けなく残念なことであった」と書いている。戦場では、普段窺い知ることのできない人間の勇敢と利己の両面が浮き彫りになる。

2　猪口敏平艦長の最期

遺書にみる美意識

ここでいったん時間を戻し、武蔵艦長・猪口敏平少将の最期について、もう少し詳しく考えてみたい。なぜ猪口は退艦することなく武蔵と運命を共にしたのだろうか。まず考えられるのは、昭和の日本海軍における、生還した艦長への人事上の冷遇である。千早正隆は、沈

没する艦と運命を共にしなかった艦長らに対してはきわめて厳しい措置がとられ、「ある艦長は予備役に編入した上で即日応召として、つまらない職につけられたり、また、ある艦長はソロモン随一の陸上の激戦地にあげられて九死に一生をえて戻ってくると、今度はフィリピンに追いやられて戦死した」（千早『日本海軍の戦略発想』）と解説する。

前者の艦長は四二年一一月の第三次ソロモン海戦で撃沈された戦艦比叡の西田正雄大佐、後者は霧島艦長の岩淵三次大佐を指す。岩淵は少将進級後、一九四四年に海軍のマニラ防衛部隊の指揮官となり、翌四五年二月に戦死（自決）している。二人が海軍上層部により、貴重な戦艦を失ったことの責任をとらされたのは間違いない。

しかし、両艦長の生還は、退艦拒否が必ずしも日本海軍の伝統ではなかったことを示してもいる。すなわち、猪口は海軍の伝統に殉じて亡くなったわけではないのである。生還後の過酷な処遇をおそれ、拒否したとみることもできなくはないが、私はむしろ、猪口は近代日本の「国民」が明治以来培ってきた戦争の美学に殉じ、自ら死を選んだのではないか、と考えている。このことを明らかにするため、猪口艦長の遺書の後半部を引用しよう。

最後迄頑張リ通スツモリナルモ今ノ処駄目ラシイ。一八五五。暗イノデ思フタ事ヲ書キタイガ意ニマカセズ最悪ノ場合ノ処置トシテ御真影ヲ奉遷スルコト軍艦旗ヲ卸スコト、

乗員ヲ退去セシムルコト、之ハ我ガ兵力ヲ維持シタキ為生存者ハ退艦セシムル事ニ始メカラ念願、悪イ処ハ全部小官ガ責任ヲ負フベキモノナルコトハ当然デアリ、誠ニ相済マズ。／我斃ル、モ必勝ノ信念ニ何等損スル処ナシ。我ガ国ハ必ズ永遠ニ栄ヘ行クベキ国ナリ。皆様ガ大ニ奮闘シテクダサイ。最後ノ戦捷ヲアゲラル、事ヲ確信ス。／本日モ相当多数ノ戦死者ヲ出シアリ。コレ等ノ英霊ヲ慰メテヤリタシ。本艦ノ損失ハ極大ナルモ、之ガ為ニ敵撃滅戦ニ些少デモ消極的ニナル事ハナイカト気ニナラヌデモナシ。今迄ノ御恩顧ニ対シテハ心カラ御礼申ス。私ホド恵マレタ者ハナイト平素ヨリ常ニ感謝ニ満チ〳〵キタリ。始メハ相当ザワツキタルモ、夜ニ入リテ皆静カニナリ仕事モヨクハコビダシタ。今機械室ヨリ総員士気旺盛ヲ報告シ来レリ。一九〇五（『戦藻録』四四年一一月二八日条）

ここには、猪口がその死にあたって従ったとみられる美意識の形がいくつか記されている。以下、それらを列挙して解説したい。

部下や遺族を慮る

猪口は遺書の中で部下たちの「英霊ヲ慰メテヤリタ」い、と述べ、部下のことを思いやっている。この行為については明治時代の前例がある。一九一〇（明治四三）年四月一五日、広島湾で事故により沈没した第六潜水艇の佐久間勉艇長は、沈没時の状況を遺書に記して殉職したことで有名となり、当時の国定教科書にも美談として採用された。太平洋戦争中に刊行された佐久間艇長の伝記は、大正初年に刊行された小学「修身」教科書の記述を次のように要約している。

遺書には先づ艇を沈め部下を死に致すの申訳なきことを言ひ、部下の将卒が死に至るまでよく職を尽したる次第を述べたり。次に此の異変によりて潜水艇の発展を妨げられんことを慮りて、特に詳細に沈没の原因と情況とを書き記したり。次に部下の遺族の窮するあらんことを深く顧慮し、更に上官、先輩、恩師、友人に告別し、最後に時は十二時四十分なることを註して筆を止めたり。（法本義弘『正伝　佐久間艇長』）

昭和の猪口艦長もまた、遺書で「詳細に沈没の原因と情況とを書き記し」ていたことはすでに述べた。日清戦争直後の一八九六（明治二九）年に生まれ、一九一八（大正七）年に海軍兵学校を卒業した猪口の行動には、戦前の軍隊・戦争にまつわる〝美談〟の影響をみてとることができる。

戦前の日本「国民」が戦争や軍事にまつわるもろもろの話を美談、もしくは虚実皮膜のあいだにある教訓めいた「おはなし」（大月隆寛）として理解していたことに留意しないと、猪口の遺書は読めないのである。

猪口と同じく、太平洋戦争で死に際して遺書をしたためた著名な海軍軍人の例として、人間魚雷「回天」の訓練中に事故で殉職した黒木博司大尉がある。黒木は戦局挽回のため有人体当たり兵器の採用を熱心に上申し「回天の創始者」とされる。四四年九月六日、自ら第一号艇に同乗して操縦訓練中、海底に突入して脱出できず、二二歳の若さで帰らぬ人となった。

彼は事故後にとった応急処置や経過を遺書に細かく記した。その一節には「必死必殺ニ徹スルニアラズンバ、而モ飛機ニ於テ早急ニ徹スルニアラズンバ、神州不滅モ保シ難シト存ジ奉リ候」「必ズ神州挙ツテ明日ヨリ即刻体当リ戦法ニ徹スルコトヲ確信シ、神州不滅ヲ疑ハズ、欣ンデ茲ニ予テ覚悟ノ殉職ヲ致スモノニ候」（回天顕彰会編『回天』）とある。海軍軍人としてまさに佐久間大尉の先例にならった行動と言える。

「飛機」による特攻は直後の一〇月、レイテ沖海戦で実現される。武蔵も事実上の「体当リ戦法」の結果として沈んだ。死者の命をかけた督励は、生者を同じく死へと向かわせるだけの力を発揮したのである。猪口もまた、自らの死をもって「神州不滅」のため生者を督励しようとしたのかもしれない。確かに大艦巨砲の夢は敵機の前に潰えた。しかし「神州不滅」

のため国民が後に続いてくれるという別の夢のなかに猪口は生き続けたのである。このことからも、戦争は当時から「ファンタジー」であったといえる。ただし、ここでいう夢とは妄想などではなく、人が生き、そして死ぬうえで必要欠くべからざる何かである。

戦争はこれからだと主張する

先に引用した猪口の遺書の前半部には、武蔵や海軍に期待した「全国民」への詫びの言葉がある。これは、一九四二年六月のミッドウェー海戦で戦死し、戦意高揚のため喧伝された空母飛龍艦長・加来止男大佐（一八九三〈明治二六〉年生）の最後の訓示とよく似ている。

> 共に今日の戦ひに臨み乍ら、共に只今ここで相見ることのできない幾多の戦友の英霊には、多感、云ひ現せないものを覚える。同時にその尊い赤子を多く失つたことを　陛下を始め奉り、一般国民に対し深くお詫び申上げる。／今次出撃の際にも各員に申し述べた通り、戦は正にこれからだ。諸子の同僚はここの海底に神鎮まるもここの海上は敵アメリカへの撃滅路として無数の英魂は万世かけて我が太平洋を護るであろう。諸子もどうか一層奮励して更にわが海軍に光輝を加へてくれ、敵を撃滅し尽さずんば止まじの魂をいよいよ鍛へ合つてくれ。（大本営海軍報道部編『提督の最期』）

加来は「戦は正にこれからだ」と主張し、死してなお海底に踏みとどまり、アメリカと戦うと語ったことになっていた。猪口もまた「我斃ル、モ必勝ノ信念ニ何等損スル処ナシ」と言い、上官の宇垣纏に宛てた最後の電報では「小官ハ最後迄踏止マリ而シテ今後ノ重大作戦ノ備ヘト致度」と述べている（第一戦隊司令官宛報告、「軍艦武蔵戦闘詳報　非島沖海戦（捷号作戦）」）。猪口は、加来艦長が先に示した一種の模範に倣い、アメリカへの「撃滅路」を守ろうとしたのではなかったか。

ちなみに、ミッドウェー海戦惨敗の一因は、それまで常勝だった日本側の驕り、油断であったとよく言われるが、作戦前の加来は海軍兵学校同期生の石川信吾の回想によると「今度の作戦は意味がない。これでおしまいだ」と漏らして」おり、「既に覚悟していたようであ」ったという（水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　下』）。機動部隊内、少なくとも加来個人には山本連合艦隊司令長官の「バクチ的の閃き」に基づく戦略への不信感があり、ゆえにあらかじめ死ぬ覚悟を固めていた節がある。

空母飛龍の副長も共に艦に止まりたいと申し出たが、加来は「いけない。それはいかん。自分は艦の責任者として、艦と運命を共にするの名誉を担ふ者であるが、他の者は許さん」と拒否したことになっている（大本営海軍報道部編『提督の最期』）。

武蔵の加藤憲吉副長もまた、供を申し出て猪口に拒否されている。このように書くと芝居じみているが、実際には淡々とした別れだったらしい。とはいえ、猪口は所持品のシャープペンシルを形見として生還した加藤副長に渡すことで退去を促したのは事実である。これもまた、飛龍に加来大佐とともに座乗していた第二航空戦隊司令官・山口多聞少将が「「司令官、何ぞ、お遺品を下さい」／先任参謀は追ひすがるやうに、両手をあげて艦橋を振り仰ぎました。その手へ山口司令官の戦闘帽がふわりと軽く投げられました」（『提督の最期』）と宣伝されたのと似ている。私は、この語り口にある種の様式美の成立をみる。

結局、加来と山口の最期をその眼で見届けた者はいないのだが、宇垣纏は日記で「司令官の責任を重んじ、茲に従容として艦と運命を共にす。其の職責に殉ずる崇高の精神正に至高にして喩ゆるに物なし」と絶讃、「蓋し彼の事なり。乗員の全部退去を見送り、而して炎々として燃え続くる煙中、艦橋に於て潔く自刃したるものと認めらる」（宇垣『戦藻録』四二年六月六日条）と絶讃している。艦を失った艦長・司令官は責任を取って潔く切腹すべきという海軍軍人ならではの規範意識を、中将たる宇垣も共有している。

この艦長という存在についての意識は、宇垣のような海軍将官個人のみならず、将校たち一般に広く共有されていた。前出の摩耶主計長・永末英一は「ある巡洋艦の艦長は「総員退去」を命じてのち、みずからも海に投じて救助された。／兵隊のあいだで、「あの艦長は、

まっさきにとび込んでたすかった」といううわさが広がった。／これではもう、その艦長は部下を統率することはできない」、「そのときの指揮官の身の処しかたは、兵隊の士気にきわめて大きい影響をおよぼす」と述べている（永末「艦種／配置別『総員退艦』損得論」）。要するに艦長が生き残っては部下たちに示しがつかないという軍隊組織ならではの論理であり、宇垣の加来・山口賞讃もそれに基づいているのだろう。

今日でも山口多聞は名将として知名度が高い。ミッドウェー海戦で飛龍を指揮、米空母ヨークタウンを撃破（のち日本軍潜水艦が撃沈）したのと、先にみた戦時中の宣伝でその最期が美談化・賞讃されたためである。一方の猪口は高級指揮官の犠牲が日常茶飯事となった戦争後半に亡くなり、その最期が国民に周知されることもないまま今日に至っている。

「増やしたくはないがなあ」

以下は余談である。戦後に公開された日本映画『太平洋の嵐　ハワイ・ミッドウェイ大海空戦』（東宝、一九六〇年）は、副題通り太平洋戦争序盤の真珠湾攻撃からミッドウェー海戦までを描いた戦争スペクタクル作品であるが、終盤に、味方の魚雷で処分されて東太平洋の海底に横たわる空母飛龍が登場する。その艦橋で、もはやこの世の人でなくなった山口司令官（三船敏郎）と加来艦長（田崎潤）が「これからもみんな、勇ましく死んで、こういう墓

場が、太平洋に、増えるんでしょうなあ」「もう、増やしたくはないがなあ」と言葉を交わす。

監督の松林宗恵自身、学徒出陣の元海軍士官であった。彼の心中には、死者たちが海底に踏みとどまり、味方の反撃を待っているという戦時中の宣伝が記憶されていたから、こうした作りとなったのではないか。「増やしたくはないがなあ」という山口の台詞には、結局この手の宣伝に促されるように大勢の人間——猪口武蔵艦長もその一人——が「勇ましく死んで」いき、残った者が死者たちの意に反して反撃もならないまま降伏に至ったことへの無念ないしは諦念が込められているように思う。

艦長が死ぬことはなぜ尊いか

このように、猪口艦長は死にあたって加来大佐や山口少将、そして佐久間大尉といった海軍の先行者たちが死に際して示した（とされる）海軍的様式美に従ったのではないかと想像される。さらに考えたいのは、そもそもなぜ艦長が自ら死を選ぶことは尊いとされたのかという、より根源的な問いである。当時の出版物などでこの問いに直接答えたものは見受けられないが、ヒントとなりそうなのは、たびたび引用してきた大本営海軍報道部編『提督の最期』の次の一節である。

> 近代戦は科学戦と云はれます。／従ひまして各種艦船、兵器、機関、装備等が、戦闘の勝敗を決する重大な要素であることは、申すまでもありません。しかし古来の戦争を観ましても、軍隊就中これが上に立つ指揮官の素質と至誠奉公の精神如何等の要素が、か丶る物質的戦力を凌駕するものであることは、万古不変の鉄則であります。／今やわが将兵は、大御稜威を戴き、卓越せる指揮官の下、全軍一体となつて、物的優勢を恃みとする敵戦力を徹底的に撃砕致して居ります。物的要素はもとより些かも軽視してはなりませんが、精神的無形の要素が、無限の戦力を形成するものであることを、特に銘記すべきであります。

死を決した加来や山口は物質を上回る精神力の実在を存証した、だから尊いとされたのではないだろうか。日本はこの精神力がある限り「物的優勢を恃みとする」大国米英相手の戦争には負けないが、それは目に見えないから存在も証明できず、ここに密かな勝利への不安が発生する。しかし加来たちは国民に対し、生命を賭すことで貧国日本の絶対不敗を証明してみせた。ゆえに尊いとみなされ、海軍という一組織を超えて全国民の感動を呼んだのである。

あるいは、加来たちは、「捕虜になるくらいなら自ら死ぬ」という当時の陸海軍における暗黙の規範を実践したから偉いとされたともいえる。以下は戦時中の四三年に刊行された「切腹」を主題とする本の一節であるが、ここに加来や山口の最期が模範として引用される。

> 部下の総員を駆逐艦に移乗せしめたる後、自らは明月を賞しつ丶従容として艦と運命を倶にしたのであった。／この事例に見るに、我にあつても強ひて生存を欲せば、よし虜囚の辱は受けずとも、その途なきにしもあらざるべきを、敢へてこれを取らず、たゞ一途将帥たるの責務に帰一し、以て悠久の大義に生きんとする。〔中略〕かうしたおほらかさの裡に包む熱烈極りなき道義感――これ即ちわれ等の謂ふ切腹の道義感そのまゝである。（和田克徳『切腹』）

確かに「よし虜囚の辱は受けずとも」とはあるが、この一節が示すのは、「虜囚の辱」を受ける、すなわち敵の捕虜として生きるくらいなら日本人たる者潔く「切腹」するのが「道義」という考え方（実際に腹を切るかはともかく）であり、加来艦長たちはこれを実践したから偉いのだ、という主張である。今となっては陳腐としか言いようがないが、実はこのようなありふれた言辞にこそ、当時の人々を強力に束縛した価値観が潜むのである。

沈没艦と捕虜

なぜ沈みゆく艦の艦長は自ら死なねばならないか、という問題について、この捕虜の忌避という観点からもう少し説明を加えたい。

四二年六月のミッドウェー海戦で、米軍機の爆撃により前出の飛龍とともに大破炎上、行動不能となった空母赤城は六日、味方の駆逐艦により撃沈処分された。後方の大和艦上で指揮を執っていた山本五十六連合艦隊司令長官が「僕の責任に於て処分しようか」と言いだして実行されたことだが、それは味方艦による曳航が不可能で米軍側がなお強大な航空戦力を有している以上、夜間のうちに処分しておく必要があり、さらに「万一敵手に陥らんか、恥の上塗りのみならず、不利甚し」いと判断したからである。

注目すべきは、この時山本が続けて「昭和十年大演習に於て第四艦隊暴風雨に会し、駆逐艦の艦首漂流し生存者存在の疑ありたるに当時の司令官小松少将〔輝久、正しくは大佐〕は之を砲撃々沈し問題を惹起せり」と述べたことだ（以上、宇垣『戦藻録』四二年六月五日条）。

これは一九三五年九月、三陸沖で演習中だった第四艦隊が台風に遭遇して多数の破損艦と死者五四名を出した、いわゆる第四艦隊事件を指す。この時、駆逐艦初雪の艦首部が強度不足で折れて単独漂流を始めた。当該部分には電信室があり、外国に暗号書などの機密が暴露

するのを恐れた重巡洋艦那智の小松艦長は生存者のいる可能性を承知で砲撃を加え、撃沈した。

私が問題提起したいのは、ここで山本が述べた「不利」とは、赤城艦内に初雪と同じく生存者がいる可能性があり、味方の手で処分しない場合、各種書類のみならず彼らまでもが米軍に捕獲されて機密が露見してしまう事態を指すのでは、ということである。そうでないと、あえて生存者の存在に言及した理由がわからない。山本の「問題を惹起せり」との発言は、部下を殺したという世評への懸念を表していようが、彼は最終的に軍人としての価値観に従い、部下の命よりも機密保持を優先して撃沈処分を断行したのである。

山本や宇垣は知る由もなかったが、赤城とともに沈んだ空母飛龍の機関科将兵は艦底にいて閉じ込められ、沈没直前にようやく脱出した機関長以下三四名が二週間の漂流の末に米軍の捕虜となった。彼らは巧妙な米軍の尋問に飛龍の性能や海戦の状況などを詳しく話し（中田整一『トレイシー　日本兵捕虜秘密尋問所』）、機密に関する山本らの懸念は、人か書類か、あるいはその重要性の程は別として、結果的に現実となった。

比叡処分問題

同様の問題は、五か月後の同年一一月一三日、第三次ソロモン海戦で沈没した戦艦比叡に

も発生した。一二日夜、米艦隊との砲戦で舵を破壊されて行動不能となった比叡は、宇垣纏の日記によると曳航、放置、処分、いずれかの措置を取ることになった。小型の駆逐艦で大量浸水した戦艦の曳航は無理、貴重な高速戦艦を失いたくないので処分も不可、結局赤城と異なり味方の制空権内にいることから、潜水艦の監視を付けてひとまず放置された。

ところが、山本司令長官が「如何も明日の撮影に依り宣伝の国米国に利用せらるる事心苦し〔放置命令に〕サインはしたるも如何かと思ふ」、つまり比叡の写真を米軍機に撮られて宣伝に使われるのは困ると処分を言いだし、宇垣参謀長も「無理なき事恥の上塗りも考へ物」と同意した（以上、宇垣『戦藻録』四二年一一月一三日条）。この処分案は先任参謀の黒島亀人大佐が味方輸送船団に対する米軍機の攻撃を比叡に吸収できると反対したため、山本によって撤回される。

自ら賛同した案を部下に覆された形の宇垣は、山本は長官として自ら責任を取る覚悟だったし、処分は「敵手に委して機密暴露の惧を来す事なからしむるの用心」あってのことなのに、黒島は理屈に偏してこれら「機微の点」を理解していない、と批判している。比叡はこの日の夜に自沈したとされる（吉田俊雄『戦艦「比叡」 高速戦艦悲劇の生涯（新装版）』ほか）。一四日、比叡の姿が見えなくなったとの報告を受けた宇垣は「菊花の御紋章を附する艦に心あるか、残骸を敵前に暴さず果又神の摂理と申すべきか、我意に合し心反りて安し」と記し

た（宇垣『戦藻録』一一月一四日条）。

ここで山本や宇垣の言う「機密」には、比叡に積んである書類のみならず生存者たち（すでに「乗員一六〇〇を収容」済みとは報告されていたが）が知るそれという意味合いがあるのではないか。彼らが繰り返し用いる「恥の上塗り」という言葉は、明言こそされないものの、単に敵に捕獲されて「宣伝」上の見世物にされる軍艦のみならず、実は捕虜となった将兵についても使われているのではないか。微妙な問題なので断定はできないが、猪口も将官としてこうした上層部の捕虜となるくらいなら死ねという「機微の点」に関する考え方を理解ないしは共有しており、それゆえ自ら死を選んだとも考えられる。

沈みゆく比叡より生還した艦長の西田正雄大佐は一週間後の同月二〇日、はるか後方のトラック泊地に浮かぶ大和へ来艦、「声涙其の苦衷を報告」した。宇垣は「余輩慰撫に努む。毎回の事乍ら語る人聞く人共に之位つらきものはあらざるべし。海軍指揮官として最大の苦悩たるものなり」と同情の念を示した。

ところがまさに同じ日、ミッドウェーでの山口多聞の最期に立ち会った先任参謀の手記を読んだ宇垣は、「武士道とは結局死ぬる事なり。何時でも死ねる覚悟が出来たら武士も一人前なりとの葉隠精神に生き、犬死も腰抜けと云はるるよりは優りなりとなせり。見事なる覚悟立派なる最後、彼満足して逝きたり。死処を得て其の精神を万代に貽し得るの士は幸な

り」とこれを激賞している（以上、宇垣『戦藻録』一一月二〇日条）。この「犬死」も「腰抜け」といわれるよりはまし、大事なのは「死処」という軍人ならではの冷徹な美学に基づいて西田は冷遇され（四三年三月予備役編入）、猪口は武蔵と運命を共にしたのである。

死者の共同体？

以上のことから、猪口艦長は生きて恥をさらすよりも、自ら死して国民の模範となる途を選んだ、との解釈ができる。戦争末期の日本国内では戦意高揚のため、加来や山口たち海底の戦死者が国民に向かって次のような「叫び」、督戦の声を挙げていると宣伝されていた。

> 東太平洋の千尋（せんじん）の底から、山口司令官の、加来艦長の声が聞える。南からは山本司令長官の、古賀司令長官の声も聞える。その他幾万の英霊の叫びが、東から、西から、南から、北から聞えるではないか。／「時は今だぞ。早くしないか。俺達の護りを無駄にはすまいぞ。」／此の声にこたへる備へはいゝか。構へはいゝか。戦争は前線に血を流す勇士達ばかりの戦ひではない。銃後も同じ戦ひを戦つてゐるのである。／〔中略〕山口司令官、加来艦長、その他東太平洋に散華した英霊は、その日の先導をうけたまはらうと待つてゐる。東太平洋はアメリカ撃滅への路上である。／「さ、早く俺達に続け！」／両提督の声がする。（益田甫（ますだはじめ）『加来艦長の最期』）

すべては猪口本人が何も語らない以上推測となるが、彼の死は機密保持や冷遇への懸念などの消極的な理由よりもむしろ、潔く死ぬことで国民を激励し、来たるべき反攻の先導役になるべく、自ら死者の群れに入っていくためのものではなかったろうか。ここまで見てきたように、猪口の行動や発言は、加来や山口が戦場で示した（とされる）先例にきわめてよく似ているのである。

人は自ら死ぬことに対し、当然すさまじい葛藤や逡巡（しゅんじゅん）を抱く。にもかかわらず、戦場でそれらを乗り越えて死ねるのは、従うに足るその時代ならではの美学、大義があるからである。猪口は武蔵沈没に際し、遺書に国民に詫びる言葉を記していた。彼にとっての美学とは、まさにその国民のための献身に他ならなかった。天皇には意図的か否かは不明だが、詫びていない点にも注意したい。

戦争前半であれば、猪口は山口や加来のように各メディアで顕彰され、今日まで国民に名を知られていただろう。しかし、山室建徳（やまむろけんとく）が指摘するように、レイテ沖海戦以降、軍神として讃（たた）えられたのは、飛行機に乗って突撃する年若い兵士たちであり、かつてのような人格高潔な中年の将校ではなかった（山室『軍神　近代日本が生んだ「英雄」たちの軌跡』）。したが

って、猪口はもはや国民の儀表となり得ず、そのまま敗戦とともに忘れられてしまったのである。

猪口と森下艦長の対比

本書の目的の一つは、大和と武蔵の人気の差がどうして生じたのかを問うことである。今日まで大和の人気を高め、相対的に武蔵のそれを低めている挿話の一つに、このレイテ沖海戦時における両艦艦長の対応の違いがある。たとえば、次のような説明がある。

猪口敏平「武蔵」艦長が、「飛行機だろうと船だろうと、主砲をうちまくればいいんだよ。『武蔵』は沈みはしない」と豪語していたのとは対照的に、森下〔信衛・大和〕艦長は巧みな操艦で魚雷を避け続けた。その結果、艦首に〔爆弾を〕一発受けた程度の損害にとどまった。（新人物往来社戦史室編『日本海軍指揮官総覧』）

私自身、昔テレビドラマで煙草を吹かしながら悠々と米軍機の爆弾を回避する森下の勇姿を観た記憶があり（演じたのは若林豪で、おそらく一九九〇年のTBSドラマ『愛と哀しみの海戦艦大和の悲劇』だが、映像ソフト未発売のため確認できず）、かっこいいなあと思ったもので

ある。引用文中の「豪語」という言葉には、どこか大艦巨砲主義とその信奉者たる猪口を愚かと批判するニュアンスがこめられている。このように極端とも言える評価の差が両者間に生じたのは、戦後の当事者たちの回想の力が大きいとみられる。

まず森下本人が戦後、レイテ沖海戦時の乗艦大和について「自分をなくして無心となり、明鏡止水の境地になるように努めていると、次第に七万トンの大艦が、駆逐艦同様に小さく見えるようになって、自由に安心して操艦することができた」と書いている（倉橋友二郎〈元駆逐艦涼月砲術長、少佐〉『第41防空駆逐隊戦記　戦艦大和直衛艦隊の奮戦』）。

当時、森下の大和艦長在任期間は九か月（着任四四年一月）で二か月に過ぎない猪口（同四四年八月）より長く、その分大和型の扱いに習熟していたこと、なによりもこの海戦で大和は被雷せず生還したのに、武蔵は大量の魚雷を受けて沈んだことは事実である。ただ、先に引用した池田元武蔵航海長の手記を読んでなお、大和をあたかも「駆逐艦同様に」操艦できたという話を真に受けてよいものか、とは思う。

倉橋の引用した森下の回想は、本人右手不自由のため夫人が代筆したというもので、現物は管見の限り未公表である。一方、森下本人の名前で公刊されたレイテ戦時の回想には「戦艦「大和」のように艦体が非常に大きく、従って標的面が大になり、かつ運動が鈍重なるものは敏速な回避はきわめてむずかしく、多数の航空機を完全に回避することは、もっとも苦

手とするところである」（森下「戦艦「大和」死闘二時間の記録」）としか書かれていない。
レイテ沖海戦中の一〇月二四日、大和に乗っていた小柳冨次少将は、自艦が被雷しなかった理由に森下艦長の「練達なる回避運動と、適切なる戦闘指揮」を挙げ、「長官も司令官も黙せること石仏の如く、乗員はただ片唾を呑んで艦長の顔色だけを見守っている。余裕綽々として微笑を湛えながら、いささかも昂奮の色なく落ちつき払って操艦している自信たっぷりな艦長の雄姿が、いつまでも印象に残る」と往時を回想する（小柳『栗田艦隊』）が、元乗組員らの証言によると露天の防空指揮所で操艦の指示を出していた森下（辺見じゅん「「大和」で死にたかった　名艦長・森下信衛の生涯」）の「雄姿」を、その下の第一艦橋にいたはずの小柳がどうやって間近で見ていたのか、という疑問がある。ちなみに前出のテレビドラマでは森下は艦橋にいたが、これでは襲ってくる米軍機がよく見えない。
レイテ沖海戦時、大和乗組の偵察機搭乗員だった岩佐二郎・元中尉は、「「大和」が来襲する米艦載機群に、熾烈な弾幕を撃ちあげ、魚雷、爆弾回避へと操艦されていくのにくらべて、「武蔵」の砲火には、もうひとつ活気がない。ことに、操艦に精彩がなかった」、「午後一時すぎにはじまった第三波攻撃でも、「武蔵」の対空砲火はなぜか十分でない。魚雷回避の操艦のまずさが、いっそうめだってきて、みすみす米機の襲来、跳梁をひとり許している。なぜだ、なぜなのだ」と回想している（岩佐『戦艦「大和」レイテ沖の七日間「大和」艦載機

偵察員の戦場報告』）。
この「精彩」云々については、武蔵は大和よりも搭載高角砲の数が少なく、それは猪口艦長以下乗組員の責任ではないこと、岩佐が自艦の対空射撃の騒音や振動を間近で体感していることを考慮すべきだろう。さらに、武蔵が第二次空襲までに魚雷四本を受けて速力が二二ノットまで低下したために米軍機の集中攻撃を受け、その分大和への来襲機が減ったことも、同じく考慮されねばならない。
森下をめぐるこれらの回想や伝説の中で、彼が翌二五日の米護衛空母部隊追撃戦時に米駆逐艦の放った魚雷六本を回避し損ね、命中を免れるためにこの魚雷と約一〇分間ほど外方（敵の反対側）へ併走せざるを得ず、追撃の好機を逃したこと、森下本人が当時これについて「敵の魚雷攻撃に対し、射線にとびこむ内方回避はなかなかやれないものですな」と言っていた（大谷藤之助〈当時第二艦隊参謀、元中佐〉「レイテ海戦作戦参謀の手記」）ことは言及されない。ただし、この非敵側への回頭は同日の宇垣纏日記によれば「「栗田」長官の指示に依り」なされたともいう。
総じて、負け戦ではあるがせめて一人の英雄を見いだしたい、という戦後の元軍人たちの心情が、先に述べた森下への高い評価と、必然的に猪口への低い評価をもたらしているように思われる。

生き残った乗員たち

ルソン島へ上陸した加藤副長以下の武蔵生存者は、事実上の口封じとして同地のコレヒドール島へ送られた。手塚正己の調査によると、武蔵生存者一三七六名のうち、四四年内に直接内地へ戻れたのは飛行機便乗約五〇名（一名墜落死）、病院船氷川丸・高砂丸約三〇名、空母隼鷹便乗約二〇〇名である。輸送船さんとす丸便乗者四二〇名は航路途中の一一月二五日に船が撃沈されて約三〇〇名が戦死・行方不明、生存者約一二〇名は台湾に上陸した。その半数約六〇名が船で一二月中旬に内地へ帰還、残りは数名を除き戦後になって内地へ復員した。以上の人々を除く六九七名が翌四五年のルソン防衛戦のため残留、うち六四一名が戦病死を遂げ、終戦により生還したのは五六名に過ぎない。武蔵乗員中、戦後まで生き残ったのは約四五〇名とされる（手塚「生き残った『武蔵』乗組員の運命」）。

なぜ多くの乗組員がフィリピン防衛戦の兵力として残置されたのか。彼らに残留を命じ、敗戦まで現地でその指揮を執った有馬馨・南西方面艦隊参謀長（中将、初代武蔵艦長）は、戦後次のように回想している。

> 余は昭和十九年九月着任以来、自分の戦略的判断から比島において勝算ありとは思っていなかったことは事実である。しかしながら、比島の帝国防衛上の重要性に鑑み、死力を尽くして出来る限りの力を竭すべきであり、消極的には海軍の統制を守り、〔短期壊滅した〕サイパンのごとき無辜の良臣を犠牲にして不用意に惨敗を暴露することはなんとしても避けなければならぬ、あくまで持久的であらねばならぬ、とひそかに期していた。生死など問題になかった。（有馬「比島作戦の思い出」）

武蔵沈没当時の日本海軍ではすでに「勝算」、まして個人の「生死など問題になかった」のであった。サイパンという地名が挙げられているのは、同島を含む中部太平洋方面が陸軍ではなく海軍の指揮下にあり、その最高指揮官が海軍の南雲忠一中将（戦死）だったからであろう。「無辜の良臣」とは軍人のみならず、同地在住の民間日本人も含むかもしれない。民間人を守り切れずに短期間で「惨敗」したことが海軍の体面を大きく傷つけたのである。有馬が言外に示しているのは、武蔵生存者たち、そして有馬本人さえもフィリピンで「持久」戦に徹して本土決戦準備の時間を稼ぐ、もっといえば海軍という組織の体面を保つための駒に過ぎなかった、ということである。

有馬はフィリピン転勤の直前まで海軍兵学校教頭を務めており、まもなく戦場へ向かう生徒たちに「二十五歳迄生キレバ結構デアル〔中略〕次々ニ後進志ヲ相継ギテ国家永遠ノ生命

ヲ拡充シテ行クノデアル、軍神ノ肉体亡ブモ精神ハ死セズ諸子ニ生レ替ツテ居ルノデアル」と訓示していた（有馬「第七十三期生徒卒業ニ際シ贈ル言葉」四四年二月一八日）。有馬は生徒たちに嘘（うそ）をついていたのではなく、人の生死について本気でそう考えていたのだと思う。ここにも当事者にとっての戦争の「ファンタジー」的側面がある。

マニラ死守

ルソンに残された武蔵乗組員たちは、マニラ、クラークフィールド、コレヒドールなど各地の海軍防衛隊に分割配置された。このうちマニラには約二〇〇名が配備され、一九四五年二月三日に始まった市街戦で多くが戦死を遂げた。二六日に司令官・岩淵三次少将（元戦艦霧島艦長）も自決、三月二、三日にかけてマニラは米軍の手に落ちる。しかしルソンでは陸海軍とも不利な平野での戦いを避け、北部山中に籠もって有馬が述べたような「持久」戦を行う予定であり、陸軍側のマニラ放棄と撤退の方針を海軍司令部側も了承していたはずであった。

ところが結果的に海軍部隊がマニラで徹底抗戦し、一か月間の戦いで大勢の住民を巻き込み全滅した背景として、防衛庁（現・防衛省）の公刊戦史『戦史叢書　南西方面海軍作戦　第二段作戦以降』の第八章「レイテ及びマニラの喪失」を読むと、在ルソン海軍部隊の指揮

を執る南西方面艦隊司令部内に根拠地マニラ放棄に反対する空気が強くあったこと、そして後方の司令部にいた大川内傳七（おおこうちでんしち）司令長官や有馬馨参謀長らが、岩淵が内心で撤退命令を心待ちにしていた節があるにもかかわらず、土壇場まで積極的な撤退指示を出さなかったことが浮かんでくる。

岩淵は二月九日にいったん市街地から出たものの、一一日に再度市街地に戻って抗戦ののち自決を遂げている。そうした理由はわからない。前掲の公刊戦史は、想像される理由のひとつとして「石川電（「南西方面艦隊参謀の自信のほどとは、はるかにかけ離れた海軍のふがいない戦闘ぶりを報告した」陸軍側の電報）の海軍批判に対し、海軍の士気を鼓舞し、陸軍からうしろ指をさされないように、戦闘指導を行なう必要があると思ったこと」を挙げている。

何かルソンの海軍上層部に海軍という組織の面目を（主として陸軍に対し）「死守」したいという意図があり、岩淵がそのような上司たちの意向に従わざるを得なかったことが、元武蔵乗員を含む多数の将兵とマニラ市民の死をもたらしたように思えてならない。大川内は岩淵が自決する直前の二三日、「海軍の伝統精神を遺憾なく発揮したことについて感激に堪えない」旨を打電し、その行動を讃えている。

結果から言うと海軍はマニラ防衛戦で「持久」どころか「不用意に惨敗を暴露」する結果となったが、有馬は戦後の一九五三年、その理由について「ルソンの防衛は根拠地隊司令官

〔岩淵〕の任務であり、陸上戦闘となれば所在海軍の自己より後任の者を指揮して陸軍の指揮下に入りて戦うことは、これまたその任務であって、艦隊司令部は関係するところではない」、その陸軍がマニラ海軍防衛隊に撤退を命じなかったのは、第一四方面軍参謀長・武藤章中将や上級司令部にあたる振武集団の長・横山静雄中将らがルソン山中には十分な食糧がないため「生存競争の心理から、海軍部隊はマニラで全滅してくれれば自分達は助かるのだ」と考えていたからだ、と弁明している（有馬「比島作戦の思い出」）。

つまり、海軍部隊のマニラ撤退がなされなかった責任は陸軍側にあり、自分たちはあずかり知らぬ、と主張しているのだが、これは戦後の戦犯裁判でマニラ市民に対する日本軍の残虐行為が問題となったからである。

一方、陸軍の武藤は、共に北部山中に撤退し抗戦を続けた有馬ら海軍の司令部について、停戦の声が聞こえる頃から存在が明瞭となり（それまではなかったという皮肉）、米軍との降伏交渉の際もいちいち異議を唱え、米軍側の文書に海軍長官の名がないことに立腹して九月二日の調印は陸軍のこと、海軍は別途だと言い出したと批判している。結局参謀同士では話が付かず、武藤が有馬に電話してようやく一緒に行くことになった。

武藤はA級戦犯として起訴された東京裁判の獄中でこの回想を記し、「統帥権分立の弊は大東亜戦敗因の一つであるが、比島の山奥にまでそれはあった」（武藤『比島から巣鴨へ　日

本軍部の歩んだ道と一軍人の運命』）と書きのこして刑死した。この「弊」とは、陸軍と海軍が憲法上それぞれ対等に天皇に直属しているため、互いの意思疎通や決定がうまく行かなかったことを指す。両軍の面子への固執は、負け戦が込むにつれて深刻になった。

有馬が前出の手記「比島作戦の思い出」を書いたのは、武藤『比島から巣鴨へ』が出版された翌年のことだった。有馬が同書を読んでいたかは分からないが、思うところがあったのか、「武藤参謀長とは南京攻略時の同僚であり、互いに主張すべきは主張したが、きわめて親密の間柄であった」ととくに追記している。

突入成功

興味深いことに、栗田艦隊のレイテ湾突入は実は成功していた。ただし、日本内地での戦況報道においてである。以下に、毎日新聞社が出していた『時局情報』という雑誌に四五年一一月一〇日付けで「報道班員（毎日新聞特派員）」の肩書きを持つ新名丈夫が書いた記事の一節を引用する。

> レイテ湾内敵大艦隊が艦を連ねて備へるところ、わが艦隊は猛然殴り込みを決行したのだ。電波探信儀〔レーダー〕の登場以来、夜戦と雖も絶対に奇襲はあり得ない今日の海

戦で、しかも白兵戦の殴り込みを敢てしたのだ。／そのころレイテ湾敵艦隊は有力なる戦艦多数を擁する強大なる兵力であり、固よりわが攻撃に備へて厳重なる警戒を張り廻らしてゐたであらうこと疑ひない。万死を期しての悲壮なる突撃であり、体当りである。／突撃を前にして廿四日深更、司令長官の訓令は厳かに下つた。／『天佑を確信し全軍突撃せよ』／いまや猛然波を蹴つて疾駆するわが艦隊は廿五日未明からレイテ湾深く突入、敵戦艦戦隊初め巡洋艦その他の艦船に、咫尺の距離に迫つてこれを猛攻、敵艦隊に大なる損害を加へるとともに、底知れぬ恐怖と戦慄を与へ凱歌を奏して引揚げたのである。しかもわが損害は極めて軽微であつた。（新名「壮絶！台湾、比島沖　海空戦の実相」）

新名は毎日新聞の記者として四四年二月二三日の同紙面で「竹槍では間に合わぬ　飛行機だ、海洋飛行機だ」と東條首相の戦争指導を痛烈に批判、激怒した東條の指示で陸軍に懲罰召集された武勇伝の持ち主として有名である。にもかかわらず彼がこの見てきたような記事を書けたのは、海軍の庇護下で召集解除となり、報道班員として現地のフィリピンへ行っていたからである。

戦後の新名は、時の権力者東條を勇敢にも批判した抵抗者扱いされてきたが、戦争中に書

いていた記事といえば、引用文が示す通り東條の精神論を笑う資格などない、空想としか言いようのない体のものである。前出の竹槍記事とて、権力批判というよりは、陸軍は飛行機をこちらへ寄こせという海軍の政治的主張の代弁的性格が強い。

とはいえ新名自身も、彼に戦況を教えた海軍軍人も、悪意をもって国民を騙そうとしたのではなく、栗田艦隊のレイテ湾突入成功を自ら信じた（かった）からこそ、このような記事が書けたのではないか。だとすれば、当事者にとっても眼前の戦争とは空想上の事態なのであり、そこで「敵艦隊に大なる損害を加へ」ている以上、戦争はなお半年以上も続くのである。

裏返しの決戦主義

しかし四五年三月にマニラが陥落、事実上フィリピンが失陥するとともに、日本内地では軍が国民に向けて次のような戦略思想の「大転換」を唱えるに至った。以下は、同盟通信の記者・篠原滋なる人物が大本営陸軍部の意向をうけて一般向けに刊行した宣伝書『陸軍新輯③　比島決戦場』（一九四五年）の一節である。

率直にいつて、ルソン島戦を一線として我が太平洋戦略は大転換を余儀なくされた。そ

れは現にルソン島戦において見る如く、決戦思想の完全なる払拭であり、持久出血作戦への徹底的移行である。即ち物量の重厚と縦深とをもつて、日本軍の衝力を短時日に破摧せんとし、短期決戦主義を振り翳して来攻する驕慢な敵の攻勢に対して柔軟な持久出血作戦をもつて対し、敵をしてその最も痛痒点とする人的資源に大損耗を加へ、流血地獄の泥沼にひきずり込み、貧血からつひには昏倒致死せしめんとするものである。ルソン島においてすでに然り。支那大陸においてまた然り。米鬼にして、もし我が本土を窺はんか、持久出血作戦の鋭鋒はその頂点に達して発揚されるのである。

このように、武蔵が沈んでルソンが失われた結果、日本の戦争目的は従来の短期決戦から長期持久戦、それによる米軍への人的損耗の強要へと一転したのであった（だいいち、もう海軍には艦隊がない）。一見、日露戦後以来伝統の決戦主義を潔く放擲したようだが、敵アメリカの「短期決戦主義」の破砕を唱えている以上、それは裏返しの決戦待望論に過ぎないといえる。日本軍は結局最後まで、この手の身勝手な希望的発想から逃れ得なかった。

この文章は陸軍側の主張だが、海軍も似たような展望を国民に語っていた。元連合艦隊司令長官・海軍大将の高橋三吉は沖縄戦にあたって雑誌上で「私は今次戦争においては、日本海々戦のやうな場面の無いことを前から想像してゐた。〔中略〕沖縄の戦を勝機たらしめる。

それに越したことはない然しそれが出来なければ次の神機を獲得するまでだ」（高橋「攻防の態勢は急転する　今こそ神機を摑め」）と絶叫していた。「日本海々戦」云々については話が違うと、「神機」についてはずいぶん安い神機だなあと、それぞれ感じた人もいたかもしれない。

高橋は敗戦まで、予備役軍人として「直接責任の局になかったとはいえ海軍の元老として〔中略〕一意全智全能を傾けて銃後国民の団結強化と、戦意の昂揚に、寧日なきまでに尽瘁〔尽力〕」（高橋信一編『我か海軍と高橋三吉』）していた。その結果がこの発言である。

そして陸海軍ともこの希望的発想に基づき、沖縄で味方の一機と米軍の一艦――より正確に言うならその大勢の乗組員たち――を交換せんとする航空特攻作戦を繰り広げた。今日では陸軍が本土決戦を視野に入れていたのに対し、海軍は沖縄をもって一撃講和の最後の機会と考えていた、とされるが、当時そのような本音が国民に明かされることはもちろんなかった。

敗戦という思考の欠落

武蔵沈没がその航空特攻作戦を推進させる一つの力となったことを、戦争当事者の回想から示しておきたい。

かつて呉工廠で武蔵の修理にあたった堀元美技術少佐は、四四年一〇月末、一緒に戦艦の修理を担当していた部下の桂井技術大尉から「ムサ公は、もういないんですね。堀部員！」と聞かされた（堀『続・鳶色の襟章』）。「ムサ公」すなわち武蔵という「われわれの造艦能力が何年もかかって造り上げたものが、わずか数時間の戦闘で、あえなく沈んでいく」ことに驚いた堀に、軍艦の乗員との交流が多かった桂井は続けて「フネにはいってくる電報を見ると、一機命中、二機命中といってきてるんです。一発命中じゃあないんです」と教えた。これは同じレイテ沖海戦における神風特攻隊の出撃をさす。

このころ堀の勤める呉工廠の主要工事は水上艦から潜水艦にすっかり移行し、各地の分工場では小型潜航艇・蛟龍や特攻兵器・回天、震洋の製造に注力されていた。もはや「狭い日本の本土に立て籠もって、敵軍の来襲を待つというほかはない」状況であった。堀たちは、「それが正気の沙汰ではないということを、何となく心の片隅に抱きながら、「敗ける」というたった一言が、どうにも浮かんでこない、いわば思考の象限の一部に欠けたところがあるままに、毎日の戦争生産に一切を打ち込んでい」った。

「敗ける」という発想が持てなかったのは堀だけではない。『レイテ戦記』の作者、大岡昇平のような知性の人でさえ、戦争中は陸軍の一兵卒として「僕なんかでも日本が勝てるとは思ってなかったが、神風が吹きそうな気がすることがありましたよ、ふっとね（笑）」（いい

だももとの対談、大岡『対談　戦争と文学と』）と言っているくらいだ。巨艦武蔵の沈没、連合艦隊の壊滅は必然的に日本の敗北につながるはずだが、それらの現実を見ない、考えないためにこそ、堀たちは目前の新たな戦争手段である特攻兵器の生産に努力したのである。

造った兵器は使わねばならない。かくして特攻隊は海空からの出撃を続け、やがて武蔵の姉妹艦大和までもが翌四五年四月の沖縄特攻作戦で沈む。

レイテ沖海戦で大和の艦長だった森下信衛はその後第二艦隊参謀長として再び大和に乗り、一九四五年四月、沖縄へ出撃した。九州・坊ノ岬沖で大和は米軍機の魚雷多数を受けて浸水傾斜、復旧の見込みがなくなった。森下は一九五六年の手記でその際の伊藤整一・第二艦隊司令長官の様子を次のように語る。

伊藤は森下ら幕僚を艦橋に集め、「最早大和は沖縄まで行くことはむつかしいと思うから、幕僚は皆横付けする駆逐艦に乗り移って、沖縄へ先行せよ。自分は大和に残る」と述べて、長官控室に降りていった。森下は参謀長として幕僚たちに「自分は大和の艦長をした経験もあり、大和の操縦には自信がある。大和は未だ速力があるから、速力のある限り何とか沖縄へ持って行く決心である。幕僚は駆逐艦に乗り移って沖縄へ先行せよ」と述べ艦橋に残ったが、その後艦が横転して水中に投げ出され、生還した（森下「帝国海軍最後の突撃　大和潰ゆ沖縄沖海戦」）。

この時の状況を公式記録に照らすと、伊藤長官は大和沈没に際し「突入作戦ハ成立セズ」、「生存者ヲ救助後図ヲ策スベシ」と「決心」して「艦隊幕僚ハ冬月〔駆逐艦〕ニ移乗残存部隊ノ拾収（ママ）ニ任ズベク下命」したとあり、食い違う（第二水雷戦隊司令部〈第二艦隊司令部〉「天一号作戦海上特攻隊戦闘詳報」、アテネ書房編集部編『戦艦大和・武蔵戦闘記録』所収。ただし「艦隊幕僚ハ〜下命」の箇所は後からの加筆）。

だが、大切なのは作戦継続と中止のどちらが正しいかではなく、森下が敗戦後もなお、戦時中の価値観に基づいて手記を書いている点である。一度始めた「突撃」の中止などはあり得ず、指揮官はたとえ船が沈んでも戦闘を続け、目標へ進まねばならない。先に沈んだ武蔵の猪口艦長と共通する、海軍軍人の使命感や美学のようなものが感じられる。

第三章　戦後の武蔵物語とその特徴

1　武蔵物語の成立——佐藤太郎『戦艦武蔵』

敗戦後の敗因追究

一九四五年の敗戦後、戦艦武蔵とその姉妹艦大和はいわゆる「大艦巨砲主義」の象徴として、時代遅れ、頭が固い、敗戦の原因などと、賞讃どころか批判の的になった。

二〇一五年に刊行された太平洋戦争に関する最新の歴史辞典でも、日本海軍は「伝統的な大艦巨砲主義から基本的に脱却できなかった」とされ、「艦隊決戦に拘り続けてきたこと」や「伝統と権威が足枷となって、航空戦力を基軸にした海軍戦力の再構築が果たせなかったこと」が「日本海軍の滅亡に拍車をかけた一因」と説明される。そして戦艦大和や武蔵、空母信濃は依然として日本海軍における同主義の「代表事例」と目されている（纐纈厚「大艦

巨砲主義」、吉田裕ほか編『アジア・太平洋戦争辞典』)。

戦後における「大艦巨砲主義」という言葉の管見の限りもっとも早い用例は、一九四六年二月に毎日新聞編輯局次長兼社会部長の森正蔵が刊行した『旋風二十年　解禁昭和裏面史　下巻』の「大和、武蔵の秘密」と題する項である。

ちなみに戦前のそれは、海軍大佐・藤田定市の著書『鵬の羽風　海洋叢話』(一九一三〈大正二〉年)だが、同書のいう大艦巨砲主義とは、日露戦争以後に軍艦の大口径砲の射程と射撃精度が向上した結果、今後の海戦は大戦艦に大口径砲を多数積んだほうが有利であるとみた各国海軍が進んで採用している思想を指し、批判的なニュアンスはない。とはいえ、藤田が最後の「海軍用航空機」と題する節で、艦隊に飛行機(飛行船)を付属すれば偵察や潜水艦の発見に使えるから「若し海上権の維持を望まば、空中権の獲得も亦我国に対して須要」、「航空機の援助なき艦隊は、之を有するものに比し、絶大なる不利益を蒙るべきや必せり」というイギリス海軍ブースビー大尉の発言を論評抜きとはいえ長々と引用しているのは、日本の航空史を考える上で印象的である。

話を『旋風二十年』に戻すと、著者の森は「両艦竣工の頃から海戦の様相は一変し従来の大艦巨砲主義に代る空軍第一主義に転換、多大の期待を集めて長年月の日子と巨費を投じた両戦艦もあたら働く場所を失ひ予期に反して戦果を挙げ得なかつた」のに、「海軍の首脳部

には大艦巨砲の迷夢がさめ」ず「戦艦の主砲の威力を過信し、空軍の協力なき又は協力少き出撃を敢て行つたところに失敗があつた」と解説し、空母部隊同士による航空決戦だったマリアナ沖海戦すらも、戦艦の戦いとして描いている。敗戦からわずか半年の段階で戦争の史実が改変され、その具体的でわかりやすい敗因として「大艦巨砲主義」とその象徴たる戦艦武蔵が大和とともに名指しされているのである。

森がこれらを本気で書いていたとは思えない。戦争中、彼と同じ毎日新聞の新名丈夫が海軍の意に添って「飛行機だ、海洋飛行機だ」と新聞で飛行機の重要性を訴えていたことは前述したし、軍需省航空兵器総局総務局長の大西瀧治郎海軍中将は四四年、ラジオで国民に向かって「航空機の大増産が予定通り出来るかどうかに依つて戦争の勝敗は決するのであります。〔中略〕皆様も、航空機増産は皆様自身の責任と考へて最善の努力と御協力をして下さい。お願ひ致します」(大西「決勝増産は全国民の責任に於て」)などと国民に飛行機増産を懇請していたことを知らないはずはないからだ。

さらに、高橋三吉・海軍大将に至ってはレイテ沖海戦終了後の四四年一二月、「今回の戦闘で艦隊が出動したことを以て、恰もはじめて聯合艦隊の主力が動き出したのだといふ感じを持つてゐる人が多い」が「これは大変な誤りで、今日に於ける聯合艦隊の主力は艦艇ではなくて、航空機」と国民に明言していたはずだった(高橋「聯合艦隊の猛威発す」)。

栗原悦蔵（くりはらえつぞう）・大本営海軍報道部長（海軍大佐）も四五年一月、国民に「聯合艦隊の主兵は戦艦ではない」と断言（栗原『戦争一本　比島戦局と必勝の構へ』）していた。彼は新たな「主兵」である飛行機は特攻隊員という神の乗る「神輿（しんよ）」であるから、その精神で増産に励めと国民を督励、各メディアはこれを国民に拡散する役割を果たしていた。

『旋風二十年』自体は、森の部下が書いたものを彼の名前でまとめたものだが、重要なのは前記の諸発言が敗戦と同時にすべてなかったことにされ、「海軍部内においては、終戦直前まで空軍の軽視される傾きのあったことは見逃せなかつた」と、敗戦が飛行機（栗原報道部長いうところの「神輿」）の増産「努力」を怠った国民ではなく、あたかも海軍の大艦巨砲主義者――「砲術科出身を以て代表されるコチ〳〵の旧型軍人」単独の「責任」であるかのように語られていることだ。

戦争に負けたのは愚かな指導者のせいであって飛行機増産を怠った国民のせいではない、という一般国民免責論的な性格をもって「解禁」されたこの〝真相〟なるものが、戦争責任を天皇を除く旧指導者層にのみ担わせ、一般国民は免罪し懐柔しようとする占領国・米国の意向にかない、当の日本国民にとっても決して悪い話でなかったのは無論である。

森が四五年一二月二七日の日記で同書について「内容には僕の気に食はぬところが少くない」としながらも「これはこれとしてこの時代に必要な一書であることも否めない」（森『あ

るジャーナリストの敗戦日記　1945～1946』）と語っているのは、こうした文脈に基づく。ちなみに、大西瀧治郎は玉音放送の翌一六日に自決し、高橋三吉はA級戦犯の容疑で同年一二月二日に逮捕、収監されていた（四八年一二月二八日に不起訴釈放）。

かくして『旋風二十年』は当時の日本国民にウケて大ベストセラーになり、「大艦巨砲主義」は先の辞典の解説のように、現在でも戦艦武蔵や太平洋戦争の敗因を語る際のスタンダードな理解となっている。

なお、森の一般国民免責論については、同じ毎日新聞の新名丈夫も、東條英機を糾弾する一九五八年の雑誌記事で、戦時中は「「一機でも多く」と増産がやかましく要求され、生産のすすまぬのは国民の努力がたりぬためであるかのようにいわれたけれども、ほんとうは「量」よりも「質」で負けていた、と類似の主張を述べている（新名「亡国の指導者　東條の竹槍戦術を衝（つ）く」）。新名は東條が唱えたとされる陸軍の「竹槍戦術」を海軍の大艦巨砲主義と並ぶ愚かな戦法として一般国民免責のために殊更に強調しており、そのイメージが今日まで残っている。

海軍軍人たちの〝反省〟

戦後、旧海軍軍人たちが開戦と敗戦の当事者として種々の反省の弁を述べることがあった

が、その一つに戦艦ではなく、もっと飛行機に注力すればよかった、というものがあった。連合艦隊参謀長を務めた草鹿龍之介・元中将は敗戦から七年後の著書で、真珠湾攻撃とマレー沖海戦は「大艦巨砲主義者に大きな警鐘を鳴らしたものであ」り、「日本海軍としては、この時、大艦の建造を一時中止して、航空機の増産にふり向け、艦隊編制も実際に戦う機動部隊の充実拡大に重点をおき、航空要員の養成につとめ、作戦目標も敵機動部隊と航空兵力の撃滅に重点をおき換えるべきであった」と「反省」の弁を述べてみせた。

彼の著書では、「ミッドウェーのような痛い目にあいながら、なおかつ大艦巨砲主義の旧株を守り、戦艦を温存しようとする旧態が依然として跡を絶たなかった」ことになっている（以上、草鹿『聯合艦隊　草鹿元参謀長の回想』）。実際には、戦艦武蔵には建造中止の声があったし、同信濃は開戦とともに工事中止、ミッドウェー海戦の敗北をうけて空母へ改装された。戦艦は「温存」したというより使い道がなかったに過ぎない。

草鹿は大正末期、少佐の時から航空の道を歩み、真珠湾攻撃などでは空母機動部隊の第一航空艦隊や第三艦隊の参謀長を務めた、航空戦の専門家といえる人物である。自分以外の誰かが古い「大艦巨砲主義」に固執して新しい「航空至上主義」への転換が遅れたので戦争に負けた、というこの分かりやすい「批判」や「反省」は人口に膾炙し、敗戦の惨禍をもたらした旧軍への批判材料として今日まで盛んに利用されてきた。そのとき武蔵と大和は「大艦

巨砲主義」の明快な象徴として、いわば戦犯扱いされたのである。

戦艦武蔵の関係者にも、戦後こうした「大艦巨砲主義」批判を明言する者がいた。後述する元乗組員（下士官）佐藤太郎の体験記『戦艦武蔵』の中で、古賀祐光・武蔵高射長は佐藤ら部下機銃員に向かって「これからの戦争は飛行機と飛行機、そして飛行機と対空火器の戦争である。こんな主砲は屑鉄にして幾百幾千の機銃、高角砲をつくるべきである。日本の海軍は飛行機は勿論、近代戦争をする兵器が不足しているから、速かにこれ等のことを実現すべきである」と勇ましく訓示したことになっており、佐藤はこの訓示を「正しく分隊長のいう通りである。大艦巨砲主義の時代は既に過去のものである。戦艦無用論は、緒戦に於ける英国の不沈戦艦プリンス・オブ・ウエルスの撃沈によっても立証されるところで、近代戦の様相は全く航空にあることは間違いない」と肯定的に評価している。

佐藤の作品中の古賀は部下たちに「何しろわしのように利口なものは少なくて馬鹿が多い海軍上層部であるから何とも出来ない」と大言壮語している。草鹿のような海軍の航空関係の高級士官のみならず、佐藤のような下士官兵レベルの回想を通じても、あの戦争は大艦巨砲主義に固執する頭の古い「馬鹿」な上層部のせいで負けた、との言説が庶民的共感をもって広まったとみられる。

六〇年代の「大艦巨砲主義」批判

近年の日本海軍擁護論――かつての日本を頭が固いなどと悪く言うな――とでもいうべき議論の中で、この「大艦巨砲主義」批判が見直しの対象としてあげられている（澄川浩「日本海軍と大艦巨砲主義」、森雅雄「イデオロギーとしての「大艦巨砲主義批判」」、石動竜仁〈dragoner〉「「大艦巨砲主義」の〝まぼろし〟」など）。その要旨は、当時日本海軍だけが「大艦巨砲主義」に固執していたのではなく、それは米英も同じであった、したがって日本は英米に遅れていたのでも、頭が固かったのでもない、というものである。

それではなぜ、戦後日本では「大艦巨砲主義」批判の言説が広く受け入れられたのであろうか。森たち「大艦巨砲主義」批判の批判者はこれを、単に物量の差で負けたというのではなく、「大艦巨砲主義」のせいにすれば「より周到であり反省の契機もあって、より上等で良心的で服従するに足りるように見え」たからだ、と説明する（森前掲論文）。

しかし、戦後の「大艦巨砲主義」とその象徴大和・武蔵批判に対する「反論」や日本海軍弁護論は、戦後一定の時間が経過して旧海軍関係者たちが戦記雑誌『丸』誌上などで盛んに往事を回顧し始めた一九五〇年代からすでに存在する。

例えば、吉田俊雄・元海軍中佐は一九五七年の時点で「日本海軍の首脳者たちは、こんな〔飛行機に「戦艦のツユハライ」をさせるという〕思い切ったことを考えた。イギリスあたりで

は、第二次大戦になっても、飛行機にはあまり期待していなかったようだ」（吉田「最後の超弩級戦艦「武蔵」の生涯」）と、高木惣吉・元少将は六四年に「一九三〇年代を通じて、大艦巨砲主義でない海軍はなかったので、ひとり日本海軍を責めるのは当たらないであろう」（高木「日本の財宝大和・武蔵は誰に向けられるべきだったか」）とそれぞれ弁護的に書いている。戦後日本における「大艦巨砲主義」は、過去の愚かさの象徴として自虐的に糾弾されるのみだったとは必ずしもいえず、擁護論も存在したのである。

しかし私はそれよりもむしろ、戦後の日本人がその「大艦巨砲主義」の象徴たる大和・武蔵を自虐的に反省するどころか国の誇りや敗北への慰めを見いだし、今日に至るまでささやかな自尊心を回復させる道具としてきたのもまた事実であった、と指摘したい。

たとえば技術立国の基盤としての大和型戦艦讃美論が、一九六〇年代から唱えられていた。元技術少佐の福井静夫は六四年の『丸』で大和・武蔵を論じ、「戦いに使うために、洋上の艦隊決戦で米国主力艦群をたたきつぶすために計画され、建造された」のに、人員と油を浪費するばかりで役に立たなかったのは「皮肉」であったと慨嘆しつつも、「さらに皮肉なのは、これらの巨体や、兵器の建造の技術と施設とが、戦後のわが工業の発達に大いに貢献していることにある。たとえば巨船日章丸（佐世保のドック）や、NBCのタンカー（呉のドック）の建造、カメラその他の光学工業の発達、そして最近の、わが電子工業の飛躍などで

ある。／前者は不運であり、後者は幸運である」（福井「見かた考えかた　1964年のトップ銘柄〝戦艦大和〟を斬る！」）と書いている。

これは戦艦大和・武蔵の存在があったから今日の技術立国日本があるのだ、よって両艦はすばらしいという、現在の日本でもなじみ深い議論――たとえば広島県の呉市海事歴史科学館（通称・大和ミュージアム）へ行けば、大和がこうした技術史論的文脈のもとで顕彰されている――の先駆けといえる。あるいは戦艦大和・武蔵が大活躍してアメリカに勝つという仮想戦記小説や漫画が一九八〇年代から大量に出版されてきたという事実（拙著『戦艦大和講義』）が示すように、戦後日本人には自ら否定、反省しているはずの「大艦巨砲主義」を利用してその自尊心を満たしてきたという矛盾、ご都合主義があったのである。

戦後の日本社会は「大艦巨砲主義」批判一色で凝り固まっていたわけではなく、同主義への時に無理筋な擁護や讃美論も同時に存在していたことが「大艦巨砲主義批判」の批判者たちの議論からは欠落している。旧海軍やその「大艦巨砲主義」を批判して良心的高みに立とうとする行為が愚かならば、それを能天気に讃美して気持ちよくなろうとする行為もまた無理筋であり、前者のみを批判する議論は一面的ではないだろうか。

武蔵は技術立国の源流か

無理筋というのは、技術立国の原点としての大和・武蔵讃美論に対して、同じく六〇年代の時点で同じ海軍軍人から次のような批判が出ていたからである。本書でもたびたび登場してきた堀元美は「大和、武蔵は、日本艦艇技術の代表的結晶といわなければなるまい」と認めつつも、「他の多数の艦艇の建造に関連した技術をのぞいて、大和級だけのために、とくに開発された技術をピックアップすると、前述の〔防御用甲鈑、球状艦首、一八インチ砲などの〕ごときわめて特殊な、戦艦特有な事項が多く、今日に生きているご利益を、そう多くならび立てることはむずかしい。／大和が無事に建造できたのは、日本の技術水準がそこまで来ていたからこそ、そう多くの開発を前提条件とすることなしにできたこと」（堀「現代造船界に生きる戦艦大和の造艦術」）だ、としている。

つまり、戦後の高度成長はあくまでも日本人が戦前を通じて積み上げてきた工業技術水準の結果であり、大和・武蔵という個別の軍艦と直接には関係しないという、素人目にも正論というべき議論である。

さらに、戦後四〇年近くたった、元海軍軍人たちの内輪の席ではあるが、牧野茂も大和・武蔵の存在が「造船屋全体に非常な自信を持って大きい船を造るという原動力になった」とは言いつつも、「日本の海軍の技術が高かったから、〔中略〕日本の戦後の商船の技術が非常にほかに比べて高くなった」という考え方については、「それも確かに少しはそうでござい

ますが、必ずしもそれが大原因とは言えない」、「たくさん造る。多量生産ですね、その技術は日本は非常にうまくいって、そして安く、しかも納期が短くて、納期を確実に守るという。これはもうみんな造船、戦後の海軍の問題ですね」、「戦後の日本の造船屋の非常な努力、それを買わなくちゃいけない」と釘を刺している（八三年三月二五日の海軍反省会における発言。戸髙一成編『証言録　海軍反省会　五』）。ここで指摘される造船技術の諸特徴は、一点豪華主義・重厚長大の大和型とは正反対である。

しかし、堀や牧野らの批判が社会的に肯定され、定着することはなかった。人はある神話を造るにあたって、そこに登場させるべきわかりやすい象徴を求めたがる。戦後日本人はすでに失われた大和・武蔵、海軍を戦後高度経済成長という新たな神話における象徴として持ち上げ、それを否定するような苦い意見は、たとえ正論であっても拒絶したのである。

八〇年代の「大艦巨砲主義」論争

興味深いのは、前述の草鹿龍之介のような「大艦巨砲主義」批判に対抗するかのように、かつての海軍の「鉄砲屋」――砲術関係者たちが一九七〇～八〇年代にかけて、あくまで既定方針通り、飛行機と空母ではなく戦艦でアメリカと戦争すべきだったと主張していたことである。あえて彼らの発言に注目するのは、彼らはほんとうに最後まで頭が古くて固い、頑

迷な心の持ち主のままだったのか、と思うからである。

論者の一人は松田千秋（元少将、軍令部で大和型計画を担当。第二代大和艦長）である。彼は一九八一年のある雑誌上で、大胆にも先の戦争は戦艦による「艦隊決戦のほうが有利だった」のであり、真珠湾攻撃は「素人の作戦」に過ぎぬという主張を述べた。なぜならこれを立案した山本五十六は、「飛行機では戦艦に致命傷を与え得ないとする米海軍伝統の「戦艦万能主義」を一擲させ、航空戦によって海上作戦は決定できるとする「航空万能主義」に転向させ」、それは「航空機生産能力と民間パイロット（短期の軍事訓練により容易に軍用パイロットに転用できる）の数においてわれわれに十倍する米国の思う壺に嵌まった」（松田「追想軍令部伝統の作戦計画」）に過ぎないからである。

このような主張は、けっして松田一人の特異なものではなく、敗戦から一〇年ほど経った時点で海軍軍人の間ですでに唱えられていた。たとえば大和型計画立案に携わり、戦争中は軍令部第一部長として中枢作戦指導にあたっていた中沢佑・元中将は、日本の「敗因の一ツ」として「敵艦隊の西太平洋に進出する機会を失わしめ、機動艦隊の価値を認識させ、バトンを敵に譲って戦争の後半を苦しめ抜かれ、遂に艦隊の華々しい決戦のチャンスを失ってしまった」こと、「敵主力艦隊は来攻せず、却って我から教えられた機動艦隊を以てする機動作戦を随所に展開し（中略）日本海軍が多年錬成して来た戦法も実施する術なきに至っ

た」ことを挙げている（水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　下』）。彼が戦後もなお大和型の速力不足を悔いる発言をしていたことは本書三七頁で述べたが、そこで「第二次大戦の経過より判断し」云々とあったのは、松田と同じ考え方に基づく。

二人目は黛治夫（元大佐、大和副長などを歴任、重巡利根艦長時には武蔵の沈没直前まで護衛に付いた）である。その要旨は松田と同様、航空機の生産能力に劣る以上はハワイ作戦などを止めて戦艦群の艦隊決戦に持ち込み、早期和平を目指すべきであったというものである。彼は一九七二年の著書『海軍砲戦史談』で艦隊決戦を選択した場合に予想される結果を「この場合最も威力を発揮したのは、大和、武蔵であったであろう。洋心決戦の経過中、母艦航空兵力は、相打ち的に消耗し、残存兵力が互に戦艦一、二隻を処分したであろう」、「残存敵戦艦は、大口径の九一〔式〕徹甲弾と九三式魚雷が、全部深海に送ったであろう」、「これが貧乏国日本の取るべき早期戦争終結のための唯一の方策」などとし、戦艦とその巨砲への変わらぬ思い入れを語る。

このように、黛の頭の中では戦後四半世紀経ってもなお、戦艦武蔵と大和を切り札とする艦隊決戦の夢想が続いていた。もはや両艦が存在しない以上、それが醒めることはなかった。

面白いのは、黛が「洋上決戦で勝っても中国奥地（四川省など）からB—29の原爆攻撃を

受ければ敗戦必至という説」をあえて取りあげ、「(1)これは正にその通りであったであろう。(2)しかしこれは、われに原爆のない時点で開戦となった以上何ともなし難いところである」と書いている点である（『海軍砲戦史談』）。結局負ける戦争なのだから、それなら艦隊決戦のほうがまだマシだった、という開き直りともとれ、これに反駁するのは意外と難しい。積極的に肯定する根拠はないが、否定する根拠もまたないからである。

黛は「日本海軍の大口径砲の命中率がアメリカ海軍に比べ3倍」（同前）という根拠薄弱な自説に最後まで固執したとして評判がよくないし、この艦隊決戦論もしょせん後知恵もしくは居直りといえばそれまでだ。しかし、あの戦争は最初から勝つ見込みがなかった、と暗に認めているだけ、草鹿らの「たられば」論よりは潔いという見方も可能である。

「侵略戦争」批判

ふたたび松田千秋の議論に戻ろう。彼は一九八〇年に行われたインタビューの中で、より本質的な「反省」の言葉をのこしている。いわく、「太平洋戦争は、日本の中国侵略を阻止するために米英がとった対日輸出制限に対抗して、日本が武力行使したものであって、大義名分は、むしろ米英側にあるわけだ。／しかも、このような成算なき戦争を回避する方策はあったんだよ。きわめて簡単なことなんだ。つまり、成算と名分の立たない中国侵略から、

手を引くことだったんだ。しかし、当時の軍当局や為政者が、断固この措置に出なかったのは、かえすがえすも遺憾にたえませんね——」（松田「孫子の兵法」）。

確かに戦後の松田らの戦艦擁護・航空批判論は「たられば」論、後知恵に過ぎない。そこまで言うならなぜ当時海軍軍人として所論を断固主張しなかったのか、という批判も可能だろう。ただ、松田の議論については、同じ「反省」であっても、「名分」のない「侵略」戦争自体への歴史的文脈に即した、その意味で視野の広いものとは言える。

というのは、航空論者の一人である草鹿龍之介が戦後に述べた「反省」なるものは、「第二次大戦の勃発が、ドイツの帝国主義的な野望に引火されたものであるかどうかは別として、日米開戦の場合は、少なくとも平和に対する真剣味と、熱意において、いま一段の謙譲と努力があれば避けることができたのではないか」（草鹿『聯合艦隊　草鹿元参謀長の回想』）と、主語を欠いた曖昧なものだったからである。平和に対する真剣味と熱意を欠いていたのは日本か米国か、あるいはその両方だったのかがまったくわからない。

では、彼ら（元）大艦巨砲主義者たちは、なぜ敗戦から三〇年前後も経過した時期になってそのような発言をあえてしたのだろうか。

敗戦責任のなすり合い

松田らの戦艦擁護論の背景には、同じ海軍の元航空関係者たちが、自らの敗戦責任をより年長で頭の固い「大艦巨砲主義」者に押し付けていたことがあるとみられる。たとえば前出の森雅雄が、戦後いち早く大艦巨砲主義批判を唱えた海軍軍人の著作の一つに、士官パイロットの淵田美津雄・元大佐と奥宮正武・元中佐の共著『ミッドウェー』（一九五一年）を挙げている（森「イデオロギーとしての「大艦巨砲主義批判」」）のはこれを示唆する。

淵田ら以外にも、吉岡忠一・元海軍中佐（開戦時、真珠湾攻撃を行った第一航空艦隊の航空参謀などを歴任）が敗戦責任をすべて「大艦巨砲主義」者に押しつけるかのごとき回想を一九八一年に記している。その中に登場するのが、戦艦武蔵とともに戦死した猪口敏平である。

> 開戦翌年の初夏、源田〔実〕中佐と私は、砲術の神様猪口敏平氏に面接した。猪口大佐は鳥取訛で言われた。「妙なことになったのお」／源田中佐はすぐ答えた。／「妙なことじゃあ、ありません、ハワイ攻撃、マレイ沖海空戦が、近代海空戦の姿です。正しい戦訓です。一日も早く古い考えを変えなくてはいけません」／これに対し、猪口大佐は答えた。「戦争にはいろいろ不測のことが起るもんだのお。だいたい米といい、英といい油断があったのお。日本海軍はそれとは違うよ」〔中略〕好漢惜しむらくは頭が堅すぎた。（吉岡「海軍航空参謀の回想　ハワイへの道程」）

吉岡は、続いて「当時の〔海軍〕首脳の方々は砲術学校関係の方々から砲戦の実力が日本は米国の三倍も大きいから、艦隊決戦になれば必ず勝てると教育され、これを信じていたものと想像するのである」と書いている。つまり、きわめて遠回しな言い方に終始しつつも、戦争を始めたのは猪口や黛ら「大艦巨砲主義」者が愚かな対米戦不敗論を指導層に吹き込んだからであり、無残に負けたのは彼らが開戦後もなお「頭が堅すぎ」て「近代海空戦」を理解できなかったからで、我々航空のせいではない、と言っているのである。

こう書かれてももはや死人に口なし、猪口は何も反論できない。先に引用した松田千秋らの戦艦擁護論は、同じ元鉄砲屋として、こうした航空関係者からの批判に対抗すべく書かれたものと推察される。吉岡のこの文章と、先に引用した松田「追想　軍令部伝統の作戦計画」とが『増刊歴史と人物』（中央公論社）のまさに同じ特集号「実録・太平洋戦争」に掲載されていることは、その裏付けとなろう。

このように、戦後の大艦巨砲主義者と航空主兵論者の論争は、旧海軍グループという狭い世界の中における開戦＝敗戦責任のなすり合い、「たられば」論に過ぎないといえるし、松田や黛らの主張には、航空関係者からの再反論もある。草鹿龍之介らと並ぶ海軍航空の草分け的存在だった山本親雄（やまもとちかお）・元少将は一九七四年の著書で、もし戦艦同士の決戦に先立つ空母

同士の戦闘に日本が勝ったとしても、米艦隊はさっさと引き返して結局艦隊決戦は起こらなかっただろうし、米軍は空母の増産に乗り出して結局長期戦になるので彼らの批判はあたらない、と主張する（山本『大本営海軍部　回想の大東亜戦争』）。だがこれでは米軍に惨敗した史実と同じで、やはり航空主兵論が最善の策だったとは必ずしもならない。結局水掛け論というべきこの論争をみるに、一見「頭が堅すぎ」る大艦巨砲主義者の方が、反省がより根本的であり、より広い歴史的視野を持っているだけマシなのではないだろうか。

これらの論争とは別に、千早正隆・元中佐は本書第二章で述べた対空射撃の改善を連合艦隊の研究会で訴えたが「「大艦巨砲主義」が骨の髄までしみ込んだお偉方には、徹底して無視され」たと主張する（東京新聞・戦後50年取材班編『元連合艦隊参謀の太平洋戦争　千早正隆インタビュー』）。そこで艦隊防空は護衛戦闘機一〇〇機とそれを積む空母二隻を付けねば不可能という趣旨のレポートを作成したものの、やはり採用は遅れ、海軍部内に配付されたのは四二年後半になってであった。

千早は晩年に行われた新聞記者相手のインタビューのためか、「ミッドウェー前に私の論文の中の提案が採用されていたら、あの悲劇は避けられたかもしれませんよ」（同前）などと話を大きくしてしまっているが、大和型建艦の時点で軍令部の方針はすでに「制空権下の艦隊決戦」であった（本書四五頁参照）から、彼のレポートはこれをなぞったに過ぎない。

彼の事例を見るに、「大艦巨砲主義」は、戦後の平和な社会の中で、元若手士官がすでにこの世にいない頭の古い上層部をダシに自らの優秀さを誇るうえでのキーワードとして繰り返し使われ、有名になった感がある。戦後の大艦巨砲主義論争は、元海軍グループ内部での世代間闘争とも言える。

ただ、この論争の中で元軍人たちが完全に忘れていたものが一つある。それは猪口たち死んだ戦友である。松田は侵略戦争なぞ止めておけばよかったのだ、と実に良心的に反省してみせたが、それはしょせん、生者の自己満足に過ぎないとも言える。仮に、松田に向かって「では、猪口艦長はあなたの言う「大義名分」のない「侵略」戦争のために死んだのですか？」と聞いたならば、彼はどう答えただろうか。

誇りとしての武蔵

昭和も末期となった一九八七年、大蔵省主計官・田谷廣明が整備新幹線（青森―札幌間の北海道新幹線など五路線）の予算は戦艦大和と青函トンネルに並ぶ「昭和の三大バカ査定」だとマスコミに向かって放言し、問題となった。この言葉は正確には「主計局に語り継がれてきた言葉で、三つのうち二つまでは名前を言ってもいい。戦艦大和でも戦艦武蔵でも青函トンネルでも、二つまでは挙げていいが、三つ目は絶対挙げてはいけないという戒めの言葉

なんだ。要するに三つ目は〝おまえがやったらバカ査定になるぞ〟という戒めの意味が込められている」（岸宣仁『検証 大蔵省崩壊　権力の巨塔を襲った絶体絶命の危機』）そうだが、馬鹿げた税金の無駄遣い、大愚策という否定的な意味に変わりはない。

このように、戦艦武蔵は大和とともに、戦後日本における讃美・誇りの拠り所とされながら、一方で批判・自虐の対象でもあり続けた。戦前・戦後の日本について、否定であれ肯定であれ、何かもの申したい論者は好きな方に力点を置いて両艦を語れば、何か実のある議論をした気になれる。ここに両艦が今日まで知名度を保ち続けている一つの理由がある。

では、武蔵はいかなる意味で日本の誇りたり得るのだろうか。一つの答えは、すでに述べたように、経済立国を支える平和技術の基点としての武蔵、というものである（これは大和も同様）。たとえば占領が終結した一九五二年、大衆雑誌『キング』に掲載された論説は、次のような戦後ならではの武蔵論を展開している。

> だが、日本の誇るべき造船技術は、決してこの巨艦と運命を共にしてはいない。今日、平和産業に、そして商船の建造に、再びその優秀性を遺憾なく発揮する日が到来している。やがて卓抜した造船力は、この後に平和の巨船を産み出していくことであろう。／『武蔵』を産んだ三菱の、そして現在の西日本重工業の長崎造船所の巨大な第二船台は、

もはや棕梠縄の簑〔建造時、機密保持のためシュロ縄の網で船体を隠した〕も不必要であろう。この同じ船台から『武蔵』の妹たちが平和の女神に祝福され、美しく飾られて進水していくことであろう。〔中略〕我々国民にとつて、この気持は共通した或る共感をもつものであろう。それは決して、在りし日の海軍への淡い追憶の念などではなく、精魂を傾けた技術の結晶への、断ち難き愛着から滲み出る感慨からだと信ずるから。（神崎浩太郎「比島シブヤン海峡に眠る　超戦艦『武蔵』の建造秘話」）

建造時の徹底した機密保持、その象徴としてのシュロ縄、進水時に技術者たちが払った苦心とフィリピンでのあっけない最期、「海軍首脳部のいわゆる大艦巨砲主義の哀れな記念碑にすぎない『武蔵』と姉妹艦『大和』」（同前）という評価などは、のちの吉村昭の小説『戦艦武蔵』（一九六六年）以降の武蔵物語の定型を先取りする。

武蔵は兵器のはず

だが、大和とその同型艦武蔵の技術は旧海軍関係者たちにとって、本当に「平和」のためのものだったのだろうか。少なくとも日本敗戦時の武蔵の技術は、「平和」どころか「再軍備」のためのものであった。大和建造に携わった庭田尚三・元海軍造船中将は、敗戦時に

大和・武蔵の建造記録を一斉処分した理由について、「今から思えば実に残念でとり返しのつかぬ軽卒であったと思われ」るが、「その当時の当事者としては戦後わが国が軍備を断念して無防禦の平和国家に生まれ代わるというようなことは夢想だにせなかったことであって、必ずやいずれは再軍備するに違いないと考えたために、本艦のような絶世の設計や建造記録が宿敵米軍の手に渡っては万事休矣と考えたからであ」った、「敗戦となった瞬間誰もがそうせねばならぬ気持ちとなった」と語っている（庭田『建艦秘話』）。

庭田によれば、大和と武蔵の技術は来たるべき「再軍備」と対米復讐戦のため活用されるべきであり、「宿敵」米軍の手に渡ってはならぬと考えられたからこそすべて処分されたのである。にもかかわらず、先の『キング』の論説のように武蔵が純然たる対米決戦兵器として造られたことをあえて無視し、それどころか「無防禦の平和国家」の象徴として崇拝してきたのが戦後日本であった。

ただし、大和・武蔵の建造技術資料はごく一部が関係者の手元に保管され、松本喜太郎『戦艦大和　その生涯の技術報告』（一九五二年）などの形でたびたび公刊されている。

大和物語の二番煎じとしての武蔵

戦後の武蔵物語は、こうした技術者たちによる肯定的な内容のみならず、元乗組員たちの

手によって、批判的なものも作られていった。その先駆けとなったのが、雑誌『サロン』一九四九年一一月号に掲載された、元海軍下士官（上等兵曹）佐藤太郎の小説「軍艦武蔵」である。佐藤は武蔵の沈没時、機銃砲台部附戦闘記録係を務めており、のちの著書『太平洋戦記 戦艦武蔵』（一九六七年）奥付の著者紹介は一九一五（大正四）年生まれ、一九三五（昭和一〇）年以来駆逐艦、巡洋艦に乗り組み、太平洋戦争開戦後は駆逐艦朝雲を経て武蔵乗員、その間砲術学校高等科の対空教程を卒業、とある。

この雑誌『サロン』同年六月号には、有名な吉田満（東大法学部卒、学徒出陣の元海軍少尉、戦後日本銀行勤務）の小説「軍艦大和」が先行して掲載されていた。この時の「軍艦大和」は占領軍の検閲に配慮して口語体とされ、のちの一九五二年、『戦艦大和ノ最期』と題する文語体の書籍として創元社より刊行されるが、佐藤の小説「軍艦武蔵」も加筆のうえ、同じ五二年に単行本『戦艦武蔵』として再建社より出版された。

『サロン』掲載の「軍艦武蔵」は冒頭の煽り文に「「軍艦大和」の姉妹篇、遂に出づ!!」とあるように、吉田「軍艦大和」がうけたのをみて柳の下の二匹目のドジョウを狙った、言い方は悪いが二番煎じの作にもみえる。

このように戦後の戦艦武蔵と大和の物語は相次いで、しかもきわめて似た形式で世に出たといえる。ところが、吉田の大和物語は現在もなお有名なのに対し、佐藤のそれはほぼ忘れ

られた形となっている。これはなぜなのだろうか。

吉田の「大和」物語の特徴は、戦死者自身の口から語らせたことにある。『戦艦大和ノ最期』登場人物の一人で、沖縄特攻作戦で戦死した臼淵磐大尉は、死の意味をめぐって口論する少尉たちに「負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ／日本ハ進歩トイフコトヲ軽ンジ過ギタ」、「敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ハレルカ」と諭した。つまり、大和とその乗組員たちの死は古い日本の新たな「目覚メ」のためであり、よって無駄どころか崇高とされたのである。

同書は公刊直後は軍国主義讃美として批判を浴びたようだが、やがて多くの人々の感動を呼び、永く読み継がれることになる（詳細は拙著『戦艦大和講義』参照）。人は誰しも、単なる「犬死」よりは崇高なもののための犠牲と献身の物語を好む。多くの人が戦争で家族や知人、家や財産を失った時代にあってはなおさらである。

〈時代劇〉としての武蔵物語

一方、佐藤の武蔵物語の特徴は、ある種の勧善懲悪、通俗時代物である（に過ぎない）ことだ。四九年の小説「軍艦武蔵」は、古賀高射長による武蔵批判の場面に始まり、艦沈没時における砲術長の事実上の自決で終わる。猪口艦長が従来の対空射撃の手順に従わず、最初

から主砲を発砲して機銃の射撃を著しく妨げたという「砲戦指揮の誤り」を反省し「航空機のない海戦が無意味であることを述べ」て切腹（！）したことになっている叙述と併せ、大艦巨砲主義の愚かさを告発する内容となっている。これを大幅に加筆して刊行された彼の初の単行本『戦艦武蔵』（五二年）の特徴として、次の三点を挙げたい。

第一点は、優しく話の分かる山本五十六・連合艦隊司令長官（下々に優しい正義の殿様）と嫌な加藤憲吉・武蔵副長（悪代官）という物語上の図式が組み込まれていることだ。佐藤の『戦艦武蔵』の中の山本は、なぜか武蔵艦上で下士官兵たちと輪投げ遊びに興じており、負けた山本が罰を受けるため「さあ、遠慮なくやれ」と顔をつき出し、下士官は「失礼します」と言って勢いよく指をはじく。ぱち、といとも調子の高い快音が額に鳴り、「長官は、にっこり笑われた」のであった。

この慈父のごとき山本像は佐藤一人のものではなく、たとえば舛田利雄監督の戦争映画『零戦燃ゆ』（東宝、一九八四年）での、下士官兵戦闘機パイロットと気さくにウミガメのすき焼きを食べようとする場面（山本役は丹波哲郎）にも引き継がれている。

輪投げ自体は航海中の気晴らしとして明治時代から軍艦内で行われていたという（清水金桝『海軍講話　下士卒生活』）が、長官と下級兵士とのそれは、身分差別の厳しい帝国海軍にあっては考えづらい話である。

一方、戦艦の副長という高い位置にありながら、佐藤ら下士官兵にまでいちいち厳しく当たる加藤については「「副長も、どこかへ行けばいいな」「あいつは、さっぱり酒を飲ませないからな」」と、人情を知らぬやかまし屋扱いされている。

また、加藤副長は佐藤の『戦艦武蔵』の中で、前出の古賀高射長の発言に対して「下士官兵を集めてあんなことをいってはいかん。失言を取消せ」と食ってかかり、古賀から「副長は、下士官兵、下士官兵といいますが、日本の海軍が世界に誇る強さをもつているのは、何のためだと思つていますか」「日本の海軍の強いのは、下士官兵が強いからだ」「私の言葉は下士官兵の言葉であり、下士官兵の言葉は私の言葉です。私が〔武蔵の主砲を〕鉄屑といつたり、天然記念物といつたのは、何がわるいですか。近代戦の様式に合つた物量がほしいといつているだけです。日本の大馬鹿どもには、これが分らないのです」とやり込められる道化役を演じさせられている。

つまり作中の古賀大尉は、下々の弱者に代わって頭の古い愚かな権力者をやり込め、その鬱憤を晴らしてくれる時代劇の若武者、正義のヒーロー的な扱いなのである。

佐藤の著作には、後述するように史実との相違や脚色の跡が指摘されるが、古賀は『サロン』誌掲載の小説「軍艦武蔵」の時点ですでに、「四十五糎（ママ）砲など、威張つて居るが、こんな大砲を使う時代はもう来ないのだ」「今や時代は飛行機、母艦、高角砲機銃を切実に要求

して居る。従つて、我々対空関係員は此の戦争のヒーローであり、此の軍艦の主力である」などと部下に訓示したことになっている。悪代官のごとき加藤副長との激論場面こそ脚色だろうが、実際にこれに類する大艦巨砲主義批判をした可能性は高いと私は思う。

佐藤の物語の中で古賀はヒーローであったから、彼が放水射法などという戯画的な対空射撃訓練法を実行せざるを得なかった事実（本書八五〜八六頁参照）などが作中に描かれることはなかった。

一方、悪役扱いの加藤大佐だが、彼が軍艦の副長として艦内の規律保持に責任を持つ立場にあったことは当然考慮されねばならない。彼がその職務を厳格に遂行していたのは事実である。たとえば四四年三月にパラオ沖で武蔵が被雷した際、酒保(しゅほ)倉庫に浸水して当時みることもなかった貴重品の虎屋(とらや)の羊羹(ようかん)が全部潮漬(しおづけ)となった。修理のため呉に入港すると、羊羹は全部ドックのほとりの地上へ積み上げられた。「戦争中甘いものの皆無というときには、これは誰だって見逃せない話だった」が、加藤副長は食中毒防止のため「心を鬼にして」全部捨てさせたという（堀『続・鳶色の襟章　海軍工廠の戦いの日々』）。

艦を預かる副長としては当然の措置だが、下々の兵隊からすれば恨みを抱きそうな話ではある。こうした細かいことが積み重なり、後述する武蔵沈没後の一部乗組員フィリピン残留問題と相まって、加藤への悪評として残ったのではないか。

艦長の「切腹」

第二点は、佐藤が描く猪口武蔵艦長の最期の場面である。なぜか艦長は切腹したことになっており、これもまたある種の時代物――敗軍の将は潔く腹を切る――のように読める。

> 静かに振り返つた艦長は、／「砲術長、本艦ももはやこれまで……介錯(かいしゃく)を頼む」／そして自分の軍刀を差出した。同時に傍(そば)においてあつた短刀を握りしめ、一気にぐつと脇腹に突き刺し、横へ一文字に掻(か)き切つた。どくどくと鮮血が噴き出た。／「艦長、私もお供を」／「馬鹿、お前が死んでどうなる。俺を犬死さすな」／もうその声も苦しそうであつた。やむなく砲術長は、軍刀をすらりと抜いて、艦長の後ろへまわつた。（佐藤『戦艦武蔵』。この描写については「以上は海上にて泳ぎながら、直接砲術長より聞いた従兵斎藤兵曹の話による」との但し書きがある）

佐藤は猪口艦長の遺した遺書についても、「世界最強を誇る武蔵といえども、飛行機の前には一介の目標物にすぎなく、いかに強固な大艦隊も、飛行機のないのは武器のないのに等しい。今日の会戦はそれを如実に証明したものであつて、不沈艦を誇つた武蔵もここに屈し

てしまったことは、不肖の不徳はいうまでもないことながら、飛行機のないことに起因したことも見逃せない。この戦訓によって、日本海軍は今後大いに航空機の生産と、搭乗員の養成に努めるべきであると信ずる」(『戦艦武蔵』)とその内容を一部改変している。これによって、あたかも頑迷な大艦巨砲主義者の猪口が、土壇場で自らの頭の古さ、愚かさを認めて詫びたかのようになっている。

もちろん本書で先に全文を引用した実際の遺書とは大きく異なるが、これは佐藤自身による敗戦理由の総括であるとともに、『戦艦武蔵』が昔ながらの通俗的な〝教訓ばなし〟の文法(この場合、頭が古いと戦争に負けるぞ、という意味での教訓)に従って書かれた結果と考えたほうがよい。

この佐藤の描写はある程度、後続の武蔵物語に影響を与えたとみられる。たとえば戦記雑誌の『丸』一九五九年一二月号は猪口艦長の最期を「沈みゆく艦上で絶叫した、「航空兵力を軽視した自分の判断はあやまりだった」という悲痛な声も、比島沖にむなしく呑まれたのである」(「徹底した主砲万能論者」)と、あたかも大艦巨砲主義者としての頭の古さを後悔していたかのように描いている。同誌一九六四年九月号でも艦長の最期を割腹自決とし、介錯を引き受けた砲術長が軍刀を一閃させるや、「まるで軌を一にするように、このとき武蔵は、最後の大咆哮を天に向かって叫び、大きく横に倒れたのである」(「総合立体特集　戦艦武蔵レ

イテ沖海戦の最後」)と、艦の終焉を通俗軍記物の落城場面になぞらえて語っている。

士官への恨みつらみ

第三点は、武蔵沈没後、自分たち部下を見捨てて内地へ帰った士官の非道に対する恨みつらみの羅列である。佐藤は艦の沈没後、コレヒドールから輸送船さんとす丸で内地へ向かったのだが、同船は米潜水艦に撃沈されて再び漂流を経験、救助されて台湾の高雄へ上陸し、そこで敗戦を迎えた。以下はその際の所感にして同書の結びである。

> 「あゝ、こんな時誰か一人でも士官がいてくれたらなあ」／と、またしても飛んで帰った士官たちを怨むのであった。〔中略〕私は当然、警備隊の一員として、残留したのであるが、予想した通り、ひどい継子扱いを受けてしまった。給与通知、履歴書などもさっぱり送ってもらえず、そのために進級はおくれ、給料もろくにもらえなかった。内地で残務整理をしているであろう士官たちの怠慢を恨みつつ、終戦を迎えたのであった。
> (『戦艦武蔵』)

このように、佐藤の武蔵物語は士官たちへの恨みつらみに終始しているのだが、これを一

つの文学作品として見た場合、残念ながら吉田「大和」より不出来である。それは二人の受けてきた教育内容や教養の差を反映しているのだろう。

だがそれで話を終わらせるのではなく、なぜ佐藤の「武蔵」物語が通俗時代物の雰囲気をまとって描かれたのかを問題としたい。私は、佐藤が生きた戦前の時代、戦争は読んで面白い一つの勧善懲悪ものがたり、「おはなし」であり、『戦艦武蔵』は単にその時代の空気、文法に従って書かれたに過ぎない、と考えている。

民俗学・宗教学者の川村邦光は、日露戦後の戦争にまつわる「フォークロア」（伝承）について、「教科書に掲載された戦争物語や歌から推測するなら、〝戦争のフォークロア〟の語り継がれた場は学校の教育空間であり、その担い手と媒体は元兵士・教師・知識人・ジャーナリストと書籍＝活字メディアであったといえるのではなかろうか」（川村『民俗空間の近代　若者・戦争・災厄・他界のフォークロア』）と述べている。佐藤らはみなそのような時代の子である。もし川村のいう「語り」の実例を知りたければ、中内敏夫『軍国美談と教科書』や山室建徳『軍神』などを読むとよい。

民俗学者の大月隆寛は、ある年代までの日本人が「むかしの話」を語るとき、「ある〝おはなし〟の連鎖としてしか記憶されていないむかしのなかに、平然と弘法大師や俵藤太や山中鹿之介や小野小町といった、われわれからすれば「フィクション」の人物やそのエピソ

ードが介在してくる」ことを挙げ、「確かにこの自分が体験したこと、見聞したこと以外は、どのようなものであれ、人は社会的な言葉と意味のからくりを媒介にして自分の内側に取り込んでゆくしかない。その限りで、どのようなリアリティも〝おはなし〟の働きから逃れられるわけではない」と主張している（大月『歴史の消息について〈いま・ここ〉からの「歴史」を考える』）。

大月は科学性や客観的な「正しさ」の追究を標榜した戦後歴史学への批判としてこのように述べたのだが、それは狭い学問の枠を超えた、戦後日本社会一般の歴史認識に対する批判にもなっている。戦前の日本には、戦争物語を今日のような「嘘と真実」などという、ある意味でさかしい二分法をもって読む者などいなかったのだ。

吉田と佐藤――大和と武蔵それぞれの物語の最大の違いは、戦後社会で若者たちの死の意義をポジティブに語ったか否かにある。先に述べたように、吉田が戦友たちの死の意義を語り得たのに対し、佐藤は海軍への個人的な恨みつらみ、愚痴に終始するばかりであった。これでは小説として感動できず、そのことが、今日における両者間の知名度の大差につながっているとみられる。

猪口艦長は、佐藤『戦艦武蔵』の作中では、最後の別れの場面で「「副長、私の不徳は、数百人の兵の命を奪い、そしてこれ等数千人の遺族を悲嘆の底に落した。私に代つて、帰還

の上はこれ等の遺族を慰め、また残つた者の面倒をよく見てやつてほしい」／と改まつた口調で語つた」ことになっている。しかし、一九五七年の加藤副長本人の回想によると猪口は「副長、私に代つて帰還の上は遺族を慰め、また残つた者の面倒をよく見てやつてほしい」と改まつた口調で語」ったとされ（加藤ほか〈談話筆記〉「決死の捷号作戦に出撃！　壮絶！　戦艦武蔵の死闘」）、兵の「命」や遺族の「悲嘆」とまでは言っていない。

この佐藤の部分的脚色には、先に述べた佐久間艇長の遺書（本書九七頁参照）と、弱者慰撫の物語としての通俗芸能の影響をみてとらざるを得ない。その一例として、日露戦争後の乃木希典大将が実に昭和一〇年代までの浪花節（浪曲）の中で、戦死者遺族を自ら慰撫するため各地を行脚していたことがある。むろん作り話であるが、戦場での肉親の死に「《耐えて泣く人々を理解する偉人》を欲する願望」（真鍋昌賢「乃木さんのひとり歩き　浪花節にえがかれた日露戦後の庶民感情」）がこのような物語を作り上げたのであり、佐藤の武蔵物語もその伝統の上にある。

大和物語の中の〈戦前〉

佐藤の「軍艦武蔵」が掲載された『サロン』一九四九年一一月号のグラビア「彗星の如く」には水泳選手の古橋広之進や女優京マチ子の写真とともに、新婚の吉田満夫妻が登場

し、「御覧の通り眉目秀麗の若人、澄みきつた瞳には如何にも「大和」の作者らしい純粋不屈の精神が宿つてゐるやうだ。明るい秋の陽の一杯にさし込んだ縁側で、氏は傍らの夫人に友だちのやうな言葉で話しかける。五月に結婚したばかり、似合の新婚御夫婦である」とのキャプションが付いている。大和撃沈と降伏から四年、吉田はいち早く〈戦後〉の空気を読んで自己とその物語を適応させたのに対し、〈戦前〉の人であった佐藤にはそれができなかったともいえる。

とはいえ、吉田（一九二三〈大正一二〉年生）の『戦艦大和ノ最期』にもまた、戦前的「おはなし」の側面はある。たとえば、大和沈没後、脱出した乗組員たちが救命艇に殺到してすがりつき、転覆をあやうんだ艇の指揮官が軍刀で縁にすがりつく将兵の手首を「バッサバッサ」と斬り払う、という描写があるが、これは『平家物語』に類似の場面があり、その影響が指摘されている（栗原俊雄『戦艦大和　生還者たちの証言から』）。その意味では、吉田大和もまた一つの「おはなし」なのである。

吉田と同い年の司馬遼太郎は、学徒出陣で陸軍戦車隊の士官となり、本土防衛部隊に配属された。彼は戦後の一九六四年以降、エッセイや対談の中で、米軍が上陸して戦車隊が進撃する際、あふれかえっているであろう避難民はどうするのか、と大本営の参謀に質問したところ「避難民は轢き殺してゆけ」と言われたと、あたかも実体験であるかのように繰り返

し語っていた。

司馬の語ったこの〝伝説〟には、本当にそのような問答があったのかとの疑念が呈されている（秦郁彦『昭和史の秘話を追う』第四章「司馬遼太郎と戦車」）が、これは一種の勧善懲悪的な物語といえる。戦後日本社会における価値観の大転換により、かつてのエリート参謀が非道な「悪玉」として描かれたのである。

佐藤、吉田、司馬ら戦前の世代にとって戦争物語とは「おはなし」であり、彼らは戦後も戦争をその文法に則して描き続けた。ただそれだけのことである。

司馬遼太郎はある対談の中で、ノモンハン事件（一九三九年）の日本陸軍師団長・小松原道太郎中将がソ連軍に孤立させられた天幕の中で「なんとかなるだろう、日本の兵隊さんは強いから」と言っていたとされる挿話を引用し、「日本の兵隊さんが強いということの伝説を小学教育からや」る、「伝説教育」を受けたからそうなったのだ、と述べている（司馬・谷沢永一〈対談〉「円卓トーキングⅠ　昭和の時代と人間　その原型を問う」）。この発言は非常に興味深い。なぜならそのような「教育」を受けたのは一八八六（明治一九）年生まれの小松原よりもむしろ、大正末期生まれの司馬本人とその世代だからである。子どものころから「伝説教育」を受けた人間にとって、自らも伝説を事実であるかのように語り出すのは何ら不自然なことではなかった、というのはあり得る話である。

前出の毎日新聞記者・新名丈夫も戦争中の報道で「レイテ湾内わが艦隊の突入こそは、比島沖の戦闘を通じて、海鷲特別攻撃隊の奮戦と相並んで最も特異なる戦法を示すものであり、日清戦役の威海衛襲撃、日露戦役の日本海海戦におけるわが水雷艇隊の夜襲この方の帝国海軍の伝統を発揮せるものである」（新名「壮絶！台湾、比島沖　海空戦の実相」）と述べていた。この記事もまた、日本の海軍は明治以来強いのだという伝説に寄りかかって書かれている点で、司馬の言う「伝説教育」の所産と言える。

戦艦武蔵に話を戻すと、前出の佐藤太郎が（伝聞を元に）語った猪口艦長の切腹シーンもまた、「偉い人は捕虜にならないよう切腹すべきだ」という戦時中の切腹言説（本書一〇五頁を参照）に沿って書かれているに過ぎない。

事実の探求は確かに大切だ。しかし結局のところ、人の昔語りは、大月隆寛が言うように、自らがそれまで見聞してきた「おはなし」の影響から「逃れられるわけではない」のである。そうであるならば、佐藤太郎のような昔語りを後から「嘘」と切って捨てることに一体何の意味があるのか。それは一種の傲慢ではないだろうか。

かつて文芸評論家の川村湊と社会学者の上野千鶴子は、座談の中で沖縄戦の集団自決「神話」について「歴史的な正当性、実証的に正しいかどうかだけで語りについての論議や判断がなされるとしたら、まちがってしまうのではないか」「曽野〔綾子〕さんのように神話化

を批判する必要が、どこにあるんでしょう。解き明かされなければならないのは、なぜそうした神話が成立するのか、ではないでしょうか」とそれぞれ述べている（川村ほか『戦争はどのように語られてきたか』）が、同感である。

〈正確〉にあらずとの断罪

傲慢と言ったのは、今日、武蔵の最も有名な記録小説・吉村昭『戦艦武蔵』（一九六六年）が佐藤の一連の武蔵物語への批判から出発しているからである。吉村は執筆・取材記録『戦艦武蔵ノート』（一九七〇年）にて佐藤『戦艦武蔵の最後』の書名を挙げ、次のような厳しい批判を加えている。

> この新書版のような本は、武蔵の艤装時に乗組んで、最後の沈没まで経験した武蔵乗組みの下士官の記録で、私は、この一書に大きな期待をかけた。殊に武蔵が戦力として動き出し、沈没時までの経過をこの一書を参考にさらに徹底的に調べてまわりたいと思ったのだ。／しかし、十頁も読み進まないうちに、私は、この書物にかけた期待が残念ながらあやまちであったことを知らされた。／そして、その後、私が自分で歩いて調べるにつれて、この一書に対する期待は、根底からくずされていった。〔中略〕この戦記物

> のあやまちは、無数にあったが、この一書にかぎらず、雑誌その他に発表されている「武蔵」の記録も全くひどいものがあって、困ったことには、権威のある人までがその誤った記載を信用して引用したりしている。となると、その記録は、その人への信頼性からあたかも正確なものでもあるかのように堂々と通用することになるのである。〔中略〕そうしたことに気づいた私は、この一書だけにかぎらず「武蔵」に関する記述を、すべて信用しない態度をとることにきめた。そして、それは、結果的に極めて正しかったと信じている。歩く、そして聞く——私は、取材の基本的態度を守りつづけた。（吉村『戦艦武蔵ノート』）

佐藤の武蔵物語は前出の『戦艦武蔵』（五二年）後も加筆修正、タイトルを替えて複数回再刊され、『戦艦武蔵の最後』は芳賀書店から一九六〇年に刊行されたものである。ただし「新書版」のサイズにあたるのは『戦艦武蔵』（河出書房、一九六七年）と『戦艦武蔵の死闘』（鱒書房、一九五五年）であり、吉村の勘違いとみられる。なお、のちの八五年に刊行された『戦艦武蔵ノート』文春文庫版からは『戦艦武蔵の最後』の書名が削除されている。

佐藤の武蔵物語は、敗戦時に中学生で軍隊に行くことはなかった吉村（一九二七年生）の実に戦後的な発想によって「あやまち」、別の場では「読物にすぎない」「歴史を冒瀆するも

の」（吉村「下士官の手記」）とまで言われて断罪され、やがて忘却されたのである。

私は単純な世代論を好むものではないが、実際に戦争へ行った佐藤・吉田ら大正世代と、年若く東京で傍観していた吉村の昭和との間には、戦争の描き方や理解をめぐる断絶があるのではないか、と思う。吉村の世代以降、個々の日本人が〈戦争〉を語り、理解するその枠組みが嘘と事実の二分法へと大きく変化したのである。特段の根拠があるわけではないが、私はそこに敗戦直後の「真相」暴露的報道の数々、そして東京裁判の影響をみる。

〈戦争〉を物語る枠組みという問題について付け加えると、佐藤は『戦艦武蔵』のまえがきにおいて同書執筆の目的の一つは武蔵が「当時の火力を超越したいかに偉大な戦艦であつたか」を公表することだったとし、ついで次のような注目すべき発言をしている。

> いま一つは、今度の戦争に狩り出され、従軍した（兵の心）を知つていたゞきたいと思つたことである。軍律の前には、雪が黒いといつても、これに反対することが出来なかつた軍隊に於て兵たちはいかに思い、いかに考え、そしていかに戦つたか。〔中略〕終戦後、参謀その他の将校による戦争記録が夥しく刊行されたが、兵による記録は実に尠い。従つて日本軍に根深く内包されていた宿命的な「将兵の相剋」が全く描かれていない。

戦後の日本で書かれた戦記物の多くが高級参謀などの弁明に終始している点については今日でもいくつかの指摘がある（保阪正康『戦場体験者　沈黙の記録』など）が、佐藤は一九五二年の段階でこれに対する異議を唱えているのであり、戦後日本の戦争叙述史上における重要な問題提起といえる。佐藤の武蔵物語が、少なくとも本人の主観では先駆的に「将兵の相剋」の存在に言及、かつ描いたものであるのは言を俟たない。よって、多少の「あやまち」が含まれるからといって無下に退けたり、無視するのは適切ではない。

佐藤の武蔵物語は、後続のそれにある程度の影響を与えた。漫画家の水木しげるは一九六〇年の戦記漫画「水木しげる作戦シリーズ八　決戦レイテ湾　第二部　戦艦武蔵の最后」において、猪口艦長は「絶大なる期待をかけられた本艦を失うことは誠に国家国民に対して申し訳なし。最期の勝利を確信し、お先に参ります」との遺書をのこして「切腹」したと描く。小説家の赤城毅は同作の解説中、切腹はある乗組員が発表した手記の作り話で事実でないことが判明しているとしつつも（猪口の最期をその目で見た者はいないのだが……）、そうしたささいな瑕疵をあげつらうのは無意味に近い、猪口や栗田ら「将帥たちの心の動きは、指揮官かくあるべし、という作者の祈りを投影したもの」であり、「作者が創造した、生を希求しながら、他者に死を命じ、自らも滅び去っていく、そうでなくてはならなかった軍人像」

と指摘する（赤城「解説　哀惜のクロニスト」傍点は原文ママ）。

この指摘に従うなら、水木は猪口を大勢の兵士を見捨てずに一緒に死んでくれる、そのような「将帥」として「創造」したのである。これはたとえば日露戦争後の乃木希典伝説を作り出した近代の庶民的伝統に連なる行為といえ、嘘とあげつらうのは民話をいちいち嘘だと言うようなもので無意味に近い。

教訓話としての大和物語

佐藤太郎の『戦艦武蔵』は、対米戦争の敗因を頭の固い大艦巨砲主義に基づく航空軽視に求め、その方向へと史実を書き換えた（例・猪口艦長の遺書）、もしくはその可能性のある（古賀高射長と加藤副長の激論）、一種の〈教訓〉物語であると先に述べた。

実は、吉田満『戦艦大和ノ最期』にも、これに似た教訓性が見てとれる。作品に登場する大和副砲分隊長・臼淵磐大尉（戦死）は「敗レテ目覚メル」発言だけが今日目立ってしまっているけれど、作中では大和在艦時、砲術学校から回覧されてきた対空戦闘の戦訓が敗因を「命中率ノ低下ハ射撃能力ノ低下、訓練ノ不足ニヨル」と断定していたのに対し、「コノ大馬鹿野郎」「不足ナルハ訓練ニ非（あら）ズシテ、科学的研究ノ熱意ト能力ナリ」と書き込んだ人物としても描かれる。

先見の明ある優秀な若者が、頭の固い老人の無理解の犠牲となって空しく死んでいく（臼淵の意見は「徹底セル沈黙ヲモツテ幹部間ニ回覧サレタルノミ」だった）という、このある意味でよく出来た吉田の物語は、佐藤太郎の『戦艦武蔵の死闘』（一九五五年）が武蔵高射長の古賀大尉を、「「日本海軍の大馬鹿野郎」とののしり、「武蔵、大和を天然（ママ）記念物」といい「戦いに勝つためには生きる努力をすることである」と喝破し、そして「将来は音よりも速い航空機ができる」と断言し、武蔵艦上に一波乱おこした」勇気と先見の明ある人物に描いているのと酷似している。

吉田の大和物語を佐藤が真似たというよりは、この時代の戦争に対する語りの定型（パターン）が、非命に斃れた若き先覚者（若武者？）に無力だった己の心情を仮託し、そのぶん頭の固い年寄そして武蔵や大和を引き立て役の悪玉として貶（おとし）めるものだったとみたほうがよいだろう。

吉田や佐藤は、ここでも自分の物語を戦争中の実体験に照らしながら、一種の悲劇もしくは教訓物語――「おはなし」として書いているのだ。二人とも、戦前の日本で戦争物語が書かれる際のあるべき〈文法〉に従ったに過ぎない。

吉田満は、この臼淵の上層部批判により、大和艦内の若手士官の間では「「世界ノ三馬鹿、無用ノ長物ノ見本――万里ノ長城、ピラミッド、大和」ナル雑言、「少佐以上銃殺、海軍ヲ救フノ道コノホカニナシ」ナル暴言ヲ、艦内ニ喚（わめ）キ合フモ憚（はばか）ルトコロナ」かった、と書く。

先に述べた大艦巨砲主義批判、世界の三馬鹿戦艦大和（武蔵）なる物言いが戦後日本で人口に膾炙していくには、このようにわかりやすく教訓化された戦争物語群の影響が大いにありうる。

加藤副長の反論

猪口艦長の遺書は一九五七年一月の『臨時増刊　旬刊タイムス』（東京内外新聞社）「特集・世界の恐愕（きょうがく）戦艦武蔵の解剖」の「壮絶！戦艦武蔵の死闘」と題する武蔵の戦記に全文引用された。執筆は加藤元副長、村山隆元内務士、斉藤静八郎元主砲方位盤射手の連名である。同誌の表紙には「殉国至誠の提督　戦艦武蔵・猪口艦長の遺書」「手渡たされた（ママ）遺書を胸に十余年!!沈黙を破つて加藤副長が初めて綴（つづ）る血涙の手記」とある。戦前と違って「殉国」が正義どころか悪となった時代、そのような語られ方をされた猪口艦長は、人々から忘れ去られていかざるを得なかった。

この武蔵特集の一ページは「加藤副長の横顔」と題し「ある本で、加藤副長を非常に中傷した記事」に対し、二人の元海軍佐官が「多少融通性がない、固すぎるということもいえるだろうが、軍人としてはまことに純粋な――これこそもつとも正当な評価なのだが――方であつたと思う」「加藤さんは実にその「ハート・ナイス」〔人の良いことを指す海軍の隠語〕の

典型みたいな人であつた」と擁護している。加藤たち元士官グループとしても、下士官佐藤の小説『戦艦武蔵』は体面上無視できず、猪口の遺書を証拠として使い、それが作り話の「中傷」に過ぎないことを立証しようとしたのかもしれない。

ただし、佐藤は『戦艦武蔵の死闘』（一九五五年）のみに「その後の武蔵乗員」なる一項を追加、加藤副長について確かに厳格ではあったが「一日も早く無事に加藤部隊の者が帰ってくれるように常に願っていたにちがいない」、「若い兵たちの不運な死に、泣いても泣ききれぬ悲しい親心」などと特に記していることから、両者間には何らかの和解がすでにあったとも考えられる。

2　武蔵と日本人、そして天皇――吉村昭と渡辺清

戦争を支えたのは誰か

作家・吉村昭（一九二七～二〇〇六年）が一九六六年に刊行した小説『戦艦武蔵』は今日でも知名度・評価の高い戦記小説だが、それはなぜほかならぬ六〇年代に書かれねばならなかったのだろうか。あらかじめ結論を述べておくと、戦後日本において主流であった戦争観、すなわちあの戦争は一部の指導者や軍部が悪かったのだ、という今日でも根強い見方への異

議を申し立てるためであった。

吉村の考えによると、あの戦争は決して一部の者によるのではなく、当時の無数の日本人が発揮した「巨大なエネルギー」によって支えられていた。吉村の目的は、それを武蔵という事例をもとに描いて人々に示すことであった。

> 私は、戦争を解明するのには、戦時中に人間たちが示したエネルギーを大胆に直視することからはじめるべきだという考えを抱いていた。そして、それらのエネルギーが大量の人命と物を浪費したことに、戦争というものの本質があるように思っていた。戦争は、一部のものがたしかに煽動してひき起したものかも知れないが、戦争を根強く持続させたのは、やはり無数の人間たちであったにちがいない。あれほど厖大な人命と物を消費した巨大なエネルギーが、終戦後言われているような極く一部のものだけでは到底維持できるものではない。このことを戦時中少年であった私は直接眼にしてきたし、その体験を通して、戦争についての作品を書いてみたいとねがっていた私は、日誌から噴き出る熱っぽい空気にあの奇妙な一時期のまぎれもない姿を見いだしたような気がして、武蔵について少しずつ知識を持ちはじめるようになった。そして、ようやく武蔵こそ、私の考えている戦争そのものの象徴的な存在のようにも思えてきたのだ。（吉村『戦艦武

> 蔵』「あとがき」）

このように、吉村が描き出そうとしたのは、あの戦争を支えるべく当時の日本人が発揮した「巨大なエネルギー」であった。戦艦武蔵はあくまでもその「エネルギー」の体現物、象徴に過ぎない。したがって、小説『戦艦武蔵』の頁の大半は三菱長崎造船所での建造過程に割かれており、戦闘と沈没、その後の乗組員たちの運命にかかわる頁数は相対的に少ない。

ちなみに、本書冒頭で引用した、武蔵が海底に沈まず世界の海中を漂流しているという「伝説」は、吉村が元乗組員から聴取した話をエッセイ「消えた「武蔵」」（一九七八年）に記し、以後広く知られるようになったものである。

戦前日本人の使命感

吉村にとって、戦前の人々が発揮した「エネルギー」や使命感とは、いったいどのようなものであったろうか。彼が『戦艦武蔵』に記したその実例を以下に掲げる。

> 〔三菱長崎造船所の〕所員たちには、一つの確信があった。自分たちのつくっているこの巨大な新型戦艦が海上に浮べば、日本の国土は、おそらく十二分に守護されるだろう

……と。かれらは、この島国の住民の生命・財産が、自分たちの腕にゆだねられているのだという、強い責任感に支配されていた。そのためにも、かれらは、一刻も早く、しかも完璧な姿でこの巨艦を戦列に加えたいという願いをいだきつづけていた。／かれらは、誰一人として手を休めている者はなく、千数百名の所員たちは、汗と油にまみれて作業に取り組んでいた。／それらの小さな人間の群れの中で、おびただしい量の鉄で組立てられた巨大な船体が、奇怪な生物のように傲然と横たわっていた。

私は先に、末次信正大将が戦前、軍縮問題と大陸の権益擁護は不可分である、と述べていたことを紹介した（本書二二頁参照）。武蔵はこの、いざとなったら戦争に訴えてでも日本の権益を守る、という発想に基づき建造された兵器であった。また、吉村『戦艦武蔵』文庫版に「解説」を記した磯田光一も、「げんに〔武蔵の〕建造作業に従事している人間にしてみれば、それがどれほど苦役であろうと、巨大な軍艦の神秘はいつしか人々の心を支える唯一のものに転化してしまう。職業的な使命感というものが、人間にどれほど壮大な夢を見させるかは、知る人ぞ知るであろう」（新潮文庫版『戦艦武蔵』「解説」）、つまり武蔵を日本人の「夢」の体現物と観ている。

吉村とその読者にとって巨艦武蔵は、戦前日本人の多くが抱き、敗戦後は一転なかったこ

とにされた「エネルギー」や「使命感」、「夢」の体現物そのものであった。

武蔵の建造に際して関係者が抱いた夢や高揚感がよくわかる文章として、三菱長崎造船所の武蔵建造主任・渡辺賢介が艦の進水にあたり記した、「人間ノ精神ヲ或ル一大事物因縁ニ集注スル時、其ノ精神ト決心トガ世界ニ比類ナキ軍艦トナル。因ヨリ一朝一夕ノ偶然デモ僥倖デモナイ。一ツニ我々ノ精神力ノ不断ノ鍛錬（作業）ガ果ヲ結ビタルモノニシテ、コノ貴キ自力コソ神力トモ神風トモ融合一致スル偉力ナル感ヲ新タニスルモノナリ」とのメモ（古賀繁一『古い思い出』）がある。この一文は吉村も小説の現地取材と執筆の過程で読んだはずである。

渡辺という一人の人間の中では、綿密な計算と技術によって巨艦武蔵を水上に浮かべさせるに至った合理主義と、「神力」「神風」という非合理的とも言える精神主義とが渾然一体となっており、いささかも矛盾していない。このメモ一つをみても、武蔵は昭和日本人のエネルギーや夢の結晶という吉村の指摘は的を射ている。

ただし、武蔵に膨大な「エネルギー」や「使命感」をつぎ込んだ日本人の中に、吉村が武蔵の図面一枚の紛失事件に際して疑わしいとみなした三菱関係者や、長崎在住の中国人たちを拷問に等しい方法で取り調べた警察官、憲兵たちも含めていることは、強調しておかねばならない。

巨艦武蔵はそのような暗いエネルギーをも吸収して誕生し、やがて戦場で大勢の将兵たちの生命を呑み込んでゆく。だから磯田は吉村『戦艦武蔵』を「日本人の〝集団自殺〟の物語」と評したし、吉村は武蔵を一個の「怪物」とみなしたのである。

「エネルギー」強調の理由

吉村が武蔵を執筆対象に選んだのは、かねて「あの戦争では皆騙されたのだ」と口をぬぐう戦後社会に対する何とも言えない違和感を覚えており、それが戦後約二〇年を経過するにつれて、いよいよ大きくなってきたからであったという。

> 終戦後二十年間、戦争は、民主主義という言葉の中でゆがめられ、戦争の実際の姿から人々は視線をそらせつづけている。それに対するもどかしさが憤りに近いものとなって、私は鬱屈とした二十年間をすごしてきた。平和をねがうならば、戦争の悲惨さ、むなしさを直視しなければならないはずなのだ。〔中略〕戦後の戦争論は、「軍部が悪かった」の一語で簡単にすましている。そして、戦争を持続させる原動力となった一般大衆のエネルギーについては、一切口をとじている。大衆のエネルギーが、どのような形をとったか。一例をあげれば、日本では、特攻隊員の死であり、それをただ「犬死であった」

> とすましていては、戦争を解く鍵とはなるまい。その鍵とはなにか。それは、戦時中にしめした大多数の人々のすさまじいエネルギーであり、死をさえいとわなかったエネルギーではないのか。そのことを大胆に直視しなければ、戦争のはかなさ、悲惨さはその姿を鮮明にはしない。（吉村『戦艦武蔵ノート』）

吉村には、あの戦争を支えたのは軍部などではなく無数の国民大衆であったという「実際の姿」を「大胆に直視し」て伝承しておかなければ、日本人はかつての敗戦時に戦争から平和へと豹変したのと同じく、今度は平和から戦争へと再び豹変し突進するのではないか、という危機感や恐怖心があったように私は思う。

吉村は戦争中、身近に住むごく普通の人々が豹変するのをその目でみていた。たとえば、平和なころ「いつも笑みを絶やさず、まことに愛想がよかった」近所の八百屋は戦争が長引いて野菜類が不足するとともに「全く面変り」し、野菜を買いに来た吉村に荒々しく「あんたの家に売る物はないよ」というようになった（吉村「歪んだ生活」）。野菜を買えるのは、お金以外に何か生活必需品を渡す客である。

彼の『戦艦武蔵』執筆のきっかけには、このような後者の戒めと言うべき発想があったとみられる。彼は同書刊行の二年後に記した文章の中で「戦争に幼いながらも接触した私は、

二つの相反した精神的季節の中に生きた人間という存在の奇怪さを、後の世代に伝える義務を課せられているように思う」「順応性にすぐれた人間という動物は、戦争の悲惨な記憶がうすれ、記憶がとかく美化されがちなように美しいものとして感じはじめられた時、その環境の変化につれて再び殺戮に熱中する人間に変貌する可能性をもつのではないだろうか」と述べている（吉村「二つの精神的季節」）。軍部のみならず一般日本人の過ちを記録して繰り返してはならない、という吉村の主張は、歴史学で言うところの、民衆の戦争責任論と通底するものがある。

このような民衆に対する戦争責任追及とも読みうる発言は、戦後二〇年経って戦争体験が「風化」したからなしえたことであろう。また、彼が戦時中「少年」、「傍観者」であり、自ら何らかの責任を負うべき戦いの当事者ではなかったこともあるだろう。

このように、吉村の目標が戦争にまつわる暗い「事実」の追求にあったからこそ、彼は戦後平和主義的発想で明るく作り替えられた武蔵語りを「嘘」とみなして強く憎んだ。

たとえば『戦艦武蔵ノート』には、『戦艦武蔵』刊行から数年後、「長崎放送から、数年前、「武蔵」の建造を中心としたルポルタージュの放送テープが残っているが、きいてみてはどうか」と言われた際の話がある。吉村はこれを聴き、ある元技師の「「武蔵」は、平和をねがって建造されたもので、この巨艦さえあればアメリカも手は出さないだろうと思っていた。

いわば私は、平和のために「武蔵」建造に従事したのです」という言葉に激しく怒った。

> 馬鹿を言うな、と思った。「武蔵」は純然たる兵器である。多くの人々を艦船とともに巨大な砲弾で飛散させようという目的でつくられた殺戮の具である。それを「平和のために」というのは、現在の時点に立った考え方で、こうした浅薄な妄言が戦争の実態をぼやかし、戦争のもつ残酷さを薄めさせてしまっているのである。／核兵器保有が平和のため……という大国の愚劣な言葉と全く同一で、私は不快感を通りこして憤りをおぼえた。（『戦艦武蔵ノート』）

ここで激しく指弾されているのは、武蔵の兵器性を否定するという、戦後日本ではなじみ深い議論である。確かに我々は、このような武蔵にまつわる「嘘」が戦後日本の他の場所でもつかれていたことをすでに知っている（本書二九〜三〇頁参照）。吉村の執筆活動には、少なくとも『戦艦武蔵』に限って言えば、日本人の過去にまつわる「事実」を究明、直視し戦後的な「嘘」を批判するという、明快かつ一貫した目的がある。

彼は一九八五年の対談で、『戦艦武蔵』を書くにあたってどこに視点を置くかで悩み、「結局、いろいろ考えて、つくられていく武蔵が私なんだ、と考えた」と語っている（吉村『時

代の声、史料の声』)。武蔵とは実は吉村本人であり、同艦の物語は吉村にとっての戦争、人生そのものであるから、そこにいささかの「嘘」も混入してはならなかった。
結局、吉村は『戦艦武蔵』を誰のためでもなく自分のために書いたのである。

〈事実〉のあやふやさ

『戦艦武蔵』をはじめとする吉村の「戦史小説」は、かくも徹底した〈事実〉へのこだわりの面で現在でも評価が高い。それは、彼が戦後日本の〈嘘〉を激しく憎みつつ、「戦争は厳として実在したものであり、その叙述にはいささかの誤りも許されない」(吉村「史実と創作について」)という厳しい態度で取材と執筆に臨んだ旨をのちのちまで公言していたからである。
ところが、吉村は一方で、『戦艦武蔵』の登場人物に創作の台詞——艦の進水直前、進水主任が「御誕生が近いぞ」と叫ぶ——を言わせたり、建造責任者が短刀を懐に忍ばせて進水に臨んだという事実を、近代戦艦の建造に似つかわしくないという理由で意図的にカット、しかもそのことを公言してさえいる。ノンフィクション作家の最相葉月(さいしょうはづき)はこの行為を「〔吉村にとっては〕事実よりも自分の小説のほうが大事、なのだからあたりまえである」(最相「「小説になる」瞬間」)と身もふたもなく評するのだが、それにしても佐藤太郎の作品のとった態度とははなはだしく矛盾しているようにみえる。

この矛盾は、吉村にとっても戦争話(本人言うところの「戦史小説」)は結局のところ、佐藤や吉田満らと同様、何か教訓をくみ取るための物語、ひとつの「おはなし」に過ぎなかったと考えれば解消される。吉村にとって敗戦までの戦争は「悲壮でそして美的なものであり、それは必ず勝利によって終るはずのもの」(吉村『戦艦武蔵ノート』)であった。つまり彼もまた、戦争を一個の物語(ファンタジー)と捉えていた「戦前」の子なのである。
佐藤の武蔵物語と吉村のそれとの大きな違いは、前者の告発対象が頭が古くて戦争に負け、とうに滅んだ日本海軍であったのに対し、後者は滅ぶどころか厳然として存在する戦後日本それ自体であったことだ。相手が現存する以上、これを撃つにはいい加減な嘘ではなく、確固たる根拠、「事実」の提示が必要となる。ここに吉村の武蔵物語が〈事実〉、ただし、あくまでも本人がそうみなしたものに固執した理由があるように思う。
吉村は、一九七〇年の「事実と虚構の間」と題する対談で「ぼくは虚構というのは、事実というものを作者の抽象化という意識で濾過(ろか)し、真実にまで高められたときに果せるものだと解釈」するのだと語っている(吉村『時代の声、史料の声』)。これを『戦艦武蔵』に即していうならば、武蔵に関するもろもろの「事実」のうちから吉村の意にかなうものだけ選択し配列したものが「真実」の武蔵物語になる。そのため、吉村は「ある下士官の手記によると、

艦長が自殺する場面」に出くわし、「困ったなと思」ったという。佐藤太郎『戦艦武蔵』の語る猪口艦長の切腹シーンは、彼が頭の中で考えた「真実」にはおよそそぐわなかったからである。

こうなると、吉村にとって本当に大事だったのは「事実」ではなく、それらを取捨選択してなり立ったところの「真実」だったといえる。よって、「巨大なエネルギー」を発揮して戦争を支えるどころか、不満たらたらの水兵ばかり出てくる佐藤太郎の武蔵物語は、単なる「あやまち」として退けられてしまったのである。

柔道畳

しかし人を呪わば穴二つというべきか、吉村『戦艦武蔵』もまた、武蔵内務長（運用長）・工藤計（くどうけい）大佐の遺族から事実関係の「誤り」を指弾されていた。同作が描くところの工藤大佐の行動は、「防御指揮官工藤大佐は、部下たちの手で柔道畳の上にのせられて駆逐艦の舷側に近づくことができた」というものであった。吉村はこれを生還者からの情報基づいて書いたとみられる。たとえば、斉藤静八郎（元武蔵主砲方位盤射手、中尉）は「互に長は部下をいたわり、部下は長を思いつつ、助け合つて泳いでいた。／内務長の久藤（ママ）中佐（ママ）を部下が浮遊物にのせて、守つていた」（斉藤「戦艦「武蔵」の生涯」）と雑誌に書いている。吉村が依拠した

のも彼からの聞き取りだったかもしれない。

しかし、後述する武蔵の戦友会誌『続!! 嗚呼（ああ） 戦艦武蔵』（一九八二年）上で、工藤の妻がこの箇所は「事実と異」なると抗議している。

> 吉村昭氏の「戦艦武蔵」が昭和四十一年に発行されたので、夫は直ぐに求めてまいりました。作者の情熱をかけた立派な実録に感銘〔を〕受けながらも、終りの頁の方に「工藤は部下たちの手で柔道畳の上にのせられて、駆逐艦の舷側に近づくことができたが……云々」後略の記事に非常に憤慨しておりました。／そんなことは絶対ない……些細なことではあっても事実と異った記事をのせられて、その頃はやりきれない気持の様でした。吉村昭氏も誰方（どなた）の情報提供か知りませんが誤報をそのままに信じて、記事にされたのでしょうが、印刷の文字は訂正すべくもなく、夫の心を思いやり、私も妻としていい気持ちはしませんでした。（工藤美代子「武蔵乗組員の妻としての回想」）

おそらく柔道畳云々は「事実」ではなかったのだろう。工藤が「非常に憤慨」したのは、吉村『戦艦武蔵』が続いて同じ武蔵幹部の越野〔公威〕砲術長を「水泳の達人であったので元気に泳ぎ廻りながら部下を誘導していた。しかし、救助が本格的にはじめられた頃、急に

体をめぐらすと、武蔵の沈没方向に一人で泳ぎ去り、そのまま夜の海上に姿を没した。砲術長として対空射撃の責任を負ったとしか思えぬ行為であった」と描いており、あたかも命を惜しんで柔道畳で生きて帰ったと、批判されたように感じたからとも考えられる。

後年の手塚正己のノンフィクション『軍艦武蔵』（二〇〇三年）は、別の証言に基づき、工藤は泳ぎが達者で漂流する部下を励ましていたと記すことで、吉村の小説にそれとなく異議を唱えている。

この工藤大佐をめぐる挿話は、歴史叙述における証言や回想の扱いの難しさを示すといえるが、ここで問題にしたいのはそのようなことではなく、人は事実を何のために求め語るのか、それはなぜ事実として語られねばならないのか、ということである。

すでに述べたように、吉村は過去の事実（と自らみなしたもの）こそが自分の生を支え導く指針、戦後社会の嘘を撃つ論拠と確信していた。だから、ひたすら事実を追求して真実へと高め、そこで佐藤太郎のように嘘とみなした他者は容赦なく排撃した。そしてそれゆえにこそ、自らの作品もまた事実の究明が究極の目的であるかのように他者――遺族から受け取られ、その基準に照らして否定されてしまったのである。

『戦艦武蔵』の柔道畳云々の箇所は、二〇一五年に刊行された作品集『吉村昭　昭和の戦争Ⅱ　武蔵と陸奥と』収録版においても訂正されないままである。

戦艦武蔵と天皇

渡辺清（わたなべきよし）（一九二五～八一年）は元武蔵乗組の海軍少年兵であった。静岡県の貧しい農家に生まれ、高等小学校を卒業後、中学へ行けなかったため四一年に一六歳で海軍を志願した。太平洋を転戦して武蔵の沈没を体験、終戦時には下士官となっていた。

渡辺は武蔵艦上での過酷な生活を描いた小説『海の城　海軍少年兵の手記』（一九六九年）、レイテ沖海戦と沈没の体験を記した『戦艦武蔵の最期』（七一年）、敗戦後の昭和天皇に対する幻滅を吐露した『砕かれた神　ある復員兵の手記』（七七年）の三部作をはじめ、戦争に関する多くの文章を遺している。主として武蔵乗組から沈没までの過程、戦後の昭和天皇批判にかかわるものだが、今日では著作の流通状況に照らして知名度は低いといわざるを得ない。武蔵の最期を描いた『戦艦武蔵の最期』も吉村『戦艦武蔵』と異なり新刊書店では買えないし（二〇一六年現在、オンデマンド版でのみ出版社より購入可能）、二〇一五年に戦後七〇周年を当てこんで出版された戦記物ブックガイドの多くにも取り上げられていない。

戦後の渡辺は、戦没学徒兵の追悼団体として著名な「わだつみ会」運営に深く関与していくが、なぜそのかたわらで戦争や武蔵についての物語を繰り返し書いたのだろうか。一つは、次の一九六三年八月一五日の日記にある通り、本来自らの命や生と地続きであるはずの戦争

や死んだ兵士たちを冷酷にも忘れ去った戦後社会への異議を唱えるためである。

おおかたの国民も、敗戦後は戦没者に対しては非情ともいっていいくらい冷淡だった。／これはぼくの村の例だが、それまでの「名誉の戦死」にたいするあたりは、敗戦を境にがらりとかわった。〔中略〕戦没者が自分の身代りだったということに、おおかたの人は気がつかなかったのではないか。生き残ったというのは、死者を仲立ちにしてはじめていえることなのに……。（渡辺『私の天皇観』）

その「戦没者」を大量に生んだ責任者は追及されねばならない。渡辺からすれば、その最大の責任者は昭和天皇である。彼は敗戦・復員後、予想を裏切って自決も退位もしなかった天皇に怒り、海軍入隊以来支給された給与、衣服費や食費に相当する金を皇居へ送り、これで貸し借りなしと宣言したと『砕かれた神』にはある。ただし、この話はのちに本人が一部は創作と公言している。たとえば小説中では返した金は「四千円」となっているが、実際には「衣服とか食費なんかは創作ですけれども、恩賜のたばこは、これは天皇じきじきの品物だということで、それは三百円くらい」だったという（渡辺「『砕かれた神』をめぐって」〈青木安弘による七七年五月のインタビュー〉）。その意味で、彼の武蔵物語もまた、戦前生まれな

らではの作為の入った物語なのである。

では、渡辺はなぜ、八一年に亡くなる直前まで天皇を執拗に批判したのだろうか。いうまでもなく、仲間たちの死に対する責任を取らない天皇への怒りに基づく。彼は、「天皇裕仁氏への公開状」（一九六一年）において、沈没間際の武蔵艦上で「おれ……名誉の戦死だよなぁ……これ天皇陛下のためだよなぁ……本当に、そうだよなぁ、辺〔あだ名〕、そうだよなぁ……」と「その身ぎわまでその死の意味を自分に納得させていた」戦友「M」の名を挙げ、「私はその後Mたちのあとを追いそびれて、こうして生きて帰ってはきましたが、同じ戦場で斃れた仲間たちの最期のあれこれを思うにつけ、無責任なあなたへの無念の怒りをおさえることができません」（渡辺「天皇裕仁氏への公開状」）という。

戦友「M」、そして渡辺本人にとって先の戦争とは「天皇陛下のため」のものに他ならなかった。たとえば、前出の人間魚雷・回天で亡くなった黒木博司大尉も、「陛下ノ艇ヲ沈メ奉リ、就中㈥〔回天の秘匿名称〕ニ対シテハ、畏クモ陛下ノ御期待大ナリト拝聞致シ奉リ居リ候際、〔中略〕充分ニ後継者ニ伝フルコトヲ得ズシテ殉職スルハ洵ニ不忠申訳ナク慚愧ニ耐ヘザル次第ニ候」（回天顕彰会編『回天』）と、天皇への献身意識に基づく謝罪を述べている。彼の死は戦争に勝つためであるとともに、昭和天皇その人のためであった。それにもかかわらず、敗戦後、生還者や死者たちに何の謝罪もしようとしない天皇への舌鋒は鋭い。渡辺の

作品は、戦後にあまた書かれた天皇の戦争責任追及論の中でもきわめて痛烈、ラジカルにみえる。

武蔵の主砲が撃つべきは

一見ラジカルにみえる渡辺の主張は他にもある。たとえば、戦艦武蔵の四六センチ主砲は、無謀な対米戦争を始め、戦友たちを無残に殺した天皇をこそ撃つべきだった、というものである。渡辺は武蔵で死んだ戦友の「鈴木」に向かって「俺はな、鈴木、できることなら、もう一度戦艦武蔵に乗り組んで、こんどこそ、あの四十六サンチの主砲をさかさに向けてやりたいと思っている。むろんいまとなってはそれも夢のまた夢だが、ポチョムキン号の水兵のように、武蔵の大砲をさかさに向けることさえ知らなかったという痛恨の思いに、俺はいまもうつうつとこだわりつづけている」（渡辺「北緯一二度五〇分　東経一二二度三五分　水深一三〇〇米の海底に眠る友へ」）と激白する。

第一次ロシア革命（一九〇五年）の発端となったロシア海軍の戦艦ポチョムキン号はその砲を皇帝に向けたのだから、武蔵の主砲が向けられるべきは天皇ということになる。セルゲイ・エイゼンシュテイン監督のロシア映画『戦艦ポチョムキン』（一九二五年）は、日本では戦後の一九五九年に初上映、六七年劇場公開された。戦前は輸入禁止処分とされ、「天皇制

権力とたたかう日本のすべての人々にその名を刻みこ」んだ幻の名作（山田和夫『戦艦ポチョムキン』）という同時代の評価は、当然渡辺も知っていたはずだ。

では、渡辺は実際に何か天皇を撃つような行動をおこしたのだろうか。ここで思い出されるのは、一九六九年正月、皇居の一般参賀で元陸軍下士官の奥崎謙三が昭和天皇に向けてパチンコ玉を打った事件である。その詳細は奥崎『ヤマザキ、天皇を撃て！』（一九七二年）に詳しい。

「ヤマザキ」とは、ニューギニアで行方不明となった奥崎の戦友の名である。同地へ派遣された彼らの所属部隊は補給を断たれて飢餓が蔓延、人肉食まで発生した。犯行はそのことを恨んでのことである（懲役刑）。当時、他にも類似の事件があり、以後皇居のバルコニーにガラス板が導入されたが、戦後の日本で帰還兵士として本当に「天皇を撃」ったのはおそらく奥崎のみである。

一方の渡辺はといえば、事件直後の一月三日、日記において「とにかく、たとえゴムのパチンコ玉にせよ、直接天皇にたいしてその怨念をぶつけたその行動力には脱帽する。／いずれにしろ天皇のことで心が揺れるのは、天皇のために心底からもだえ、苦しみ、悩んだものだけだと思う。無関心派は別として、ひとまえで天皇をことさら敬愛し、あがめてみせるものは、実は天皇の権威をかりて己れの権威を主張しているわけだ」（渡辺『私の天皇観』）と

論評したのみである。

渡辺は奥崎に「脱帽」はしても、自分も続こうなどとはおよそ考えていないことがわかる。武蔵の主砲云々は、しょせん口だけといえる。これは、彼の一見ラジカルな反天皇論における、ある種の曖昧さ、不徹底さを示すとはいえないか。

自らの戦争責任を認める

渡辺の作品が今日ごく一部ではあれ高く評価されている（たとえば斎藤貴男・森達也『日本人と戦争責任　元戦艦武蔵乗組員の「遺書」を読んで考える』）のは、彼が一九六〇年代のいわゆる農民兵士論争、すなわち岩手県農村文化懇談会編『戦没農民兵士の手紙』（岩波新書、一九六一年）刊行をきっかけに起こった、指導者層のみならず下級農民兵士にも戦争協力の責任があるか否かを問う論争の中で、昭和天皇の責任だけをあげつらうのではなく、その天皇を支え戦争に協力したかつての下級兵士たる自分への批判も、次のような形で行ったからである。

> 僕が〔中国民衆への〕非行をまぬかれたのは、たんに直接「敵」とぶつからない海上戦闘にたずさわっていたという「偶然」の救いだけである。たまたま、その場に居合せなかったというだけの……。しかしそういう僕の手も決してキレイではない。告白すれば、そこには上から〔の〕強制というそれなりの理由があったにせよ、僕も下の兵隊を殴ったことがある。それも一度や二度ではない。そのような僕がどうしてすべての犯罪から自由であり得たろう。条件いかんでは、その非行は現に行なわれたものよりも、さらに凶悪なものになっていたのではないか。いまさらめくが、僕はそれを想像して己れにぞっとしないではいられない。本書〔『戦没農民兵士の手紙』〕の兵士たちは、そっくりそのままかつての僕自身であった。（渡辺「帰還農民兵士の立場から」）

しかし、渡辺の自己批判についても、私はある種の不徹底さを感じざるを得ない。それは海軍の兵隊が中国人に暴行を働く可能性がどれだけあったのか、といった些末な話ではなく、『戦艦武蔵の最期』における、死んだ戦友たちの描写を読んだ上でのことである。彼らはみな、兵に暴力を振るう下士官たちも含め、不自然なほど全員が「貧しさ」ゆえ軍隊に入ったことにされている。次に掲げるのは、堀川という名の武蔵の戦友が渡辺に語った身の上話の一節。

> 堀川は福島の阿武隈川沿いの農家の四男だが、彼の話によると、まとめて七反ほどの

田圃（たんぼ）や畠も全部が小作で、うちの暮しむきはひどかったようだ。「〔中略〕いつも腹をすかしていました。こんなことをいうと笑われるかもしれませんが、わたしはね、軍隊へ来てはじめて毛のズボンや皮靴をはいたり、メンチカツとかライスカレーを食べましたよ。はじめてライスカレーを食べたときなんかびっくりしました。世の中にもこんな美味しいもんがあったのかと思って。……ほんとに親方日の丸ですね。」

渡辺たち下級兵士に辛く当たった下士官もまた、ささやかな立身出世を目指して海軍に入り、もうすぐ腰に短剣を吊（つ）れる、そうなれば村長も俺には頭が上がらない、学歴は小学校だけだけど、と言って喜んでいたにもかかわらず、武蔵とともに無残な最期を遂げてしまう。このように、渡辺の作品中の戦友たちはみな貧しさゆえに海軍に入っている。渡辺が、彼らにも戦争に協力した応分の責任があると明言することは決してないのである。

この一連の叙述は、戦前の日本は貧しかったから侵略行為は仕方なかったという、戦後の日本社会ではなじみ深い日本免罪論とどこかで相通じているように思えてならない。

吉田裕によると、一九八二年一〇月にNHK放送世論調査所が行った「日本人の平和観」に関する世論調査中、「資源の少ない貧しい日本が、他国に軍事進出して行ったのは、生きるためのやむを得ない行為だった」という問いに「そう思う」と答えた人は四四・八％にも達した。吉田はこの結果に対し、「「やむを得ない」「しかたのない」戦争であるのなら、そこには「責任」という観念が生じるはずもない」と指摘している（吉田『日本人の戦争観』）。渡辺が死んだ戦友たちにも戦争に協力した責任はあるのだ、と断言しない限り、彼の戦争責任論は根底のところで不徹底となってしまうだろう。死者たちに責任があるなら、同じく生家の貧しさゆえに海軍へ入隊した渡辺にもあるだろうが、彼らにないのなら、渡辺にもないのである。

戦友たちへの「恥」

なぜ渡辺は死んだ戦友や上官たちの、したがって自分の責任を強く問わ（問え）ないのだろうか。児童文学者の山中恒（やまなかひさし）によると、渡辺は戦後、大学を出て一時期教師をしていたという。それは「かつて海兵団から海軍砲術学校普通科終了（ママ）ということで、戦後「陸海軍諸学校出身者及在学者等措置要項（ママ）」（昭和二〇年八月二八日閣議決定）該当者として、学科試験免除で専門学校へ入学し、それが新制大学へ移行し」たからであり、渡辺は「そのことについて言及するのを好まなかった」という。山中は「海軍における経歴によって学校を出たことが、渡辺さんにとっては、手ひどい「恥」だった」と書いているが、問題は渡辺がいったい誰に対して「恥」の意識を感じていたかであろう。

それは、小学校以外の「学校」を出ることもなく、「軍隊生活で、学校出がどれほど優遇されたかをいやというほど見せつけられ」ただけで空しく死んでいった上官や戦友たちに対してではなかったか。渡辺には、そのような彼らの「責任」を追及して鞭打つような真似などとうていできなかったのである（山中「渡辺清にとっての戦後」「渡辺清さんの魂と共生すること」）。

このように、渡辺の議論が実際のところラジカルではないのは、彼が「ひとに対しては、じつにやさしく、つつましかった」からであり、誰かの「責任」を冷徹に追及できる人ではなかったからだと思う。ではそんな彼がなぜ、天皇を糾弾する「気迫のこもった激しい文章」を終生書き続けたのだろうか。ここで参考になるのが、渡辺が精力的に言論活動を行っていたのと同じころに書かれた児玉隆也の天皇論『君は天皇を見たか　「テンノウヘイカバンザイ」の現場検証』（一九七五年）――様々な立場の人にインタビューして編まれた天皇体験集とでも呼ぶべき書物――の文庫版に、作家・詩人の三木卓が加えた解説である。

> 『君は天皇を見たか』を読んでいて思ったことは、天皇は、天皇への信仰や尊崇の念を抱くものによってのみ必要とされていたわけではなく、反感や怒りを抱いているものにとっても必要とされてきたのだ、ということであった。〔中略〕政治のもとで現実を生きている人間たちのさまざまな種類、さまざまな質の心のほころびに対して、天皇は、それを救済するためのなんらかの対応をする装置として機能するように設定されてきた。不平不満を、それがどのような質のものであれ、究極的に一手にひきうけてくれる対象がもしなかったとしたら、ますます救われない、と感じる人間は多いし、もし、そういう人間がそのために別の行動をとりはじめたらどうなるか。（児玉『君は天皇を見たか』）

三木は、戦後の日本では、諸々のどうにもならぬものに対する人々の「反感や怒り」の受け止め先の一つが天皇であったと言うのである。天皇の存在が、三木の示唆する社会体制の安定にどれほど貢献したかはともかく、心身の傷を抱えた人々が戦後日本を生きていくためには、感情の矛先としての天皇が必要だったというのはうなずける。そう考えると、渡辺が自ら「天皇を撃て」なかった理由もはっきりする。渡辺がほんとうに武蔵の主砲で天皇を撃って万が一その命を奪ったりなどすれば、彼自身もまた生きていけなくなるのである。この点は、渡辺が武蔵物語を書くことは生きることだったと強く示唆する。

渡辺清は一九八一年、病を得て亡くなる三か月前の日記に「ここまできて、八十歳の天皇より先に死ぬわけにはいかぬ」と記している（渡辺「私の天皇観」）。彼にとって天皇とは生きる動機そのものとなっていた。

渡辺清と吉田満の生き方

渡辺にとって、太平洋戦争とはいったい何だったのだろうか。

彼は『戦艦武蔵の最期』にある兵長を登場させて、この戦争とは「金持ちと軍部が天皇とグルになってはじめたもの」と語らせている。軍紀厳正な四四年の武蔵艦上でそのような左翼的発言が本当にあり得たかは、どうでもよいことである。大切なのは、戦後の渡辺自身が、あの戦争はなぜ起こったのか、いったい何であったのかについて、納得のいく〝説明〟を必要とし、それを死者の口を借りて語らせたことだ。戦艦武蔵とその乗組員は不義の戦争の犠牲者であり、天皇はその実行者として責任を負うべきだ、という主張が彼の武蔵物語を貫く軸となっている。

一方、彼と同時代における大和物語の担い手・吉田満は、そのような天皇への強いこだわりを持たなかった。一九六二年に二人はその名も「戦艦大和の士官と武蔵の兵」と題する座談会（司会・安田武（やすだたけし））を行い、それぞれの戦争観を語っている。渡辺が戦いで生き残った罪悪感を天皇にぶつけたのに対し、吉田は次のように語る。

吉田　私は天皇自体への関心は、稀薄です。国家という集団と、その構成員である個々

の人間の生活との対決。その間にあるべき原理をつきとめなければ、戦争に抵抗するといっても、二十年前も現在も、まったく同じになってしまうという感じです。

〔中略〕

吉田　いま「自分が生きているのが罪である」ということをいわれたが、私は駆逐艦にひろいあげられ、佐世保に帰ってき、病院に入り、白衣姿で桜の花が散っているのを見て生きている罪悪感をよく感じた記憶があります。しかし、同時に、生きていることの意味が始めて鮮明につかめたということもあってやはり私の場合は、罪悪感に裏打ちされながらも、逆に積極的に生きていることの意味をつかまえなくてはいけないと思うのです。（吉田・渡辺〈座談会〉「戦艦大和の士官と武蔵の兵　戦争体験と戦後倫理をめぐって」）

渡辺はこの発言に、自分は「罪の意識とむなしさが雑居しているわけなんで」と応じているが、二人の議論はなんとなくかみ合わない、というより二人とも司会者の安田武とばかり話していて、互いの意見をぶつけることが少ないのである。それは、彼らが戦後を生きるうえで向いている方向が完全に反対だからではないだろうか。この生の方向について評論家の勢古浩爾（せこうじ）は「吉田満は過去にこだわりながら前を向いた。渡辺清は後ろを向いたまま、前に進んだ」（勢古『大和よ武蔵よ　吉田満と渡辺清』）ときわめてポジティブに評価しているが、

果たしてそうだろうか。

ここで思い起こされるのが、かつて久野収（くのおさむ）と鶴見俊輔（つるみしゅんすけ）の提起した、有名な「顕教」「密教」論である。すなわち、戦前の日本では、一般国民には小・中学および軍隊で天皇を「顕教」――「無限の権威と権力を持つ絶対君主」として徹底的に教え、「密教」――「憲法その他によって限界づけられた制限君主」としての天皇は大学および高等文官試験ではじめて明らかにし、「この二様の解釈の微妙な運営的調和」の上に日本という国家が成り立っていた、というのである（久野・鶴見『現代日本の思想』）。

少なくとも戦前においては、高等小学校卒の渡辺が「顕教」側の、「学校」それも東大法学部卒の吉田が「密教」側の人間であったことは言うまでもない。このことが戦後における両者の天皇への思い入れ、重さの違いに大きく影響している。

吉田は天皇、ある意味では過去の日本そのものをあっさりと捨てた。一方の渡辺は天皇を恨むばかりで「前に進ん」だように私には見えないし、奥崎のように自らの手で「天皇を撃」ったわけでもない。確かに吉田も創作活動で「過去にこだわ」ってはいたが、そこでの「過去」とは臼淵大尉や同じ学徒出陣の士官たちであり、渡辺たち下士官兵に焦点が当てられることはなかった。吉田の書いた大和や海軍の物語はいずれも士官のそれであり、晩年になって下士官兵の物語を書こうとしていたとはされるものの、結局果たされないまま死去し

たのである。

断っておくが、私は彼らを非難しているわけではない。彼らは戦後を生きていくために、自分のためにそれぞれの物語を書いたのであり、それでよいと思う。よくないのは、それをことさらに美化、教訓化しようとする「過剰な「政治主義」」（安田武『戦争体験』）である。

こうした「未来志向」と「過去志向」という両者の方向性の違いが、大和と武蔵の物語的性格の差となり、渡辺―武蔵の影が薄い原因となったのではないだろうか。多くの人は自らの暗い過去をえぐる物語よりも、明るい未来を指し示すそれに心を惹かれる。

同時代の評価

とはいえ、渡辺清の武蔵物語に対する同時代の評価には、肯定的なものも存在した。作家の野呂邦暢（のろくにのぶ）は一九七七年刊の戦争文学評論集『失われた兵士たち　戦争文学試論』で渡辺の『海の城』を取りあげ、「小説のような体裁をとっているが、これはあくまでドキュメントであり、武蔵の機銃員として戦った少年兵の貴重な証言である」、「とかく海戦記となれば大砲の射ち合いだけを連想しがちで、砲を射つ水兵たちの生活まで考えはまわらない。その意味で渡辺氏の記録は値打ちがある。対象を立体的に描くということは、明るい面ばかりを肯定的に描くことではなく、人間性の暗い面にもたじろがぬ視線をそそぐことである」と高く評

価している（野呂『失われた兵士たち』）。

　一九三七年に生まれ、敗戦とともに世の価値観が一変したことに父親がうちひしがれるのを間近で見て育った野呂は、吉村昭の『戦艦武蔵』については「文学的ルポルタージュで当事者の手記ではない」（同前）と評したのみであった。彼は戦時下の日本人が発揮した「エネルギー」よりも、戦争の「当事者」すなわち元兵士、戦場体験者として「人間性の暗い面」の描写に注力した渡辺の武蔵物語にこそ、戦争の事実性（リアリティ）を感じとったのである。

　野呂は、『海の城』で下士官兵が乱痴気騒ぎを繰り広げ、惨めな境遇を自嘲する戯（ざ）れ歌を吐く描写について、「これがすべてだと私はいうつもりはないが、一面の真実はついているだろう」と述べている。当事者の記した「文学の域にまで高められていないという理由で軽んじられ話題にもならず忘れ去られた書物」や体験を己の想像力というフィルターにかけ、残ったものを〝真実〟とみなす彼の姿勢は、吉村昭と同じ作家同士で共通している。渡辺の武蔵物語に対し、あれは小説だから――たとえば『海の城』では、戦艦武蔵の名が「播磨（はりま）」と架空のそれに改められている――などと無下に退けるのではなく、事実性を認めて評価する読者も確かにいたのである。

　そもそも、野呂が『海の城』をとくに賞讃したのは、一九七一年に刊行された井門寛（いもんひろし）編『太平洋戦史文献解題』に同書が収録されていない（吉村昭『戦艦武蔵』はある）ことに「わ

けがわからない」と違和感を覚えたからでもあった。当時からすでに、渡辺の武蔵物語は正当な戦争の記録として評価されていなかった節があり、野呂はこれに義憤を感じたのである。

　野呂自身は自ら戦記評論を書くにあたって「一つの時代を後世の価値観で裁くことは、私たちがおちいり易い錯誤である。〔中略〕反戦を叫ぶ現代の日本人が一時代前に戦って死んだ人々よりもすぐれていることにはならない」（『失われた兵士たち』）と語ったし、渡辺『海の城』についても「戦争体験の継承ということは何も戦争の経過だけを忠実に追うことだけではあるまい。あるときには賢明であり、あるときは愚かであったわれわれの先人の行為を明暗両面からとらえ直すことでもあるだろう」（同前）と評していた。

　つまり野呂の意図は、少なくとも主観的には戦争という過去の継承にあり、一方的な断罪ではなかったのだが、必ずしも読者の理解、共感は得られなかった。『失われた兵士たち』のあとがきには、元となった雑誌の連載について「旧軍人と思われる人々から多くの批判を受けた。事情を知らないのに何をいうかという趣旨」とある。渡辺の作品を取りあげたことも、その一因となっているかもしれない。

　繰り返しになるが、人は己の暗い面よりは明るい面、断罪よりは許し、肯定の物語をみたいものである。ここに渡辺の武蔵物語が今ひとつ一般受けしなかった理由があろう。

吉村昭と天皇

なお、吉村昭は渡辺清と同じ武蔵物語の紡ぎ手でありながら、昭和天皇の戦争責任問題についてはほぼ逆の立場に立つ。吉村は、昭和天皇死去後に再燃した戦争責任論争に触発されて書いたとみられる一九九一年のエッセイで「昭和天皇が、開戦前に主戦論を押えれば国内に必ずクーデターが起きたであろうと述べておられるのは、当時の国内輿論を直視したものと言える」（吉村「歴史は押しとどめられない」）と述べ、たとえ昭和天皇であっても、戦争突入は「押しとどめられな」かったとの見解を示している。

かつて渡辺が木戸幸一や近衛文麿の日記といった歴史資料まで用いて天皇の戦争責任の立証を試みた（渡辺「天皇裕仁氏への公開状」）のに対し、吉村はその存在自体を認めていない。そのことは「歴史の流れは、必然的に日本を開戦へ導き、何物もそれを押しとどめる力はなく、そして、その流れは、必然的に敗戦へとつながっていったのである」という結びの一文からもわかる。

ただし、吉村にとっての日本と日本人は「歴史の流れ」の一方的な被害者だったのかというと、そうでもない。彼は同じエッセイで「当時、少年であった私は、周囲の大人たちが、このままではアメリカの圧力で日本はジリ貧におちいり、それならば戦争もやむを得ない、と興奮した声で言うのを何度も耳にした」とも書いており、対米戦争は当時の日本の「興奮

した」「国内輿論」が自ら選び取ったものとも解釈できるからだ。

そもそもかつての著作『戦艦武蔵』における歴史認識も、同作における武蔵が平和の具などではなく人殺し用の兵器と明言されていたことを思えば、九一年のそれと同様だったと言える。吉村自身、いったいなぜ日本が無謀な戦争に突入したのか、その理由についての思考は晩年まで揺れていた。

第四章　語り出す武蔵乗組員たち

1　なぜ戦友を慰霊するのか——武蔵の映画と戦友会

映画化できない武蔵

戦艦大和と異なり、武蔵を主人公（?）とした映画は管見の限り作られていない。一九六〇年代、武蔵にも映画化の企画があったが、立ち消えとなった。理由は暗いからである。一九六八年、日活『戦艦武蔵』のシナリオが脚本家・国弘威雄（くにひろたけお）により執筆されたが、お蔵入りとなった。のちに市販されたシナリオ冒頭の「制作意図」で吉村昭『戦艦武蔵』は次のように、「陰惨」だから娯楽作品の原作にはできないと名指しで批判されている。

この映画は、吉村昭原作の戦艦武蔵に依るものではない。吉村武蔵の建艦秘話は、陰惨

> で今の日本映画人口を吸収できぬ素材ではない。／ここに提案する武蔵は、防衛庁戦史資料室の奥深く眠る、不沈艦武蔵の建艦より激戦の末、遂に南海の底に沈むまでの真実の歴史を調査した結果、武蔵を宿敵とねらう米潜水艦隊旗艦、ダータの艦長を始めとする乗組員たちのヤンキー魂と、これを向え撃つ武蔵の乗組員たちの大和魂の、雄々しい戦斗の実戦記録をドラマチックに追求したものである。

こうした米潜水艦との「雄々しい戦斗」という史実を逸脱した半ば虚構の内容ですら、日本映画の衰退もあってか企画立ち消えとなった。考えてみれば、一方的に撃沈された武蔵の戦闘を「雄々しい」というのはなんとも嘘くさいし、「大和魂」もいかにも時代錯誤的である。そこへ折からの映画不況が合わさってお蔵入りになったのだろう。

同じく実現しなかった武蔵映画の構想として、雑誌『シナリオ』一九七〇年三月号に掲載された、石原プロモーション制作の『戦艦武蔵』の脚本（井手雅人執筆）がある。内容は長崎での建造過程にほぼ特化しており、その意味では吉村昭の原作に忠実である。しかし穿った見方をすれば、同じ石原プロのヒット作『黒部の太陽』（日活、一九六八年。脚本は井手と熊井啓）でダムという巨大なモノを男たちが苦心のすえ見事完成させる映画が高度成長期の時代にマッチしてウケたから、今度は戦艦という二匹目のドジョウを狙ったともとれる。

井手の脚本は吉村の原作に独自の考察を加えてよく練られた力作と言えるが、それにもかかわらず結局公開に至らなかった直接的な理由は、当時の石原プロが『黒部の太陽』などの制作費がかさんだ結果、経営難に陥っていたことだろう。だが、武蔵という悲惨な戦争にまつわる物語が「陰惨」で客にウケそうにもないと判断された可能性も大いにありうる。

このように戦後の大衆文化の中で、武蔵物語は要するに「陰惨」で救いがなく、ゆえに客にウケないとされて、映像化されること自体まれであった。一方の大和は一九八一年の『連合艦隊』（東宝）などでたびたびスクリーンに登場することになった。そこで強調されるのは、特攻する大和の大爆発シーンに代表される軍艦の造形美、悲壮美であり、あるいは『男たちの大和』（東映、二〇〇五年）における臼淵大尉の「敗レテ目覚メル」の感動場面であった。大和物語には客を泣かせてすっきりさせる要素を組み込めるが、武蔵にはそれができないのである。

一九七四年、テレビアニメ『宇宙戦艦ヤマト』が放映され、のちに映画化されて大ヒット、今日まで高い人気を保っている。一方、戦艦武蔵は一九八〇年、その名も『宇宙戦艦ムサシ』と題する文庫版の小説が文化出版局より刊行された。作者はヤマトのノベライズを担当した作家・若桜木虔である。私も一読したが、宇宙戦艦に改造された武蔵が宇宙へ旅立つところで話が終わってしまい、物語としての完成度は本家のヤマトに遠く及ばなかった。続編

は管見の限りない。以上のように、武蔵とその戦死者たちは大和と異なり、フィクション化、通俗化された大衆文化の中ですらも、人々に想起されることがなかった。

戦友会の活動

武蔵の生存者たちは、敗戦から数年を経て戦友会「軍艦武蔵会」を結成した。一九五一年ごろ以来、細谷四郎、吉田利雄、霜崎源次郎、大塚健次、佐藤太郎、遠藤義正らが会合して五一年一〇月に靖国神社を昇殿参拝、武蔵会結成の呼びかけをはじめた。一九六三年一〇月の決議に基づき、武蔵戦没二〇周年の行事として靖国神社にて「大慰霊祭」と「軍艦武蔵を偲ぶ会」の実施計画を立案、加藤憲吉・元副長を会長に、古村啓蔵二代目艦長と朝倉豊次三代目艦長を顧問に推戴して正式に「軍艦武蔵会」が発足した（軍艦武蔵会『武蔵会の歩み』）。

武蔵会は、一九六四年一一月二四日に初の慰霊祭を靖国神社で行った。生還者たちは、上官・部下・戦友たちの死の意味をどう考え、公的な場で説明していたのだろうか。第一回慰霊祭で加藤会長が朗読した祭文の一節から、それがうかがえる。

> 今や祖国日本は焦土から立上り、その経済的成長度は世界驚異の的であると聞いております。これは武蔵の建造でも明らかなように技術面と之を用いる国民性の優秀さを益々

> 発揚するよう、一死もって天上から守り続けて頂きましたあなた方の御蔭でなくて何でありましょう。／生き残った私達は我海軍精神の伝統長所を昂揚し我日本をますます健全に発展させることを念願し必死に努力することを心から誓うものであります。／在天の英霊よ　願わくは安らかに眠って下さい。（軍艦武蔵戦没者慰霊祭執行会『軍艦武蔵戦没者慰霊祭記念写真アルバム』）

〝武蔵は経済大国の起源〟という本書でもおなじみの考え方による死の意味づけだが、ここで問題となるのは、なぜ生存者たちがこうした論を使って慰霊活動を繰り広げたか、その動機である。

彼らの原動力となったのは、戦争を生き残ったことへの後ろめたさであった。副会長細谷四郎（信号員、上等兵曹）は会誌『嗚呼　戦艦武蔵』で会設立の理由を次のように語る。

> その後もさまざまな異様な夢が私の夢枕に立って何かを求めるようであった。靖国神社参道の木枯の銀杏の木々に無数の戦没者の頭、手、足、アバラ等の骨がバラバラに吊り下り誠に恐しい程の形態となって現れ始めたのです。私は愈々気味悪くなり英霊は一体何を私に求め、何を指示し、何を願っているのか、これは何かある、只事ではない、戦

友の霊は成仏出来ずいまだ迷っている姿だと直感した。そうだ私は武蔵の信号員で副長附であったのだ。武蔵の目、耳、口の任務にいた関係であるから、武蔵の最高責任者である加藤副長に伝達して早く成仏出来るようにしてくれ、と願い出て来たのだ、お前は信号だ、お前が副長に伝えなければ誰もしてくれる者はない。と武蔵の英霊は私に最後の信号員としての残務整理を求めて来たものと思いました。（細谷四郎「武蔵会発足の所以」）

この鬼気迫る文章から、戦争慰霊という行為は死者の魂のみならず、死者に対する生者自身の生き残ってしまったという負い目を解消し、良心を慰めるためになされる（新田光子「慰霊と戦友会」）ことがよくわかる。むしろ後者が主眼かもしれない。文中の「残務整理」なる言葉は、後述するように武蔵の慰霊活動におけるキーワードとなる。

その後も、『武蔵会の歩み』によると軍艦武蔵会は次のような慰霊活動を行った。毎年の慰霊祭のほか、一九六九年一一月二四日、靖国神社で戦没二五周年慰霊祭・武蔵艦型（縮尺七五分の一、ブロンズ製、重量三トン）奉納除幕式挙行、七一年四月、三井商船の観光船さくら丸によるシブヤン海での海上慰霊祭（会長ほか少数会員と栗田健男・元第二艦隊長官参列）とコレヒドール島への「武蔵乗員集結の地」と銘記した石碑仮設・慰霊巡拝、七三年一一月

の比島戦跡巡拝団の慰霊行事、七四年一〇月の戦没三〇周年慰霊記念事業、七九年一〇月の戦没三五周年の現地大慰霊祭（生存者・遺族二三九名が参加し、現地に「戦艦武蔵比島方面戦没者慰霊の碑」を設置）などである。

「私には親友と呼べる者がおりません」

軍艦武蔵会の顕著な活動の一つが、沈没三〇周年記念事業として元乗組員と遺族の体験記を多数収録した会誌『嗚呼　戦艦武蔵』（一九七五年）とその続編『続!!　嗚呼　戦艦武蔵』（八二年）の刊行である。それぞれ全三二六、四九二頁にもわたる同書を読むと、細谷の他にも、生き残ったことへの後ろめたさを語る元乗組員がいる。小川平吉（注排水指揮所注排水員）は武蔵沈没の直前、海へ飛び込んだ時のことを次のように回想する。

突然抱きついて来る者がありました、水泳ぎに自信があっただけに、泳げない者に抱きつかれる恐しさは良く知っています。夢中で突き放し脚でけとばしました。それがあとあと同年兵の〇〇に思われて仕方なく、何時までも自責の念に苦しんだものでした。然しその事は誰にも話さず復員するまで自分自身で責めていました。〔中略〕今、顧りみて約五年間の海軍生活で、只一つ心残りは武蔵沈没の時、重油の海で縋り着いて来た者

を無情にも突き放してしまった事であります。今では夢を見る事はありませんが何んとも残念でなりません。生死の境にいる友を助ける事が出来なかった。／私にはその後親友と呼べる者がおりません。「イザ」となった時「トコトン」まで助けてやれる自信が無くて怖いのです。（小川平吉「横徴機三二五二八」）

戦友会といえば、皆で温泉などに集まって酒を飲み、往事を回顧する親睦会的なイメージがあった。武蔵会についても当時、そのような観察がなされていた。一九七〇年一〇月二五日『朝日新聞』朝刊の「軍艦旗」と題するコラムは、武蔵会の総会風景を「会計報告、軍歌祭出場の件。議事そっちのけで、出席者は周囲の人と懐旧談にふける。「おい、タカハシ入院したっていうじゃないか」「オレは、死ぬまで十月二十四日は公休だ、と会社に届けてあるんだ」」といささか皮肉っぽく描いている。そこで「黒い和服の〔猪口〕艦長未亡人は、そんな中でぽつねんとしていた。人目につくまい、と気をつかっているふうだった。「英霊のごめい福を祈るばかりでございます」とだけ語った」と記され、筆者はこの会合に戦死者やその遺族への敬意は薄い、と言いたげである。

しかし、この一見楽しそうな会の活動には、細谷や小川のように、恨みや悔悟といった生還者のやりきれない感情を記し、はけ口にするという裏の意味合いもあった。

後を引く恨みつらみ

軍艦武蔵会に集まった元乗組員たちは、一見協力して慰霊に努めているようで、実は加藤副長は無責任だという批判を底流に抱え込んでいた。

斉藤静八郎（武蔵分隊士）は武蔵沈没後、コレヒドール島から南西艦隊司令部幕僚付としてルソン島に残留、敗戦後の四六年一月二日マニラより浦賀へ帰還した。そこで、比島に残された元乗組員の行方が遺家族に伝わっていないことを知って驚いたといい、次のような批判的意見を会誌『嗚呼　軍艦武蔵』に載せている。

武蔵の沈没は昭和十九年十月二十四日、帝国海軍の健全な時であり、また当時は機密保持の関係から家族等に通知は出来なかったにしても、終戦後半年も過ぎたその当時、比島残留遺家族に当然連絡すべきであったと思ったからである。他の部隊は皆残務整理をして、遺家族に当然の義務を果たしていた。海戦での生存者、コレヒドール集結者の約半数七百名近い加藤部隊の残留者に対する処置がなされていないとは、予想もつかないことであった。また、家族が武蔵乗組とばかり信じていたのは当然のことで、加藤部隊長はじめ大勢の内地帰還者があるのに、終戦後比島残留者に対しては、忘れられたかの

ように思われていたのである。〔中略〕コレヒドール島においての残留者と帰還者の指名は、生と死を決めるに等しいものであった。〔中略〕そのためか、比島残留者約七百名中、五、六十名の生還者がいる現在、武蔵会に出席する者は僅か四、五名と、極めて少ない。〔中略〕加藤部隊長より司令部に提出された残留指名者名簿は、今も私の手許(てもと)に残っている。今一度心静かに当時を想い起こし、双方の心境を考えてもらいたい。
（斉藤静八郎「武蔵並に比島残留者と残務整理に就て」）

ここに「残留指名者名簿」とあるのは、フィリピンに残留させられた者は加藤副長が「指名」したのではなかったのか、という遠回しの問いかけである。はっきり言うなら、加藤副長は自らの責任で多数の将兵を残留させて死なせたのに、なぜいつまでたっても「残務整理」すなわち遺族への報告など戦争の後始末をしなかったのか、という批判である。

そしてその批判を行うにあたって、斉藤は故猪口艦長の遺志を持ち出し、「現在でも、比島残留生還者及び遺家族のある者からは、その当時、当然行うべき処理もされずに、今更慰霊をされても、それは自己満足に過ぎない、との酷な声すら聞かれる。／果たして、全責任を負い艦と運命を共にした猪口艦長の遺書にある、「我が兵力を維持したきため、生存者は退艦せしむること、また我が国は必ず永遠に栄え行くべき国なり。」「英霊を慰めてやりた

し。」「乗員の面倒を見るように」などの御意志に副(そ)ったであろうか」などと、厳しい批判の言葉を並べる。

ここで猪口艦長の遺書は、敗戦後の日本にあっては本人の願いであったろう国民の督励ではなく生き残った部下の間での争い——大勢の戦友を無残に死なせた責任追及の材料として使われている。しかもその矛先が命令の大本の有馬参謀長や海軍上層部、さらにはかつての大元帥・昭和天皇ではなく、民間人となった加藤一人に向けられるという、何ともやるせない事態になっている。

士官と下士官兵の対立構造

武蔵会という戦友会活動の底流にあったのは、士官と下士官兵の対立である。会の立ち上げに奔走し、副会長となった前出の細谷四郎は、武蔵沈没後の加藤副長の行動を斉藤と同様、会誌『嗚呼　戦艦武蔵』上で次のように糾弾した。文中の「加藤部隊」とは、フィリピン上陸後、情報秘匿のため武蔵生存者たちに付けられた名前で、言うまでもなく副長の姓にちなんでいる。

マニラに行った加藤副長は、一向に姿を見せない、やがて副長は内地に帰ったと言うう

わさが起った、大騒ぎとなり、軍刀を奮って、いかりをぶちまけている準〔准〕士官が何人も出たのだ。これからの加藤部隊はどうなるんだと、／よく聞いて見て驚いた。副長は、一言もなく引継ぎの責任者も残さず、戦局の要請により内地に転勤したと言うのだ、そして、また驚いた。士官室士官（兵学校出身）も次々と飛行機便を取り、内地に帰っていたのだ。部隊長始め士官連中は我々下士官兵を残して捨子したのだ。残された我々は、喰うに食なく、他の部隊、司令部に交渉するも相手にされず、一時は乞食同然の生活である。残されたのは、加藤部隊と言う名前だけだ。〔中略〕以上は私の体験中の記録の一部でありますが何と言っても忘れ得ぬ事は多種多難の苦痛と戦い最後を遂げた、戦艦武蔵乗組員の悲壮な末路であり、加藤部隊の存在と其の後の在り方に疑問を持つものである。ここに幾多の戦友の霊の冥福をお祈り申し上げます。（細谷「戦艦武蔵乗艦より終戦復員まで」）

細谷と加藤は同じ戦友会で活動しているはずなのだが、このような厳しい批判が行われていた。彼らは同じ武蔵の生き残りでも、一枚岩では決してなかった。かくして、前掲『武蔵会の歩み』（八一年）には次のような士官に対する下士官兵側の意見が堂々と掲載された。

武蔵会結成以来、その中心となって滅私奉仕を続けている一部会員の卒直な声として、武蔵の艤装以来を始め、特に戦闘中、吾々の上官、上司であった乗組士官〔中略〕が慰霊奉仕や会活動にや丶消極的で一部に吾れ関せずの感なしとしない三十余年の実態を知って、海軍の上官と部下の美徳を信じていた伝統にいささか疑念を抱く空気があることは洵に遺憾であり残念なことであるが、戦後の複雑多岐な事情に因るものが多く、決して全部でないことは勿論で、理解されている。（『武蔵会の歩み』）

戦友会とは、少なくとも建前上は生き残りが一致団結して戦死者慰霊に取り組むことを趣旨とする団体であることを思えば、このような批判的記述はいかにも異様である。

戦友会の役割

このように、細谷らは加藤と同じ戦友会の幹部で慰霊活動も一緒にしているのに、かつての上官への恨みつらみを露骨に語っていた。このことは、戦後日本の戦友会活動の意味のひとつに、生き残った者たちのやり場のない感情の吐露があったことを意味している。彼らもまた、死者のみならず自分のために武蔵の記録を作成し、後世に残したのである。

そして、批判を一身に集めた形の加藤元副長は、管見の限りこうした批判にほとんど弁明

をしていない。加藤が一九七〇年、読売新聞の取材に「いろいろな書物の中には、わたし以下、士官の悪口を書いたものもありますが、正直いって、そのときに、わたしたちには、もう、どうするわけにもいかんものね。ケガ人を移すとかなんとかいう時間もないし――」、「〔武蔵会にふれて〕わたしたちは、どんなに大言壮語しても、できないことはやれない。ただ、できる限りの慰霊をつくしていきたいと、いまは、それぱかりを考えています」（読売新聞社編『昭和史の天皇　一二』）と語ったのが、かろうじて弁明に当たるだろうか。

武蔵は大和に比べて生き残った者が多く、その沈没後の運命も様々であった。先述したように、武蔵が米軍機と交戦してから沈没までには相当の時間があったため一〇〇〇人以上が脱出に成功し、内地帰還中の海没死や陸上戦闘での死者が多数出たものの、手塚正己の調査によれば、戦後に約四五〇名が生き残った。

一方、大和は短時間で爆沈した結果、生き残りは少ない。乗員約三〇〇〇名中、生還者は吉田満ら二七六名である。さらに四か月後には終戦となった。武蔵は沈没から敗戦まで一定の時間があったため生還者同士に多くの恨みつらみが発生することになったのに対し、大和にはその余地が相対的に少なかったとみられる。もちろん皆無だったと言うつもりはないが。

その大和関係者たちの団体・戦艦大和会の第一回会合は、一九六八年一二月八日に行われた。これに先立つ五四年四月七日、初の慰霊祭が第二水雷戦隊（大和沈没時、その護衛にあた

った部隊）元司令官・古村啓蔵や第二艦隊参謀長の森下信衛、同副官の石田恒夫たちによって行われ、その後各地に大和会が設立されたというが、全国組織の設立は六八年、初代会長は古村であった（石田恒夫「戦艦大和会初代艦長古村さん」）。

ちなみに古村は一九四三年六月から一二月まで武蔵艦長を務めており、石田は「戦艦武蔵艦長をなさった古村さんが、戦艦大和会の会長をお引き受けいただき十年間もお勤めくださった」と謝意を示している。

戦艦大和会の設立と活動は、六八年の慰霊塔「戦艦大和を旗艦とする特攻戦士慰霊塔」除幕式・第一回合同慰霊祭に海上自衛隊の護衛艦・航空機が参加したり、翌年の第二回合同慰霊祭に高松宮（たかまつのみや）夫妻が参列したことなどが示すように、旧海軍の下士官兵たちが下から積み上げたというよりは、高級士官グループによる、上からのものであったように思う。それゆえ、公刊された会関係の著作物を見る限りでは、武蔵のそれに過去への恨みつらみがにじむのに対し、大和は美化・顕彰的な性格がきわめて強い。

このような表立っての慰霊活動の主体の違いも、武蔵と大和の物語的性格の違いを生み出しているといえよう。武蔵とその物語はやはり暗く救いがないのだ。

渡辺清と武蔵会

元武蔵乗組員たちによる生き残ったことへの後ろめたさや種々の恨みつらみの吐露は、渡辺清の『戦艦武蔵の最期』をはじめとする執筆活動の動機と共通している。ただし渡辺は武蔵会の活動に批判的で、参加することはなく、一九六七年に武蔵会について「まだこの会に一度も顔を出したことがない」と述べるなどして距離を置いていた（『嗚呼　戦艦武蔵』付録の会員名簿には、千葉県市川在住として渡辺の名前がある）。その理由は「僕はこういう会や組織に半ば本能的な嫌忌を感ずる。生き残りの罪深い恥しさが先にきてどうしても出席する気になれない」からであった。

渡辺は、「そういう僕をさして「敗戦痴呆症」といい、戦争の痛みなんか早く忘れろ、と説く人がいるが、なんといわれようと、僕は僕なりの仕方でまだ当分、死者の氷のような沈黙に静かに耳をかたむけていたいと思う」（以上、渡辺「恥多き戦中派」）と語っている。

武蔵会に限らず、戦友会活動一般に対する渡辺の「本能的な嫌忌」は、生き残りが戦死者たちのことをきれいに忘れて「「天下国家」を論」じたり、「「泰平ムード」にひたりこ」んでいることへの「罪」や「恥」意識に基づいていた。だが、渡辺はこの種の会の隠れた目的が「戦後」を生きていくために恨みつらみをはき出し、「戦争の痛みなんか早く忘れ」ることにあると見抜いていたともいえる。

やはり、戦友会は死者のための団体というよりはむしろ生者のための団体であった。そして、武蔵会とはここまで述べてきたように、人々が「戦後」を生きていくために、「戦争の痛み」を繰り返し吐露して昇華させるための場であった。それを誰が批判したり否定できようか。

では、渡辺が終生批判を続けた、昭和天皇と武蔵会関係者たちとの関係はどうだったのか。

手塚正己によると、武蔵会の慰霊団がフィリピン現地慰霊祭に出発した一九七九年一〇月二四日、戦後衆院議員となった重巡摩耶の生還者・永末英一（本書七二頁参照）は靖国神社での慰霊祭を終えて「赤坂離宮で催された天皇陛下の御招宴」に出席、昭和天皇に団が本日出発した旨を報告した（手塚『『軍艦武蔵』取材記』）。近年刊行された宮内庁編『昭和天皇実録　巻五五』によると、同日に赤坂御苑で秋の園遊会が行われ、天皇は国会議員などの招待客に「会釈」しているので、武蔵をめぐる会話はこの時とみられる。

天皇は永末に「ああそう、私も十八年に、武蔵に乗りました……」と「殊のほか感慨深げに話され」たというが、フィリピン現地でこのことを聞かされた団員の多くは「特別の感慨も抱かずに解散した」という。昭和天皇が一九七五年を最後に同神社を参拝していないことも、この無関心の一因となっていたかもしれない。

しかし、団員の一人小澤孝太郎（元武蔵二番主砲中砲一番砲手給弾長）は違っていた。彼は

のちに手塚のインタビューに応えて「もしもご存知ならば、どのように思われたのか、適(かな)わぬことではあったが、心底陛下のお気持ちを知りたかった」と慰霊祭当時の心境を語っている。天皇から無残な最期を遂げた戦友たちに何らかの謝意なり慰撫の言葉があるべきだ、と感じたのであろう。小澤以外の団員は洋上慰霊祭を終えると晴れ晴れとした顔でパーティーに興じていたが、どうしても馴染(なじ)めず中座したという。彼自身、艦の沈没後ルソンに残置されて地上戦に従軍中栄養失調となり、九死に一生を得て生還したものの、病気で右の腎臓と膀胱(ぼうこう)を摘出するという苦難の戦後を歩んでいた。

昭和天皇への怒り

この手塚のインタビューは、昭和天皇が亡くなり「平成の時代になって二年目の、夏が終わろうとする頃」に行われた。手塚はその時の小澤の様子を次のように描写する。

私に向き直った小澤氏が、身を乗り出すようにして言った。／「天皇陛下は、あの戦争で死んで逝(ママ)った数百万の兵隊たちの最後の様子を、ご存知だったんですかね?」／目の前に、頬がこけ黒ずんだ氏の顔があった。／「あの世で、戦没者たちがお伝えしているのではないでしょうか」／氏は私の言葉をまともに受け取ったかのように、「それなら、

いいんですがね……」と呟(つぶや)いた。／相変わらず、部屋の空気は重く沈んでいた。小澤氏は、／「でも、それは……無理なことだろうな……」／と漏らすと、激しく咳(せ)き込んだ。

（手塚『軍艦武蔵』取材記）

忖度(そんたく)するに、小澤は無残な最期を遂げた大勢の武蔵の戦友、そして自分に対して天皇が何らかの謝罪の言葉をかけることのないまま亡くなったことに激しい無念を覚えているのだろう。武蔵会に関与を続けた生き残りのうち多くの人は天皇を忘れ去ったが、中には小澤のように天皇への怒りを密かに燃やし続けた人はいた。そしてその感情、こだわりはおそらく手塚も十二分に理解しているのである。

2　武蔵乗組員たちの言いたかったこと——個人の回想記

「自己鍛錬の場」としての軍隊回想

すべての元武蔵乗組員が、戦後の社会で渡辺清や細谷四郎のように戦争での恨みつらみを吐露し続けたのではない。たとえば元乗組員のある兵長は、戦争や軍隊体験に対する肯定的な感想を『嗚呼　戦艦武蔵』に記している。

私は戦後色々の本や映画等あらゆる物書や左系の政治家が口にする度に、又は表現する度に軍隊という所はまるで昔のタコ部屋かあるいは地獄の鬼の様なのばかりがいる所の様に思わせるものがほとんどの様に思われます。〔中略〕もちろん私も新兵から下士官になる間幾度（いくど）か「こんちく性（ママ）」と思った事があります（士官下士官及び上級者に対して）。しかしこれは現在の社会はもちろん戦前の社会においては日常茶飯時（ママ）にあった事で、小さな会社や工場などでは上の者、古い者からどなられる事はもちろん、時にはなぐられる事もあった時代を育って来た私達にとって、軍隊は青春時代の思い出であり、自己の体力及び能力の鍛錬の場であったと言えます。（小林次郎「武蔵の思い出」）

軍隊経験がかくも肯定的に心に固着されている以上、それが表立って批判されたり、糾弾されることはない。もしある人が老境にたち、自分の人生が無意味であったり、他者から否定されることに耐えられないなら、何とかして〝意味づけ〟の言葉を考えていくしかないだろう。それが戦争という辛いものであればなおさらである。

軍隊を一種の人生道場視する考え方は、戦前戦後、今日の日本社会ですら珍しくないものであるが、それはこのような元兵士たちの事情によって繰り返し語られてきたとも言える。

戦後日本では、渡辺清だけが武蔵物語の語り部だったわけではない。このような肯定的な戦争観に基づく武蔵体験記もまた書かれたのである。このことを踏まえないと、その後作られてゆく武蔵物語とその読者たちにおいて、なぜ戦争が起こって武蔵は沈んだのか、その責任の所在はどこか、などといった歴史的文脈の追及がしだいに欠落し、「脱文脈化」してゆく経緯、理由がわからないのではないだろうか。小林の指弾する「戦後色々の本」「物書」の中には、同じ元武蔵乗組員の渡辺清とその諸作品もあるかもしれない。

個人の武蔵体験記は何のために書かれたか

一九八〇～九〇年代にかけて、敗戦から四〇年前後が経過して老境に入った元武蔵乗組員たちが、同艦での体験を本にまとめていった。それは、自らの人生の回顧と総括という意味合いがあるだろう。

吉野伊三郎（よしのいさぶろう）は一九二一年に生まれ、四二年より海軍の兵士ではなく軍属、理髪手として戦艦武蔵に乗り組んだ。一九八二年に軍隊組織の枠外、底辺から見たその有様を『戦艦武蔵乗組み記』と題して公刊している。彼の目的は、まえがきによると、「激動期の中にあって、兵員達はどの様な形でしごかれ、これに耐え、如何に活躍していたかを、この目で見、また様々な形で体験して来た事実を記録として書」くことにあった。

吉野の叙述は基本的には自己の見聞を淡々と記していくスタイルだが、時に過去への違和感がにじみ出る。それは、四三年の横須賀沖・天皇行幸の際、天皇らが記念撮影をしている場面である。「その様子を遠くから下士官、兵がうらやましそうな目で見ていたが、ここにも階級差という厚い壁にはばまれている彼等の姿は、同じ軍人でありながら、気の毒でならなかった。また国の為、陛下の為、銃後の国民の為に、一命をかけて戦う気持には、上下に変りがないのだが？　と私は思った」（同前）。

吉村昭の『戦艦武蔵』とも相通ずる、「激動期」の戦争を支えていたのは「兵員」「下士官、兵」たちであったという意識と、それにもかかわらずかつての海軍に厳然と存在した階級制度への違和感がうかがえる。吉野は、かつて自らが向かった戦争をある種の「国民的事業」（岸田國士「文化の擁護」）と素朴にとらえているように思う。

先に登場した軍艦武蔵会副会長の細谷四郎は、一九八八年に単独で戦争体験記『戦艦武蔵戦闘航海記』を出版した。その目的は、死んだ乗組員たちの「末路」を記録し、関係者や遺族に伝えることだというが、内容はと言えば、相変わらず加藤副長（同書中では「K副長」）への恨み言である。

> とにかく、艦長のせっかくの遺言は無視され、戦没者達の多くが無惨にもフィリピンの戦場に見捨てられ、さらに残務整理まで放棄されたため、「死んでも死にきれない、いまさら副長は頼りにならない」とさまよい続けて、私に「信号お前が頼りだ」と訴え出てきているのだと思うようになったのである。／それは猪口艦長がK副長を信頼し託した遺言にも拘らず、「戦死した者は運が悪かったのだ、気の毒ではあるがみんな戦争が作った結果でその責任は自分達にはない。すべての責任は国にあり、戦争終結した今、自分達の責任は一切解消しているのだ。自分達も紙一重で九死に一生を得てきたのだ」と戦場に部下を置きざりにして内地に帰ってしまった責任を一生懸命回避せんとする元上官達に、戦没者達はあの世から遺言の伝言役をした私に、夢枕に立って訴え続けているのではないだろうか。

細谷にとって夢枕に立った戦死者たちの霊が、軍艦武蔵会設立の背景となったことは前述したが、ここで考えてみるべきは、なぜ細谷はかくも執拗に加藤副長の「責任」を追及し続けたのか、ということである。私は次の文章を読むに、細谷が追及しているのは決して加藤一人ではなく、もっと大きなものだったと考える。

> ところが、K副長や上官達は健在で終戦を迎え高額な軍恩〔軍人恩給〕を受給しながら、

その後の行動はお互いが戦争の被害者にすぎないという顔をして悲しむ遺族の前に平然と振る舞い、部下への愛情や思いやりなどさらさら見られず、今日に至っても艦長の遺言が宙に浮いたままなのである。／こうして、他の艦隊や靖国神社の神霊達に支援された武蔵の戦没者達は深い恨みと憎しみを込めて激怒した挙句、その魂が私に乗り移らんとして、私の夢枕に立ち、遺言の伝言役をした私に、武蔵の残務整理をせよ、K副長の裏切りの態度のすべてを追及せよ、と指示して夢に現れ続けていると信じるほかはない。
（同前）

細谷はこうした副長批判の言葉を執拗に、時に当時の虐待ぶりを描いた挿絵つきで書き連ねるのだが、それは、本人が意識しているか否かはともかく、一つの戦後社会批判となっている。なぜなら、引用文中の「K副長や上官達」を「戦後日本人」と言い換えても、充分に意味は通るからだ。

加藤一人が「お互いが戦争の被害者にすぎないという顔をして悲しむ遺族の前に平然と振る舞い、部下への愛情や思いやりなどさらさら見られ」なかったのではない。平和や豊かさを満喫する戦後日本社会がそうだったのである。ここには、吉村昭『戦艦武蔵』や渡辺清『戦艦武蔵の最期』にも共通する、戦後日本への根本的な違和感や憤りがある。加藤元副長

は、それを向けるうえでの具体的な矛先とされているに過ぎない。

「不動の姿勢」の加藤副長

こう考えると、細谷にとっての「加藤副長」とは、渡辺清にとっての「昭和天皇」に相当するのではなかろうか。具体的な誰かが無意味な犠牲の責任をその一身に背負ってくれねば、生き残った人々は感情の持って行き場がないのである。戦争体験記の執筆はその手段・場所であり、昭和天皇も加藤もほとんど何も弁明することなく、人々の憤りを黙って受け止め続けたのであった。軍艦武蔵会が一九七〇年代に行った前出のフィリピン現地慰霊祭は、加藤にとってその受け止める場所となっていた。以下、その様子をみよう。

一九七一年四月、生存者と遺族約二〇名がシブヤン海の武蔵沈没地点とバシー海峡のさんとす丸沈没地点の近くで洋上慰霊祭を行い、コレヒドール島に武蔵乗員集結の地という記念碑を建てた。七三年一一月には会員遺族二八名が航空便で現地を訪れ、参加した加藤憲吉元副長は「私の感じでは戦没者の霊は私どもの訪問を待ち侘びておったように思いました。／猪口艦長の御遺言を果して英霊を供養したいと念じておりますが及ばないことの多いのを恥じるものであります」（加藤「武蔵副長の回想」）と、短い詫びの言葉を記している。

七九年一〇月、コレヒドール島で行われた武蔵会の現地慰霊祭にも、加藤は猪口艦長の

妻・嘉子（よしこ）とともに参列した。ある生存者は、そこで見た彼らの様子を「武蔵記念碑の前に特設された祭壇の前で、この地の守備隊長の遺児が追悼の辞を読み上げる。八十四才の加藤団長が不動の姿勢のまま、じっと悲しみをこらえている様子。部下を残して去らねばならなかった胸中いかばかりか。団長のわきに立つ猪口敏平艦長未亡人がそっと目を押さえる。暑い太陽を真上に受けて、腰の曲ったその姿が痛々しかった」（石岡哲正〈下部給弾室左運弾盤〉「海上巡拝慰霊祭の思い出」）と記している。

猪口嘉子が武蔵会の総会で一人ぽつねんとしていたことは先に述べたが、この慰霊祭の後では「戦友の慰霊と遺族のあと頼みし　艦長の遺言まもりて三十五年経つ」という歌を詠んでいる（猪口嘉子「み魂よ　安かれ」）。遺族と元部下たちの収まりきれない感情を慰藉（いしゃ）するために、老齢の二人は黙って灼熱（しゃくねつ）の現地に立ち続けたのであった。

貧しい日本の少年たち

元乗組員によるその他の武蔵体験記として、武蔵沈没からちょうど半世紀後の一九九四年に刊行された塚田義明（つかだよしあき）『戦艦武蔵の最後（ママ）　海軍特別年少兵の見た太平洋海戦』を挙げよう。著者の塚田は一九二七年生まれ、四二年に特年兵（海軍特別年少兵）を志願して武蔵の第五分隊（高角砲分隊）に配属され、艦の沈没と漂流を体験した。彼は海軍志願の理由を同書の

「あとがき」で次のように語る。

> 国も貧乏だった。贅沢（ぜいたく）は許されず、物は配給制で自由に食べ、飲むことも出来ない私たちの生活も貧しかった。中学以上の上級学校に行けるのは、限られた子弟だけで、ほとんどは義務教育の尋常高等小学校止まり、私たちは家業を手伝うか、軍需工場などに就職して、戦争の一翼を担うしかなかったのだ。／兵役の義務も厳然としてあり、だからいずれは軍隊に入らなければならない。〔中略〕そうした少年たちが、人よりも早く、軍隊に入って出世したいと願うのは、これも当然の成り行きであった。／こうした時代背景の中で生まれた特年兵制度は、軍国少年たちにとって、救い主でもあった。将来に夢と希望を馳（は）せた少年たちが、応募に殺到したのである。

塚田の示した貧しさ故の戦争・軍隊志願、という時代背景の説明は、渡辺清の作品と共通している。塚田自身は一〇歳で父親を亡くし、五人の子どもを母が死にものぐるいで働いて育てていた。しかし、海軍は出世させるどころか「特年兵といえども区別せず、一般志願兵と同じように、熾烈（しれつ）さを増す第一線に駆り出し、結局、消耗品のように掃き捨てた」のみだった。彼の批判はこれについての怨恨をともないつつ、海軍の教育が少年兵たちに「何のた

めに死ぬのか」を教えなかったことへと向かう。

> 国のために一身を捧げるつもりで志願してきたのに。そこで行なわれてきたことは、制裁と罰直の連続であり、そして、私たちの個性を抹殺して人間性を奪い、恐れを抱かして上官の言うことなら何でも聞く、そんな主体性のない人間を作ることであった。〔中略〕上辺は強そうに見えても、内心は誰のために、何のために死ぬのかさえ、見失ってしまった仲間が多かったのである。（同前）

　この激しい海軍批判のなかで、かつての武蔵物語には明記されていた献身対象としての天皇が言わばなかったことにされているのは興味深い。塚田が戦前の日本人にとって文字通り献身の対象、現人神（あらひとがみ）だった昭和天皇を忘れるはずはない。なぜなら『戦艦武蔵の最後』には、武蔵に乗り組む前の海兵団における新兵教育で「銃器は、天皇陛下から授けられたものだと〝神聖視〟させられ、毎日、念入りな手入れを強制された」「整然と格納された小銃が恨めしくさえ思えたこともたびたびだった」という描写があるからだ。

　つまりここで武蔵物語の系譜上、渡辺清以来の下級兵士と貧しさという視点や要素は維持されたものの、昭和天皇の死とともにその責任追及という要素が脱落ないしは削除され、今

日に至るのである。

　塚田は天皇に代わる責任追及の対象として、海軍を批判するのだが、その際に「最年少兵「特年兵」の目を通し、「武蔵」沈没の真実を書きたかった」（同前）と、「真実」なる言葉を使っていることに注目したい。

　彼の武蔵体験記出版の目的は、同時代社会における「海軍は、紳士が多く、しかも自由な気風に溢（あふ）れている」といったような、能天気きわまる海軍讃美論への異議申し立てにある。塚田は「それは兵学校出身者など、恵まれたキャリア士官の世界であって、志願や徴兵の一般下士官兵には、まったく関係ないこと」であったと書く。今現在、世の中で語られている戦争・軍隊像は自分にとって言わば嘘だ、という強い思いがあるから、この「真実」という言葉が出てくるのだろう。それはおそらく八〇年代から九〇年代初頭にかけての豊かになった日本で起こっていた海軍や大和ブームへの違和感とみられる。

大和人気の由来

　塚田のこうした海軍批判が、『戦艦武蔵の最後』刊行当時に盛んだった海軍ブーム、讃美論に対する違和感から発しているのは間違いない。以下はビジネス雑誌『プレジデント』一九八八年八月号の「特集　戦艦「大和」」の巻頭に掲載された、作家の豊田穣（とよだじょう）（一九四〇年

海軍兵学校卒の元爆撃機搭乗員、撃墜され捕虜経験あり）と広島銀行頭取の橋口収（はしぐちおさむ）（東大法学部卒業後、四三年に海軍経理学校へ入校した短期現役士官、戦後大蔵省主計局長などを歴任）の対談「されど「大和」、なれど「大和」」の一部である。

豊田　吉田〔満〕さんは、ネイビーのガンルーム（士官次室）のムードが非常に気に入ったようです。きびきびしていて、ときには分隊長に殴られることもあるけれども、一発でおしまいで、あとくされがない。／臼淵という大尉が『戦艦大和ノ最期』に出てくるでしょう。この人は典型的な江田島〔海軍兵学校〕出身の士官ですが、彼の教育方法に吉田さんは共感を覚えたらしい。臼淵大尉は「大和」と運命を共にしますが……。

橋口　あれは歴史に残る名著でしょうね。

豊田　ですから、吉田さんの名著とともに「大和」も永遠に残っていくと思います。

好景気に沸く当時の日本ではこのような士官の物語としての大和物語、具体的には吉田満『戦艦大和ノ最期』がもてはやされていたことがわかる。同時期の日本で、下級兵士の視点から武蔵物語が編まれたのは、このようなエリート士官たちの視点による海軍教育讃美――スマートで体罰もさっぱりしていた、という認識のみが一方的に語られることへの反発とい

う意味があろう。武蔵の兵士たちは「一発でおしまい」どころか毎晩執拗に殴られていたし、前出の軍属・吉野伊三郎が著書で不満を述べていたように、戦争は士官だけでやっていたのではない。

この大和特集は、本書のテーマである「なぜ大和は人気があって武蔵はないのか」という問題を解く鍵として考えることもできる。それは、同特集を構成する記事のタイトルが「雄姿を現した驚異の「コスト・ダウン戦艦」」（広田一夫）、「超ハイテク「四六センチ砲」はかく完成した」（保阪正康）などであったことから分かるように、士官主体の大和物語は八〇年代「ハイテク」日本の豊かさの象徴、『プレジデント』誌の主たる読者の五〇代ビジネスマンが仕事上くみ取るべき種々の〝教訓〟の源として消費可能だったが、武蔵は違ったからである。

たとえば当時ビジネス現場にコンピュータが導入され、ハードウェアとかソフトウェアとかいった言葉がはやると、「〔巨艦大和という〕ハードウェアは、全力を挙げて整備に努めたが、ソフト、つまり使用法・作戦計画の立て方で、時代の変化から遅れてしまった。／海に浮かぶ船で、絶対不沈がありえない以上は、ソフトウェアでそれをカバーしなければならないが、上級司令部で時代に適応しようとせず、前時代性を押し通そうとしたから、「大和」は滅びるしかなかった」（吉田俊雄「「七万トン」に集積された「技術の粋」」）といった具合で

あった。この戦史上の〝教訓〟が現実のビジネス戦争に応用できたかはどうでもよい。おじさんたちが何か歴史に学んで賢くなった気分に浸ることが大事なのである。

一方、下士官兵主体の武蔵物語はこれまでの経緯上、遠い昔、戦前日本の貧しさの象徴にしかなれず、したがって彼らの消費に適さなかった。同特集中、武蔵の影は実に薄い。レイテ沖海戦で大和が米機の投下する魚雷や爆弾を次々と回避して「冴える森下〔信衛艦長〕の操艦の腕」と評されたのに対し、実戦経験が乏しく直進を主張した猪口艦長の武蔵は次々に被弾して横転沈没、「猪口艦長は、ひとり艦長休憩室に閉じこもって艦と運命をともにした」（佐藤和正「レイテ沖にて「大和」痛恨の反転」）と書かれるなど、格好の大和の引き立て役、もしくは創意工夫を怠りビジネス競争に敗れた者の暗喩じみた扱いをされているに過ぎない。

天皇の脱落

先に武蔵会慰霊祭の箇所で登場した小澤孝太郎の『燃え尽きた青春』（一九八九年）は、元武蔵主砲員（兵曹長）としての個人体験記である。著者小澤は一九三七年海軍に入隊、四二年三月武蔵に配属された。艦の沈没後はマニラ海軍防衛隊に配属されて米軍と交戦、のちに山中へと退避して住民所有の水牛の略奪、人肉食、中隊長による神経症の部下の斬首など、地獄のような見聞をした。終戦によりかろうじて生還したが腎臓と膀胱を悪くしてしまい、

元の元気を取り戻すことはついにできなかった。

小澤は自らの著書の末尾で「如何に苦しい時でも、自身に語ることは戦場や戦災で亡くなられた多くの人達（戦友）の事であって、戦後も生存している幸せを「まだ幸せなんだ」と自責の念が脳裏に真先に甦るのが常」と述べ、「「戦争反対」「世界の平和」を強く訴えて終りとします」と結んでいる。

注目すべきは、彼にとっての戦争の総括が多くの戦記物にも共通する常識的な反戦平和の訴えとされており、本書二二四〜二二五頁でみたような昭和天皇への怨恨は、その天皇が死去して戦争責任論争が再燃、銃撃事件まで発生した時期（八八年一二月、天皇の責任に言及した本島等長崎市長が、九〇年一月、右翼の男に銃撃されて重傷を負った）の刊行とあってか、まったく書かれていないことである。前出の塚田義明の作品にも同じことは想定しうる。著者の本当に言いたかったことが実は書かれていないという戦争体験記の抱える限界を、手塚正己のインタビューははじめて浮き彫りにしたのであり、ゆえに彼の仕事は貴重である。

同書について別途注目しておきたいのは、その序文中、武蔵について「国内の大仏から銅像・記念碑・橋の金具・各家庭の鍋釜に至るまで直接必需物は総て取り壊して供出され国民の総力で完成された、世界最大の戦艦武蔵」との説明があり、猪口艦長は「国民の艦を沈める責任から只一人艦橋に残って艦と運命を共にさせられた」との解釈を示していることであ

る。戦争が「国民の総力」によって遂行されたことを強調しても、そこでかつて人々の献身対象であったはずの天皇にはほとんど何も言及しないという点で、同書は渡辺清ではなく吉村昭『戦艦武蔵』的な武蔵物語の系譜上にあると言える。

美化への抗議

塚田や小澤らの体験記が書かれた一九八〇～九〇年代、人々の主たる懐古や讃美の対象となったのは、戦艦武蔵ではなく大和である。一九九四年は大和沈没から人間で言えば五〇回忌にあたり、雑誌『文藝春秋』五月号で「戦艦大和・五十回忌」という座談会が組まれた。そのサブタイトルは「『無用の長物』の技術が後の高度成長を支えた」というもので、自らも学徒出陣の海軍士官だった阿川弘之が、戦後日本の起源としての大和讃美論という文脈で「そのほかにも冷房がついているし、エレベーターもある。ハンモックじゃなくてベッドだし、電話はもちろんついていた。だから、当時は「大和ホテル」「武蔵御殿」と呼ばれてね」と、その先進性を強調する趣旨の発言をした。こういう方向からの大和讃美論は、二〇年以上経った今日でも、各種の出版物などで好んで語られている。

ところがこの座談会に対し、翌六月号の同誌読者投書欄「三人の卓子」に、元大和乗組機関兵の反論が掲載された。彼は言う、冷房といっても一部高級士官室と病室だけで下士官

兵の居住区は摂氏四〇度以上、ベッドも下士官以上で兵は相変わらずのハンモック、海軍独特のリンチもあり睡眠時間は三時間程度、「この座談会を読まれた多くの読者の中には、「大和」乗組員はさぞ優雅な生活を送っていたように思われるかもしれないが、少なくとも下級兵士の生活は惨烈な日々の連続であったことを私は言いたいのである」と。これは、自分の「惨烈」な体験が後から他者によって書き換えられ、口当たりよく美化、消費されてしまうことへの抗議と言ってよい。

以上のように、細谷や塚田たち武蔵、そして大和の元下級兵士が老境に入って書いた武蔵物語で語ったのは、海軍や戦争、戦前日本の貧しさに対する恨みつらみで、「戦争のむなしさと平和の尊さ」といった常識的なお題目は後である。それを記した小澤孝太郎とて、本当に訴えたかったことは別にあった。まして当時の日本で盛んだった海軍懐古・讃美などは否定の対象そのもの、ゆえに戦後世代の関心や感動を呼ばなかった。武蔵が今日の日本における戦争についての語りで取りあげられることが大和に比べ少ないのは、こうした背景もあろう。

3　戦争に関する「なぜ」の消失――手塚正己『軍艦武蔵』

手塚正己と戦艦武蔵

手塚正己は一九四六年生まれの映画監督で、長編ドキュメンタリー映画『軍艦武蔵』（一九九一年）の制作・脚本・監督を務め、その後、上下巻合わせて合計一〇〇〇頁近いノンフィクションの大著『軍艦武蔵』（二〇〇三年、その後文庫化を経て二〇一五年に「新版」刊行）、『軍艦武蔵』取材記　海軍を生きた男たち』（二〇〇四年）など戦艦武蔵や日本海軍、近年では海上自衛隊に関する著作を精力的に刊行している。『軍艦武蔵』は、本書では初めて取りあげる戦後生まれ（本人は「疎開先の長野県で生まれる」と微妙な言い方をしている）の書いた武蔵物語といえる。その執筆動機にあたるのは次の一文だろうか。

〔武蔵は「ほとんど取り上げられることのない地味な存在」だが〕私は、「大和」とまったく同じ兵装と防御機能、選りすぐりの優秀な将兵で編成された乗員が乗組んだ「武蔵」には、まだまだ世に知られざる多くの真実が、公表されないままになっているのではないか、という疑問を抱いていた。〔中略、吉村昭『戦艦武蔵』が建造過程に重点を置いたのに

対し〕私がもっとも知りたかったことは、「武蔵」に乗組んだ男たちの艦内における勤務状態や日常生活、戦争という異常事態を前にしての偽らざる心情、各配置で勇戦奮闘した各員の体験など、生の人間の姿であり、さらには彼ら海軍将兵の気分、あるいは海軍の空気といったものであった。（手塚『『軍艦武蔵』取材記』）

手塚が大和ではなく武蔵物語の紡ぎ手になる決意をした理由として、「真実」という言葉を使っていることに注目したい。彼には既存の大和（＝戦争）物語への不満があり、武蔵という別の主題によってその解消を試みているのではないか、と思われるからである。

手塚『軍艦武蔵』の物語上の眼目の一つは、かつての佐藤太郎『戦艦武蔵』を批判し、その「作り話」の部分を正しく修正することである。この点では吉村昭『戦艦武蔵』以来の武蔵物語の趣旨、系譜を引き継ぐものといえる。

手塚は「元乗員の手によって書かれた本がある。内容は本人の実体験が半分、残りは嘘とは言わぬまでも、見て来たような作り話によって埋められている」と佐藤の『戦艦武蔵』を批判する。その「見て来たような作り話」の例として、加藤憲吉副長が出撃祝いで酔った兵士を激しく叱責するなど厳格に過ぎる態度をとったことなどを挙げ、仮に兵員が乱酔したとしても、副長の手をわずらわせるまでもなく各分隊の上官たちがきちんと取り納めるはずで

ある、「この本を書いた人物と同じ機銃分隊に属していた人たちに訊ねたところ、出撃祝いの座が乱れて、副長に怒鳴られたということはなかったと、誰もが一様に否定している」（手塚『軍艦武蔵　上巻』）と元乗組員へのインタビューに依拠して「真実」はこうだ、と主張する。

　ここに佐藤が『戦艦武蔵』で「作り話」をした理由を問う姿勢はない。本書の課題の一つはそれを考えることにあるが、手塚もそうすべきだったなどと言いたいのでは無論ない。何を問うかは畢竟個人の興味や問題意識にかかわっており、手塚のそれはあくまでも武蔵の「真実」解明にあるからだ。

猪口艦長の最期

　手塚は猪口艦長の最期の場面についても、実際には佐藤が描いてみせたような切腹はもちろん、拳銃自決すらもしていないことを強調している。

　猪口艦長の最期については、多くの本に書かれている。その中には、艦長附の佐野少尉が持つ鞄から拳銃を取り出すと、艦長休憩室あるいは海図室に入って自決したとある。その時、ご丁寧にも発射音が聞こえたと言う者まで現れている。〔中略〕では、真実の

ところはどうであったのだろうか。これはあくまで推測でしかないが、井土〔守〕少尉が艦橋を出てから、わずかの間ではあったが、猪口艦長はかねてより用意してあったロープで、羅針儀に身体を縛り付けた。それは、艦長が「武蔵」に赴任する少し前の夏の日、次男の信に対して言い聞かせたように、艦と共に自分の身体を沈めるということであった。／猪口信は父親の最期について、「子供と父親との約束で、死ぬ時は自分の身体を柱かなにかにくくって、と聞いていますので、父はその言葉を守ってくれたんだろうな、というふうに僕は思いたいですね」／と語っている。（手塚『軍艦武蔵　下巻』）

　手塚はこのように「真実」の所在にどこまでも執着し、時に証言者の元武蔵乗組員を詰問するに至る。以下は、映画で採用した、猪口艦長に自分もお供すると泣いて申し出た艦長付の若い少尉がいたという一生還者（一等水兵）の証言に、後から疑いの念を覚えるようになったとの回想である。

　小高〔証言者の名〕証言に不自然なものを覚えるようになっていった。／その理由を一言で言えば、小高氏の証言する艦長の別れの場面は、芝居でも見ているように、あまりにも劇的であり過ぎるような気がしてならなかった。果たして、艦がいつ沈むか判らな

い状況の時、儀式めいたことを行う余裕などあったのだろうか、どうしても釈然としなかった。（手塚『軍艦武蔵』取材記）

そこで手塚は入院中の証言者のところへ確認しに行き、真偽のほどを確かめる。

「いやあ、あれは違います」／意味を掴みかねた。「なにが違うのですか？」／「だから、映画で言ったことは、嘘です」／私は自分の耳を疑った。氏は悪びれるふうもなく、世間話でもしているように続けた。／「あの時は、話の行き掛かり上、つい話を作り上げてしまいました。そうした方が、みなさん喜ぶんじゃないかと思って」／氏は謝るでもなく平然としている。私は正直なところ、腹が立ってきた。／「それで、本当のところはどうだったのですか？」〔中略〕氏が車椅子から乗り出すようにして言った。／「あそこのところは、多少脚色しましたが、他は本当に体験したことです。信じてください」／その顔から、笑顔が消えていた。（同前）

手塚はなぜここまで「真実（ほんとう）」のありかに執着し、時に生存者の語る「おはなし」を「嘘」とまで糾弾するのだろうか。

意味づけの拒否

この執着の理由について、手塚自身は次のように説明している。

私は本書を書くにあたって、心に期するものがあった。それは一切の誇張と憶測を取り除いて、より真実に近い「武蔵」の物語を作り上げるということであった。そのために当然のこととして、可能な限り一次資料を使用した。また、証言に関しては伝聞に類するものは極力避けて、当事者が見聞きしたことのみを採用するように心がけた。〔中略〕疑問に感じた点は、当人に直接当たって確認に務めた（ママ）。それでも疑わしいと判断した証言は、どんなに興味深い内容であっても、思い切って捨てた。／私は当初から、記録のみを積み重ねた戦記を書くつもりはなかった。さりとて、勇壮かつ壮絶な、あるいは反戦平和を唱えた戦争小説にも興味はなかった。本の形態などなにも考えずに、証言者たちから得た膨大な記憶といまに残された戦史資料を頼りに、ひたすら事実だけを追い求めて、原稿の枡目（ますめ）に文字を埋めていった。〔中略〕実際に起こった出来事の断片を、多くの証言者の体験と資料の中から選んで、これを組み立てたのが、私の主な仕事であった。そこには、私論も論評も評価も、あえて加えなかった。すべては、実際に起こった

出来事として、客観的に紙の上に再現したつもりである。その結果、完成した本書が、どんなジャンルに属するものなのかは、読者の方々の判断にお任せしたい。（手塚『軍艦武蔵　下巻』）

「事実」への強いこだわりは吉村昭と同じだが、従来の武蔵物語が様々な形で行ってきたはずのその意味づけ（私論、論評、評価）は意図的に回避し、ひたすら「客観的な」「真実」の再現を目指している。このこだわりは、戦争の美化ないしは否定に特化してきた戦後日本の戦争物語、すなわち「勇壮かつ壮絶な、あるいは反戦平和を唱えた戦争小説」に対する「誇張と憶測」という批判や反発と表裏一体の関係にある。

そもそも、こうした戦後戦争物語に対する批判は、武蔵の生還者がつとに呈していたものであった。手塚『『軍艦武蔵』取材記』は、武蔵生き残りの鈴木正義・元機関兵長による二つの「証言」を肯定的に引用する。

「武蔵は、手もなく簡単に沈められたと、見たこともないくせに、見てきたようなことを言う人もいた。〔中略〕『あんたは戦争を見てきたのかね』と、言ったのを覚えている……」

「なにが壮烈だ。あんな悲惨なことはないですよ。なにが散華だ。冗談言っちゃいけない。あんな死に方ぐらい惨めなものはない。戦争というのは、悲惨そのものだ。他に言葉は見付からない」

鈴木はかつての乗艦武蔵とその戦いに対する他者からの解釈を、否定（「手もなく簡単に沈められた」）も美化（「壮烈」）も共に強く拒絶している。その結果として、ここでの戦争は〝何もの〟でもなくなっている。

もとを糺せば、このような武蔵に対する他者からの意味づけの拒否は、鈴木一人のみならず、一九七〇年代の元乗組員たちが軍艦武蔵会の会誌『嗚呼　戦艦武蔵』ですでに行っていたことであった。たとえば、次に掲げる同書「まえがき」の一節は、武蔵とその死者たちに対する他者からの主として否定的な意味づけを拒否する旨の宣言といえる。

武蔵の戦記に類する図書は、いろいろ巷間に出て居りますが、その一部に正鵠の虞れがある等して必ずしも武蔵の真実を伝えず誤解を招く懼れもあるやに思われるので、本誌の内容については真実、真相を伝えることに力点を置きました。／従って寄稿者の原稿は、努めて生のままとし、僅かに誤字脱字、句読点や一部の仮名使いを補正したのみと

しました。
この『嗚呼　戦艦武蔵』編者による、体験者たちの書いた「生のままの」「原稿」にこそ（のみ）伝承すべき武蔵の「真実、真相」があるとの説明は、武蔵物語の「脱文脈化」過程を考える上で重要である。彼らは戦争や武蔵に対する他者からのマイナスの解釈や意味づけを「真実」でないとして拒否する。そうしてよい、あるいは積極的にそうすべき理由は、端的にそれが「真実」ではないからである。かといって自らの手でプラスの意味づけを行うことはできない（負けた戦争なので難しい）。これはいわば「真実」への逃避である。「正鵠の虞れがある」「一部」の「図書」とは吉村昭や渡辺清の本を指すだろうか。吉村の作品が遺族から「事実」と違うと批判されたことは本書ですでに述べた。

その結果、『嗚呼　戦艦武蔵』での戦艦武蔵は、吉村や渡辺のそれとは異なり、結果として〝何もの〟でもなくなってしまったのである。

「事実がゆがめられては」

生還者たちが武蔵の「真実」に固執した理由を探るため、話をさらに一九六〇年代へとさかのぼらせたい。『週刊新潮』一九六〇年五月九日特大号に、瀬野尾光治（武蔵二番副砲員

長）の「特別読物　戦艦武蔵の名誉のために」と題する体験記が掲載された。武蔵二番副砲での対空戦闘と沈没の状況、漂流ののち空母隼鷹で内地へ戻るまでの経緯を記したものだが、興味深いのは冒頭に週刊誌側が付けたあおり文である。

「武蔵は戦わずして沈んだ」というS週刊誌〔不明〕の記事に物言いがつけられた。投書の主は「武蔵」の乗組員だった瀬野尾光治氏。「われわれは砲身が赤くなるまで応戦し、僚艦の作戦遂行のために、米軍雷爆撃機延べ約千機の攻撃を一身に引き受けたのだ。いくら戦争否定の世の中でも、事実がゆがめられては、南海に散った三千（ママ）の戦友が浮かばれない。今こそ私は言う」というのが彼の言い分。以下は、瀬野尾氏が十五年目につづった戦争叙事詩である。

自分たちの戦いや戦友の死の意味を実情を知らぬ他人から否定されるのはやりきれないから反駁したい。とはいえ、武蔵の沈没にさしたる意味があるわけではないのでそれも難しい。そうであるなら、世間の「戦争否定」論が「事実」か否かのみを争点にすれば、面倒な、もしかしたら政治的なものに発展しかねない意味づけの議論は回避できる。武蔵乗組員たちはすでに一九六〇年代の時点で、自らと死者の「名誉」を守り、意味づけをめぐる論争から逃

避するため、「事実」なる言葉を（自覚していたかはともかく）戦略的に使っていたのである。

社会学者の高橋三郎（たかはしさぶろう）は、武蔵会のみならず日本の戦友会活動が全体的に政治的性格を帯びなかった理由として「戦友会がまず何よりも自己確認の場、心のやすらぎを求める場であったこと」や「とにかく利用されるのはごめんだという感覚、したがって戦友会としては政治的なものにはかかわりたくないという気持」を挙げている（高橋『「戦記もの」を読む　戦争体験と戦後日本社会』）。これは元乗組員たちがひたすら「事実」の記録化に固執し、部外者によるその意味づけは頑として拒否した理由の説明にもなり得よう。

手塚がこのような武蔵の元乗組員たち、たとえば前出の鈴木正義の「見たこともないくせに」という声に従うならば、戦争や死の意味づけはそれが美化であれ批判であれ、とうてい不可能となる。そうである以上、「『武蔵』と、これに乗り組む老いた昭和の士卒たちの苛烈な生き様を描きたい」（手塚「撮影報告　軍艦武蔵」）という手塚のクリエイターとしての情熱は、ひたすら「事実」「真実」それ自体の発掘、確定に向かうしかない。

彼の映画『軍艦武蔵』のラストシーンは、靖国神社での慰霊祭で集合写真を撮る生還者や遺族たちである。彼・彼女らはみな、何か言いたげな複雑な表情を浮かべており、それは作品に深い陰影を与えているのだが、その心中の声が映画で語られたり、あるいは二〇一五年に新版として刊行された『軍艦武蔵』上下巻に明示されることはない。結果、手塚の武蔵物

語でも、武蔵は何ものでもないまま、人々の鑑賞、読書するところとなってしまう。

それは個人の問題関心や「好み」の問題であり、作品の巧拙や道義的善し悪（あ）しの問題ではまったくない。手塚の武蔵物語が貴重な証言を多数発掘した力作であることはすでに述べた。ただ、かつての武蔵物語にはあった戦争や死者の死の意味づけ、解釈がほとんどない、あるとすれば「戦争は悲惨だ」ぐらいだというのは、いわば「事実への逃避」とでも呼ぶべき事態ではないかとは感じる。

戦争が悲惨なのは当たり前である。問題はその戦争がなぜ起こり、今日の我々にどのような影響を及ぼしているのか、兵士たちの死の意味はどこにあるのか、ではないだろうか。

この「事実への逃避」、たとえば前出の「完成した本書が、どんなジャンルに属するものなのかは、読者の方々の判断にお任せしたい」という姿勢は、自らの頭で判断することをしない、という点において、今日の国際的な歴史問題に対し「判断は後世の歴史家に委ねたい」とコメントし、本当は自らの判断があるはずなのにその公表は一切拒否する政治家のそれとどこか似てしまっている。

歴史に「事実」はない？

歴史学界では一九九〇年代以降、「歴史とは「多元的な現実」から成り立っており、視点

が「事実」を構築する」「誰がいつ、どのような視点からいかに書くのかによってきわめて多様な解釈の可能性がありうる」（荻野美穂「歴史学における構築主義」）のであり、史料を丹念にあたればいつかは一つの「真実」にたどり着けると信じて疑わないのはナイーブに過ぎる、という考え方が主流である。この考え方は「歴史はしょせん物語、フィクションにすぎない」というニヒリズム的な考え方に行き着かないでもないし、現にそのような主張は国民の歴史をナショナリズム昂揚の手段としたがる立場の人々の間にあった（ある）。

この歴史学（歴史叙述）と物語との関係について、経済人類学者の春日直樹は二〇〇二年、イタリアの作家ウンベルト・エーコを引用しながら次のような問題提起を行った。

> 彼ら〔歴史家〕は表面上は無関係な一連の要素に、同一テクストとしてのつながりを見いだして物語へと仕上げる。そうして組み立てられた仮説に科学的確証はないが、説明の経済性や「テクストとしてのもっともらしさ」に依拠して妥当性が付与される。〔中略〕物語の手法を真偽＝認識の面から支えるはずの「証拠」「可能性」の区分は、はたしてそれほど頼りがいのあるものだろうか。（春日「物語ること」）

このように、学術の世界では「要するに歴史家の思考法は、不可避的に物語を産出せざる

をえない」」、私なりに解釈すれば物語性抜きの厳密な歴史叙述などもはやあり得ないという意見が以前からあり、歴史に「真実」ありと信じ込むのはナイーブに過ぎるという見解が多数派だ（と私は思う）。しかし、一般社会ではむしろ逆で、手塚『軍艦武蔵』のように歴史上の「真実」なるものを認め、希求することが多くなり、必然的に物語は嘘、作り話、あやまちなどとみなされ、排除されているのは興味深い現象である。

かつての戦争を語る上で「真実」なる言葉が多用されていく背景について、私なりの見通しを述べておきたい。一九八〇年代から九〇年代にかけての東西冷戦終結、湾岸戦争（一九九〇～九一年）、そしてバブル崩壊といった、日本の政治・経済・外交に激変をもたらした一連の出来事は、日本人の歴史認識にも強く影響した。冷戦終結や湾岸戦争によって、戦後日本で長らく支配的であったいわゆる一国平和主義や反戦平和論に対する懐疑が広まり、近現代史、中でも昭和の戦争に対する評価が大きく揺れるようになったのである。

その「揺れ」の具体例として、一九九五年に教育学者の藤岡信勝らが自由主義史観研究会を結成して従来の日本近現代史教育・研究を「自虐」と激しく批判、これに対して左派の歴史学者たちが侵略戦争の讃美と反論したのである。藤岡がそれまでの左派的立場から一躍「転向」を遂げたのは、湾岸戦争勃発に衝撃を受けたためであったという。

本書の視点上重要なのは、この歴史論争が「真実」の争奪戦であったこと、つまり我こそ

が歴史の「真実」の代弁者なりと主張するという形で行われたことである。それは、左派の歴史学者たちが藤岡たちへの批判のために編んだ本の書名が『近現代史の真実は何か　藤岡信勝氏の「歴史教育・平和教育」論批判』（藤原彰・森田俊男編、大月書店、一九九六年）であったり、藤岡・自由主義史観研究会原作・監修の『マンガ　教科書が教えない歴史①』（産経新聞ニュースサービス、一九九八年）の帯に「来たるべき二一世紀を生きる子供たちにこそ知ってほしい、この国の真実の歴史」とあることなどからわかる。

湾岸戦争が日本社会にかくも深刻な精神的動揺を引き起こした原因として、評論家の浅羽通明は同戦争時の新聞投書欄――そこにはときに居丈高ともとれる平和のあり方をめぐる〝正論〟が並んでいた――から直感的に見て取った、人々の「膨大な見知らぬ情報からなる空間に支えもなく吊り下げられたような」、「いわば己のあまりの矮小さを直視した不安」（浅羽『天使の王国　平成の精神史的起源』）を挙げている。

浅羽は人々の間に「ニュースを捉え返し、情報を図式づけて、世界を把握することによる精神的安定への欲求が湧き起こ」り、「国際情勢や社会問題について、ともあれ、簡単なアンチョコ、絵解きがほしくな」ったのであり、新聞の投書欄はその「ステロタイプな世界把握の典型的サンプル」だと観察した。この指摘にしたがうなら、藤岡らの本が大いに売れたのは、人々の世界認識が怪しくなった結果、近現代史の問題でもその簡単な「アンチョコ、

絵解き」を求めたからとみられる。

しかし重要なのは、この歴史の「真実」論争はしだいに尖鋭化しつつも、どちらか一方が相手を圧倒したわけではないことだ。論争の当事者たちにとっての歴史、たとえば太平洋戦争の「真実」とは、その意味づけ――自衛・植民地解放戦争か、侵略戦争かという昔ながらの図式である――に他ならなかったが、戦争の極端な美化には二〇一五年の日本社会にもなお相応のためらいがある。ゆえに藤岡らの運動の流れを汲む歴史教科書は、必ずしも高いシェアを獲得するには至っていない。つまり、その他大勢の人々は傍観にまわり、どちらかに与しようとはしなかったのである。

けれども、とにかく「真実」が大事なことに間違いはなさそうなので、この言葉は社会の中で一般的となって今に至る。ただし、そこで使われる「真実」とは「出来事」「事件」のひたすらな羅列のことであり、そのトータルな意味づけは、一種の踏み絵であり、叩かれるもとだから慎重に回避されているのだ。かくして、「真実」それ自体が面倒な意味づけなどいらない唯一無二の神聖なものとして人々に崇められるに至った。

武蔵の「事実」「真実」を一途に重視する手塚正己の映画『軍艦武蔵』は九一年の制作であり、前述の社会背景、すなわち歴史認識論争の直接的な影響を蒙ったと断定はできない。ただ、映画制作から同名の書籍刊行までの約一〇年間が、先に述べた戦後日本社会における

歴史、とくに近現代史認識の一大転換期と大きく重なっていること、そしてあらゆる物語は著者の思考や意志とは必ずしも関係なく、その時代の影響を大なり小なり蒙ることには留意しておきたい。

現在と関係ない「歴史」

二〇一五年に「新版」が刊行された手塚『軍艦武蔵』への反響の一例として、新聞書評を挙げたい。評論家の荻上チキ（一九八一年生）は、二〇一五年八月三〇日『朝日新聞』朝刊読書面で同書を評し、「〔武蔵乗組員の〕人々の息遣いを通じて、存在としての武蔵、体験としての武蔵が多角的・立体的によみがえってくる」と評価している。

本書でみてきた戦後の武蔵物語は、存在・体験としての武蔵についてなにがしかの主体的かつ確固たる評価・意味づけをしていたが、荻上の評価では、それが一転して「多角的」であることがポイントとなっているのである。肯定であれ否定であれ、歴史についての確固たる評価や解釈が個人の主観として忌避され、むしろそれをしないことが公平と評価される〈今〉という時代をよく表した書評と言える。

ではなぜ、確固たる意味づけは高い評価の対象とされるどころか忌避されてしまうのか。私は二〇一五年一一月一一日、同じ『朝日新聞』朝刊文化・文芸面に掲載された「戦争とは

マンガが問う」（山崎聡執筆）がその手がかりとなると思う。「戦争マンガ」がなぜ再注目されているのかを問うこの記事において、マンガコラムニストの夏目房之介（一九五〇年生）は、再注目の背景として「多くの日本人にとって戦争はすでに『歴史』で、風化している」ことを挙げ、「想像力を頼りに戦争のリアルさを取り戻したいという欲求が高まっている」と論評する。

夏目とマンガの読者たちにとって、戦争とはすでに風化しきった「歴史」であり、現在とは直接関係のない他人事という位置づけのようだ。まさに手塚正己と同様、「リアル」への強い関心はあっても、戦争に何か自分なりの問いをぶつけ、意味（意義）を見いだそうという姿勢はないのである。よく考えてみれば「想像力を頼りに戦争のリアルさを取り戻」すというのは吉村昭や野呂邦暢らと同じ種類の〈歴史実践〉と呼ぶべき行為なのだが、私に言わせれば肝心の「歴史」は現在と地続きであるとか、自分は「歴史」の上に作られた存在である、といった渡辺清的発想（本書一八八頁参照）を夏目の文章に見いだすことはできない。その理由は、別途考えられてよいだろう。一つ思いつくのは戦後歴史教育の貧困である。

本当に誰も泣かなかったのか

ここまでみてきた武蔵物語の歴史とは、先行する物語を後発のそれが「事実」「真実」で

はない、と否定するパターンの反復ともいえる。ことに猪口艦長の最期については、切腹云々とともに、別離の場面で若い士官尉が感極まり涙を流すという劇的な場面が「作り話」として否定されている。手塚がそのような証言をした元乗組員を詰問するに至ったことは先に述べた。これは武蔵の沈没時、猪口艦長の側にいて別れの場に立ち会い、生還した野村治男（武蔵の甲板士官、元大尉）から「佐野〔少尉〕が泣くかなあ」というアドバイスを得たうえでのことだった。

だが、武蔵に関する昔の文献を読んでいくと、その野村元大尉本人が沈没から約一三年後、一九五七年という早い時点である戦記雑誌上に猪口艦長との別れの場面を記し、「私も艦長と一緒に残ります」と言って泣いた若い少尉の存在にふれていることにつきあたる。

> いちはやく艦の運命を察せられた艦長は、総員退去を命じ、副長に後の世話を托（たく）されたのであつた。そして佐野少尉から鞄を受取り、拳銃を取り出して、ズボンのポケットに入られた。殆ど〔の〕人々が艦橋を立去つた頃、井土少尉が登つて来た。信号書焼き終りの報告の為であつた。艦長は、退去命令を未だ知らぬ彼に急いで艦橋を降りるように言われた。／「艦長はどうされるのですか」／「俺のことは気にせんでもよい、君は早く行け！」／「私も艦長と一緒に残ります」／ようやく二十になつた純情の見張士は、艦橋を去らぬと云い張つて、はてはオイオイ泣き出してしまつた。艦長の目にも泪（なみだ）が光つていた。艦長は、ようやく彼をなだめ、又叱り諭しして艦橋から降された。（野村「戦艦「武蔵」の最後（ママ）」）

確かに映画『軍艦武蔵』で元乗組員が艦長との別れの場面で泣いたと証言したのは「佐野少尉」であるが、かつての野村本人の回想では別の少尉（井土守少尉）が泣いたことになっているし、拳銃での自決も暗示されている。これでは、手塚が言うように別れの場面が淡々としたものであったとは、もはや誰にも断定できないことになるのではないか。

もしかしたら、約六〇年前の野村もまた、手塚正己からみて「嘘」を述べた映画の証言者と同じように、戦前生まれの一人として戦争にまつわる「おはなし」を「そうした方が、みなさん喜ぶんじゃないかと思って」語っていた可能性もあるかもしれない。これを「あやまち」とか「嘘」といって退ければ他の証言はどうなのか、という問題に波及しかねないが、私はそのような詮索をするよりも、なぜ野村が昭和三二年にこのような話をしたのかを考えた方が建設的だと思う。吉村昭がそうであったように、「事実」「真実」かどうかだけを唯一無二の判断基準として他者の作品を否定していくと、自らの作品もまた否定の対象となってしまうだろう。

艦長の最期と羅針儀

武蔵物語における猪口艦長の最期の描写についてもう少し述べたい。手塚が遺児へのインタビューを踏まえて「かねてより用意してあったロープで、羅針儀に体をくくり付けた」と推測していることは本書二四四～二四五頁で述べた。だが、ここで想定しておきたいのは、戦後に作られた大和物語の潜在的な影響である。

一九六〇年に刊行された戦記もの雑誌『画報戦記』創刊号の「世界一の戦艦「大和」「武蔵」の壮絶な最期」と題する記事（山岸耕平執筆）の中で、猪口の最期は「乗組員たちの必死の勧告もむなしいまま、戦闘艦橋の扉をかたくとざして艦と運命をともにした（中略）「最後の戦勝を信じ、お先にいきます」という遺言をのこしたまま……」と描写されている。一方、戦艦大和の艦長・有賀幸作大佐のそれは、

> 一本の麻縄をとり出すと、自分の体を羅針儀にぐるぐるしばりつけたのだ。／「こうやってしばっておかんと、無意識に泳ぎ出してしまうからなあ……」／こうつぶやいたのが、さいごの言葉となったのである。／あくまでも、愛する部下の死んだこの艦で、死んでいきたいと考えたのであろう。そして、部下たちといっしょに、いつまでもいつま

> でもはるか海底から故国を護ろうと思ったにちがいない。／その姿は、生きながらにしてすでに神の姿そのものであった、と目撃した生存者たちは述懐しているのである。

と、より劇的に美化されている。ここで描かれる有賀艦長の最期の前半の〝元ネタ〟が吉田満『戦艦大和ノ最期』描くところの「艦長有賀幸作大佐御最期（中略）鉄兜、防弾「チョッキ」ソノママ、身三箇所ヲ羅針儀ニ固縛ス」というくだりであり、後半のそれは本書第二章で述べたミッドウェーの山口多聞、加来止男の物語、そして猪口の遺書にみられる戦時中の記憶であることはいうまでもない。

同誌と名前が似ているが別の戦記雑誌『戦記画報』第四号（一九六〇年一二月）で、かの『戦艦武蔵』の作者・佐藤太郎は猪口の最期について、はじめは「一説によると、刀で割腹したというのですが、実際にみた人の話によりますと、艦橋でピストルによる自決をとげたということです」（「希望座談会　凄絶レイテ沖大海戦　戦艦「武蔵」戦闘記録係佐藤兵曹長を囲んで」）と語っていたのに、吉田満『戦艦大和ノ最期』を読んだであろう読者の学生（写真を見るに中学生）から「やはり、体をなわでしばりつけたりしたのでしょうか」と質問されると「そうでしょうね。ああいった人たちには、いざというときの覚悟はできているのです」と応じている。武蔵の生き残りともあろう者が、戦後に作られ有名となった大和伝説に影響

されて、あっさり「証言」を翻してしまっているのだ。

私が言いたいのは、「猪口は羅針儀に体をくくり付けた」はずという彼らの解釈自体が、実はどこかしら戦後に劇化された戦争（大和）物語の影響下にあるのではないか、ということである。そうであるなら、手塚の武蔵物語もまた、「事実」「真実」の探求に撤しているようで、実は戦後の戦争（大和）物語の影響を免れ得てはいないのではないだろうか。繰り返すが、私はそれを「真実」と「嘘」の二分法で詮索する必要はないと思っている。

「水戸黄門」への回帰

武蔵物語は、二〇〇〇年代に入ると、かつての〝時代物〟的な性格を取り戻していったようにみえる。たとえば、戦艦武蔵が主人公の架空戦記『飛行戦艦「武蔵」遺欧大戦　大西洋燃ゆ』（二〇〇二年）の作者青山智樹（あおやまともき）は「あとがき」にて、「物語の進め方、考え方は例によって水戸黄門です。現実にあったかも知れない兵器を使って、ああだこうだやっています。／本当だったら思想的な何かとか盛りこんだほうが重みも、奥深さも出せるのでしょうが、水戸黄門にそんなものはありません（と、思う）」といささか自嘲気味に述べている。

物語自体は、タイトル通り戦艦武蔵が空を飛んでアメリカと戦うという荒唐無稽なファンタジー（これは批判ではなく、著者自身「トンデモ」という言い方で自認している）だが、興味

深いことに、二一世紀の武蔵物語はかつての佐藤太郎的、読み物（「水戸黄門」）的なものへと回帰しているのである。それは、戦争体験がしだいに「風化」して、語ること聞くことに何らかの痛みや怒りの感情をともなうものではなくなっていったからだろう。そのことは、青山が続けて「今でこそこうやって太平洋戦争を舞台にお気楽な話も書けますが、二十年前、三十年前では考えられなかったでしょう。……十年ぐらい前でも、架空戦記の作者に国粋主義、共産主義、双方の方々から抗議の手紙が届けられた、なんて話を聞きます」と回顧していることからわかる。彼自身も抗議の手紙を一通受け取ったことがあるという。

さらに青山は、「水戸黄門ではないですが、時代小説も似たようなものではないのでしょうか？　時代小説、歴史小説の範疇（はんちゅう）はやはり江戸時代とか、それ以前が主流で大正の頃を書いても受け入れられません。ところが、時が流れて昭和初期が範疇に収まってきたのではないか、ってのはうがちすぎでしょうか」（同前）とも推測している。

この発言は興味深い。かつて吉村昭は自らの『戦艦武蔵』をはじめとする昭和の戦争を扱った小説を「戦史小説」なるカテゴリーに入れ、前近代を扱う「時代小説」とは明確に区別していたが、「時が流れて」青山の時代にはそうした区別が失われ、どちらも同じ時代物の「範疇」に収まってきたことを表すからだ。それは彼ら新たな武蔵物語の紡ぎ手たちが、かつての戦争を痛みや「リアリティ」をもって語れなくなっていった過程そのものである。

青山はこの点に自覚的であり、前述のいささか自嘲気味な発言もそこから来ているのだが、他の紡ぎ手たちはどうだろうか。

終章　二〇一五年の武蔵

太平洋戦争は「巻き込まれた」のだろうか？

話はいよいよ二〇一五年へと移る。この年、米国人実業家ポール・アレンの潜水調査により、武蔵は北緯一二度四八分、東経一二二度三〇分（時実雅信「今明らかになる『武蔵』の沈没地点」）の水深一一〇〇メートルを超える地点に、沈没後の大爆発のため船体前部・同後部・前檣楼ほか上部構造物の三つをはじめとする大小の残骸となって散乱、着底している（「戦艦武蔵の残骸情況　これが海底に眠る姿だ！」『Gakken Mook　戦艦「武蔵」の真実』）ことが確認された。この発見と戦後七〇周年とが相まって、武蔵にまつわる多数のムック（雑誌と本の混成刊行物）や雑誌特集号が刊行された。以下それらを総称して〝武蔵本〟と呼ぶ。

海軍史研究家・戸髙一成（一九四八年生）の監修による新書『「戦記」で読み解くあの戦争

の真実　日本人が忘れてはいけない太平洋戦争の記録』（二〇一五年）は、戦後七〇年にあたって日本人が読むべきとされる太平洋戦争関連書のガイド本であるが、その中に吉村昭『戦艦武蔵』と吉田満『戦艦大和ノ最期』が挙げられている。これらに加えられた解説は二〇一五年における武蔵・大和認識の一例といえよう。まず、同書はなぜ太平洋戦争とその物語を語り継ぎ、忘れてはならないと訴えているのかを確認しておこう。

戦争を体験した父や祖父母、あるいは、悲惨な戦争体験を、語り部として語り継ぐことの出来る人がいなくなった時、戦争は、戦後世代の人間にとって肌感覚を失ってゆくことになる。

私たちは、二度と戦争を経験しないためにも、より戦争の実態を知らなければならず、また、かつての日本は、どのようにして戦争に向かってしまったのかを知ることが、次の日本の危機を回避するための重要な知識となるのではないだろうか。

いささか感覚的な言い方になるが、我々が戦争にまつわる問いを発するうえで、「経験」と「選択」、「どのようにして」と「なぜ」、「日本」と「日本人」とでは、その意味が微妙に違ってくるのではないだろうか。後者にくらべて前者からは、主体性、当事者意識の微妙な

欠如、他人事感を感じざるを得ないからである。たとえば戦争の「選択」について言うなら、吉村昭にとっての戦争とは、確かに誰も抗（あらが）えない歴史の大きな流れによるものであったが、同時に日本人が自ら選択したはずのものでもあった（本書一七四頁参照）。自分は吉村と違って戦後生まれだから、主体性を持てないのはやむをえない、と言われれば話は終わってしまうが、本当にそれでいいのだろうか、とは思う。

『「戦記」で読み解くあの戦争の真実』の第一章は、「日本人なら読んでおくべき9冊」と題するブックガイドである。武蔵と大和の「戦記」は両方とも選ばれている。まず、吉田満『戦艦大和ノ最期』は、「世界最大の不沈艦」とうたわれた戦艦「大和」の沈没を、乗組員の視点からリアルに描いた戦記。生きて帰る見込みがない海上特攻という作戦に際し、乗組員たちはどう立ち向かったのか？」と紹介されている。ここにもやはり、「どう」はあっても「なぜ」はない。かつての「巨大なエネルギー」（吉村昭）や「敗レテ目覚メル」（吉田満）といった戦争の意味づけは「真実」「リアル」でないとされてか、無視ないし放棄されている。手塚正己『軍艦武蔵』に見られた「事実への逃避」がここにも観察される。

では、同書は吉村昭の『戦艦武蔵』をどう紹介しているのだろうか。

「大和」とともに、日本海軍の夢と希望が詰まった戦艦「武蔵」。極秘で行われた建造か

ら、レイテ沖に沈むまでの姿を克明につづった戦記文学。非論理的な〝愚行〟に邁進（まいしん）した〝人間〟の内部にひそむ奇怪さとともに描く。

本作品は戦艦「武蔵」の建造から終焉までを克明につづった戦記文学だが、その8割近くは長崎造船所での建造に割かれている。技術者たちが血のにじむような苦労を重ねて建造にこぎつけたが、人命と物資をいたずらに浪費するだけの戦争に巻き込まれ、沈没するまでの過程を、感情的な表現を極力抑えて述べている。その描写が、沈没に向けての悲哀をより際立たせている。

ここでの武蔵と日本人は「非論理的な〝愚行〟」としての戦争に「巻き込まれ」たことにされているが、果たして吉村の武蔵物語とはそのような内容だっただろうか？

論理的な愚行？

この「非論理的な〝愚行〟」とは、もとは新潮文庫版の解説で磯田光一が用いた言葉である。磯田は『軍艦武蔵』について、「昭和十年代における日米関係の悪化と、それにたいする日本の軍事力の拡大という要素は多大にあった。しかしそれだけなら、必ずしも〝武蔵〟の建造は必要ではなかったであろう」（吉村『戦艦武蔵』新潮文庫版「解説」）と指摘する。論

理性を超越した愚行に進んで邁進するところに、吉村は「人間というものの奇怪さ」をみている、というのだ。

しかし、文学的素養や想像力を欠くが故の見方になるのかもしれないが、当時の日本人はあくまでも論理的発想に基づき、武蔵建造を始めたのではなかったか。吉村自身、『戦艦武蔵』に「〔パナマ運河を通れない巨大戦艦は造れないという米海軍の〕弱点をついて、日本海軍は、巨大な砲を装備した巨大な戦艦を完成させ、圧倒的な威力でアメリカ海軍と対決しようと企てているのである」、「日本は、四囲を海にかこまれた島国である。航空機の発達も目ざましいが、窮極的には、海軍の洋上戦力がその存否を左右するにちがいない」と、繰り返し対米戦争における巨艦武蔵建造の「必要」性を記しているからだ。

こうした論理的思考に基づく説得や目的意識の喚起なしに、人々の内から自らを突き動かす「巨大なエネルギー」が湧き出てくるなどということがありうるだろうか。むろん、「論理」なるもののとらえ方が磯田と私で違っている可能性は大いにあるが。

吉村にとっては、論理的発想に基づいて作られたはずの巨艦武蔵が結果的には何の役にも立たず、大量の人命とともに海に沈んだこと、これこそが「愚行」であり、直視すべき戦争の「むなしさ」だったのではなかろうか。武蔵とは「論理的な愚行」の物語である。

「非論理的な〝愚行〟」という言葉は、戦前の人々があたかも非論理的な発想で行動してい

たように見なす、戦後的視点に即して発せられたに過ぎないと考える。

また、戦争に「巻き込まれた」と述べているが、それは吉村が激しく憎んだ戦後的な、保身のための嘘――たとえば「庶民は、罪深い戦争をのろいながらも、戦争にまきこまれて多くの被害を蒙った」（吉村「二つの精神的季節」）――のうち、「庶民」の箇所を「日本」に置き換えただけで、七〇年近くたってもなお、なぞっているに過ぎないのではないだろうか。

ちなみにこのブックガイドに、渡辺清『戦艦武蔵の最期』や『海の城』の名はないし、手塚『軍艦武蔵』巻末の参考文献リストにもない。彼の激しい天皇批判を忌避したのだろうか。それならば、天皇の戦争責任という複雑で何らかの態度表明はできれば避けたい問題から逃げた、いわば歴史とイデオロギーからの逃避と言える。

近現代日本文学の研究者たちによって編まれた、近年の戦争文学に関する代表的なブックガイドとして『コレクション　戦争×文学』（全二〇巻）とその『別巻〈戦争と文学〉案内』（二〇一三年）があるが、そこでの吉田満『戦艦大和ノ最期』や吉村昭『戦艦武蔵』、渡辺清の戦争三部作など巨艦物語の扱いは大きいとはいえない。『別巻』に収録された近代日本戦争文学の通史といえる「I〈戦争と文学〉の一五〇年」において、『戦艦大和ノ最期』はその読者たちにより「ナショナリズムを刺激する文学へと方向づけられた」（紅野謙介「太平洋戦争前後の時代　戦中から占領期への連続と非連続」）とか「この戦争の過程で殺された中

国や朝鮮、東南アジアのひとびとの存在は意識されていない」（同前）などとされた程度で評価は実は低い。吉村『戦艦武蔵』は同巻「II〈戦争と文学〉長編作品紹介」（コレクションが中短編作品主体なので、長編は代替として概略を紹介）に「戦艦武蔵の誕生から最期までを描いた記録小説」「吉村昭の出世作」とされているのみである。

渡辺の作品に至っては、「III〈戦争と文学〉年表」に「帰還農民兵士の立場から」（六二年四月）、『海の城』（六九年一一月）の名はあっても『戦艦武蔵の最期』『砕かれた神』はない（第一一巻『軍隊と人間』に『海の城』第三章のみ収録）。

なぜないのかはわからないが、一般向けの『「戦記」で読み解くあの戦争の真実』とアカデミックな『コレクション　戦争×文学』の対比は、戦後の武蔵・大和物語が通俗的とみなされ、しょせんは正統な〈文学研究〉の対象にはされ得ない一種のサブカルチャーに過ぎなかった、あるいは今でも過ぎないことを示すように思われる。

「想いや覚悟」

結局、武蔵とは何なのだろうか。この問いを示していそうな二〇一五年刊行の別の文献として、前出の海軍史研究家・戸高一成に対する「特別インタビュー　戦艦「武蔵」とはなんだったのか」（戸高監修『証言・戦艦「武蔵」』）と題するものがある。しかし奇妙なことに、

武蔵とは何か、という問いはあっても明確な答えはなく、せいぜい「戦争をせず乗り切るのが外交であり、軍隊はその際に武力を見せるためのツール」との発言があるだけだ。

軍艦たる武蔵は「ツール」なのだろうか。ある意味では実に正しい答えといえるし、間違っているともいえる。史実上の武蔵は帝国主義的外交の道具（ツール）ではなく、大艦巨砲の夢（ファンタジー）を叶（かな）える極秘の決戦兵器だったからだ。しかし、戦後の武蔵物語群が同艦をそのようにドライに割り切ってきたわけではなく、恨みつらみなどのウェットな要素に満ちていたのはここまで見てきたとおりである。つまり、武蔵物語の系譜がある時点でプツンと切れて、かつての紡ぎ手たちがそれぞれ語ってきた〈意味〉が失われているのだ。

『証言・戦艦「武蔵」』に示された、武蔵と大和とは「なんだったのか」という問いに対する戸高の答えと思（おぼ）しきものは、別の雑誌記事にある。

> その後、日本はいわゆる「高度経済成長期」を迎えて経済大国として劇的な復興を遂げますが、その裏には、実は大和型戦艦の存在がありました。〔中略〕戦後、日本が「モノづくり大国」として栄光をつかむことができた背景には、大和と武蔵のDNAが確かにあったのです。／戦艦大和と武蔵が今なお多くの人々に知られるのは、吉田満が著わした『戦艦大和ノ最期』を契機に、その悲劇性に注目が集まった側面もあるでしょう。

> しかし、この世界最大にして最強の戦艦が語りかけるものは、決して「悲劇」だけではありません。大和型戦艦を造り上げた技術力はもちろん、日本を守るという想いや覚悟、そして日本人の魂が凝縮された「結晶」が、大和と武蔵であったのです。（戸高「総論　大和型戦艦…それは日本人の「技術力」と「魂」の結晶だった」）

武蔵は日本人の「想いや覚悟」「「魂」の結晶」だというのであるが、ここに、本来戦争が持つはずの愚昧性や、それを描いてきたはずの戦後の武蔵物語群の暗さはうかがえない。大仏と自由の女神の喩（たと）え話にみられる戦争の喜劇性、武蔵がほとんど何の役にも立たなかった事実、その生き残りたちが戦後、「覚悟」どころか種々の恨みつらみを語ってきた経緯などは、完全に無視されている。

むろん、戸高一人が武蔵を単なる「美化」の対象としているのではない。戦後日本社会が武蔵を語る言葉をどこかで捨て、忘れたのだ。私見では、たぶん戦争の意味づけを放棄し、「真実」や「事実」へと逃げはじめた一九九〇年代の時点からそうなっている。

同じく武蔵の船体発見にあわせて、作家の森史朗（もりしろう）（一九四一年生）は『文藝春秋』二〇一五年五月号に「七十年ぶりに発見　戦艦武蔵　悲劇の航跡を辿（たど）る」と題する文章を発表した。森はその末尾で一九九四年当時の戦艦大和・武蔵讃美論に対する「元武蔵水兵の抗議の一

文」の投書（本書二四〇～二四一頁を参照。ただし投書の主は大和乗組で武蔵ではない）を引用し、「歴史には、明と暗がある。大和型戦艦の威容が語られる背景に、下級水兵たち――これが乗員のほとんどだが、その苛酷な生活があったことを忘れることはできない。これが良かれ悪しかれ、昭和という歴史の歩みなのだ」と結んでいる。

森は九四年当時の『文藝春秋』編集長だっただけに、戦後における大和・武蔵の一面的な美化が元水兵たちの抗議を招いたことについて、何らかの忸怩たる思いがあったのだろう。しかし、二〇一五年の武蔵に関する各種の出版物において、このような下からの声が大きく語られたり、「昭和という歴史の歩み」を俯瞰せんとする試みは少なかったように思われる。

もう一つ忘れ去られたこと――天皇と戦争

二〇一五年の〝武蔵本〟における武蔵語りをみていると、（渡辺清的な意味での）戦前天皇の記憶も完全に消えていることに気づく。本来、武蔵は〝天皇の軍艦〟であった。そのことは武蔵の巨体を間近で見た元乗組員・塚田義明の以下の回想からわかる。

> 〔武蔵の〕正面に回ると姿は一変する。丸く、まるでオスタップ〔金だらい〕である。その上に圧するような艦橋が聳え立ち、巨大な丸ビル（当時、私たちが知る東京駅前の日本最大の高層ビル）が、立ちふさがったような威圧感を感じた。／艦首の舳先に燦然と輝く、金色の十六弁の菊の紋が眩しかった。数ある軍艦のなかで、天皇の紋章である十六弁の菊の紋の使用が許されているのは戦艦だけで、まさに天皇の軍隊の象徴であった。
> （塚田『戦艦武蔵の最後』）

では今の日本人の心中において、天皇はどうなっているのか。無関心ゆえの不在、もしくは危なくて表に出せないものとなっている。塚田は二〇一五年の時点でなお健在で武蔵物語を語っている。たとえば、二〇一五年に発行された〝武蔵本〟の一冊である『よみがえる戦艦武蔵』（双葉社スーパームック）には「戦艦武蔵　元乗組員の証言①　戦艦武蔵での艦隊生活」と題する塚田のインタビューが掲載されているが、戦前の貧しさや献身対象としての天皇のことは語られ（せ）ない一方、対空用の噴進砲（ロケット砲）のイラストを大きく掲載、「塚田氏の証言により本書では搭載説をとっている」と記している。聞き手（と読者たち）の関心の行方は、天皇や海軍の教育論などではなく、レイテ沖海戦時の武蔵が噴進砲を装備していたか否かというマニア的「事実」の行方のみにあった。つまり、天皇と先の戦争との関係への関心、あるいは天皇の存在自体がまるごと消えている。

しかしそれは、彼らの政治社会や歴史に対する無知、無関心のゆえではけっしてない。

二〇一三年にサービスが開始されたブラウザ戦闘ゲーム「艦隊これくしょん」（通称・艦これ）で、武蔵は艦娘と称する美少女に〝擬人化〟されている。姉の大和が純和風、黒髪の少女であるのに対し、武蔵は銀髪緋眼、褐色の肌の男性的な〝キャラ設定〟がされており、それもまた現在における武蔵表象の一環といえるが、面白いのは彼女が「大和」と揃って首に掛けている、船の舳先を模したチョーカーには、ほんらい菊花紋章が飾られるべきところ、なぜか訳のわからない桜に置き換えられている点である。

もし人々が過去の戦争およびその天皇との関係に本当に無知で無関心なら、約七〇年前の軍艦たちの魂を受け継ぐと称するファンタジー世界の中の武蔵たち艦娘は、菊花紋章を首に燦然と輝かせているはずである。しかし、そうはなっていない。

一つの理由は、艦これとは艦娘たちが被弾すると服が破れて露出が増え、苦痛とも恍惚ともとれる表情を浮かべるゲームであり、そんなものに菊花紋章を持ち込むのは〝不謹慎〟だからである。ちなみに、本書冒頭で紹介した『MC☆あくしず』の美少女武蔵は、発見された実艦の菊花紋章が（幸か不幸か）脱落し失われているため、これを描いていないが、問題なのはなぜそれが不謹慎なのか、ということにある。

それは、一九六四年生まれの作家・赤坂真理が九七年ごろ、東京裁判で翻訳の仕事をしていたという自らの母親と繰り広げた、「じゃあ天皇に戦争責任はあると思う?」「天皇陛下を

裁いたら日本がめちゃくちゃになったわ!」というやりとり（赤坂『愛と暴力の戦後とその後』）が如実に示しているように、天皇やその戦争責任を批判したり不真面目なネタにする者は日本社会の秩序や結束を乱す敵、という認識をゲームの開発者側がいまだ内面化しているからではないだろうか。

歴史学者の米原謙は、戦前日本の国体論（万世一系の天皇が治める日本の国柄を讃美する議論）について「体制の秩序原理として、政治的異論や社会的不安定に直結する言行への防御機制」（米原『国体論はなぜ生まれたか　明治国家の知の地形図』）として機能した、と指摘している。すなわち、戦争や恐慌といった社会体制の危機が生じると人々は国体論を高唱し、その批判者と見なした人をそのまま体制の破壊者として激しく糾弾することで心理的安定が図られたというのだが、この状況は現在もなお続いている。艦これから菊花紋章が抹消されたり、各種の戦後七〇年を当てこんで刊行された数々の〝武蔵本〟やブックガイドが渡辺清の武蔵物語をほぼ完全に無視しているのは、天皇批判ととられる行為が体制への挑戦と見なされ、関係者は社会的制裁を受けかねないと内心恐れ、自己規制しているからに他ならない。

艦これの武蔵はゲームの世界で姉妹艦・大和たちとともに謎の敵「深海棲艦」と戦うが、そこでこの戦いはいったい何のためだとか、七〇年前の実際の戦争の意義をどう思うかなどについては絶対に語ることがない。それは畢竟、現時点での消費者たちがそういう物語に興

味がないか、もしくは嫌っており、したがって商売にならないと開発者側が考えているからだ。将来、もしも日本人が対外的危機に際して過去の、もしくは目前となった対外戦争を意義づける物語を望むなら、艦娘武蔵もしくは別のゲームの後継美少女たちは喜んでそれを語り出し、人々を鼓舞するはずである。しかし二〇一五年の日本では、天皇と戦争は実は「ファンタジー」どころか、人々の心身を傷つけうるリアルな、ゆえに不可視とすべき問題なのである。武蔵はそのことを露見させかねない、危うい存在である。

一方、天皇や戦争責任問題に曖昧な態度をとり続けた吉村昭の武蔵物語には、前述の各種〝武蔵本〟が示すように、なお生き残る余地がある。さらに戦艦大和とその物語が「事実」関係をめぐる批判の高まりこそあれ、いまだ人気があるのは、吉田満が天皇を切り捨てて以降、その戦争責任にふれることなく安心して消費できるものであり続けているからだ。この点でも、武蔵と大和はまことに対照的である。

天皇と美少女

天皇制の問題と、本書の冒頭で紹介した、萌え絵・キャラクター化された戦艦武蔵との関係についてもう少し述べておく。もう一〇年以上前から、キャラクターを論じる人々の間では、日本人が「いつのまにか生身の現実世界よりもマンガやアニメが作り出す「仮想現実」

のほうに強いリアリティや共感を覚えるようになっ」ている、「いつのまにか「生身の現実世界」やそこを生きる「生身の私」が違和感や拒否反応を覚える存在になって」いる（以上、相原博之（あいはらひろゆき）『キャラ化するニッポン』）といった指摘がなされている。

また、キャラクターとそれらが本来背負っているはずの物語との関係については、意外なことに「70年代以降のキャラクターの特徴をひと言で言えば、物語を背負っていないところにあ」るという。サンリオのキティちゃんのように無表情なキャラクターに「自分の気持ちを勝手に投影させてしまえるからいいらしい」、なぜなら人々にとって自ら物語を作るのは「面倒くさい」（以上、香山（かやま）リカ＋バンダイキャラクター研究所『87%の日本人がキャラクターを好きな理由』）からだと説明されている。

とくに相原の「仮想現実」論は言い過ぎだと思うが、一方で興味深い構造的視点を提供してくれてもいる。確かに現在の日本人の面前には「仮想現実」の世界が広がっており、そこでは戦争の大義や歴史的背景といった「面倒くさい」踏み絵のごとき物語と関わらないで済むから、鋼鉄の巨艦武蔵は美少女にもなれるのだろう。それは現在日本人の一つの気分の反映である。ただし、彼女は完全な仮想（ファンタジー）空間内の住人なのかというとそうではない。天皇というきわめて面倒くさい物語を含む現実の社会空間との接点上に生きているのだ。

こう言うと、敗戦から七〇年が経過し、昭和天皇もとうに亡くなってその戦争責任論争は

遠い過去の話ではないか、という反論もあるだろう。だが、彼の子の現天皇が戦後七〇周年の節目に際し、かつての激戦地パラオやフィリピンへ赴いて戦死者たちの霊に深々と頭を下げるという、見方によっては和解や謝罪ととれる高度な政治的行為を続けているのに、国民側のあらゆる世代がかつての激しい論争を一方的に忘れ去ったなどとは、私には思えない。

ポエムとしての戦争

結局、日本人にとって二〇一五年現在の武蔵は、昔のように天皇の軍艦として語ることは許されず、したがって現状「何ものでもない」と言わざるを得ない存在である。日本における武蔵、そして太平洋戦争とは何なのか、という問いには、「詩（ポエム）である」と答えることもできる。同年発行の〝武蔵本〟である『別冊宝島二三四〇　戦艦「大和」と「武蔵」』（二〇一五年五月）の「おわりにかえて」には、次のような一文が載っている。

> 二〇一五年三月、戦艦「武蔵」発見の報がもたらされた――。／探査艇のライトに照らしだされたその姿は、／九時間におよぶ苦闘をしのばせる痛ましいものであった。／しかし、それでも「武蔵」は、不沈艦と称された／往時の威厳をたたえつつ、そこにあった。／戦後七〇年が経ち、太平洋戦争を経験した人々の／肉声に触れることすら、困難

> になりつつある。／だが、戦艦「大和」と「武蔵」が象徴する／「太平洋戦争とはなんだったのか」という問いに答えるには、／まだ多くの時間が必要だろう。／海底の「武蔵」は、この巨艦とともに戦った多くの人々の声、さらには、あの戦いに関わったすべての人々の想いを／代弁しているようにも思えた。／戦艦「大和」と「武蔵」、／そして、あの戦争を戦ったすべての人々に想いをこめて――。

二〇一五年、経済的に凋落（ちょうらく）する日本にあって武蔵はもはやかつての技術立国物語（ストーリー）の起源ですらありえず、きわめて抽象的な詩（ポエム）にしかなりえない存在なのだろうか。それはともかく、これを書いた人は、「太平洋戦争とはなんだったのか」という「問い」に答える気が本当にあるのだろうか。自分では考えられない（たくない）から先送りしているのではないか。ここにいう「すべての人々」の「想い」とは一体何か、それは一本化できるのか、「すべての人々」に開戦を命じた側の大元帥昭和天皇は入っているのか、といった、戦後日本で人々がこだわってきたはずの種々の問いかけが、丸ごとなくなっている。

「なぜこうなったのか？」

一九四五年の敗戦時、二三歳の医学生だった作家・山田風太郎（やまだふうたろう）は、同年八月一六日の日記

に次のように書いている。

「なぜか?」／日本人はこういう疑問を起すことが稀(まれ)である。まして、／「なぜこうなったのか?」というその経過を分析し、徹底的に探究し、そこから一法則を抽出することなど全然思いつかない。考えて出来ないのではなく、全然そういう考え方に頭脳を向けないのである。一口にいえば、浅薄なのである。上すべりなのである。いい加減なのである。（山田『新装版　戦中派不戦日記』）

山田の「なぜか?」が「なぜ戦争に負けたのか?」という血を吐くような叫びであることは言うまでもない（前日・一五日の日記は「帝国ツイニ敵ニ屈ス。」のたった一行で終わっている）。

本書で戦後の武蔵物語の歴史をたどってみて分かったのは、山田のように日本人だから「なぜか?」を問う姿勢がないとみなすのは正しくない、ということである。武蔵に乗って戦争に行った人、当時の空気を肌で知る人の多くが、「なぜ」自分が戦争で酷(ひど)い目にあったのかを他ならぬ自分のために、真剣に問うていたからだ。たとえそれが「K副長のせいである」という答えであっても。この「なぜ」がある限り、武蔵は何ものかであり得た。

しかしそれはしょせん武蔵や戦争を自ら知った人々の話であって、彼らが体験を語り終え

るや、同じ戦争、同じ軍艦の話でありながら、その後の世代はふたたび「全然そういう考え方に頭脳を向けない」ものとなり、結果として武蔵も何ものでもなくなった。約七〇年間、口ではずっと「戦争体験の継承は大切だ」と言い続けてきたにもかかわらずである。そう考えると、山田の指摘は間違っていると同時に、残念ながら正しいと言える。人が歴史に「なぜ」を問うのは、しょせん自らと同時代のそれに限ってのことであるに過ぎない。

参考文献

※著者名を五十音順に、同一著者は刊行年順にそれぞれ配列した。

■あ行

相原博之『キャラ化するニッポン』講談社現代新書、二〇〇七年

青山智樹『飛行戦艦「武蔵」遣欧大戦　大西洋燃ゆ』経済界〈RYU NOVELS〉、二〇〇二年

赤城毅「解説　哀惜のクロニスト」（水木しげる『水木しげる漫画大全集〇一七　貸本戦記漫画集四　水木しげる作戦シリーズ　下』講談社、二〇一五年）

赤坂真理『愛と暴力の戦後とその後』講談社現代新書、二〇一四年

阿川弘之・早坂暁・原勝洋「戦艦大和・五十回忌「無用の長物」の技術が後の高度成長を支えた」（『文藝春秋』一九九四年五月号）

浅羽通明『天使の王国　平成の精神史的起源』幻冬舎文庫、一九九七年（初刊一九九一年）

アテネ書房編集部編『戦艦大和・武蔵戦闘記録』アテネ書房、二〇〇〇年

有馬馨「第七十三期生徒卒業ニ際シ贈ル言葉」一九四四年二月一八日

有馬馨「比島作戦の思い出」（一九五三年一〇月二六日〈追記あり〉、有馬『帝国海軍の伝統と教育　付・比島作戦の思い出』五曜書房、二〇〇一年）

池田貞枝「不確実な大和・武蔵の沈没場所」（『丸』二〇一、一九六四年二月）
池田貞枝「戦闘中における武蔵の効果的な運転法」（前掲『丸』二〇一）
池田貞枝・中村正司〈対談〉「八百余隻の鋼鉄の墓標はかなし」（『丸』二五九、一九六八年一〇月）
池田貞枝『太平洋戦争沈没艦船遺体調査大鑑』戦没遺体収揚委員会、一九七七年
石岡哲正「海上巡拝慰霊祭の思い出」（軍艦武蔵会編『続!! 嗚呼 戦艦武蔵』同会、一九八二年）
石田恒夫「乗艦「大和」の死闘」（『増刊歴史と人物 太平洋戦争シリーズ 実録・太平洋戦争』一九八一年）
石田恒夫「戦艦大和会初代艦長古村さん」（古村啓蔵回想録刊行会編『海の武将 古村啓蔵回想録』原書房、一九八二年）
石動竜仁（dragoner）「「大艦巨砲主義」の〝まぼろし〟」（『Gakken Mook 戦艦「武蔵」の真実』二〇一五年）
一ノ瀬俊也『戦艦大和講義 私たちにとって太平洋戦争とは何か』人文書院、二〇一五年
井手雅人「シナリオ 戦艦武蔵」（『シナリオ』二六一号、一九七〇年三月）
伊藤隆ほか編『東條内閣総理大臣機密記録 東條英機大将言行録』東京大学出版会、一九九〇年
伊藤隆編『高木惣吉 日記と情報 上巻』みすず書房、二〇〇〇年
井上団平「レイテ沖 この非情なる大海戦 史上最大の海戦から奇跡的に生還した激闘の記録」（初出一九七〇年一二月、「丸」編集部編『重巡「最上」出撃せよ 巡洋艦戦記』光人社NF文庫、二〇一一年）
井上義和「記憶の継承から遺志の継承へ 知覧巡礼の活入れ効果に着目して」（福間良明・山口誠編『「知覧」の誕生 特攻の記憶はいかに創られてきたのか』柏書房、二〇一五年）
猪口嘉子「み魂よ 安かれ」（前掲『続!! 嗚呼 戦艦武蔵』）
岩佐二郎『戦艦「大和」レイテ沖の七日間 「大和」艦載機偵察員の戦場報告』光人社、一九九八年
宇垣纏『戦藻録』原書房〈明治百年史叢書 第五〇巻〉、一九六八年

近江兵治郎『連合艦隊司令長官山本五十六とその参謀たち』テイ・アイ・エス、二〇〇〇年
大岡昇平『対談 戦争と文学と』文春学藝ライブラリー、二〇一五年（初刊一九七二年）
大谷藤之助「レイテ海戦作戦参謀の手記」（『増刊歴史と人物 秘史・太平洋戦争』一九八四年一二月）
大月隆寛『歴史の消息について 〈いま・ここ〉からの「歴史」を考える』洋泉社、一九九九年
大西瀧治郎「決勝増産は全国民の責任に於て」（『放送』四―二、一九四四年二月）
岡田幸和「建造の背景と巨艦の性能」（『別冊歴史読本永久保存版89 戦記シリーズ43 戦艦大和と武蔵』一九九八年一〇月）
小川平吉「横徴機三二五二八」（前掲『続!! 嗚呼 戦艦武蔵』）
荻野美穂「歴史学における構築主義」（上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、二〇〇一年、第五章）
奥崎謙三『ヤマザキ、天皇を撃て!』三一書店、一九七二年
小澤孝太郎『燃え尽きた青春』私家版、一九八九年

■か行

海軍省編『観艦式の栞』同省、一九三六年
海軍省海軍軍事普及部編『予算上より見たる帝国海軍』同部、一九三七年
回天顕彰会編『回天』同会、一九六五年
学芸研究会編『世界に誇る帝国海軍の威容 大観艦式記念』同会、一九三六年
梶本顗「〝戦艦武蔵〟の護衛について」（『清霜』五、一九七一年四月）
梶原正夫「大和、武蔵建造のエピソード」（造船会編『造船官の記録』船舶技術協会、一九六六年）
春日直樹「物語ること」（森明子編『歴史叙述の現在 歴史学と人類学の対話』人文書院、二〇〇二年）
加藤憲吉・村山隆・斉藤静八郎（談話筆記）「決死の捷号作戦に出撃! 壮絶!戦艦武蔵の死闘」（『臨時増刊 旬刊タイムス』一九五七年一月）

加藤憲吉「武蔵副長の回想」（軍艦武蔵会編『嗚呼　戦艦武蔵』一九七五年）
門脇尚一『駆逐艦「清霜」の奮戦』私家版、一九九九年ごろ
賀屋興宣『戦前・戦後八十年』浪曼、一九七五年（初刊一九七二年）
香山リカ＋バンダイキャラクター研究所『87%の日本人がキャラクターを好きな理由』学習研究社、二〇〇一年
川村邦光『民俗空間の近代　若者・戦争・災厄・他界のフォークロア』情況出版、一九九六年
川村湊ほか『戦争はどのように語られてきたか』朝日新聞社、一九九九年
川森圓次郎「土佐から武蔵まで（道中の道草を拾い集めて）」（『回想の百年』編集室編『回想の百年　長船の思い出を綴る（上）』三菱重工業株式会社長崎造船所、一九七四年）
神崎浩太郎「比島シブヤン海峡に眠る　超戦艦『武蔵』の建造秘話」（『キング』二八―六、一九五二年六月）
岸宣仁『検証　大蔵省崩壊　権力の巨塔を襲った絶体絶命の危機』東洋経済新報社、一九九六年
北岡伸一『門戸開放政策と日本』東京大学出版会、二〇一五年
木下共武「武蔵の残工事」（造船会編『続・造船官の記録』今日の話題社、一九九一年）
草鹿龍之介『聯合艦隊　草鹿元参謀長の回想』毎日新聞社、一九五二年
工藤美代子「武蔵乗組員の妻としての回想」（前掲『続!!　嗚呼　戦艦武蔵』）
宮内庁編『昭和天皇実録　巻二十九　昭和十六年　下』同庁、二〇一四年
久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波新書、一九五六年
倉橋友二郎『第41防空駆逐隊戦記　戦艦大和直衛艦隊の奮戦』鱒書房、一九五六年
栗原悦蔵『戦争一本　比島戦局と必勝の構へ』朝日新聞社、一九四五年
栗原俊雄『戦艦大和　生還者たちの証言から』岩波新書、二〇〇七年
軍艦武蔵戦没者慰霊祭執行会『軍艦武蔵戦没者慰霊祭記念写真アルバム』同会、一九六五年

軍艦武蔵会編『嗚呼　戦艦武蔵』同会、一九七五年
軍艦武蔵会『武蔵会の歩み』同会、一九八一年
軍艦武蔵会編『続!!　嗚呼　戦艦武蔵』同会、一九八二年
纐纈厚「大艦巨砲主義」（吉田裕ほか編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、二〇一五年）
紅野謙介「太平洋戦争前後の時代　戦中から占領期への連続と非連続」（戦争と文学編集室編『コレクション　戦争×文学　別巻〈戦争と文学〉案内』新潮社、二〇一三年）
古賀繁一『古い思い出』私家版、一九九二年
児玉隆也『君は天皇を見たか「テンノウヘイカバンザイ」の現場検証』（講談社文庫、一九八五年〈初刊一九七五年〉）
小林次郎「武蔵の思い出」（前掲『嗚呼　戦艦武蔵』）
小柳冨次『栗田艦隊　レイテ沖海戦秘録』潮書房、一九五六年

■さ行

最相葉月「「小説になる」瞬間」（『小説新潮』二〇〇七年四月号）
斉藤静八郎「戦艦「武蔵」の生涯」（『サンデー日本』三五、一九五七年七月）
斉藤静八郎「武蔵並に比島残留者と残務整理に就て」（前掲『嗚呼　戦艦武蔵』）
斎藤貴男・森達也『日本人と戦争責任　元戦艦武蔵乗組員の「遺書」を読んで考える』高文研、二〇〇七年
佐藤和正「レイテ沖にて「大和」痛恨の反転」（『プレジデント』一九八八年八月）
佐藤太郎「軍艦武蔵」（『サロン』四―一〇、一九四九年一一月）
佐藤太郎『戦艦武蔵』再建社、一九五二年
佐藤太郎『戦艦武蔵の死闘』鱒書房、一九五五年
佐藤太郎『太平洋戦記　戦艦武蔵』河出書房、一九六七年

参謀本部編『杉山メモ　上』原書房〈明治百年史叢書〉、一九六七年
篠原滋『陸軍新輯③　比島決戦場』日本報道社、一九四五年
司馬遼太郎・谷沢永一（対談）「円卓トーキングⅠ　昭和の時代と人間　その原型を問う」（『円卓会議』創刊号、一九八四年一月）
清水金桝『海軍講話　下士卒生活』厚生堂、一九〇三年
新人物往来社戦史室編『日本海軍指揮官総覧』同社、一九九五年
新名丈夫「壮絶！台湾、比島沖　海空戦の実相」（『時局情報』八―一二、一九四五年一月一〇日）
新名丈夫「亡国の指導者　東條の竹槍戦術を衝く」（『サンデー日本』五一、一九五八年三月）
水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　上』同会、二〇一〇年
水交会編『帝国海軍　提督達の遺稿　小柳資料　下』同会、二〇一〇年
末次信正『非常時局と国防問題』朝日新聞社、一九三四年
澄川浩「日本海軍と大艦巨砲主義」（『鵬友』二六―四、二〇〇〇年一一月）
勢古浩爾『大和よ武蔵よ　吉田満と渡辺清』洋泉社、二〇〇九年
瀬野尾光治「特別読物　戦艦武蔵の名誉のために」（『週刊新潮』一九六〇年五月九日特大号）
「戦艦武蔵建造記録」刊行委員会編『戦艦武蔵建造記録　大和型戦艦の全貌』アテネ書房、一九九四年

■た行

大本営海軍報道部編『提督の最期』同部、一九四三年
高木惣吉「日本の財宝大和・武蔵は誰に向けられるべきだったか」（『丸』二〇一、一九六四年二月）
高橋三郎『「戦記もの」を読む　戦争体験と戦後日本社会』アカデミア出版会、一九八八年
高橋三吉「我に必勝の信念あり」（『日の出』五―四、一九三六年四月）
高橋三吉「聯合艦隊の猛威発す」（『富士』二〇―一二、一九四四年一二月）

高橋三吉「攻防の態勢は急転する　今こそ神機を摑め」（『月刊西日本』二―五、一九四五年五月）
高橋信一編『我か海軍と高橋三吉』非売品、一九七〇年
高橋弘希「解説　戦争がファンタジーになるとき」（大岡昇平『対談　戦争と文学と』文春学藝ライブラリー、二〇一五年〈初刊一九七二年〉）
高増武夫『軍港させぼ秘話』〈雑誌〉長崎ジャーナル、一九七六年
千早正隆「第二号艦艤装員」（前掲『嗚呼　戦艦武蔵』）
千早正隆『日本海軍の戦略発想』プレジデント社、二〇〇八年（初刊一九八二年）
塚田義明『戦艦武蔵の最後　海軍特別年少兵の見た太平洋海戦』光人社、一九九四年
手塚正己「撮影報告　軍艦武蔵」（『映画撮影』一一七、一九九二年八月）
手塚正己『軍艦武蔵　上巻』太田出版、二〇〇三年
手塚正己『軍艦武蔵　下巻』太田出版、二〇〇三年
手塚正己『『軍艦武蔵』取材記　海軍を生きた男たち』太田出版、二〇〇四年
手塚正己「生き残った『武蔵』乗組員の運命」（前掲『Gakken Mook　戦艦「武蔵」の真実』）
東京新聞・戦後50年取材班編『元連合艦隊参謀の太平洋戦争　千早正隆インタビュー』東京新聞出版局（東京ブックレット⑰）、一九九五年
時実雅信「今明らかになる『武蔵』の沈没地点」（前掲『Gakken Mook　戦艦「武蔵」の真実』）
戸髙一成編『証言録　海軍反省会　二』ＰＨＰ研究所、二〇一一年
戸髙一成編『証言録　海軍反省会　五』ＰＨＰ研究所、二〇一三年
戸髙一成「総論　大和型戦艦…それは日本人の「技術力」と「魂」の結晶だった」（『歴史街道』三二八〈総力特集　戦艦大和と武蔵　史上最大・最強の戦艦に託したもの〉二〇一五年八月）
戸髙一成監修『証言・戦艦「武蔵」』ＫＡＤＯＫＡＷＡ、二〇一五年
戸髙一成監修『「戦記」で読み解くあの戦争の真実　日本人が忘れてはいけない太平洋戦争の記録』ＳＢ新

書、二〇一五年
外崎克久『津軽の濤声　海軍大将中村良三とその時代』黒潮社、一九八六年
富岡定俊『開戦と終戦　人と機構と計画』毎日新聞社、一九六八年
豊田穣・橋口収（対談）「されど「大和」、なれど「大和」」（『プレジデント』一九八八年八月号）

■な行

内藤初穂『戦艦大和へのレクイエム　大艦巨砲の技術を顧みる』グラフ社、二〇〇八年
中内敏夫『軍国美談と教科書』岩波新書、一九八八年
中澤佑刊行会編『海軍中将　中澤佑　作戦部長・人事局長の回想』原書房、一九七九年
永末英一「摩耶シケの海戦回想」（井畑憲次・野間弘編『海軍主計科士官物語　二年現役補修学生総覧』浴恩出版会、一九六八年）
永末英一「最後の「摩耶」主計長　比島沖海戦」（破竹会編『破竹　海軍経理学校第八期補修学生の記録』破竹会三十周年記念事業実行委員会、一九七二年）
永末英一「艦種／配置別『総員退艦』損得論」（『丸』四一二、一九八〇年一一月）
中田整一『トレイシー　日本兵捕虜秘密尋問所』講談社文庫、二〇一二年（初刊二〇一〇年）
中原茂敏『国力なき戦争指導』原書房、一九八九年
新田光子「慰霊と戦友会」（高橋三郎編著『新装版　共同研究・戦友会』インパクト出版会、二〇〇五年）
庭田尚三『建艦秘話』船舶技術協会、一九六五年
能村次郎『慟哭の海　戦艦大和死闘の記録』読売新聞社、一九六七年
野村治男「戦艦「武蔵」の最後」（『サンデー日本』三五、一九五七年七月。これと同名同一内容の記事が『戦記画報』一―二、一九六四年一二月に掲載）
野元為輝「これからのこと」（海上自衛隊幹部学校編『海軍を想う　後継者のために伝え残したいこと』同

校、一九八四年）
法本義弘『正伝　佐久間艇長』国民社、一九四四年
野呂邦暢『失われた兵士たち　戦争文学試論』芙蓉書房、一九七七年

■は行

秦郁彦『昭和史の秘話を追う』PHP研究所、二〇一二年
深井英五『枢密院重要議事覚書』岩波書店、一九五三年
福井静夫「見かた考えかた　１９６４年のトップ銘柄〝戦艦大和〟を斬る！」（『丸』二〇一、一九六四年二月）
福井静夫「姿なき戦艦〝国会〟をまかり通る」（『丸』二三七、一九六七年二月）
福井静夫「最後の名戦艦／その艤装・戦訓・改造のすべて」（『丸』二〇八、一九六四年九月号）
藤田定市『鵬の羽風　海洋叢話』博文館、一九一三年
藤原辰史『カブラの冬　第一次世界大戦期ドイツの飢饉と民衆』人文書院、二〇一一年
船越卓「横廠から舞廠まで」（前掲『続・造船官の記録』）
辺見じゅん「「大和」で死にたかった　名艦長・森下信衛の生涯」（『増刊歴史と人物　証言・太平洋戦争』一六五、一九八四年九月）
防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　海軍軍戦備〈一〉　昭和十六年十一月まで』朝雲新聞社、一九六九年
防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　海軍捷号作戦〈二〉　フィリピン沖海戦』朝雲新聞社、一九七二年
防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　南西方面海軍作戦　第二段作戦以降』朝雲新聞社、一九七二年
保阪正康『戦場体験者　沈黙の記録』筑摩書房、二〇一五年
細谷四郎「武蔵会発足の所以」（前掲『嗚呼　戦艦武蔵』）

細谷四郎「戦艦武蔵乗艦より終戦復員まで」（前掲『嗚呼　戦艦武蔵』）
細谷四郎『戦艦武蔵戦闘航海記』八重岳書房、一九八八年
堀元美「現代造船界に生きる戦艦大和の造艦術」（『丸』一九二、一九六三年五月）
堀元美『続・鳶色の襟章　海軍工廠の戦いの日々』原書房、一九七七年

■ま行

前田龍男「私の海軍時代」（前掲『続・造船官の記録』）
牧野茂『牧野茂　艦船ノート』出版協同社、一九八七年
牧山博人『激動の昭和時代に生きた　我が半生記』私家版、一九八九年
益田甫『加来艦長の最期』読売新聞社、一九四五年
松田千秋「追想　軍令部伝統の作戦計画」（『増刊歴史と人物　太平洋戦争シリーズ　実録・太平洋戦争』一九八一年）
松田千秋「孫子の兵法」（佐藤和正『艦長たちの太平洋戦争』光人社NF文庫、一九九三年〈初刊一九八三年〉）
真子平治「駆逐艦「浜風」鎮魂記」（『増刊歴史と人物　太平洋戦争シリーズ　日本陸海軍の戦歴』一九八六年）
真鍋昌賢「乃木さんのひとり歩き　浪花節にえがかれた日露戦後の庶民感情」（『説話・伝承学』六、一九九八年）
黛治夫『海軍砲戦史談』原書房、一九七二年
三輪公忠「対米決戦へのイメージ」（加藤秀俊・亀井俊介編『日本とアメリカ　相手国のイメージ研究』日本学術振興会、一九七七年）
武藤章『比島から巣鴨へ　日本軍部の歩んだ道と一軍人の運命』中公文庫、二〇〇八年（初刊一九五二年）

森下信衛「帝国海軍最後の突撃　大和潰ゆ沖縄沖海戦」『別冊知性　太平洋戦争の全貌』一、一九五六年七月
森下信衛「戦艦「大和」死闘二時間の記録」（『丸』一〇七、一九五七年一月）
森正蔵『旋風二十年　解禁昭和裏面史　下巻』鱒書房、一九四六年
森史朗『あるジャーナリストの敗戦日記　1945～1946』ゆまに書房、二〇〇五年
森史朗「七十年ぶりに発見　戦艦武蔵　悲劇の航跡を辿る」（『文藝春秋』九三―六、二〇一五年五月）
森雅雄「イデオロギーとしての「大艦巨砲主義批判」」（『城西国際大学紀要』二一―三〈国際人文学部〉、二〇一三年三月）

■や行

安田武『戦争体験　一九七〇年への遺書』朝文社、一九九四年（初刊一九六三年）
山岸耕平「世界一の戦艦「大和」「武蔵」の壮絶な最期」（『画報戦記』創刊第一号、一九六〇年六月）
山下省三郎「岡村博さんを偲ぶ」（前掲『造船官の記録』）
山田和夫『戦艦ポチョムキン』大月書店、一九七八年
山田風太郎『新装版　戦中派不戦日記』講談社文庫、二〇〇二年（初刊一九七一年）
山中恒「渡辺清にとっての戦後」（初出一九八一年、山中『少国民ノート』辺境社、一九八二年）
山中恒「渡辺清さんの魂と共生すること」（初出一九八一年、前掲『少国民ノート』）
山室建徳『軍神　近代日本が生んだ「英雄」たちの軌跡』中公新書、二〇〇七年
山本親雄『大本営海軍部　回想の大東亜戦争』白金書房、一九七四年
吉岡忠一「海軍航空参謀の回想　ハワイへの道程」（『増刊歴史と人物　太平洋戦争シリーズ　実録・太平洋戦争』一九八一年）
吉田俊雄「最後の超弩級戦艦「武蔵」の生涯」（『丸』一二〇、一九五七年一〇月）

吉田俊雄「「七万トン」に集積された「技術の粋」」（『プレジデント』一九八八年八月号）
吉田俊雄『戦艦「比叡」 高速戦艦悲劇の生涯（新装版）』光人社NF文庫、二〇一五年（初刊一九七三年）
吉田満・渡辺清「戦艦大和の士官と武蔵の兵 戦争体験と戦後倫理をめぐって」（初出一九六二年、渡辺『私の天皇観』辺境社、一九八一年）
吉田満「戦艦大和ノ最期」（同『吉田満著作集 上巻』文藝春秋、一九八六年 ※本書に収録されているのは著者が「決定稿」とした一九七四年・北洋社版）
吉田裕『日本人の戦争観 戦後史のなかの変容』岩波書店、一九九五年
吉田裕『シリーズ日本近現代史⑥ アジア・太平洋戦争』岩波新書、二〇〇七年
吉野伊三郎『戦艦武蔵乗組み記』エーワン出版、一九八二年
吉村昭『戦艦武蔵』新潮社、一九六六年
吉村昭「二つの精神的季節」（初出一九六八年、同『月夜の記憶』講談社文芸文庫、二〇一一年〈初刊一九九〇年〉）
吉村昭『戦艦武蔵ノート』図書出版社、一九七〇年
吉村昭「下士官の手記」（初出一九七〇年、同『戦艦武蔵ノート 作家のノートI』文春文庫、一九八五年）
吉村昭「消えた「武蔵」」（初出一九七八年、前掲『戦艦武蔵ノート 作家のノートI』）
吉村昭「史実と創作について」（初出一九八一年、同『白い道』岩波現代文庫、二〇一二年）
吉村昭「歴史は押しとどめられない」（初出一九九一年、前掲『白い道』）
吉村昭「歪んだ生活」（同『東京の戦争』ちくま文庫、二〇〇五年〈初刊二〇〇一年〉）
吉村昭『時代の声、史料の声』河出書房新社、二〇〇九年
吉村昭『吉村昭 昭和の戦争II 武蔵と陸奥と』新潮社、二〇一五年
米原謙『国体論はなぜ生まれたか 明治国家の知の地形図』ミネルヴァ書房、二〇一五年
読売新聞社編『昭和史の天皇 一二』同社、一九七〇年

■わ行

若桜木虔『宇宙戦艦ムサシ』文化出版局、一九八〇年
和田克徳『切腹』青葉書房、一九四三年
渡辺清「天皇裕仁氏への公開状」（初出一九六一年、前掲『私の天皇観』）
渡辺清「帰還農民兵士の立場から」（初出一九六二年、前掲『私の天皇観』）
渡辺清「北緯一二度五〇分 東経一二二度三五分 水深一三〇〇米の海底に眠る友へ」（初出一九六六年、前掲『私の天皇観』）
渡辺清「恥多き戦中派」（初出一九六七年、前掲『私の天皇観』）
渡辺清『海の城 海軍少年兵の手記』朝日新聞社、一九六九年
渡辺清『戦艦武蔵の最期』朝日新聞社、一九七一年
渡辺清『砕かれた神 ある復員兵の手記』評論社、一九七七年
渡辺清『私の天皇観』辺境社、一九八一年
渡辺清「『砕かれた神』をめぐって」〈青木安弘による一九七七年五月のインタビュー〉（わだつみ会編『今こそ問う天皇制 幾千万戦争犠牲者の声に聴きつつ』筑摩書房、一九八九年）

■編著者名なし

『海軍大将末次信正閣下述 軍縮決裂と我等の覚悟』楠公会総本部、一九三六年
「徹底した主砲万能論者」（『丸』一五一、一九五九年一二月号）
「希望座談会 凄絶レイテ沖大海戦 戦艦「武蔵」戦闘記録係佐藤兵曹長を囲んで」（『戦記画報』第四号、一九六〇年一二月）
「総合立体特集 戦艦武蔵レイテ沖海戦の最後」（『丸』二〇八、一九六四年九月号）

「戦艦武蔵の残骸情況　これが海底に眠る姿だ！」（前掲『Gakken Mook　戦艦「武蔵」の真実』）
『別冊宝島二三四〇　戦艦「大和」と「武蔵」』宝島社、二〇一五年五月
『よみがえる戦艦武蔵』双葉社スーパームック、二〇一五年

あとがき

私は戦後の日本人が太平洋戦争を一つの物語として理解するにあたって、戦艦大和が明るい面を、武蔵が暗い面をそれぞれ担ってきたと考えています。

武蔵がなぜ「暗い」のかについては本書で述べた通りですが、大和が担ってきたという戦争の「明るい」面とは何か、それは誰がいかにして「明るく」してきたのか、といった問題については拙著『戦艦大和講義』（人文書院）で論じましたので、よろしければご一読ください。大和と武蔵の語られ方を比較検討することで、戦後日本社会における戦争像の特徴や、形成過程がわかるように思います。

本書の概要は、二〇一五年度の埼玉大学教養学部などの講義で述べたものです。本書では講義の内容に後からいろいろと付け加えましたが、大枠はそのままとなっています。内心どう思ったかはともかく、静かに聞いて下さった学生諸君と、中公新書編集部の並木光晴氏に厚くお礼を申し上げます。

二〇一六年五月

一ノ瀬俊也

一ノ瀬俊也（いちのせ・としや）

1971年（昭和46年），福岡県に生まれる．九州大学文学部史学科卒業．同大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程中途退学．博士（比較社会文化，九州大学）．専門は日本近現代史．国立歴史民俗博物館助教などを経て，現在，埼玉大学教養学部教授．

著書『近代日本の徴兵制と社会』（吉川弘文館）
『銃後の社会史』（歴史文化ライブラリー）
『旅順と南京』（文春新書）
『皇軍兵士の日常生活』（講談社現代新書）
『故郷はなぜ兵士を殺したか』（角川選書）
『米軍が恐れた「卑怯な日本軍」』（文春文庫）
『日本軍と日本兵』（講談社現代新書）
『戦艦大和講義』（人文書院）
ほか

戦艦武蔵（せんかんむさし）
中公新書 2387
2016年7月25日発行

著　者　一ノ瀬俊也
発行者　大橋善光

本文印刷　三晃印刷
カバー印刷　大熊整美堂
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論新社
〒100-8152
東京都千代田区大手町 1-7-1
電話　販売 03-5299-1730
　　　編集 03-5299-1830
URL http://www.chuko.co.jp/

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN978-4-12-102387-2 C1221

中公新書刊行のことば

いまからちょうど五世紀まえ、グーテンベルクが近代印刷術を発明したとき、書物の大量生産は潜在的可能性を獲得し、いまからちょうど一世紀まえ、世界のおもな文明国で義務教育制度が採用されたとき、書物の大量需要の潜在性が形成された。この二つの潜在性がはげしく現実化したのが現代である。

いまや、書物によって視野を拡大し、変りゆく世界に豊かに対応しようとする強い要求を私たちは抑えることができない。この要求にこたえる義務を、今日の書物は背負っている。だが、その義務は、たんに専門的知識の通俗化をはかることによって果たされるものでもなく、通俗的好奇心にうったえて、いたずらに発行部数の巨大さを誇ることによって果たされるものでもない。現代を真摯に生きようとする読者に、真に知るに価いする知識だけを選びだして提供すること、これが中公新書の最大の目標である。

私たちは、知識として錯覚しているものによってしばしば動かされ、裏切られる。私たちは、作為によってあたえられた知識のうえに生きることがあまりに多く、ゆるぎない事実を通して思索することがあまりにすくない。中公新書が、その一貫した特色として自らに課すものは、この事実のみの持つ無条件の説得力を発揮させることである。現代にあらたな意味を投げかけるべく待機している過去の歴史的事実もまた、中公新書によって数多く発掘されるであろう。

中公新書は、現代を自らの眼で見つめようとする、逞しい知的な読者の活力となることを欲している。

一九六二年一一月

日本史

d1

2189 歴史の愉しみ方　磯田道史
2295 天災から日本史を読みなおす　磯田道史
2299 日本史の森をゆく　東京大学史料編纂所編
1617 歴代天皇総覧　笠原英彦
2302 日本人にとって聖なるものとは何か　上野誠
1928 物語 京都の歴史　脇田修・脇田晴子
2345 京都の神社と祭り　本多健一
482 倭国　岡田英弘
147 騎馬民族国家（改版）　江上波夫
2164 魏志倭人伝の謎を解く　渡邉義浩
1085 古代朝鮮と倭族　鳥越憲三郎
1878 古事記の起源　工藤隆
2157 古事記誕生　工藤隆
2211 古事記の宇宙（コスモス）―神と自然　千田稔
2095 『古事記』神話の謎を解く　西條勉
2230 言霊とは何か　佐佐木隆
804 蝦夷（えみし）　高橋崇
1041 蝦夷（えみし）の末裔　高橋崇
1622 奥州藤原氏　高橋崇
1293 壬申の乱　遠山美都男
1568 天皇誕生　遠山美都男
1779 伊勢神宮―東アジアのアマテラス　千田稔
1607 飛鳥―水の王朝　千田稔
2371 カラー版 古代飛鳥を歩く　千田稔
2168 飛鳥の木簡―古代史の新たな解明　市大樹
2353 蘇我氏―古代豪族の興亡　倉本一宏
291 神々の体系　上山春平
2362 六国史（りっこくし）―日本書紀に始まる古代の「正史」　遠藤慶太
1502 日本書紀の謎を解く　森博達
1802 古代出雲への旅　関和彦
2054 正倉院文書の世界　丸山裕美子
1003 平安朝の母と子　服藤早苗
1240 平安朝の女と男　服藤早苗
1867 院政　美川圭
2281 怨霊とは何か　山田雄司
608/613 中世の風景（上下）　阿部謹也・網野善彦・石井進・樺山紘一
1503 古文書返却の旅　網野善彦
1392 中世都市鎌倉を歩く　松尾剛次
2127 河内源氏　元木泰雄
2336 源頼政と木曽義仲　永井晋

中公新書　日本史

1521	後醍醐天皇	森　茂暁
776	室町時代	脇田晴子
2179	足利義満	小川剛生
978	室町の王権	今谷　明
1983	戦国仏教	湯浅治久
2058	日本神判史	清水克行
2139	贈与の歴史学	桜井英治
2343	戦国武将の実力	小和田哲男
2084	戦国武将の手紙を読む	小和田哲男
2350	戦国大名の正体	鍛代敏雄
1625	織田信長合戦全録	谷口克広
1782	信長軍の司令官	谷口克広
1907	信長と消えた家臣たち	谷口克広
1453	信長の親衛隊	谷口克広
2278	信長と将軍義昭	谷口克広
784	豊臣秀吉	小和田哲男
2146	秀吉と海賊大名	藤田達生
2265	天下統一	藤田達生
2264	細川ガラシャ	安　廷　苑
2241	黒田官兵衛	諏訪勝則
2372	後藤又兵衛	福田千鶴
2357	古田織部	諏訪勝則
642	関ヶ原合戦	二木謙一
711	大坂の陣	二木謙一
476	江戸時代	大石慎三郎
870	江戸時代を考える	辻　達也
2273	江戸幕府と儒学者	揖斐　高
1227	保科正之（ほしなまさゆき）	中村彰彦
1817	島原の乱	神田千里
740	元禄御畳奉行の日記	神坂次郎
1945	江戸城―本丸御殿と幕府政治	深井雅海
2079	武士の町　大坂	藪田　貫

1788	御家騒動	福田千鶴
1099	江戸文化評判記	中野三敏
853	遊女の文化史	佐伯順子
929	江戸の料理史	原田信男
2376	江戸の災害史	倉地克直

中公新書　日本史

2380	ペリー来航	西川武臣
1621	吉田松陰	田中　彰
2291	吉田松陰とその家族	一坂太郎
1710	オールコックの江戸	佐野真由子
2047	オランダ風説書	松方冬子
2297	勝海舟と幕末外交	上垣外憲一
1840	長州戦争	野口武彦
1666	長州奇兵隊	一坂太郎
1619	幕末の会津藩	星　亮一
1958	幕末維新と佐賀藩	毛利敏彦
1754	幕末歴史散歩　東京篇	一坂太郎
1811	幕末歴史散歩　京阪神篇	一坂太郎
2268	幕末維新の城	一坂太郎
60	高杉晋作	奈良本辰也
69	坂本龍馬	池田敬正

1773	新選組	大石　学
2040	鳥羽伏見の戦い	野口武彦
455	戊辰戦争	佐々木　克
1554	脱藩大名の戊辰戦争	中村彰彦
2256	ある幕臣の戊辰戦争	中村彰彦
1235	奥羽越列藩同盟	星　亮一
1728	会津落城	星　亮一
2108	大鳥圭介	星　亮一
1033	王政復古	井上　勲

日本史

- 2107 近現代日本を史料で読む　御厨　貴編
- 190 大久保利通　毛利敏彦
- 1849 明治天皇　笠原英彦
- 2011 皇　族　小田部雄次
- 1836 華　族　小田部雄次
- 2379 元老―真の指導者たち　伊藤之雄
- 840 江藤新平（増訂版）　毛利敏彦
- 2051 伊藤博文　瀧井一博
- 2103 谷　干城　小林和幸
- 2212 近代日本の官僚　清水唯一朗
- 2294 明治維新と幕臣　門松秀樹
- 561 明治六年政変　毛利敏彦
- 1316 戊辰戦争から西南戦争へ　小島慶三
- 1927 西南戦争　小川原正道
- 1584 東北―つくられた異境　河西英通
- 2320 沖縄の殿様　高橋義夫
- 252 ある明治人の記録　石光真人編著
- 161 秩父事件　井上幸治
- 2270 日清戦争　大谷　正
- 1792 日露戦争史　横手慎二
- 2141 小村寿太郎　片山慶隆
- 2210 黄禍論と日本人　飯倉　章
- 2162 桂　太郎　千葉　功
- 881 後藤新平　北岡伸一
- 2321 道路の日本史　武部健一
- 2269 日本鉄道史　幕末・明治篇　老川慶喜
- 2358 日本鉄道史　大正・昭和戦前篇　老川慶喜
- 2312 鉄道技術の日本史　小島英俊

世界史

- 1353 物語　中国の歴史　寺田隆信
- 2303 殷―中国史最古の王朝　落合淳思
- 2001 孟嘗君と戦国時代　宮城谷昌光
- 12 史　記　貝塚茂樹
- 2099 三国志　渡邉義浩
- 7 宦官（かんがん）（改版）　三田村泰助
- 15 科挙（かきょ）　宮崎市定
- 1812 西太后（せいたいこう）　加藤　徹
- 166 中国列女伝　村松　暎
- 2030 上　海　榎本泰子
- 1144 台　湾　伊藤　潔
- 925 物語　韓国史　金　両基
- 1367 物語　フィリピンの歴史　鈴木静夫
- 1372 物語　ヴェトナムの歴史　小倉貞男
- 2208 物語　シンガポールの歴史　岩崎育夫
- 1913 物語　タイの歴史　柿崎一郎
- 2249 物語　ビルマの歴史　根本　敬
- 1551 海の帝国　白石　隆
- 1866 シーア派　桜井啓子
- 1858 中東イスラーム民族史　宮田　律
- 1660 物語　イランの歴史　宮田　律
- 2323 文明の誕生　小林登志子
- 1818 シュメル―人類最古の文明　小林登志子
- 1977 シュメル神話の世界　岡田明子・小林登志子
- 1594 物語　中東の歴史　牟田口義郎
- 1931 物語　イスラエルの歴史　高橋正男
- 2067 物語　エルサレムの歴史　笈川博一
- 2205 聖書考古学　長谷川修一
- 2235 ツタンカーメン　大城道則

世界史

現代史

現代史

中公新書

- 2186 田中角栄　早野透
- 1976 大平正芳　福永文夫
- 2351 中曽根康弘　服部龍二
- 1574 海の友情　阿川尚之
- 1875 「国語」の近代史　安田敏朗
- 2075 歌う国民　渡辺裕
- 2332 「歴史認識」とは何か　大沼保昭　江川紹子
- 1804 戦後和解　小菅信子
- 1900 「慰安婦」問題とは何だったのか　大沼保昭
- 2359 竹島―もうひとつの日韓関係史　池内敏
- 1990 「戦争体験」の戦後史　福間良明
- 1820 丸山眞男の時代　竹内洋
- 2237 四大公害病　政野淳子
- 1821 安田講堂 1968-1969　島泰三
- 2110 日中国交正常化　服部龍二

- 2137 国家と歴史　波多野澄雄
- 2150 近現代日本史と歴史学　成田龍一
- 2196 大原孫三郎―善意と戦略の経営者　兼田麗子
- 2317 歴史と私　伊藤隆
- 2301 核と日本人　山本昭宏
- 2342 沖縄現代史　櫻澤誠
- 2385 革新自治体　岡田一郎

現代史

中公新書

- 2055 国際連盟　篠原初枝
- 27 ワイマル共和国　林健太郎
- 478 アドルフ・ヒトラー　村瀬興雄
- 2272 ヒトラー演説　高田博行
- 1943 ホロコースト　芝健介
- 2349 ヒトラーに抵抗した人々　對馬達雄
- 2329 ナチスの戦争 1918-1949　R・ベッセル　大山晶訳
- 2313 ニュルンベルク裁判　A・ヴァインケ　板橋拓己訳
- 2266 アデナウアー　板橋拓己
- 2274 スターリン　横手慎二
- 530 チャーチル（増補版）　河合秀和
- 1415 フランス現代史　渡邊啓貴
- 2356 イタリア現代史　伊藤武
- 2221 バチカン近現代史　松本佐保
- 1959 韓国現代史　木村幹

- 2262 先進国・韓国の憂鬱　大西裕
- 2216 北朝鮮―変貌を続ける独裁国家　平岩俊司
- 2324 李光洙（イグァンス）―韓国近代文学の祖と「親日」の烙印　波田野節子
- 1763 アジア冷戦史　下斗米伸夫
- 1876 インドネシア　水本達也
- 2143 経済大国インドネシア　佐藤百合
- 1596 ベトナム戦争　松岡完
- 1664 1665 アメリカの20世紀（上下）　有賀夏紀
- 1920 ケネディ―「神話」と実像　土田宏
- 2244 ニクソンとキッシンジャー　大嶽秀夫
- 2140 レーガン　村田晃嗣
- 1863 性と暴力のアメリカ　鈴木透
- 2381 ユダヤとアメリカ　立山良司
- 941 イスラエルとパレスチナ　立山良司
- 2112 パレスチナ―聖地の紛争　船津靖
- 2236 エジプト革命　鈴木恵美
- 2330 チェ・ゲバラ　伊高浩昭
- 2163 人種とスポーツ　川島浩平
- 2383 ビル・クリントン　西川賢

中公新書 RC 1886

政治・法律

h2

108 国際政治 高坂正堯
1686 国際政治とは何か 中西寛
2190 国際秩序 細谷雄一
2114 世界の運命 ポール・ケネディ 山口瑞彦訳
1899 国連の政治力学 北岡伸一
2207 平和主義とは何か 松元雅和
2195 入門 人間の安全保障 長有紀枝
2133 文化と外交 渡辺靖
113 日本の外交 入江昭
1000 新・日本の外交 入江昭
2366 入門 国境学 岩下明裕
1825 北方領土問題 岩下明裕
2068 ロシアの論理 武田善憲
1751 拡大ヨーロッパの挑戦（増補版） 羽場久美子
2172 中国は東アジアをどう変えるか 白石隆 ハウ・カロライン
2215 戦略論の名著 野中郁次郎編著
700 戦略的思考とは何か 岡崎久彦
721 地政学入門 曽村保信
1272 アメリカ海兵隊 野中郁次郎